

奇譚クラス

新刊 文芸春秋社



新年号

1963・1

奇譚クラス

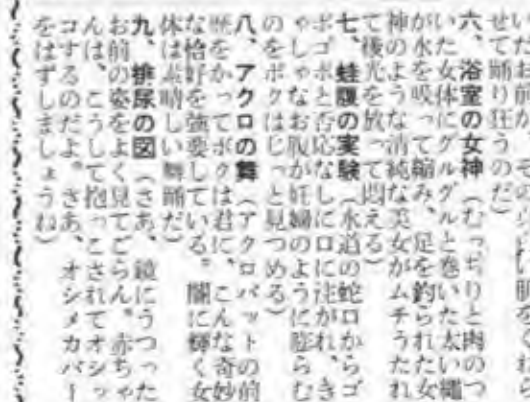
1月号

THE BITAR CLUB
Folklore of the Bitar Club
1963・1



21種×15種(本誌の大きさ)
九枚一組五〇〇円(送共) 略号「さ9」

ので一般書店では一切販売しない。その理由は、非道に接するものだからだ。内容はサド侯爵と目録する或る億長者の青年が、美少女を大なる富を背景として訓練し、囁くとき女を飼育して熾烈なサド・ストリートの完全欧米化であります。



M
フォト三十態

注文略号 (東30)

若々しくハツラツとした美しい女性の豊満な尻に股かけて、あらゆる羞しめを与えられるM男の生態を馬上の美女を主体として描いたMフオト集です。マゾモデル募集に応じて合格したこのM男は、さて、どんなようにして虐められるでしょうか。全部未発表のとうておきの資料を提供いたします。凄じき迫力で注文殺到の（ま30）を是非どうぞ！



ふくよかな白い脚で足を絞めて、息もとまるような恍惚感にむせび、白羽二重のような足の裏でびつたりと顔を押さえてつけられて、絶息の瞬間の感激を味わい堪からい足の指の汗をたふふりと紙めさせて頂く倒錯感の絶妙。

身も心も、骨のずいまでも屈伏させられたという破膚感を、いやという程叩き込まれるポリウムのある美女の臀部は、どっしりの頭の上に据えられて、顔がひしげてしまうのではないかと思うほどの荒々しい馬の乗り様、背中に乗られて逆にとられ



た後手の弱さが、更に一層の屈辱感をもって迫って男の自尊心を踏みにじってやる。

顔張り、馬乗り、尻抜き、足踏め、踏みつけ、鼻ひしやげ、首締め、胸締め、ヘッドロックと、美男によつて痛めつけられる、汚辱をいやという程極えつけられる場面が三上麗にわたつて、女ド様の體手気ままなふるまいによつて、次々と派手に展開されてゆきます。

Mマニアの要望によつて構成した第一回目的Mフオトリ集です。ものは試し、一度ごらんになつては如何ですか。

連続吊り責フォートの決定版、未発表の秘蔵版

梨花悠紀子吊責写真特集

第一集

逆エビ吊り

略号(りつ1)

A5判 (21×15) 感光紙焼付
八枚一組 五〇〇円 (送共)

第二集

逆胴吊り

略号(りつ2)

A5判 (21×15) 感光紙焼付
八枚一組 五〇〇円 (送共)

吊責にあえぐ美人モデル梨花悠紀子嬢の裸身があますところなく、あらゆる角度から鮮鋭なるレンズによってキャッチされた、その全身の悦虐の表情を、皆さまの目のあまりに見ていたくために、A5判(21×15)の大きさに廓大いたしました。宙にういた梨花嬢の悶悦の姿態は、大きな画面と相まって刻明に手にとるように眺めることが出来る吊責フォートの圧巻であります。この全写真は、吊責愛好の梨花悠紀子ならではの到底実行できないであろうと思われる強烈なものばかりであります。



全身をぐるぐる巻きに縛られて吊り責めにされてみたいというのは、マゾヒスト梨花悠紀子嬢の第一の念願でした。彼女の願う強烈にして苛烈な本格的な吊責。彼女の思うままに、何ら手心を加えることなく、S派の第一人者辻村隆がビビシと縛り上げて滑車により吊上げた連続場面です。

余りの強烈さと刺戟の強さに口絵としての使用を遠慮されていたのですが、ここにマニヤの強い要望により分譲品として同好家の方に限りお譲りすることにしました。梨花悠紀子嬢の均整のとれた姿態が吊責という妥協のない緊縛方法によって決定的な効果を打ち出していることを信じます。

凄絶ノとおきのおきの未発表吊り責め写真の秘作、ここに堂々発表乞御期待



第一集(逆エビ吊り) 十枚一組
両手首は後手に括られて、曲げた両足首と共に逆エビに緊縛された梨花嬢の肌には深々とロープが喰い込んでいます。ギリギリ、ギリギリと滑車を引き上げるとううう、と、思わず彼女の口から悲鳴が洩れ、じりじりと全身が浮き上って、苦悶の表情が彼女の顔面から、次第に足の爪先にまで伝ってゆく。高々と吊り上げた美しい逆エビの裸身――。

第二集(逆胴吊り) 十枚一組

ヒエーツという悲鳴も口にかまされた鎖ぐつわによって、ぐぐもってしまおう。鎖は徐々に滑車によって巻き上げられて頭を下にした全身は宙に浮いてきた。二の腕に、太股に、胴体にひどい程埋れてしまふ縄目。宙ぶらりんとなった裸身が吊り縄を中心として、ゆるく回る。時間が経つにつれて苦痛が次第に増してくるが、彼女はまだ頑張っている。

縛りプレイの境地

塚本鉄三・撮影・構成

一や 責め疲れた頼魔美

梨花悠紀子

第グラビ 踏みにじられた落花

網川文代

女体馬とその調教おり

大塚啓子

鞭うちによる悦唐の表情

関谷富佐子

責め遊戯の終焉

梨花悠紀子

巻頭口絵

責絵 八足の裏の火責め
女体切腹 女騎士の切腹
武家の娘自害

四馬孝画
滝れい子画

四馬孝 夜の白チンパ
傑作画 尻打ち台
シリーズ 鼻の孔掃除
新案首手足画

四馬孝画

アイデア画 体操倉庫

黒川不二男画

絶叫場面の点綴

苦痛にたえかねた表情

塚本鉄三・撮影・構成
杉原虹児・構成

ニヤ 唇打ちによる上半身の躍動

関谷富佐子

痛烈な一打による全身の表情

関谷富佐子

マゾ・フォト 男番にむせび泣く

網川文代

憂囚の美女鉄鎖にあえぐ

梨花悠紀子

逆エビのもたえ

大塚啓子

江戸時代の刑罰と処刑

御仕置おぼえ書

おもだか・しのぶ

「奇譚三十九夜」物語 (第二十二夜)

辻村隆二

乳房縛りの劍劇ストリップ

東山太朗

手記 心妖しきふしなれど

美野夕子

長篇SM小説 宇宙のどこかで

佐治麻造

告白 サデ・オステインの便り

原砂登子

「奴隷国探検」サルジニア探訪記

阿留品又悠

「懸賞応募入選作品」

和歌 憂子

面紙の部屋

村太伸

時評 麻生保の生活と意見

麻生保

告白 白足袋に結ばれた縁

木ノ下明美

川柳志 晴漫考

須藤律夫

「手記」神酒讀 (或る青年の熱烈なる手記)

佐藤麻一

新鋭十二月号の読後感

アガタ・オサム

佐川奈津子さまに捧ぐ

山本美津明

緊縛フオート撮影の実際

塚本鉄三

「答打ちに悶える媚態」

加賀 津史

女軍対女軍、女斗秘話

保田 高美

霞ヶ城 女合戦

真奈部益夫

「責め場面」の空想的読書法

読者通信



画の大きさ A5判

(21 摺×15 摺) 感光紙焼付
六枚一組 五〇〇円、略号 (か6)

一、廻上のいけにえ、(台上でエビのように二つ折りにされた全裸の女体に今まさに加えられようとする浣腸器の悪魔のような跳梁をじっと耐える彼女。)

二、高圧空気浣腸、(百ワットの電光に明るく照らし出された女体に、高圧ポンプの先から、空気がドンドン送り込まれる恐怖が鮮やかに描き出される。)

三、蛙腹の注水実験、(手と足を鎖に吊られて宙に浮いた白々とした女体。その鼻孔にはイリガートルの嘴管が水をどくどくと腹の中へ注ぎ込んだ。)

四、浣腸責の最高頂、(竹の棒によって、両足を八の字に開かされたイケニエは、目の前にある恐ろしい器具に、思わず全身を硬直させてしまった。)

五、排泄に耐える、(豊富な張りきれれるばかりの女体を一本の柱に宙じばりにされて、浣腸の洗礼を受けた彼女が便器を前にして耐えに耐えぬく悲壮感。)

六、奇妙な便器、(彼女の体内には、五〇CCのグリセリンが注入されて荒れ狂っている。奇妙な型の便器が彼女の使用を待って、あざ笑っている。)



四馬孝・案並に画

女体浣腸嗜虐場面図

(うら若き麗人、強制的に浣腸を施される図)



◎浣腸愛好者のために、特に浣腸を主題としたショッキングな場面ばかりを四馬孝画伯の豊富なアイディアによって描面して貰った力作揃い、従来兎角口絵から締め出され敬遠され勝ちだった浣腸のテーマを、ここに見事に完全に絵面化されました。

女性に対する浣腸について大きな関心を抱いている方々から、の久しい間に亘っている要望も、いらいの間の制約のために果し得ませんでしたが、浣腸ブアンの見果てぬ夢の一端でも満足して頂こうと、ここに四馬氏を煩して、女体浣腸の興味的な場面、数々の変化ある姿態、背景、小道具等によって、美しい画集として完成して頂きました。浣腸マニヤの方は勿論のこと、Sマニヤの方にとっても、非常に興味がある画面の展開がたのしみです。どうか、浣腸マニヤのために、特に作成したこの画集を、引続いて刊行するためにも、御支援下さるようお願いいたします。



















四馬 孝 画

足の裏の火責め



袴着の女剣士は腹切りぬ

試合の處の幕中のうしろに



女剣士の切腹



武家の娘自害

瀧 れい子 画



夜の白ナンバー

四馬 孝 画

屍打ち台

四馬 孝 画



鼻の孔掃除

四馬 孝 画





新案首手足枷



体操倉庫

黒川 不二男

















新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1963年 新年号

(第17巻 第1号 通刊 第172号)



緊縛モデルの一表情 大塚 啓子



江戸時代の刑罰と処刑

御仕置おぼえ書

おもだか・しの

戦国時代の殺伐な風習も徳川時代の打続く
 太平と共に次第に整頓して、町奉行の仕置も
 すべて、公事定書百箇条にもとずいて行われ
 る様になり、刑の種類は少くなり、串刺、釜
 煮、牛裂、車裂等が行われなくなったのは、
 惜しい事です、処刑の形式、縄の掛方等の
 様式が完成され、囚人の身分罪状により、縄
 の掛方に区別を付ける等、真に行き届いた、
 よき時代で有ったと思われます。

又刑の種類が少くなったとは云っても、な

お死刑の本刑のみで、六種も有り、その上に
 引廻し、獄門、鋸引等の加重刑が有り、さら
 に囚人の身分財産や扱に関する不文及び成文
 の附加刑が付けられて居るのですから大した
 ものです。私は此等の死刑の中、打首刑につ
 いて、少々調べて見たのですが、公文書には
 具体的な事はほとんど見当らず、其他の記録
 を見ても、当時の人は凶事に関する事を口に
 するのを非常にきらったので、細い具体的な
 事を書いたものが、きわめて少いので、実際

の処刑の方法や囚人の取扱をたしかめるのは
 大変に困難なのです。

たとえば火刑にしても、引廻しの時の私服
 のまま処刑されたか、又は下着の囚衣一枚に
 したのか、或は裸に剥いて刑柱に掛けたかを
 はっきり書いた文書は無い様で、ある書物の
 挿画に男囚の獄衣らしき物を肌ぬぎにさせ裾
 も充分上にまくって衣類は腰だけに纏わせた
 画が出て居り、又別の鈴ヶ森刑場の図では、
 女囚を湯文字一枚の裸にして刑架に懸けて有

り、写生画なので信用出来る様に思われますが、此の場合の囚人が刑場に入ってから柱に懸るまでの手続きが不明なので、着衣については、あまりはつきりした規定は無かったらしいと推定出来るだけです。

なお一般の絵画には刑柱を角材に描いたのが多い様ですが、鈴ヶ森の火刑台石には根本の太さ十二糎（四寸）の丸太を立てる丸い穴が穿けて有ります。

又、磔柱台石の穴は十五糎（五寸）角の柱が入る様に十六糎二耗（五寸四分）四角の穴に作って有りますが、此れは大部分の記録と一致します。磔と火焙用の台石をそなえた刑場は、日本中で鈴ヶ森だけだった様ですが、此れで一人毎に穴を掘る手数を掛けずに一カ月に十人迄は処刑出来たのです。

さて御定書の斬首刑には、切腹、斬罪、下手人、死罪、獄門の五種が有りますが、此の中、下手人と獄門は、死罪に附加刑が付かないものと首級に対して加重刑を付けられたもので、首を切る方法としては、切腹、斬罪、死罪の三種類が有っただけです。

死刑の附加刑には、処刑の申渡しと共に必ず自動的に付くものと、本刑とは別に申渡すものとが有り、さらに御定書の註にも書いて

無い、不文のものが有ります。自動的に附くものには關所が有り、本人の名儀の全財産を没収されます。下手人は死罪に關所と様物が付かないもので、此の点士に対する切腹に近いものと考えられます。

様物と云うのは死罪の附加刑と考えられるもので、斬殺を刀及び鑢の公式の試験の為に使用することを云いますが、此れには庶人の男だけが用いられ、同じ死罪囚でも士、女、非人及び不潔な皮膚病にかかって居る者の斬殺は、様物には使用されないので附加刑と云うよりも江戸っ子の特権と云った方がよいかも知れません。

獄門は死体の内、首級に対して加えられる仕置で、その方法は広く識られて居る通りでさらに引廻しを申付られるのが普通です。

次に不文の附加刑ですが、此れは主として身分に関するもので、一般には問題にされて居ない様ですが、私には中々面白い問題の様に思われます。

奉行所に呼び出される者は士分以下庶人ですが、それぞれの身分に応じた礼遇を与えられますが、入牢申渡以後は扱が変り、囚人として、士農工商とは別な身分とされ、此の扱は無罪に成った時には本通りの身分に戻れます

が、斬罪以上の死刑を申渡された時には、さらに扱が変り非人よりも下の身分とされるので、近代刑法の礼遇停止とは根本的な違いが有るので一種の附加刑と考えた方が合理的だと思います。

実際の取扱方を見ると一般人が評定所に呼出されて出頭する時には、足輕及家持町人は庶人の公式礼装で有る羽織袴で出ますが、地借町人は袴は許されず羽織白衣で、店借町人は羽織の着用も許されず、白衣（着流しの事で色は関係ない）のままですが、女は士分以上すべて白衣とされて居りますが、鬘の形で區別が附いて居り、足輕以下の庶人は、すべて白洲の砂利の上に座ります。

士分の者はすべて紋附時服に麻袴を着用し、吟味席は浪人及熨斗目以下の者は、室内には入れず、雨戸の外側の白洲から七十糎位高い板縁に坐ります。熨斗目以上御目見得以下及び此れに準ずる者は板縁より更に二十五糎位高い屋内の疊縁に通され、旗本及御目見得以上、その他有位の神官僧侶等は座敷に坐ります。

此れ等の人が入牢申付られると、それ以後は士分以上の者も吟味席に出る時は羽番繩を掛けられ、僧は法衣の着用を禁ぜられ、白衣

に成りますが、縄付にされなかった実例も有ります。

足輕以下の庶人はすべて白衣本縄付に成り足にもホダを付けられますが、庶人の衣類は私物で無く囚衣を着せられて、入牢中で有る事を表示される事に成って居た様です。

牢屋は士分は揚り座敷又は揚り屋で、庶人の大牢、無宿牢とは、はっきり区別され色々な扱いも違って居りますが、女の場合は身分格式を問わず、すべて同じ女牢に入ります。

此れは入牢中の囚人の身分が、非人同等と看做されて居る為当然で、男でも病氣に成ると非人村に有る溜に預けられますので、入牢後の士は外形的な扱いだけ庶人とは区別を付けた礼遇を受けて居ました。

囚人の身分については、「近世風俗志」の乞食類五十一種の中に引廻刑人が有り、「賤者考」の中にも刑殺人と俘囚が入って居り、世間一般の人々からも非人同様に思われて居た事が、わかります。なお乞食は非人の中でも下級の者です。此の様に身分と扱は必ずしも同一では無く、町人が苗字帯刀を許されるのも其の実例で、特種な例では、能の大夫は扱は旗本で、將軍以下多くの大名が弟子入りして、謡や舞を習って居ますが、身分は穢多

とされ、先の賤者考の中にも、隠亡皮田、雲助、刑殺人等と共に書かれて有ります。それ故大名に招かれた場合でも、食事に同席する事は禁ぜられ、その他にも人外として、色々の差別を受けて居ました。

ついでにのべますと、穢多の身分は世襲で、工匠的な職業や、芸人、重労働者等が多く此等の職業人の多くは、幕末頃にはすでに、素人（庶人）に區別出来ない位社会的にも、

生活的にも向上して居たにもかかわらず、親子代々いかなる事があっても、素人に成れません。配下の非人の方は庶人が処刑その他



の理由で人外に落された者が多く、乞食や刑場人足等の賤業が主で有り乍ら、特別な条件（金力等）によって素人に成れる点で、穢多

の配下で有り乍ら、一級上の身分とされて居ました。

さて本題に戻り、士分の者が切腹を申付られる場合ですが、此の刑を受けるのは、武道から見て道理になつたやむにやまれぬ罪で有る場合のみで、武士の体面を、いささかも辱かしめないものに対する特別の寛典なのです。したがって吟味中も御預けが普通で入牢申付けられる事は少なかった様です。

その位ですから、申渡より処刑までの取扱も礼式により公正に行われ、身体を縄で縛ったりする事も無く、死後も本人の身分通りとされ、墓をたて供養をする事も許され、附加刑等も有りませんでした。が、実質は斬首による死刑なのです。切腹の作法その他は色々の文献により広く知られて居りますが、私が祖母（一人娘で厳格な仕附を受けた）から折にふれて聞かされた心得は、士たる者が切腹するには、たとひどの様な理由が有るにもせよ無念腹は上に対し無礼の極みであつて、真剣を賜つた時にも、かすかに血のにじむ位に型だけ引廻して介錯を受けるべきで有ると云う事で、たとい扇子腹、水腹、或いは打首以上磔等の御仕置を申付られた時にも、如何にも神妙に仰受して、扱われるままに何処まで

もおとなしやかに死ななければならぬと云う事を組上の鯉の例えを引いて話して聞かされたものです。

斬罪は袴の上から縄を掛け、品川か小塚原の刑場に送つて、首を斬ります。此れは「凶礼式」等に見える切埋の方式を、いくらかつたえたものと思われまゝ。凶礼式によると切埋は、武士に対する最重刑で縛縄のまま定設の刑場以外の山野に連行し、縄目のまま首を斬り死後も罪を許さず縄で縛られたままの姿で穴に落して埋めてしまい、その場所は人に知らせず供養もさせないが、大刀取以下士分の者のみが処刑に当たると云う仕置で、刑場で行う打首よりも軽い刑で有ると云われて居ます。

斬罪は一般には士分に対する打首刑で有る様に云われて居ますが、実際には直参の士だけの為に特に定められた御仕置で、旗本又は御家人の、切腹より重い罪人に申付けられた死刑で有つて、或る藩よりの問合せに対して「斬罪は陪臣の例未だ相見え申さず」との返書が出されて居ります。

斬罪を申付けられた囚人は、吟味座の座敷又は上縁から白洲に下げて、袴姿のまま染縄で羽交ひに縛ります。そして此の縄のまま斬られますから、牢屋と奉行所の往復等に長期

間使用出来る細引の染縄を一本捨ててしまふのですが、此れは武士に対して人外の身分を意味する藁縄を用いる事を嫌つた為だと思われまゝ。

縄が掛かった死囚は一度牢屋敷に帰り、窓を荒格子にした駕籠に乗せて御仕置場に送られます。

さて刑場に着いて駕籠から下された囚人は非人に引渡され、目隠しは用い無いのでそのまま非人が引立てて切場の穴の前に据え、三人の非人が介添して襟を下げ首筋を前に出し斬り良い様にして手足を押え付けて居てくれるので、囚人は切腹の時と違つて、ただ、されるままになつて居れば同心の打役が、適当に斬つてくれるのです。

斯様に直参の士は死刑に行われる時も特別扱で、刑の申渡を受け、死刑囚と成つた後も礼服の着用を許され、士分の囚人として、刑に入るまで切腹に次ぐ礼遇を与えられるのですから、切腹以上の罪の場合は直ちに死罪に行われる陪臣に比べ大変特權的な待遇を受けて居たのです。

しかし処刑以後は供養をしたり墓を立てる事は許されず、本人に関する一切を抹殺されて、他の刑死人同様斬殺として取捨てられる

ので、衣服をすべて取去ってから、棺桶等は一切用いず、刑場内の空地へ汚物として身首バラバラに捨埋にされるので、此の点は、罪人として衣服の上から縄で縛られたままの姿で埋められる古式の切埋の方が、より人間的な取扱方だったと云えます。

各藩でも士分の家来を死刑にする時には、大体斬罪又は切埋に準じた方法を用いて居た様で、各藩の藩士が町奉行からは陪臣で有ると云う理由で、常に斬罪より一等重い死罪に行われ、庶人と共に人外の扱いで処刑されたのは、町人とは取扱いに多少の違いが有るとは云っても、随分不公平な話です。

此れは各藩の士が罪をおかした時には、其の藩において処分するのが普通であって、町奉行の手にかかって死刑にされるのは、無宿に近い、武士とは云えない様な浪人等が大部分で有り、大藩の上席の武士が町奉行から死罪を申渡される事は、極くまれで有った為に此の様な不公平が問題に成らなかつたのだらうと思います。

又直参の士でも武士に有るまじき罪をおかした者は斬罪には行われず、一等重い仕置として死罪に行われた例が度々有り、此の点から見ても、斬罪よりも次にのべる士分の死罪

の方が重い刑で有る事は明かです。

次に死罪について述べますと、此の刑は元来庶人以下の為に定められた刑ですが、実際には士分から非人迄男女を問わず、大変広い範囲に渡って行われた死刑で、かなり年少の者にまで申付けられて居り、処刑囚の数も非常に多かったので、牢屋敷内に死罪専用の切場が作ってあり、一日に数十人も切られる事が珍らしく無かつた様です。

しかし原則的な方法は書物に出て居ますが、実例を詳しく書いた物は殆んど無い様で、たまに有っても文学的な文章が大部分で細かい点は余り信用出来ないもので、庶人の場合とは扱に大分変化が有り、よい実例とは云え無いのですが、或る事件で取調べを受け、死罪を申付けられた士分の囚人の中の二人を例に取り、その他の数例と共に、彼等の受けた扱を比較し乍ら士分の者が、囚人と成り、死罪に行われるまでの身分と扱いの変化を考えて見ます。

甲は大藩の藩士で熨斗目以上の士、乙は前科が有り大名預け蟄居中の浪人ですが、二人共、幕府に対する陰謀の罪で同じ頃に死罪を申付けられました。

評定所の吟味席は、甲は上縁で、乙は板縁

です。呼出状によって出頭する士分の者は、紋付麻袴着用で、藩邸よりの介添人と共に控所で、大小提物等及足袋を取り、丸腰の素足に成って次の間から席に入ります。

乙は御預け蟄居中なので国元では、罪人として礼服の着用は一切許されず、常に着流して居ました。江戸へ送られる道中も公儀の罪人として、囚人駕籠に入れられて運ばれたのですが、奉行所に出頭する時だけは、紋付袴の第一正装を着せられた様です。しかし囚人ですから丸腰で提物等も持って居ません。其の後数回の取調べの後、二人共入牢申付けられますが、入牢後は白洲の木戸口より入りま

すので、介添人とは吟味席で顔を合わすだけに成り互に話をする事は出来なくなります。又少し以前に別の事件で逮捕された丙は、自宅で役人に逮捕されたのですが、士分なのに重罪人として、その場で縛られ駕籠にも乗せられず縄付姿で牢屋敷まで市中を歩かされて来たので、生きて居るのがたまらないほど恥かしかったと書いて居ます。

此の人は入牢後日を改めて奉行所に呼出され、吟味中揚り屋入の申渡しを受けました。

入牢を申渡されると直ちに掛の者が囚人の手を取って白洲へ下して坐させますので、両

斬罪仕置の図



手を白洲について平伏して居ると白洲の隅に控えて居た小者が、二人出て来て一人は肩衣を引抜いて取去ってしまい、今一人が後に廻

って手首に縄を掛け後に廻して縛上げますが、袴はそのままで、縄掛けが出来ると引立てて木戸口から出ます。木戸から外へ出る時の履物は藁草履が用意して有った様ですが、白洲内は囚人も役人もすべて裸足で、一般の画に有る様な荒薦等は無く、三人共白洲へ直かに坐らされました。入牢の時、牢の前の外鞘内で衣服を改める為着衣を脱がされますが多くの人の有る所で全裸にされるのは、想像以上に恥かしいもので、彼等に取っても随分辛い事だったと思われれます。

此れは女の時も同様ですから、武家の妻女には大変な苦行だったに違い有りません。入牢後揚屋内の生活は、人により扱にかなりの差が有った様です。此れは公式の罪状による取扱いの外に囚人同志の役々による待遇があり、中々ややこしいのですが、三人共牢内では隠居役等に成って居たので囚人間の、いやがらせや、私刑等は受けずにすんだ様です。しかし乙の前科の時には、大分ひどい目にあわされた様で、金も無い上、顔もきかなかったので苦しい思いをさせられました。

牢内では三人共囚衣は着せられず、私服に袴を着けてすごして居り、帯紐等も使用出来ました。入牢囚には水浅葱色の囚衣を支給す

る規定が有り、庶人の場合呼出等の時には、必ず囚衣を着せられて居た様ですが、下着はどの位の物まで着用を許されて居たのか不明で、古い例や支給の規定の無い所から見ても囚人の正装は、男女共素肌に囚衣一枚の縄付姿で、肌着や帯紐は一糸も許さ無かったものが、幕末頃には取締りが大分ゆるやかに成ったのではないかと思います。なお囚人が牢から引出される時は、必ず縄で縛られますので、帯紐等はしめて居なくても少しもさしつかえ無いのですが、そのままでは牢内が不自由ですから、囚衣には付紐を付けて有るのが普通です。此の付紐は、小供の衣類に付ける様な長いものでは無く、短い紐で左右別々に結びます。此れは安全の為必要な事で、帯や帯等の使用を許すのは非常に危険な事です。同じ幕末頃の或る藩の例を見ても、格式の有る寺の住職と妻子が入牢した時の扱は、私服は一切取上られて、白の単重の獄衣一枚に荒縄を帯の代りにしめさせられて居たそうで、江戸の牢屋にくらべ、大変丁寧な取扱いをして居ります。

女が囚と成った時の扱いは、高貴の姫君より乞食売女に至るまで全く同じで、此れは女には格式により扱の相違は有っても身分は無

格で、生れた家や夫の身分によつて、それぞれの扱いを受けて居るだけです。囚女と成つた後は、すべて同じ牢に入り、同じ扱いを受けます。又女囚を掛りの役人等がなぐさむ事も間に有り、自分の顔を見られない様にする為に、縄付女に特別の体位を取らせる方法等も考案されて居りますが、此の様な事は他の社会に比べて特に多いと云う事は無く、露見した場合は、素人に対する暴行より重く処分されて居ます。

丙は入牢中ずっと牢内縄を掛けられて居たので食事等の時には大変不自由な思いをしました。が、甲や乙は牢内生活について随分細かい事まで手紙に書いて居るのに、牢内縄の事は何も書いて居らず、本人以外にも牢内縄を掛けられて居る囚人は居なかつた様なので、牢内縄は何時頃、どんな罪囚に用いられたのか、はっきりした事は不明です。本来ならば甲は丙よりずっと重い隠謀を企て実行し



た囚人なので、衣服も定めのあるものを用い縄を掛けた上、さらに足枷も使用するべきですが、掛りの役人の考え方により、相当手加減が行われたと見られます。

評定所へ出頭する囚人は、庶人は囚衣本縄付で番に積んで送られますが、士分は紋服袴で駕籠に乗せられます。此の場合も牢外はすべて縄付が原則ですから、紋付の着物に袴の袴だけを着けて、染縄で士分格に縛られて駕籠に乗り、肩衣は別に持って行ってもらい、白洲外の囚人控所で縄を外されてから肩衣を着け、その上から改めて羽交縄を掛けられて吟味席に入ったはずです。

しかし此れにも色々違った扱方が有るので、甲の時には道中で駕籠をのぞいて見た人が居たのに、服装や縄の事は何も書いて居ないので、縄の掛方も確かな事は判らないのですが、吟味席内では、刑の申渡しを受けるまで縄や枷は一切用いられませんでした。此の点は乙も同様だった様です。しかし甲乙と共に調べられた人の中には吟味席でも縄付のまま同心が左右から縄を持って、押えて居た人も有りますから、囚人の取

調べに對する態度により、必要に応じて使用された様です。甲乙共重罪人で有乍ら牢間等も一度も受けなかったので、此の点役人の心証を善くしたと思います。牢間を受ける様になると、土分でも白洲に下げられてしまい、扱いが庶人と殆んど同様になったのですが、それでも道中は奮で無く駕籠をういます。しかし服装は礼服は用いず、私服の白衣か或いは、囚衣に本繩を打ち罪人として嚴重な取扱いをして居りました。甲乙共死罪に行われましたが、此の量刑は甲には輕すぎると思います。

御定書には公儀に對し重き謀計を企てた者は、獄門と成つて居ますが、甲の行動は「企て」位ではなく、引廻しの上逆磔位に行われども、差支えないので、此れを死罪ですませってしまったのは、明かに幕府の勢力の衰えを表わしたものです。

乙は元來、此の事件には關係が無いのに、危険人物として、ついでに片付けられたので、すから適当な量刑と云えます。なお逆磔は明治四年に水戸で行われたのが、最後です。

甲は十日程入牢の後、死罪に行われる事になり、申渡しを受ける為に奉行所へ出頭しましたが、往きの道中が土分としての最後の道

中に成ります。木戸口から素足に砂利を踏んで白洲を通り、縁に上ると役人や介添人等はすでに着座して居り、定め座について平伏すると、直ちに読渡しが始まります。

だんだんと読進み、一段と声高に「死罪申付くる」と読終ると共に、今までの武士の身分や礼遇は一切剝奪され、刑罪人として扱われる事に成るので、切腹等の場合の様に「御受申します」等と答える事も許されず、同心二人に腕を擱んで板縁まで引ずり出され、そのまま白洲に突落されます。

白洲には小者達が待ち構えて居り、落ちて来た囚人に飛掛つて、肩衣や袴等の礼服をすっかり剝取つてしまつてから、砂利の上に坐らせて、庶人用の型の本繩に縛り上げてしまします。こうして生れて始めて着流しに帯もしめない縄付の非人同然の罪人姿を藩の介添人等に晒し乍ら、白洲を引立てられて出たのです。

乙は数カ月入牢して居ましたので、髭や月代がのび、凄まじい形相で申渡しを受けました。乙の席は板縁ですから、読渡し後白洲の小者達が後から掛つて、簡単に砂利の上に引下し、礼服だけで無く、肌着まで取上げて、禪一つの裸にしてしまいました。着衣を取去

ると、そのまま四五人で手取り足取りして、草履もはかせず駕籠の所まで引ずって行き、立たせたまま素肌に繩を打つて駕籠に押入れて送り出しました。

以上の様に、二人は大分違つた取扱いを受けましたが、此れは二人共土分とは云つても身分が違ふせいだと思われれます。

先にも述べた通り、死罪は庶人の為に定められた死刑なのですから、大藩の武士で有つても、死罪申渡し以後は返答は愚か、白洲に下りて行く事も許されず、不浄のものとして役人の手で投落され、小者達から奪衣縛繩を受け、名実共に庶人の刑罪人として、白衣本繩付の姿に変えられてから、白洲を出なければならぬのですが、乙は浪人で有る上、既に蟄居中なので、土の扱いを受けては居ても罪人として人交り出来ない身分ですから、刑の申渡しと共に身分を一等下げられた為に、庶人より下の非人に成つてしまったので、その為に上記の様な變つた扱いを受けた様に思ひます。

此の様に刑の申渡しと共に身分が下るのは面白い制度で、此の方式が有る御蔭で、切腹では介錯出来る者が居ない様な、高貴な身分の人でも、打首や磔等の刑を申渡せばそれ以

後は、人外の囚人として、牢役人や刑場人足等が、畜生同様に自由に取扱えるので、明治時代初期には明文化され、雲井や河上等の処刑の時は、「除族の上臬首」等とはつきり申渡されたので、身分の変化がよく判ります。

しかし此の外にも甲は不断は極くおとなしい人で、小柄な女のようにしとやかな美青年で呼出以来最後まで、神妙に扱われるままに成って居たので、取調べの奉行等や老中からは非常に憎くまれて居たにもかかわらず、下役人や牢奉行の心証は大変良かったのです。しかし乙は白洲で自作の詩を吟じたりしたので此んな所にも甲とは取扱いに差が出来る原因が有ったのかも知れません。

又二人共衣裳は変えられても、頭には手を付けず士分の鬘のまま牢へ送り返されたのです。士分の女の場合も、甲の時とはほぼ同様に扱われたのですが、鬘は入牢の時にはどいてしまい、牢内では下髪か非人と同じ鬘に結わされて居るので、頭では庶人も士分の女も区別が付かないでしょう。

死刑囚を牢屋敷へ送り帰す時は、「追っ立て」と云う方式で、駕籠昇の人数を殖やし、警衛の者も多く成り、四十人位が前後をかこんで駈足で帰ります。しかし普通の罪状で、

目付立会吟味で無い囚人は、牢屋敷内で取調べを行い、処刑の申渡しも、検使が牢屋敷に出張して行うので、以上の手続は不要なのです。

牢屋敷へ帰って来た囚人は牢の外袴の内に入れて受刑の仕度をさせるのですが、牢屋敷で申し渡しをする時には、始めに処刑の仕度をして仕舞い、その後で申し渡しをするのです。又引廻しが附いて居る時は囚衣の上に私服の着用を許されますが、此れは罪人の素性を明らかにして展示効果を高める為に行う処置です。引廻しの時の縛り方は本縄ですが、細引では無く荒縄を用います。此れは不断は囚人の肌をいためない様に特別製の細引を使いますが、死囚にはその様な考慮は不用で有る為と、火刑の時等、本縄のまま処刑するので染縄を無駄にしない為等の理由も有るので、一番大きな目的は、その囚人が人外の死刑囚で有る事を表示する事です。

此うして用意の出来た罪人を馬に乗せて送り出しますが、死罪と獄門の囚人は再び牢屋敷へ帰って来るので、これを又外袴に入れて死罪にする為の身拵えをさせます。したがって、甲や乙も外袴に入るとすぐに本縄を外して死仕度をさせられました。普通の罪人の場

合ならば、既に礼装を剥取られて庶人同様の罪人姿に成って居ますので、そのまま切縄を掛けるか、或いは私服はすべて欠所品として取去ってしまい、囚衣一枚を着せられるのですが、甲の時は、牢奉行の石出帯刀から特に許されて、主君より拝領し、晴着として牢内まで持って来て居た紋付と袴を着用しましたが、下着に水浅葱の囚衣を着せられたか、私服を用いたか、又は素肌へ直かに紋付を着たのか不明ですが、揮は自分の物を用いて居ります。

此の事は牢屋敷始まって以来の特例と云われて居り、死罪囚としては、真に破格の扱いと云わなければなりません。又欠所品として牢屋敷の収入に成る罪人の私服を着せたまま処刑したので、奉行は此の分だけ損をしたわけです。しかし此の特例と云うのも、死罪囚の紋付袴姿が特例なのか、或は葵の御紋付を公儀の刑罪人に着用させたのが特例なのかは、大分意味が違うのですが、私は後者だと思っています。

此の様に甲は武士として最上の晴着を着せられて仕置を受ける事に成りました。しかしこの事は、石出氏の個人的な厚意によるもので、武士の身分に対する公式の礼遇では有り

御様の図



ませんから、袴の着付が出来上ると直ちに掛りの者が、ピンと張った肩衣を、ぐしゃぐしゃに潰し乍ら、庶人の死罪囚と全く同様に荒

縄の切縄を掛け始めます。晴着を着せられた事は、一見厚意の様に見えますが、幕末の礼節と法制の乱れと衰微を表わしたもので、官吏としては不忠の臣と成り、甲本人に対してもかえって非礼な処遇と云わなければ成りません。

此れは足利時代以後徳川初期の多くの実例によって明かな事で、大阪落城後、徳川家康が関白秀頼の子息の国松を処刑した時の方法は典型的なもので、「天下取りの秀頼公の子供程の貴人を、名字を持たる程の者ならば、いかに軽き者なりとも弑する事は成るまじ」との理由により、士人に対する打首刑を用いず、盗賊同様人外の罪囚として、京都市中を引廻した後、刑場に引出して、穢多に斬らせたのです。さすが三百年の太平の基を築く人の処置で、感服の外有りません。

又大坂方の有名な大將連も囚われと共に、立派な具足や装束を取上げられ、古布子一枚の姿で晒し者にされた後処刑されましたが、双方共当然の事として、敗者は囚徒の身分を甘受して討たれたのです。

此等の例でも明かな通り、士分以上の者が縄で縛られて首を斬られる等と云う事は不名誉の極みであります、改易の上囚人とした

後刑に行う時は、例い八裂にされても戦国の常、武士の習いで有って、作法にも適い、囚人に取っても公正な仕置として喜んで受入れられたのです。なぜならば、士人の身分は改易と共に消滅し、囚人と成った後は最早人外の畜生同様のものでもありますから、たといどの様な姿にされても、またどの様な刑に行われても恥がしがる必要は無いのです。

故に牢奉行が本当に甲に好意を持って士人として遇するつもりならば、死罪申付けられて送り返されて来次第、武士の髪形のまま奪衣を受けた囚衣縄付の恥姿を、出来るだけ人目に晒させぬ様に、先ず第一に鬘を解いて囚人髪にし、着衣一切を取去って庶人同様に囚衣一枚を着用させ、士分の倅を止めぬ姿にあらためてから、上手を選んで入念に縄を掛けさせるべきです。

かくする事によって、甲の人格は完全に消滅し、死出の晴姿の囚人と成るので、此れ以後は畜生同然の刑罪人として非人達に扱われる事が、作法にも適い、武士の義理でも有る筈です。此の様な自明の理を実行出来なかったのは奉行の人物にもよりませんが、以前より士分を死罪に行う方式が感情的な同情によって、身分の降下が曖昧にされ、目隠しを用い

なかったり、私服を許したりして来たため、甲の様な扱いをする役人があらわれたものと思われ、最初から死罪以上の死刑には改易が伴う事を明文化して有れば甲の様な事には成らなかったであります。

しかし士分以上と云っても女の場合は身分上の問題は一切無いので、服罪の後には庶人や女非人同様となり、荒縄を掛けられた後はたとい白昼人前で非人達に犯される様な事が有っても、畜生同然ですから、人で有った時の様に恥がしがる事も無用で、様物にも使えぬ厄介者として目隠し付きで斬られました。

次に乙の扱いを見ますと、同氏の伝記等の中には、此の辺の事を大変美化してしまい、斬罪の処刑方法を書いたのが大部分ですが、ひどいになると、斬罪の様に小塚原に作られた席に、切腹の時の様に白の死衣裳、もし本当に特に仕立てたのなら、首筋を広く出して斬り良くする為に襟は付けないのが正式なのに、普通に仕立てた単衣の着物を着て、死罪囚の様に白の細い帯をしめただけの着流姿で、御手打にでも成る様に縄も掛けられずに端然と正座して、首をさしのべると云う怪画や文章を見た事も有りますが、正に最負の引倒しです。

そこで乙の衣服の問題ですが、先の通り彼は評定所で揮一つに剝取られて帰って来たのですが、牢内に残して有った着替や不斷着等は、すべて欠所に成って居るので、自分の衣類は何も無くなって居りますが、裸で仕置をする事は無いのが慣例ですから、囚衣か場合によっては自分の衣服の中の一枚を着せられたものと思われ、何れにしても上記の様な伝記作者の描写とは大分違ったもので有りました。

着せかえと縄掛けが出来るとすぐに、轡から引出され、庭で待つて居る非人に渡されます。かくして大勢の非人達に囲まれ乍ら切場へ引立てられて行く有様は、他の死罪囚と同様で午前十時頃の事でした。

切場の門前に着くと、待ち受けて居る役人が、甲〇〇と名前を呼びます。読上げられた名前が自分に相違無い事を確かめて「ハイ」と答えます。囚人の答を聞くと、庶人の時には目隠しをしますが、士分には用いないのでそのままに場内に送り込み、血溜りの前に敷いて有る席の所まで挽いて行き、草履を脱がせて坐させます。

引据えられて前を見ると、二三日前流れた古血が茶色く固まって居り、横の斬殺置場も

掃除がすんで非人人足が新しい斬殺が出来るのを待つて居ります。

一方には打役と手伝等が控え、その先には検使役の面々が居並んで居ります。囚人が座につくと、後から縄取りの両側へ足持ちの非人が一人ずつ取付き、左右の足首を掴んでしっかりと押え付け、縄取りは小刀を出して肩へ掛かつて居る咽喉縄を切取って、斬り良い様に、襟を後へ引下し、肩を出して両肌脱ぎにして腕縄の所まで衣類を下げて、乳房を出します。

縛縄を一部分でも切放すのは一寸不安な感じがしますが、咽喉縄は長時間の間に腕の縄が弛むのを防ぐ為のもので、両腕と手首はそれぞれ胴と共に完全に結紮されて居りますので、この為囚人の結束に支障を来す事は無く、その儘腕をねじ上げる様にして胴を前に傾け、首筋が平らになる様にしてくれまですので、目をつむり身体力をゆるめて待つ所を一刀の下に身首二つの斬殺と成ります。

斬られる時に身体を固くして筋肉に力を入れて居ると首が飛びますし、歯をくいしばって居ると歯をむき出した無念の形相に成りますので、獄門に懸けられる時など特に注意して身体中の力をゆるめ、目を軽くとし口をむ

すんで居なければなりません。

又首を十分に前へ差出して置かないと首筋は胴の方に残り、頭だけの首級に成って獄門台に乗せた時、上を向いてしまい、大変見苦しい姿になるので、出来るだけ首筋を先に出して水平にし、肩に近い所から斬って貰えば置いた形もよく、誰に見られても恥かしく無い美しい首級に成れる事は、士のたしなみとして教えられて居る通りです。

打役をつとめるのは、原則として同心又は山田浅右衛門と云う事にきまつて居ますが、山田浅右衛門は弟子に勤めさせる事を許されて居ますから、一般の武士でも打首の練習をしたい時は、浅右衛門に金子を贈り、弟子と云う事にして貰って、処刑人の有る時に牢屋敷に出動して、獄門、死罪、下手人の首を斬る事が出来、甲を斬ったのも或る藩の若い士でしたが、腕の立つ人で大変美事に斬れたそうです。

斬り落した首は掛りの非人が拾い上げて検使に見せ、合図を受けてから置場に下げて元結を切り鬘をくずします。

胴体は切放された瞬間痙攣して硬直しますが、足持ち二人は構わず摺んで居る足首を、ぐっと後へ引いて身体を前にのめらせて俯伏

に倒し切口から噴出する血を血溜りへ流します。十数秒位たつて放血が一段落すると、硬直もゆるみ、力が抜けて全体がだらりと伸びますから、そのまま二三間先の置場まで足を持って引摺って行き、縄を外して衣服を剝取り、一糸まとわぬ素裸にして放り出します。

此れで死罪の執行が完了しました。甲、乙の時は処刑の中渡しから一時間位で終った様です。罪人の死骸が男女共一糸も許さず全裸体として野外に放置し、白日の下に晒されるのは、非人以下の身分の囚人の成れの果てとして当然の事で、白骨に成るまで刑場どころが置いて置いて衆目に晒して見せしめにするのが正式と云われて居ります。

剝取った衣服は、刑場人足の収入に成るので、甲は随分喜ばれた事でしよう。又甲と同じ日に同じ斬罪に成った丁は、切場に入ってから元氣よく詩を吟じたり役人に当り散らして勇ましくして居ましたが、斬殺に成ってから見ると翠丸がちじみ上つて居るのを、見て居た役人が、後に人に語った為に、日本中に知れ渡ってしまいました。

此処までは、獄門、死罪、下手人共男女を問わず同様で、獄門は首級を別便で晒場に送り、胴は死罪と同じ扱いです。

斬殺の内、様物に成る分は切場の隣の刀試場へ運ばれますが、首は槍の試験にしか使わないので、胴だけしか使わない時の方が多く名刀の試切には一度に五六体も使ってしまうので資格の有る斬殺は、殆んど全部使用された様です。

しかし甲等の士分や女、下手人等は様物には使わないので、夜になるまで置場に放り出して置かれますから、失禁も始まり、出血も続いて随分見苦しい姿を役人や非人の前に晒さなければ成りません。

役人が去ってしまうと非人達が女の斬殺を屍姦する事が有った様ですが、一方は非人有り、女は切殺ですから取立てて問題にする事もなかったようです。

甲と乙はそれぞれ其の日一番に斬られましたから、蓆も新しく、置場等も掃除がすんで綺麗に成つて居たと思いますが、二人以後には血溜は文字通り血の池になり、蓆も血だらけで、べとべととして居り、そばには血まみれの切殺がごろごろして居るので、目隠し付の庶人は兎も角、士分の囚に取つては、余り氣持の良い所ではなかったと思います。

夜に成ると斬殺は俵で荷作りして、小塚原が鈴ヶ森に送られますが、甲等の時は四斗樽

を使って居ます。

様物については、先にも述べた通り牢屋敷内の定め場所で、奉行と本阿弥が立会って浅右衛門が行いますが、此れは公式のもので、余程良い刀で無ければ経費等の点で実行出来ないで、此れとは別に、非公式に実用上の性能を試験して貰う為、山田家に依頼される刀槍は大変な量に上った模様で、その内の一部の刀を打役に出る時に使用して居たのですが、首を切るだけでは間に合う筈が無いので、小塚原に送られた斬殺を必要に応じて表向きは内密に使用して居たと思われる節があります。

此の様な内密の試切の場合には、正式の様物の時の様に庶人の男の切殺だけに限る必要は無く、又庶人の男の切殺はすでに使用済になつて居ますから、女や士分の切殺を使わなければ成らない筈です。

ですから斬罪に行われる囚人は一応すべて首を切られるだけで無く、胴体も寸断されるものと覚悟して居なければ成らなかつたらしいのです。汚物として取捨てられる物を使うのですから、大変有益な事で、刀の試験法としても理想的な方法で有ります。

甲や乙の斬殺も一人分ずつ四斗樽に詰めて

小塚原に送られ、刑場の隅に有る刀試場の物置に入れられました。

さて甲の藩の家老達は、彼が如何に幕府の刑罪人と成ったからとて、首は鑢の試験で穴だらけに成り、胴や手足をバラバラに切断されて、他の斬殺と共に捨埋めにされるのは、あまりに残念で有ると云うわけで、牢役人及び浅右衛門に金子を贈り、大変な苦勞をして、漸く渡して貰ったのですが、処刑屍体の取扱いは、外部の者に対して非常に厳重で親藩の威光と十分なる賄賂をもつてしても、刑場の外へは髪の毛一本と云えども持ち出す事を許さず、物置の四斗樽を外に出して貰い、屍体を水で洗って髪を結い直し、身首をつなぎ合せて屍衣を着せ、桶に入れて刑場内に葬るのを黙認して貰っただけで墓石を立てる事も出来ませんでした。

乙の時も友人達が努力して甲とほぼ同様に葬りましたが、首をつなぐ事は禁止されたので、膝の上に首級を置いて葬ったのです。

なお甲の揮を手に入れる事に成功しましたけれども、見た人達が、「少々血付き居り候。」としか書いて居ないので、失禁の有無は不明です。

以上数々の死罪の実例について、色々見て

参りましたが、此の刑は先に述べた切腹や斬罪及び次に述べる下手人が、受刑者の身分を尊重し分に応じた礼遇を与えられ、或いは、死後も人格を認められるのに反し、磔や火焙等の刑と同様に、処刑の居し渡しと共に、士分庶人の別無く人権を剥奪された上、刑罪人として非人よりも下の分際に落されてしまうのであります。したがって死罪は斬罪の次に位する刑と考えるのは、皮相的な見解と云わなければ成りません。

次に下手人の刑ですが、此れは庶人だけに行われた寛典で、囚人の扱い方や処刑の方法は死罪と全く同様ですが、附加刑の欠所と様物が付かないのです。

此の刑に行われるのは、もし士分の有れば、切腹に相当する様な十分同情に値する殺人罪が大部分で、様物に成らぬと云う点は先の死罪の所で述べた通り、余り實際上の意味は無かった様ですが、欠所に成らない事は本人に取つては最早関係の無い事で有つても、家族に取つては非常に重要な事です。

即ち欠所になると本人名儀の田畑家屋敷から家具、衣類、夜具、蒲団まで一切の財産を没収される為に、本人が戸主の場合、家族の者は悲惨な事に成つて終いますが、下手人な

大名刺判(9×6.5) 印画紙焼付

YYYYYY	654321	全裸荷造棒しばり	(大塚啓子)	
麗しの緊縛裸像	浴室股間縛り	見事な飾り物	観念した胡座	乱れ黒髪裸見本
(愛川悦子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)

YYYYY YYY YYY YYY YYY YYY YYY YYY
 22212019181716151413121110987
 逆十字後手縛 (愛川悦子)
 裸身の捕われ人 (愛川悦子)
 逆エビ後手足吊り (愛川悦子)
 全裸ねやの縛り (田中芳代)
 なまめかしき緊縛 (花坂道子)
 全裸フトンむし (大塚啓子)
 蒲団賣裸またぎ (大塚啓子)
 初々しき裸全身像 (岩井知子)
 ヌード股間しほり (絹川文代)
 全裸脚拵股間縛 (絹川文代)
 セーラー後手縛り (山辺砂登子)
 庭園ヌード縛り (絹川文代)
 全裸全身軀自慢 (愛川悦子)
 豊満双丘くらべ (愛川悦子)
 追いつめられた裸女 (愛川悦子)
 遅ましきヒツプ (愛川悦子)

YYYYYYYYYYYYYYYYY
41403938373635343332313029282726252423

ハダ力縛り人形	強烈後手首縄締	椅子またぎ裸後手	妖艶鬨のしほり	全裸椅子またぎ	亀甲股間縛正面	縛り腰巻色模様	開股一番一直線	ベツト縛りのポーズ	全裸強烈股間縛	囚女後手柱縛り	鎮座する縛り女神	全裸縛りの全身	むしろれたスロース	もうこれで許して	麗人受難の巻	胸のボリウム自慢	縛り正面正坐	大の字晒し
(絹川文代)	(田原美佐子)	(田原美佐子)	(絹川文代)	(田原美佐子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(平野笑子)	(平野笑子)	(花坂道子)	(益田房子)	(益田房子)	(愛川悦子)	(絹川文代)	(絹川文代)

YYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY
 60595857565554535251504948474645444342
 濃艶ハダ力縛り
 あられもなき開股
 全裸変形股間正面
 後手立木縛り
 全裸後手壁ハリツケ
 全裸後手羞恥責め
 振袖令嬢後手責め
 長襦袢後手しばり
 ワンピース縛り
 手吊り裸身の乱舞
 柱縛り観念の図
 不行儀姿態の美
 カメラに晒す全裸
 緊縛女体の開陳
 膨隆突出した臀部
 前手錠全裸像
 股間縛開股の絵
 聖壇のさらし者
 エビ責めの表情
 (絹川文代)
 (絹川文代)
 (絹川文代)
 (大塚啓子)
 (絹川文代)
 (絹川文代)
 (絹川文代)
 (大塚啓子)
 (絹川文代)
 (絹川文代)
 (花坂道子)
 (花坂道子)
 (花坂道子)
 (花坂道子)
 (愛川悦子)
 (村井知可子)
 (大塚啓子)
 (大塚啓子)
 (絹川文代)

らば本人が処刑されるだけで、一族の者は一
応生活が続ける事が出来た様で、又或る書物
によると、処刑後屍骸を家族に下げ渡して、
葬儀を許したとも云われ、町人に対する処遇
として、士分の切腹同様の取扱いだっと思
われます。

死罪に伴う欠所については、甲の場合を見
ると、本人が死罪の申渡しを受け縄付姿に変
えられて、白洲口から引出された後、次の間
に下った藩の介添人に次の様な文書が渡され
ました。

右之者所持之家財、欠所相成候間、取調之上品書相添、石谷因幡守方可被差出候。

但親妻子名前之分、レニ不及欠所、實際には藩邸内の事でも有り、藩の重要人物で有った人の事ですから、紋服以外は適当に他から不要品を集め一揃にして差出したので、本人が大切に_レして居た物はすべて保存されて居ます。

此の文書は、斬罪や死罪以重の磔等の場合も同様で、庶人の場合は町役人に渡された様

様々な御仕置の内、打首刑について色々と思ひ出すままに書いて参りましたが、一般に識られて居る様な点は出来るだけ省いて、法令と相違する取扱方や明文に無い事ばかり、はじくって見たので、ひどく雑駁なものに成ってしまいました。

その上私の思い違いも有ると思われそうですし記録の不明な所も有り、かなり大胆な推測を行つた点も有りますので、事実を御存じの方は、御笑覧の上、御教導を賜われれば有難く存じます。

「奇譚三十九夜」物語

第二十一夜

辻村 隆

秋の深まりが日毎に感じられる今日此頃です。クラブの一室――

紫煙の中に八人の退屈男達は、世の中の退屈を一身に背負った顔付きで居並びます。

円卓に盛られた、菊の群れが際立ってあざやかに秋の気配を引立てているのです。

話がひとしきり途切れて、軽い真空の空気が漂った頃、ゴルフ氏が、今宵の先手をうけたまわって、一同を制したのでした。

「戦国時代の武将列伝などを通読しますと、随分殺伐な、血を血で洗う、暴虐、残酷の物語に出くわしますが、殊に織田信長が男色家として森蘭丸との熱烈なる同性愛や、大量虐殺家サジストの統領であった事は、歴史の事実として、これは誇張ではなく記録に残っ

ております。

天龜二年九月の、叡山焼き討ちでは、逃げる老若男女、僧侶、稚児衆に到るまで、一人残らず斬首しておりますし、天文九年三月には、男家の対家の、稚児小性数人をつれて竹生島へ参拝した留守の間、城内を空にして出歩いたと云う理由だけで、留守居の女房を悉く縛り上げて、桑実寺に於て、一人一人惨殺して、それを見て悦んでいるのです。

更に天正七年の暮には、反将荒木村重の人質の女達、百二十二人を全員、寒中素裸にしてはりつけにし、これを虐殺して、大サジト信長の面目躍如たるものがあるのですが、こうした虐殺は、何も日本だけのものではなく、中欧に於ても、期を同じくして、天正三年頃

から、世にも恐ろしい、虐殺夫人が一世を震撼させていたのでした。これからお話しするのは、エリザベス・パトリ―伯爵夫人の、虐殺の記録であります」

第四十九話 薊屋敷の惨劇

織田信長がサジストの猛威をふるう一五七五年（天正三年）、ハンガリーの名門伯爵、フランク・ナースデタは、同門の貴族の娘で、当時、ハンガリーでその美貌を謳われたエリザベス・パトリ―と華やかなる華燭の典を挙げた。新婚夫婦が館を建てたワグタールの丘陵の、ツセイテの屋敷は、一面にあざみに囲繞されていた処から、その村の人には、これをあざみ屋敷と称して、若い二人の美男美女の夢の様な生活を祝福したのであった。

しかし、半年も経たぬうち、彼等の祝福は、憎悪と変り、やがて呪咀と変じていった。

伯爵フランクは、貴族にあり勝ちの我儘さから、情容赦をしらぬ人間であった。彼は部下や奴婢を叱るのに、決して言葉を用いず、先ず手か鞭で叱りつけ、更に氣に入らぬと、すぐ剣を引抜いて、相手を傷つけねば納まらない性格であった。

之に刺激されてか、又は、エリザベスの潜在的な性格の表われか、彼女も亦、夫に勝るとも劣らぬ惨虐な行為を平気で行い、女中達を意の儘に酷使し、若し応じないものがあつたり、氣に入らなかつたりすると、思う存分折檻して、死に到らしめるのを悦ぶたの女性であった。美しい女が柳眉を逆立てて、逆上すると、更に美しく見えるのか、伯爵は、彼女のこうした性向をむしろ歓迎していた。時は十六世紀頃であるから、雇われた女中や腰元は貴族の邸で

は、全く奴隷そのもので、酷使され苦役されても、従順に彼等のなすが儘にされるより仕方がなかった、貴族の専横の時代であつた。

夏の昼下り、伯爵夫人は、物うげに木蔭の寝台に、うすもの一枚で横たわり、女中の一人に足をもませていた。乳白色の、豊満な腿に、その時一匹の蛇がとまり、彼女の腿に針を立てた。女中は驚いて、慌てて、夫人の腿を掌でパシリと叩いたが、運悪く蛇は逃げて、跡に、毒虫による刺し傷が、彼女の美肌を真赤に腫れ上らせていた。

伯爵夫人は激怒した。彼女はその場で、この女中を全裸にすると百数十回柳の鞭で打擲したあと、全身に蜜を塗りつけて、榆の太木に、両手を頭上で縛って、高々と吊り下げた。丸一昼夜吊っておいて、翌日女中の体を見ると、全身虫の喰いつくに任せた肉体は、見るも無惨に、凸凹に腫れ上って、わずか一日の間に見る影もないあわれな虫喰いだらけの体になって、半死半生に声もなく呻いていたのであった。

彼女の斯う云う折檻による愉しみは、ひとつは伯爵が度々留守をするので、その間の退屈と、欲求不満から起るに違いなかった。

しかも伯爵の留守の間、彼の誤解や嫉妬から、若しもの事があつてもと、友人や異性は一切伯爵の権力に恐れて近寄らなかつたから、尚更に、伯爵婦人の憂憤は内攻して堆積していった。自然、手近な、女中や腰元達を虐めて、その苦しむ悲鳴や、流血の折檻を見ては僅かに不満をいやしていたのである。

女中達は戦々惴々として、夫人の前では、絶対に氣をつける様にしたので、彼女の、折檻のタネが減っていった。そこで婦人は、彼女達のアラや欠点を発見させる為に、又、責めの助手として、差し

当り二三人の、気の強そうな、折檻の好きそうな女を選んで、着古した衣類などをやって手馴づけ、これに監督を命じたのであった。

夫人の残酷性はその頃から、愈々高じてゆくのである。

或る女中は、買物にいった時、ほんの僅かの端した金をくすねたと云う理由で、くすねただけの貨幣を真赤に灼いて掌に握らせた上あざみ屋敷の、懲罰規定の、鞭百五十回を打った。夫人が打ちくたべれると、目附が代りに打ちのめすのである。

遂に夫人の嗜虐の極がきて、殺人の日が来た。

或る女中が、カラーのアイロンをかけた処、火のしが十分でないと云う理由で、例によって百五十回叩きが命じられた。その女中は気の強い娘と見えて、監督や夫人を押しつけ、突きのけて、逃れよ



うとしたのである。

通して、高い天井から吊り下げた。間もなく腕の付根は体重で折れ血の循環がとまって、手首から先が、真黒く変色した。

夫人は尚も飽き足らず、カラーをあてたアイロンを熱く灼き、吊り下った女中の足や、腿や腹へ、ベタベタと押しつけた。皮肉の焼け焦げる臭いが充滿しても、夫人は、女中が絶叫し息絶えるまで、幾度でも灼いては押しつけて、それを繰り返して、遂に焼き殺してしまふまで止めなかった。

一旦殺人を犯すと、次々とエリザベスの暴虐は、死に到るまで、苛酷な責めを続行する様になって行った。鞭叩きは百五十回から五百回になった。

冬の寒い朝、監督に命じて納屋の柴を、束にくくらせた処、寒さ

伯爵夫人は烈火の如く憤どおって、女中を皆なで取押えろと裸にして、荷物の様に体に足をかけて、力任せに最も細い細引で、女を後手に縛り上げ、その縛った後手の細引だけに太繩を

に女中達は手がかじかんでさっさとやらなかった。業を煮やした夫人は、その場の四人の女中を、全部寒中に素裸に剥いで、鞭で叩き乍ら働かせた。せつせとやれば温かくなると云う考である。

柴の束が出来上った時、四人の女中は誰もが、非道い凍傷にかかっていた。

余りの虐待に堪えかねて、四人のうちの一人が屋敷から逃亡したが、すぐ追手の監督につかまってしまった。その罰として女中は、氷のはった池の、氷をわって、その池の中へ裸で首まで浸けられ、更に頭から血をさましてやるのだと、手の切れるような冷水を浴びせかけられた。池から引揚げられた時、女は全身コチコチになって凍死していた。

一六四〇年―伯爵は急死した。噂では、伯爵に愛人が出来たので、エリザベス夫人が嫉妬の余り毒を盛ったと云われるが、うやむやのうちに葬儀は出され、暴虐な未亡人は、早速手分けをして、伯爵の愛人と目される三十四才の某高官の未亡人を、甘言をもって屋敷へ誘い込んだ。

自分を欲求不満にさせたのも、この女が原因であると思うと。伯爵夫人は、彼女を一思いには殺さず、ジリジリと馴れ馴れしく殺しにすることをにした。

夫人は、庭に四本の杭を打たせ、これに女の四肢を縛りつけると手足の指の第一関節から先きを、次々に斬り取っていった。

次に女の黒髪を薪で焼きつくして、黒焦げの頭にしたあと、首に縄を巻きつけて、女を四ツ這いにさせ、用を足すに、女の背中にのって、馬の代りに這い廻らせた。腰がくだけると容赦なく鞭が飛び、女の臀部は鮮血にまみれていた。

エリザベス夫人はそれに飽きると、女を太い煙突の中へ鎖で吊り下げ、下の暖炉から薪を燃やして、炎と煙りで女を焼き殺してしまつた。夫が死んでからも、男は誰も近寄らず、四十四才の豊満しきつた体を持て余して、その残酷なる性格に、益々拍車がかかっていた。

秋の夜、若い新参の女中が、夫人の食べる梨を一口盗んだと云うので、彼女は折檻柱に後手に縛々と縛られ散々に折檻された。

夫人の風を切つてぶちのめす鞭の下から若い女の鮮血が飛び散つた。

血を見ると益々喜ぶ伯爵夫人は、自分の手にはねかえってぬらつく血汐に愈々逆上して女の肉が裂け、全身くまなく蔽う鞭傷に、我れを忘れて折檻を続けた。女の絶叫が夜のしじまにこだまして、気の狂つたように打ち続ける夫人に、監督が辟易して、遂に鉄で、若い女の動脈を切つて、狂態を鎮めた。

若い女は勿論死んだが、その時、夫人は血を見て、何と思ったか動脈からドクドクと流れる血を容器にとる様申しつけた。

後世に残る伯爵夫人の血の風呂は、こうして、その血をとるが為に、さしたる理由もなくその夜、次々と惨殺された数人の女達の、いけにえの上にわかされたものだった。全身を鮮血の中に浮べて、生き血を浴びた女の姿は、さながら悪魔の化身の如くだったに違いない。

かくして、続々と殺されて行くから、それらの棺も亦、続々と邸を出ていった。

最初は神妙に坊さんの手をわずらわしていたが、しまいには遂にそれも止めてしまった。死体の処置は女中頭、監督等によって、ズ

タズタになった遺骸を、まず寝台の下につんでおいて、石灰を一杯にかけておき、夜がふけると、それを一つづつ運び出して、裏庭や野原へ埋めさせた。纏てそれも間に合わなくなると、深い井戸を堀って、そこへ次々と放り込んでいった。手伝った女達は、その都度夫人の着古しの衣服を世話係に貰っていた。

困ったのは、女中の母親達が面会にくることであつた。併し、娘達はとつくの昔になぶり殺しにされているので、言を左右にして会わせない様にした。時には現在奉公中の娘の親のくる事もあつたが迂かつに逢わせて、夫人の暴虐振りがしれては困るからこれも会わせなかつた。勤めている娘の、誰一人として満足な体の者はいないのだから、仮りに、女中頭付で面会させても、彼等はきつと娘の變貌振りに驚くに違ひなかつた。

新聞もニュースもない時代だから、こうしたあざみ屋敷の慘劇は發覺する事もなくその後も続き、夫人の命をうけた監督以下数人の女達が、八方手分けをしては、次々と可憐な若いけにえを引張り込んで来た。

伯爵が健在の頃、外敵に備えて、屋敷の廻りに深い堀を掘らせ、出入は吊り上げ橋による、城の様相を繕らえておいたので、女達がこの吊り上げ橋を渡って、一旦屋敷内へ消えたが最後、再び、生ある者として、この屋敷を脱け出す事は皆無に等しかつた。不審に思つた親達が、その筋へ訴え出ても、兼て伯爵家から、充分の鼻薬をきかされている俗吏達は、言を左右にして取り合なかつた。屋敷で死んだと云う報せを受け、かけつけた親が、せめて一目その遺骸を見たいと云つても、既にそれらは古井戸の底で重なっているのを見せる訳にも行かず、僅かの慰謝金で追払ってしまった。役所は、

彼女達の死を、いずれも病死か、偶然の死で取り扱って、親達の訴えはいくらやっても無駄であつた。

併し、遂に夫人に最後の日がやって来た。

或る若い娘の恋人が、彼女があざみ屋敷へ消えた儘、沓として消息を断つたのに疑問を感じ、敢然と美女に変装して、うまく監督の誘いの手にのり、屋敷に乗り込む事に成功したのであつた。

その夜、例によって夫人は血を見なければおさまらず、今は拷問場と化した、大広間の中央に、一人の裸女を犇々と縛って引出し、鞭打ちを氣の済む迄加えた挙句、円柱に縛りつけた娘の胸に、太い長い釘を打ち込むところを、彼はまざまざと見た。絶叫が広い大広間にこだまし、娘の胸からドロドロと鮮血が糸を引いた。更に夫人は一本の釘を眉間に力強く打ちつけた。絶叫は消えて、そこには血にまみれた一個の骸が、青白く佇立して床下の血溜りが徐々に拡がって行つた。

眉をつり上げ、形相も凄まじい夫人は両手で、その血をすくうとミサの様に、パッパッと辺りへ撒きちらし始めて晴々と哄笑した。

恐ろしい恐怖の世界を、眼の辺りに見て、青年は、自分の恋人も既にこうして虐殺された事を知つた。広い屋敷中くまなく探せど、青年の恋人は遂に見当らなかつたからである。彼は伯爵夫人のこの暴虐ぶりを、更に数日見聞した。

夫人の最も得意とする殺し方は、弱った相手の口へ手をかけて頬を引裂くか、顔や胸に針を突き刺す方法であつた。

夫人はよく死をもつてするに焼鑊を用い、鞭打ちの場合の死は、いつも夫人や目附が入れ変り立ち変り、五百回以上も体と足の裏と掌を打って殺していた。

出来るだけ、凡ゆる証拠を掴んでやろうと行動していた彼に、遂に恐ろしい順番が、何の前触れもなく廻って来た。ある夜、拷問の大広間の残酷な光景を、覗き見している現場を、監督の女に見つけたのである。

当時、屋敷には二十数人の女中や腰元が使われていたが、夫人の虐殺が始まると、彼女達は一斉に、目附の女等によって、女中部屋に追いやられてしまうのである。

毎夜の如く、一人又一人と、自分等の同僚や、親しい友が消えて行くのを、女中達は、恐怖と絶望の思いで悲嘆にくれていた。

数人の女の追手から逃れて、青年は近づく女達を叩き伏せると、濠から身を水中に投じた。

数日を経て、この地獄屋敷の現状を委細、文にしたため、青年は知人を頼ってハンガリーの司法大臣に上申した。

兼々、大臣は伯爵夫人の暴虐振りを耳に挟んでいたが、判っきりした証拠を手にしたので、突如、何の前触れもなく、或る夜、あざみ屋敷へ乗り込んだ。

橋を亘り、踏み込んだ一行の中に、勿論青年が交っていた。

慌てて立塞がる、数人の目附女を引捕え、一行が大広間の扉を押し開いた時、恐ろしい惨虐行為が、明るい灯火の下で、進行中であつた。

夫人に口答えをしたと云う罰で、一人の若い女が、唇を針金の糸で縫い合され、裸に激しい鞭を浴びている最中であつた。

広間の片隅には、薪で髪の毛を始め、体中の毛を焼き尽された女の、無漸な黒こげの焼死体がごろがっていた。

猛り狂う夫人を軟禁し、一行は屋敷中を探索した。死体が五つ、

寝台の下に石灰をかぶせられて転がっており、野菜貯蔵蔵の梁のてっぺんから逆吊りにされた半殺しの最中の女が吊り下っていた。更に物置には翌日のいけにえとなる、乳房に焼きこてをあてられた女と、鼻障子を穿ち、真鍮の鼻輪をはめられた女の二人が足に鉄の枷をはめられて、散々鞭打たれた体を、息もたえだえにして横たわっていた。

伯爵夫人始め、彼女の手伝いをした女中頭、女監督等は一網打尽にされて、馬車でウィーンに送られた。

取調べによって、数々の惨劇が白日下に曝され、女中頭と、監督頭は指を斧で打ち切られて火炙りの処刑にされた。その他の女達も夫々打ち首になって、大衆の眼前に曝された、併し、肝心のエリザベス伯爵夫人は、何分にもハンガリー有数の名門の家柄であり、親戚にも、現政府に参与する有力者が沢山いるので、おいそれと刑が言い渡せない。

大衆は極刑を迫り、女達の遺族は、しばしば夫人の身柄の引渡しを迫って、官邸に押しかけたりしたが、夫人が極度のヒステリーによって起った、いわば病気がなせるわざと云う名目で、結局終身禁錮と云うことで、自分の屋敷のソセイテの、あざみ屋敷へ押込めておくことで、事件は解決した。

彼女の一生の間に殺害した女の数は、約六百人といわれていて、蓋し「血の伯爵夫人」として以来、ローマの毒殺魔女、サリメソナと共に、その虐殺振りが喧伝された。

一六一四年八月二十一日、五十四才で兇悪無比な一生を閉じた。吉田御殿の千姫の行状記など、これからくらべると、まだまだ可愛らしいものである。

血なまぐさい戦慄の魔女の物語りを終えて、ゴルフ氏は気味悪そうに、両手をごしごしこすると、テーブルの血の色のポートワインをぐっと呑みほしました。

人々は息をのみ、この、世にも凄まじい残酷談に耳を傾むけていたのです。

空気を変えるかの様に、パイプ氏が、自慢のパイプをゆっくりくわえ直すと、さてと改まりました。

第五十話 催眠儀式

「先日のテレビで催眠術の実況を写しておりましたが、催眠術がその用法によって、嗜好、性癖を変え固疾を治す事は、皆さん、既に御存知のことと思います。人工的な催眠がどうして人間本来の性癖を変えられるのか、私はその心理的な面に非常に興味を覚えるのですが、医書によりますと、催眠状態と云うのは、刺激に反応しやすい一種の脳貧血状態だそうであります。何らかの暗示を受けると、それがただちに反応して、脳内に血がのぼるのですが、すぐ又元通りの脳貧血状態に戻り、表面の意識が、その暗示だけを潜在させておいて正常に働くのです。だから暗示者の命令通りに行動しつつもその行動自体、異常に誘致されたものであることが、催眠者自身は気がつかないのだそうです。



これからのお話は、催眠術を百パーセントに活用して快楽の生活を創り上げた、あるサラリーマンの告白です。」

「出世街道を突走ろうとするボクの目論見は、略々、達成された。

太陽電機の将来性を見込んだボクの感は狂いなく当たった。入社以来五年にして、着々と増資につぐ増資を続けて、膨大になりつつあり、今や押しも押されぬ軽電氣界の大メーカーとのし上った。

しかも計画通り、総務部長に近付き、彼の一人娘礼子の婿となり得たボクは、来年の定期総会では、文句なく、平社員から一躍販売課長に昇進する事請合ひである。

ボクの口から云うのも可笑しいが、妻の礼子は確かに美人だ。司葉子にボリュウムをつけた容姿が礼子であると想像して頂いて結構である。愁と色の二筋道で、ボク等同輩が、数多礼子を争った事は今も会社内での語り草になっている。

将を射んと欲すれば馬の例え、ボクは総務部長に近づく機会を掴むや、専ら、部長の奥さんを当て馬に、涙ぐましい努力を惜しま

なかった。部長も亦、入婿養子であるこの家庭で、奥さんの発言が如何に重きをなしているかを、ボクはボクなりの感で、逸早く見抜いていたのである。

関係のない手練手管の長々しい模様は省こう。こうした物語の、微に入り細に穿っては、源氏鶏太氏のサ

ラリーマン小説をよめば、いくらでも出てくることだろう。

礼子には、秘かに心にひめた愛人があったらしいが、部長夫人の鶴の一声が遂にボクと礼子を結びつける事になった。

深窓育ちの礼子は、母の云いつけ通り秘かな愛のかたみを心底に秘めて、ボクを夫として迎えた。

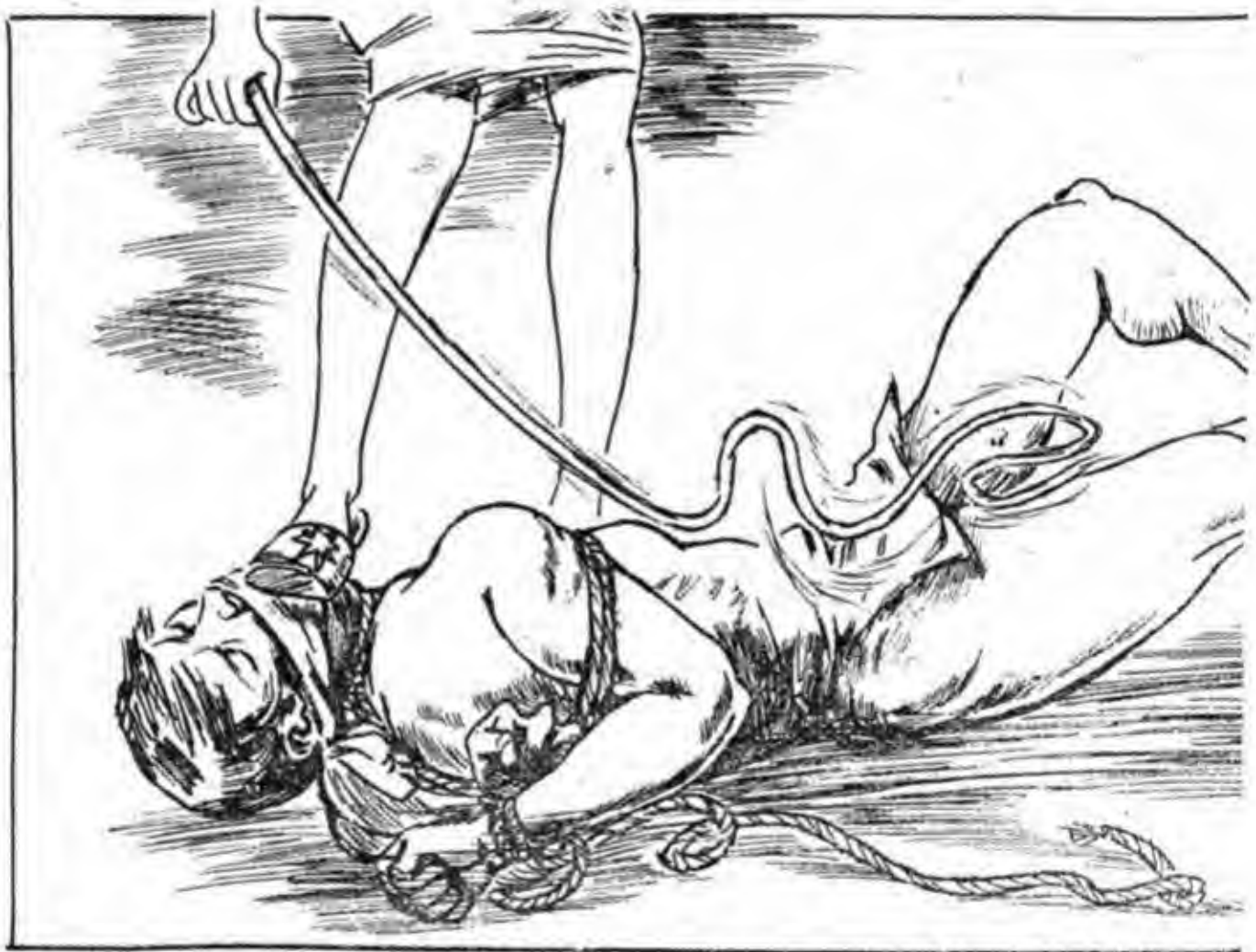
度々部長宅に出入するボクに、好感は持っていたものの、愛情と呼べる感情でなかっただけに、結婚後も、どこと云って欠点はなかったが、何か冷たく、よそよそしさがつきまといっていた。

彼女にとっても、出世の踏台にされたと云う気持が反映していたのかも知れない。

他人目には、祝福と羨望を一身に集めたが、礼子の献身的な愛情を一身に集めることは出来なかった。

表面は華やかにボクは喜びをかくすことなく愉しげに振舞っていたが、内面は冷々として、礼子の肉体は自由に出来ても、彼女の心を、どうにも自由にすることが出来なかった。

ボクが焦々し、焦慮すればする程、彼女は冷たく取り澄ました。



ボクが礼子を妻とする出発点が間違っていただけに、これは当然受けねばならぬ、打算的な感情への報復であったかも知れない。ボクは思い余った。

礼子の白磁の柔肌をかき抱いても礼子は感情の起伏にのってこなかった。いつもボクの独り相撲で終わってしまうのである。

ボクはやり切れなくなって、夜を外で過す事が多くなった。バーでしたたかに酔い痴れ、夜更けに上衣に口紅をつけて帰っても、礼子は一言の嫉妬めいた口振りも出さず、美しい眉をかすかにひそめ、軽侮の面持で、じっとボクの酔態を冷たく見下しているに過ぎないのだ。ボクが醉に任せても、礼子は拒むことなく意に従うが、それはさながら木偶に等しく、マネキン人形の様に味もそっけもないものだった。

礼子とボクの夫婦の状態がかくあっても、部長夫婦―即ちボクの義父母は、ボク等がうまく云っているものと思ひ込んでいるらしい。それは、ボクの打算的なサラリーマン根柢が、義父母に対しては、

極度に優しく、親切で、献身的であつたせいでもあろう。会社の退け刻、ボクは徒然に、ビルの一階の書店で、新刊書を物色していた。フト眼についた一冊。表題は『催眠術インスタント入門』封帯に、（貴方は僅か一週間で、自由自在に人を操れます）と、興味をひきそうなゴジックが羅列してあつた。

ボクは瞬間、礼子に思いをはせた。

彼女に催眠をほどこして、彼女の心を自由自在に操つたら、或いは、氷の様な彼女の心を、温かく解きほぐせるに違いない……

ボクはそのポケットブックを買い求めると、すぐには家路につかず、行きつけの静かなコーヒールームで、香り高いモカを啜り乍ら、それに読み耽つた。

目的をもって邁進努力するボクの性質は、学生の頃からちつとも變つてはいない。催眠術会得の為、ボクは礼子に知られざる様、種々のこの種の本を買い漁つた。インスタント入門と云つても、部厚い全書にしても、要は修練次第である。ボクは本はすべて会社の引出に保管したり馴染の喫茶に預けたりして、それに関する本は一冊たりとも家には持ち帰らず、礼子に氣附かれる事なく、懸命に会得しようと努めた。

一通り会得したあと、ボクは実際にうまくゆくものかどうか、バーのホステスに応用することにした。

正常人の場合、催眠にかかるのは三分の一程度であるが、女は男よりかかり易い状態にあることが、ボクの意を強くした。

施術の方法も色々あるが、相手と会話などで親和感をつくり、深呼吸させるとか、一点を凝視させるとか、薬を用いて気分を沈静にさせるとか、要するに、暗示にかかり易い状態をつくるのが施術の

コツでもあるのだ。

顔相により、ボクは、施術のかかり易い女、かかり難い女と判別する事も、本によって大体会得した。

比較的にかかり易いような、ホステスのH子を選ぶと、ボクは雰囲気をつくり、冗談めかせて一点凝視法を使った。

場所柄だけに、催眠中のことをすっかり忘れてしまふ、催眠性健忘の方を応用しなければならぬ。

ボクの初の実験は見事に実を果した。

H子は容易に催眠状態に入った。

初歩の暗示から、H子にふさわしい暗示へと移行する。嫌いな客が、貴方のドレスを脱がそうしていると暗示すると、彼女は嫌惡の表情を露出し、必死に胸先を身でかばい、服の裾を両手で引つ張つて上げさせまいとした。段々と酒の酔いが廻つて来たと云うと、彼女の首はユラユラと左右に揺れ、両手が、空でもつれて上半身がゆらめいた。

徐々に催眠をとくと、曉てH子は正氣づき、仮睡した事を詫びて催眠の施術中の事はまるで覚えがない様子であつた。

ボクの試みは完全に成功した。ボクは催眠に対し自信をもつた。

難関は、礼子に催眠の施術を知られまいとする事だった。施術者が相手に氣取られず術を施すのは仲々にむづかしい。礼子が若しボクの意図を知つたとしたら、恐らくベッドを別にするか、部屋を別にするだろう。

ボクは先ず予備行動として、礼子を不眠症にしようと思いついた。カフェイン系統の薬物をコーヒに混入し、これを礼子にのませる事に成功した。友人が贈ってくれたのだと云つて、コーヒポット

を持ち帰り、ボクの腕前を見せてやるからと、うんと濃いコーヒ―に更に、薬物を入れたのをのませたのだから、その夜は、礼子もかなり深更まで軋々反側して寝つかれない様だった。

ボクは極く自然に、部屋の右隅に振子時計を備えつけた。ベッドに横たわった姿勢から、時計の振子は恰度眼の位置に適當の場所だった。

二日目は、何かと話しかけて彼女を眠らせなかった。三日目は友人を呼んで、おそく迄興じた。流石に礼子は三日目の夜は眠そうだったが、心は妙にたかぶるのが眠れぬ様子だった。

「礼子、寝つかれぬ様だねー」

「ええ、何だか妙に神経が昂ぶって…」

「いい事があるよ。あの時計の振子をじっと見つめていて御覧、自然に眠くなるよーね、ホラ、段々と眠むくなつて来た。間もなく君は眠るー。スリープ：スリープ：。礼子の両の臉が徐々に合わされていく：暗示をかけるチャンスがきた。かねて思案をねってねってその挙句の暗示で：。」

：君は綺麗な花園をさまよっている：美しいとりどりの花が咲き乱れている：君はその花を千切つて髪に飾った：太陽が暑い：君は一枚一枚脱いで行く：（礼子は髪に花をさす仕ぐさをし、ベッドより降り立ってネグリジェを脱ぎ、下着をとり出した）

：ポツリと花園の彼方に人が現われた：段々と近附いてくる：その人は君の初恋の人だ：君は嬉しそうにかけよる：併し初恋の人はつめたい眼で君を凝視している：君は身を投げ出す：男は花園へ荒々しく突き倒し、天から降つて来た、その男の恋人と二人で花園の彼方へ去って行く：君は男に欺かれていたのだ：君は悲しげに泣き伏

している：太陽は沈んで君は素肌に寒さを覚える：君の体がやわらかく宙にういて、逞ましい男性に抱きかかえられる：君は顔を挙げて男性を見る：それは君が心を冷たくして、冷淡に振舞った君の夫だった：夫はすべてを許して、笑顔で君に軽いくちづけを送る：君の氷の様な心に仄々とした温かい息吹きが流れ始める：君はさめざめと涙を流して詫びている：夫は君の黒髪を優しくなでてすべてを許す：君の心に、夫への激しい愛情が湧き上ってくる：君は静かに服を身につける：安らかに、夫の胸に抱かれて君は眠る：眠むる：深い熟睡に入っていく：。」

（礼子は床に折伏し、泣き悲しみ、虚空を抱いて、その顔は徐々に安らぎに変わり、悔恨と安堵が紅潮した頬に浮び、微かな笑顔が流れて、元通りネグリジェをつけ終って、ベッドに横たわった。やがて安らかな寝息がのぞき始めた）

催眠中の暗示に従って行動する。後催眠行動によって、恐らく礼子はこの出来事を、夢中の一コマとも思い、或いはそれが現実感をともなつて、目覚めての行動に現われるに違いないのだ。この暗示は、絶対に催眠性健忘であつてはならない。

朝、快よい眠りからさめた時、礼子は恥らしい気味に私の手をとっていいじっていた。ボクが眼を開くと、彼女は眩しげにそっと手を放し、ニコリと笑った。

礼子の心を掴んだ事で、ボクの第一段階は終った。話はこれからである。

ボクは催眠術によつて、歩一歩進めて、礼子を思うさまあやつりたい慾望にかられた。

礼子は催眠術による心の変化とは氣附かぬらしいが、堅い殻から

確かに一歩抜け出し、彼女本来の優しい、素直な、こぼれる美しさが、春の泉のように氷をわって溢れ出して、ボクの抑圧されていたサジストとしての性向も彼女の春の訪れと共に芽を出し始めた。

ボク自身で名付けた催眠儀式と云うこの方式で、ボクは十日か半月に一度、礼子を催眠状態に導入し、そしてマゾの意識を徐々に注いでいった。

：君は今や、すべてを夫の前にさらけ出して、夫に愛されようと努めている：かたくなな過去の心を洗い去るためには、君は夫の責めをうけねばならない：君自身の口から、夫に責めをうける事を乞ねばならない：夫は君を愛するの余り、君を縛り、鞭打ち、さまざまに君を責めさいなむだろう：君はその行為が、夫の愛情の発露であることを知っている：君は縛られ、責められる事によって益々、夫に愛情を感じるようになる：君は両手を後に廻す：もっと強く強く縛って欲しい、と夫の足許にひれ伏して懇願しなければならぬ：君と夫の間には瀆罪の責めが、やがて甘美な愉しいプレイとして展開してくる：君はプレイを乞うことによって、かたくなな過去の心が流される：君は明日の夜、夫にあやまって、緊縛を願わねばならない：君は夫の手によって縛られることを切望している：君は縛って欲しいのだ：君は夫から虐めてほしいのだ：君は夫の奴隷になりたがっているのだ：君は縛ってほしいと夫に言い出さねばならぬ義務があるのだ：君は縛られる最初の瞬間、静かに眼をとじ、両手を後に廻して、素肌になっただけいなければいけぬ：緋々と肌に喰い込む縄に君は快楽を覚える：夫は君の言い出すのを待っている：恥かしがってはいけぬ：その夜から本当の夫婦の愛情が交錯を始める：君は縛られる事によって、妻の座を確保出来る：君は明日の

夜、縛られたいと願ひ出なければならぬ：君が願ひ出なければ、君は犬にされてしまう：君は犬になった：四ツ這いで這い廻っている：君は咆えている：犬になった事を君は悲しんでいる：君はやがて元通り人間に戻る：立上った：君は夫の奴隷にならねばならない：君は縛られる事によって、君の生きる道が見出されるのだ：君は縛られたいと願っている：鞭打たれたいと希んでいる：明日の夜夫が、ナイトガウンを着て、ピースに火をつけた瞬間、君は縛られたいと切出さねばならない：君は切出す気持でいる：君は切出した：君は縛ってほしいと叫んでいる：

後催眠行動によって、礼子は恐らく明日の夜、ボクに縛ってくれと云うに違いない。ボクはやがて、徐々に暗示をとき、いつもの様に、その後に深い熟睡へと導入していった。翌朝、ボクを会社へ送り出す時、礼子は何か云いたげだった。親爺さん夫婦は今朝から熱海への二泊旅行で留守になる。

女中はちよいとコーヒーに仕掛けして眠らせておけばよい。朝まで前後不覚だろう。今宵は、ボクと礼子とのプレイの第一歩の日になる筈であった。広い屋敷中が二人つきりになる絶好の夜だ。

二人切りの夕食に、礼子はいそいそと立ち働、十片四百瓦もあらうかと云うピフテキをデンとボクの前に据えて艶然と微笑んだ。

「さあ、召上れ！」

礼子はフランス渡りの古ブドー酒の栓をぬくと私についでくれた。快よい満腹感―やがて始まるであろうプレイ……ボクは充足足りた気持で、頬に美しさの増した礼子の甲斐々々しい姿を見上げ乍ら今宵のプレイについて、あれこれと構図を描いていた。

礼子が食後のコーヒーを運んで来た。

ボクの好みに合わせて、ブラックでうんと濃いやつだ。

ボクは軽い睡魔に襲われた。

臀部に激しい痛みを感じて、ボクは正気づいた。

「どう―鞭の味…お気に召しまして…?」

ボクは愕然として、起き上ろうとして、五体が完全に束縛されている事を、肌を感じとった。寢室の床に、ボクは裸にされて雁字搦目に縛られて転がされている。

一体これはどうしたのだ。ボクは叫ぼうとして、口中一杯につめられた自分のパンツの味をかみしめてあえいだ。狼糞。

「ホホ、鳩が豆鉄砲くった見たい…。昨夜は随分色々と念入りに聞かされましたわ…それに合わせて、犬になって這い廻って見たり、私―貴方が私に催眠術をかけていたってこと三日前の夜やっとな。貴方寝言で私に催眠術をかけている事を喋ったのよ…今更、私それに対して恐ってなんかいやしないわ。夫婦になった以上、動機はどうあるうとも、懸命に私を愛そうとする貴方の気持が分ったからだわ。昨夜時計の振子をみつめる様に御有った時、私はそっと背をむけて、見つめる振りして眼をつむったの―心を緊張させて、さもなかった如く見せかけたわ。その為私、大急ぎで『催眠術インスタント入門』って本買って来たくらいだから…いかにも術にかかった様に見えるため、私随分苦労したのよ。貴方はてっきり私が催眠したものと思いで、次々と色々御有ったわ。貴方の本心がのぞけて、私はおかしさをこらえるのに泣く程苦労したわ。貴方がその気なら、私がやってやれと先手を打ったわけよ。でも貴方の気持が嬉しいの。昔の私ならきつと腹を立てて、恐らく離婚していたでしょう。私の子供の頃から潜在していた、嗜虐的な感情が、貴方によって引出されたの。うんと貴方を虐めて、それでウンと

愛して上げたい気持ち。三度に一度は交替して縛られて見てもいいわ。ホホ、これがプレイと云うもののなのね。

礼子の手から鞭代りの革バンドが、言葉が終わるや見舞って来た。

ボクは眼を白黒させてこらえる…徐々に被虐想念が五体にうごめき始め、愛する礼子に責められる行為に、疼くような愉悦がヒタヒタと身内に充満して来た。マゾとサドとは紙一重。逆も亦真なり―とはむべなる哉。

ボクは礼子の馬になり、尻に敷かれた亭主になって、礼子の命ずる儘に易々諾々と、まるで女王に仕える気持ちで、好きな様にされている。三度に一度かわる約束が、ついぞ実行されず、プレイの被縛者はいつもボクであるが、礼子の容姿益々冴え、プレイ以外の礼子のこまやかな愛情の発露には、ボクは泣きたい程の充実した満足感を覚えているのである。

サジストである筈のボクが、すっかりマゾ気づいて、満ち足りた夫婦生活をしているのも、そもそもは催眠儀式のお蔭と、三拝九拝してもよい筈の、数冊の本がボクの抽出でホコリにまみれてその儘だ。ええい面倒くさい、いっそ屑屋へでも売ってしまえ。

パイプ氏の話は終わりました。何時しか降り出した霧雨が、しとしとと都会のペープメントを柔かく濡らしていました。

「さあ、明日は甲子園で、阪神に応援しなくちゃ…」

ワイン氏はセリーグの阪神優勝に、十五年振りの喜びをかみしめて、立上りました。人々もつられて一斉に椅子を引きます。明日の東映―阪神の決勝はきつと天気になるでしょう。金木犀の強烈な花の匂いが、そこはかと忍びよる宵も静かに更けて行きました。

「手記」

心妖しきふしなれど

美野夕子

雪の夜の詩

私はあの大雪の夜のことを忘れ得ない。一生忘れ得ないだろうと思う。

あの夜、私は初めてママが責められるのを見たのだ。雪の庭にママは松の樹を抱いて縛られていた。

雪明りに白々と映える背中と臀部には、痛々しい鞭痕が幾筋もついていたから、既に家の中でママは鞭撲れていたのだろう。私が臥むまでは湯殿に灯が点っていたから、湯上り後に責められたものか、或は湯殿の中で義父

の鞭に喘えいでいたのかも知れない。

灯は消したものの三階の三角形の寝室で、まだ私は眠っていなかった。眠れぬままに庭の雪景色を見ようとして窓のカーテンをめくったとき、突然その光景を見たのだ。私ははっと息を吞んだ。一瞬眼を瞑った。

私は最後まで責めを見届けた。息を殺しながら一心に眺めつづけた。肌を撲つ鋭い切れするような鞭音も、必死に泳えながらも、ほとばしるママの悲鳴も、三階の高さまで伝わった。霏々と降るぼたん雪を震わす如く痛々しく響いた。

臀部を撲たれながら「許して……」という声が、幾度かママの口から洩れた。双腕で太い樹幹を抱き、踊るような工合に足踏みしていたのは、鞭の苦痛のためばかりでなく、踏んでいられない雪の冷めたさだったろう。

「動くなっ」

大きな声で義父が呶鳴った。

「這わせるぞ」

踊る仕種がやんで、ママは臀部をつきだした恰好で脚を踏張った。泣くような意味のとれぬ声が唇から洩れを。

びしっ、幾度目かの鞭が横なぎに臀部に喰込むと、ママの躰が弓のように反った。私は

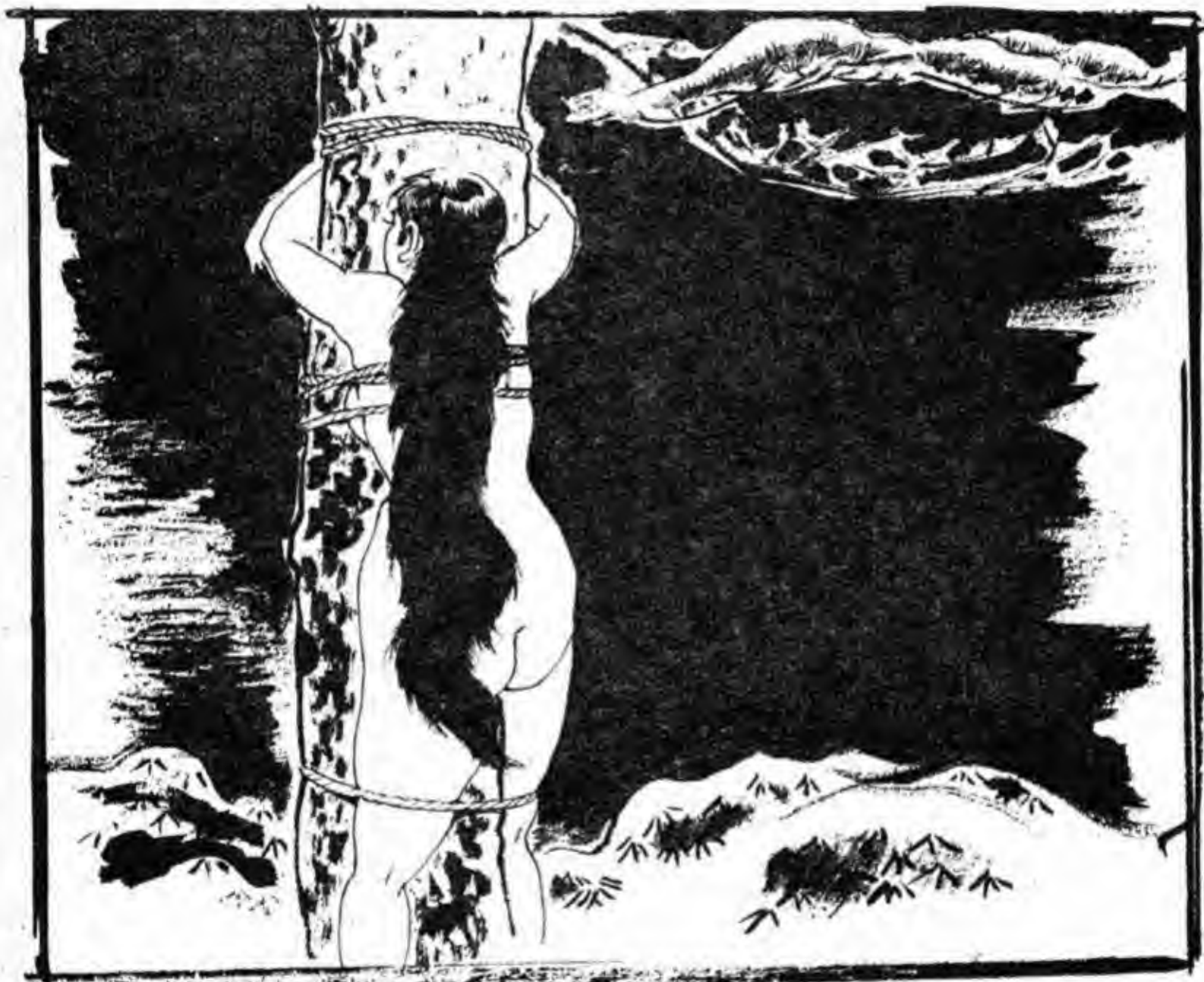
とめどもなく涙を流していた。
泣きながら眺めつづけていた。

あるとき、私の頬を伝わった
泪はなんのためなのか、今もっ
て不可解な気持がする。悲しか
ったから、と云えば嘘になるの
だろう。私は私の体内に妖しい
ものこそ感じてはおれ、ママを
哀れと想う悲しさはなかった。
ママの被虐に殉じるような、陶
酔感だけしかなかった。それは
強い炎で私のなかに燃えてい
た。

私の泪はその悲壮に酔ったも
のだろうか。——ともあれ、私
は頬を濡しながらも寝室の窓か
ら離れなかった……。

翌朝。

ママは起きてこなかった。ロ
ケがある筈のに、行かないのだ
ろうか。ママは女優だった。三
十二歳だが、二十前後のように
見える若々しい美貌の持主であ
る。歌劇スタア出で洋舞で鍛え



た躰は、いつまでも衰えをみせ
ない。神秘的なほど、しなやか
でみずみずしい四肢だ。お腎の
円み工合など、私を産んだから
だとは思えない。

通いの家政婦が作る朝食を、
私は義父とテエブルに向い合っ
て摂った。義父は優雅な手つき
でスープを掬いながら私に冗談
を云う。

「三美子も、そろそろ恋人がほ
しいだろう」

「いやな義父……」

私は声を立てて笑った。

いつもと変らない平和な朝の
空気だった。冬晴れの陽が食堂
を明るく染め、庭の残雪が美し
く光っていた。

この雪の庭で演じられた昨夜
の光景は、幼だったような気が
ふとした。

義父がまた冗談を云ったが、
私は微笑を作りながらママのこ
とを考えていた。

どんなにつめたかっただろう

と。雪を浴びつつ全裸で撲れていたママ……
 焼けるような鞭の痛さと、凍えるような雪
 のつめたさ……

ママは、どうしたの？と、私は義父に云った。猛烈にママの躰が心配になったからだ。
 「風邪を引いたらしい」

義父は云うと、なにがおかしいのか、ふいに大きな声で笑った。椅子が軋んだ。

私は二人の寝室に這入ることを禁じられていた。パパの許しがなければ足を入れることはならなかった。

「ママを見舞いたいわ」

帰ってから、見舞ったらいいと義父は云って。早く仕度をなさいと命じた。登校の時刻が過ぎているのに気づくと、私は慌ててトイレへ駆け込んだ。

義父は六二年のMGを持っている。クリム色に塗ったスマートなスポーツカーだ。毎朝、それで義父が学校まで、私を送ってくれる。友達が羨望の眼で見るのが私は得意だった。私は殊更、パパの胸に体を凭した。

私の学校は都立K女子学園だ。坂の上に白亜の瀟洒な校舎が建っている。正門の扉は青銅造りだ。

その古風な門の前で私は車を降りた。今か

らどちらへと訊くと、「ゴルフ」と短く義父は云ってギアを変え、すっと滑り去った。

昼休みに友達の一部がママの次回出演映画に就いて色々訊いた。この生徒は熱烈なママのファンだ。うるさいくらいママのことを知りたがる。

裸にならないグラマーですってね、と云うからしゃくにさわった。

帰宅すると私はすぐママの寝室に行った。ノックすると、弱々しい声で「おはいり」とママは応えた。

豪華なベッドに、うつぶせにママは臥ていた。長い髪がベッドの端へ乱れ垂れ、美しい顔が紅潮していた。熱のためだろう。

うるんだ瞳でママは私を見て頬笑んだ。心配しなくてもいいのよ、一寸風邪をひいただけ……そうママは云った。

このとき、私は云うべき言葉を知らなかった。私は蒼ざめた顔色になっていたかも知れない。余りの痛ましさに胸塞れてしまっていた。疲れ果てたママの姿を、こうして眼の前に見ると、今更にまた昨夜の責めの烈しさが背筋を冷やしてきた。

掛布団の下でママが両手で臀部を押えて、

痛みを耐えるのが私には判った。湿布をして
 いるのにちがいない。

「此処に這入っていたら、パパに叱られますよ。」

「朝、お許しをもらったわ。」

「ほんと……」

「ええ」

それでも、義父が帰ってきたら怒るかも知れないとママは云った。

「三美子、もう出てた方がいいわ。」

ママの言葉がなくても、私はこれ以上、この室にいたたまれない気がしていた。私は黙って寝室を出た。

義父が帰ってきたのは、それから五分ほど後だった。

ママに会ったか？と義父は訊いた。「いいえ」私は咄嗟に嘘を云った。

華麗な夜曲

ママがロケ地へ発ったのは、その日から五日後だった。ママのために撮影の順序がずいぶん狂ったことだろう。ロケ先から長距離電話がかかってきたとき、ママはしきりに詫びていた。泣いているような声だった。

ママが留守の間、私は折柄蓋明けたK歌劇団の公演を連日観覧に行った。K歌劇団はママの故里であり、ママの跡をついで私もこの世界に進む考えだった。母親ゆずりの貌とうたわれているふうな私に、劇団の方から誘いをかけてきていた。華やかな五色のライトを浴びて踊る花形の姿に、私は明日の自分の姿を想像した。その想像は快美だった。

義父はと云えば、相変ずゴルフに精出していたが、それが実は義父の仕事である。一流のゴルフ場を義父は経営しているのだ。義父の知己の多いことは愕くほどである。外国の使臣とまで心易くパパは握手を交す。

ママがいらないことを時折淋しいと思うだけで、私は贅沢に日を送った。

ママがいらない日を、心中どんな想いで義父は過しているだろうか、その感情の機微は私には推し測ることができない。義父は容易に気持を面にあらわさない人だ。四十男のそれが渋さだろうか。

一月が過ぎた。
ママが帰って来た。

美人はやつれたときがかえってなまめかしいとも云うけど、久しぶりに見るママはなん

だかそんなふうに美しく見えた。疲労の翳が妙にロチックなものを漂わせていた。

言葉少なにママはロケ先の土産話をし、私には熊の彫物を、義父にはダンヒルのパイプを土産として渡した。夕景で、私たちは食事をしながら語った。私一人が能弁だった。家政婦が用事で帰っていたので、片附役は私でした。

「三美子、フラフープ持ってるの？」

ママはキッチンに来て云った。

「ええ。持ってるわ」

三日前に買ったばかりだった。

「貸して頂戴。パパが回してみるとおっしゃるの……」

「できないわ。」

食堂の板の間でママは黄色い輪を扱いかねた。幾度も、輪は腰から滑り落ちた。

義父がいきなり立上ったがと思うと、ママの臀に平手打ちが飛んだ。無論スカートの上からだが、びしりという音がたって、ママは声を挙げた。

「……三美子……教えてー」

私は要領を教えた。輪は回りだした。が途端に落ちた。

義父が再び椅子を立つより早く、ママが壁の方に寄ったのは、壁を支えて衝撃に耐えるためだった。ママは両手で壁を突張った。存分にお臀を叩いてーというような恰好である耳を紅く染めたママは可憐で美しかった。

「ママのあのお尻のサイズは、三美子、いくらだと思ふ……？」

まだ椅子に掛けたまま義父が私に云った。ダンヒルのパイプから早速煙をくゆらせながら、義父の眼は深く笑っていた。

「……」

私は、物が云えなかった。ママの羞恥が私までを染めてくるようだった。たしかに、私の頬は赤らんだ。

その私の羞恥に義父は気づいたのかどうかわからないが、言葉をついで「当てくらべをしよう」と云った。そして、

「恵子（ママの名）尻をまくれ。」

三美子の前で、それだけは、どうか許してとママは声をふるわせて懇えた。着物の上から撲つだけにしてください。それがだめなら寝室で二人きりになりましょう。今までどんなことでも背いてきた筈です。

「ウハハハハ」

おそろしく高い声で義父は笑った。
「ぐずぐず云うと素っ裸にするぞ」
それが冗談や、ただの脅しではない
ことは無論私も判っている。あの大雪
の夜の責めを私はこの眼で見ているの
だ。私は顫えた。恐怖からでもなく、
私の胸は顫えた。私は再びあの雪の夜
のときのような妖しい炎が昇るのを感じ
た。

パンティをひきおろすとき、ママは
一度ぎくりと鳴咽しかかった。背中が
ふいに波を打った。ピンク色の薄いパ
ンティが細い脚を伝い落ちた。水色の
スカートもスリッパとをママの指が捲
りあげてゆくと、白桃を割ったような
白い続らかな臀部が曝された。

「さあ、サイズを当ててごらん」

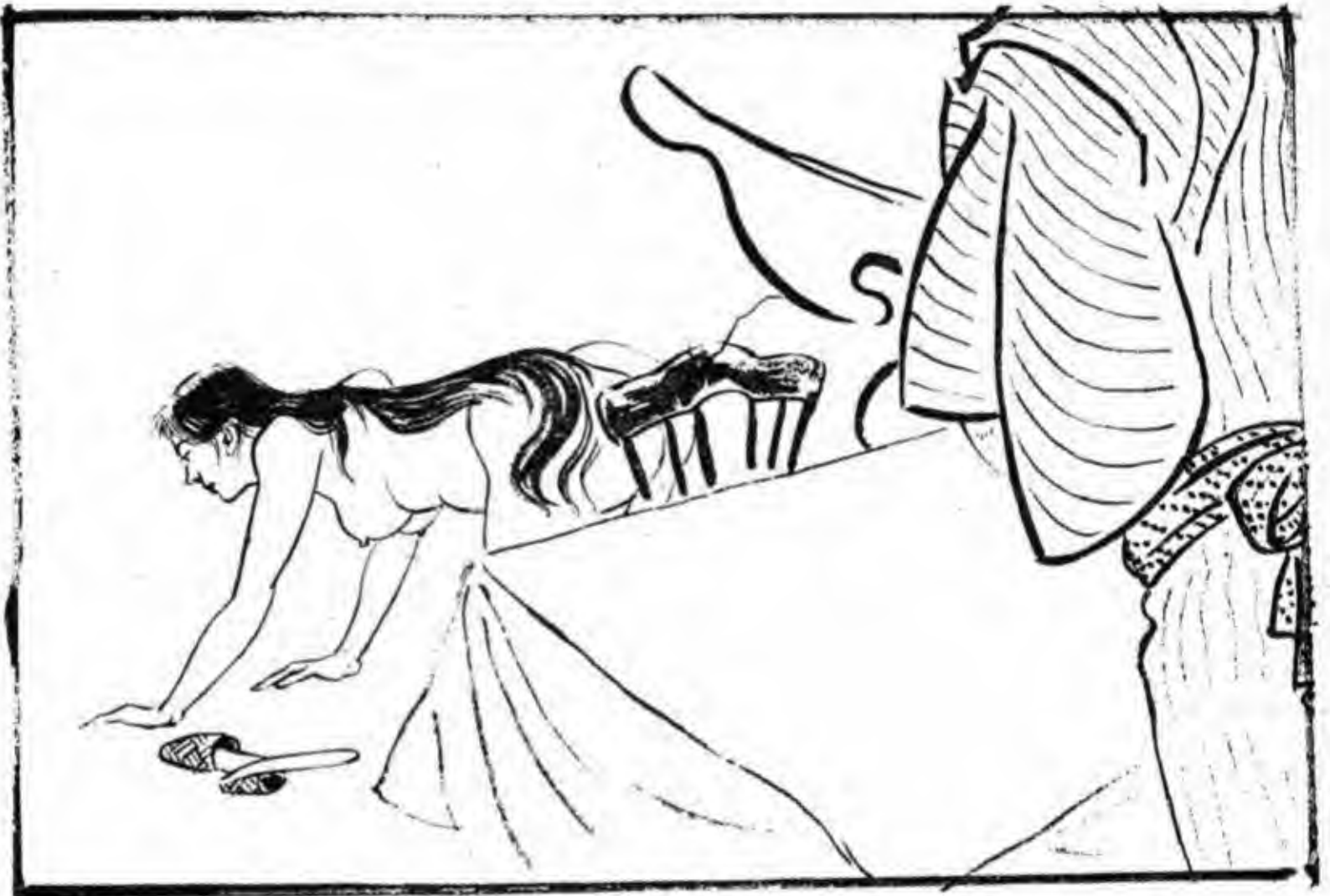
と、義父が私に云うまでには、少し
時間があつた。義父の眼は暫く魅力的
な盛上った白丘に吸われていたのだ。

「当てたら、なんでも買つてあげるよ
三美子」

「当てなかったらー」

と、ほそい声で私は云った。

「おまえの尻をママに摸たせるぞ」



あッと云つたのは、ママも私も同時
だった。二人を、義父は責めようと云
うのか。

顔から血が退くのを私は覚えた。

「あ……あなた……」

裸の尻を向けたまま、ママの声が喘
いだ。

「わ……私だけを……存分に……」

「うるさいっ」

さ、早く云えと、義父は私をせかし
た。

「八十五センチ……」

云って、私は眼を閉じた。

義父からお尻を計られながら、ママ
が鳴咽していたのは、私の云ったサイ
ズが適っていないのを知っているため
だ。

「九十センチ」

そう云うと一緒に、義父はママのお
尻を一つびしゃりと張って、

「さあ三美子の尻を責めるのだ」

腎責め抄

撲たれる私より、ママの方が疲れたことだろう。勿論私はお尻に喰いこむ革鞭の痛さに、天井から垂れた二つの金輪に吊られた不自由な身体をしなわせ、悲鳴を放ったが、心の苦痛は微塵もなかった。ママだけが「かんにんして、かんにんして」と泣きながら私を責めたのだ。ママの方が疲れた、と云うのはこの心の疲れのことだ。

私は二人の寝室に連れて行かれて責められた。このなまめかしい室は、色んな仕掛が隠されてあったのを私は知った。私の両腕を万歳する恰好に吊した二本の金輪も、義父がボタンを押すとすつと天井から垂れてきた。私の足は爪先だけがやつと床についた。

義父は狡智だった。私を吊してから後、私のストラックスを剥ぎ除るようにママに命じたのだ。

「許して……」

私の背ろでママは云い、身悶える私の下半身からストラックスとパンティがしなやかな手で脱がされた。

びしっ……ママの鞭は振られた。焼けるような痛みが、剥きだしのお尻に走った。

「もっと強く撲てっ。撲たぬか、恵子っ」

かんにんして、かんにんしてと、ママはい

っそう烈しく鞭を振いだした。私は絶叫的な悲鳴を挙げた。

時間にしてどれくらいだったろうか。三十分ぐらいだったような気もするし、もっと長かったかも知れない。

その間に一度私は水を与えられた。義父がコップから飲ませてくれ、ママはお尻を拭いた。皮膚が破れて血が流れていたのだ。

「パパ、トイレに行かしてー」

「大便か」

私は赧くなって、

「行かないわ……」

「さあ、撲てっ」

ママに命じた。

やがて、私は解かれた。羞しい話だけど、

私は便が漏れそうだった。お尻は一面火がついたように痛んでいたが、その苦痛より便意の苦痛の方がひどいようだった。起つことができず私は床を這って室を出た。血どめ薬をつけるようにとママが後ろから云った。声が泣いていた。義父はひくく笑った。

おトイレを出ると、私は寝室に戻った。ママが責められるのを見たいという意識は、そのときはなかったようだ。私は傷ついたお尻の痛さにハァハァと喘えながら、下着を取

るべく廊下を這って戻ったのだった。そしてママを見た。

私と眼が合うと、全身に朱を散らすようにばあっとママは赧んだ。

豊満な雪のように白い胸乳と、こびれた美しいウエストを、義父の眼に曝しつつ、ママの両手は素早く顔を蓋った。

窓の外には暗紫色の闇が垂れ込めて、点された明るい蛍光灯の光が、突立っているママの裸身を無漸に照らしていた。

「三美子見ないでエ……」

ママの口からはとばしった声を、義父の哄笑が打ち消した。部屋一杯に響く笑い声だった。椅子の上で海老のように背をかがめて義父は笑いにむせかえった。

純白の胸が大きく波打った。

むずと黒髪をつかんで、義父はママをひきずりまわした。ママは壁にぶつかりベッドにぶつかり、ひいひいと声を挙げてのたうった。ママは床に這いつくばった。

アップに束ね上げているママの髪は、ほどけると腰まで垂れる長さだ。痛さに耐えかねて、よろよろとママは立上る。責めはしだいに熱してきた。

双丘譜

その夜から、私の生活には大きな変化が生れた。一口で云えば、私の生活も亦ママと同様奴隷の生活になったのである。一つ屋根の下に、二人の奴隷が住み、暴虐な主人に仕えた。昼夜を厭わず私たちが母子は責められた。家政婦を義父が断ったのは無論他人の眼が邪魔なためだ。私はその老女の家政婦と気が合っていたので、雲降る道を去って行く後姿を門に立っていつまでも見送った。

炊事は勿論のこと、拭掃除庭の手入れトイレの掃除まで、私とママがしなければならなくなつた。

夜毎と云つていいほどの劇しい責めに疲れた体には、そんなこまかい仕事は辛かつた。

重ねて云うけれど、ママは女優なのだ。

容色も演技も、ともに光った存在なのだ。

その美しく優れたスタアが、ヘトヘトの体でトイレの掃除をせねばならないなどと、一体世間の誰が想像し得よう……。

映画から身を退きたい、つまりスタアを廃めたいとママが云いだしたのは、ある晩、夕食を終ったときだった。

世間から羨望視されている有名なママを、畜類でも扱う如く散々に責めることに、義父は云い知れぬ満足感を覚えているはずだ。それは、私よりママを責める方がはるかに多いことをみれば判る。無論ママに対して過剰になるのは、私より幾段もママが美しいことが、何よりもの理由だろうが……。

果して、義父は許さなかつた。「女優をやめて、ストリップにでも出るつもりか」

ソファの上に突倒されて、お尻を打据えられながら、貴方にもっと忠実になりたいためにやめたいのです。とママは云つた。

「し、し……しごとに邪魔されに……」

「ふふ。もっとももっと、責められたいと云うのか」

「う……」

義父はお尻を振りあげた。

「あアッ」

黒髪を振り乱しママの項が反る。

もはや見馴れたお尻責めの光景だが、私の室にはあのトロトロとした妖しい火が炎えだすのだった。

「裸になれ」

義父はきまって笑つて云うのだ。

「はい」

幽かに頬を染めながら、手早く次々と着ている物を除つてゆく仕草は、義父の鞭が仕込んだ服従観念だろう。パンティが床に落ちると、剥きだしのまるい臀部に赤い痣が痛々しかった。一陣の風が庭前を走って、食堂のガラス戸を鳴らした。粉雪がチラホラと硝子に砕けていた。

冷めたい板の間に、ママは四つ這いに這つた。羞恥と寒さから顫えるのだろう。床につかれた乳房がおののくように小さく揺れた。

高々と向けたお尻に唸りを曳いて刃の如く鞭が飛んだ。

「ウワッ」

思わずママは後手で尻をかばった。その手ごと第二の鞭が打据えた。

酔った如く私は茫然と烈しい尻責を眺めているばかりである。

(了)

京阪神のストリップ劇場で活躍する女剣劇ストリップ『春日裕子ショー』に、必ず、座長春

日裕子の豊満なハダカ、剣劇、それに、サジスチックな縛りシーンがふんだんにあり、その道のファ

ンを喜ばせている、最近、京都の大宮劇場でやった「エログロ浮世風呂」は、女賊霞

のお千代を描いたものだがさすがに、看板にエログロとうたっているだけに、ハダカ、縛り、

シリ打ち、のぞき、があるという大したもの。

舞踊師匠お千代は悪侍に「云うことを聞け」とつけ回される。そして、ついに帯をとられ、着物、長じゅばんをぬがされ、腰巻一枚にされる。

「それも取れ」

と、強要される。腰巻一枚の春日格子扮するお千代は、豊満な乳房をぶらぶらふるわせながら舞台いっぱい逃げまわる。そして、ついに捕えられ、上にのりかかられる。下になったお千代は、悪侍のマタを短刀でつきさす。

殺人をおかしたと思うお千代はあわや自刃しようとする。それを弟子の女たちが止めて旅に出してやる。

それから二年。彼女は霞のお千代というあだ名をもつ女賊となる。

第二景は、捕手に追われたお千代が一軒の家に逃げこむ。

そして、着物をぬいでハダカになり、自分の美しい身体を見



軽演劇と責め

乳房縛りの剣劇ストリップ

東山太郎

て一人で楽しんでる。

それをのぞく、めくらのコジキその後からきた捕手の金太がのぞいている。色々おかしみがある。

金太は、大きな張形を持っており、それをお千代にはめこみ捕えたとハリ切っている。そこへ、お千代を追っかけていた悪侍が与力になり現われる。彼はキンタマをつかれ片キンになっているという。

その場は、マッパダカになったお千代の派手な立ち回りで終わる。

第三景は女風呂。金太はお千代の内マタに大きなアザがあるといつて、女風呂まではいり込む。役得と思っている。

五人の女弟子にふんしたストリップの乳房をさぐり、足をあげ

させ、シリをたたく。

いい音がする。ここへお千代が逃げこんでくる。

ついに、大立ち回りになり、お千代は捕えられる。その縛り方が、なかなかサジスチックだ。

左手を背中へねじ上げ、捕り縄でしばり、それを豊満な乳房にぐるぐる三重に縛る。ついで左の乳房も三重に縛る。そして縄のはしを乳首にかけておく。

白い乳房が縄でしめ上げられポツと桜色になる。乳房をしばりあげるとき、観客席から、ワーッと笑い声がおこる。乳房を三重に縛られるのだから大きな乳房だ。さしあたり乳房責めというところだ。そして引き立てられる。

つぎのシーンが尻打ちのシー

ン。前手縛りで引き出されたお千代は、舞台でうつぶせにされる。そして着物をまくられる。

「可愛がってやる」

というセリフで、しりをピシピシたたかれる。

最後には、お盆でたたかれパチンパチンという音がする。

また、竹ホウキでさわられたり、たたかれたりする。ちよつと虐待という感じがする。

そして、マタをのぞこうと、彼女をひっくりかえす。パツとかくす。それを二、三回くりかえす。そこへ、女弟子たちが出てきて眠り薬を、エロサービスで役人たちをだまして飲ませ、お千代の縄をとき、刀をもたしてメダタシーメダタシ。



長篇MS小説

宇宙のどこかで

△或る無期徒刑囚の告白から▽

佐 治 麻 造

追 放 奴 隸

翌朝、空腹のためか早く眼が覚めてしまいました。囚人食でもないから腹一杯喰りたいなあ、と考え乍らウツラウツラして居ますと、やがてカチリと時間錠が外れました。起きなければ、と思いつつウトウトして居ますと、やがてベルが鳴り終り、そして突然誰か入って来ました。狼狽して起上って見ますと、寝衣姿の奥様なのです。ここに朝お見えになったのは、最初の朝以来初めてのことでした。

「おや、もう時間は来てるのね。何故すぐに起きないの？」
奥様の綺麗な瞳がキラリと光り、私は声もなくひれ伏しました。

「皆が云ってる通りなのね。寝坊して怠けてるって云うの本当だわ。私ね、お前が飢じかろうと可哀想になって、これ持って来てやったんだけど……」

奥様は片手に朝刊を、そして片手に古い食パンの塊りを持って居ました。

「早く仕事をおし。馬鹿ね。」

私は額を床にすりつけたまま、這って奥様の足許をすり抜けて出ました。背後で古パンをごみ箱に捨てる音がしました。庭の掃除をあらかた終える頃、お春さんがエプロン姿で出て来て

「三太。奥様がね、これ嵌めとけてさ。口を開けて……。フッフ」
お春さんは面白そうに私に嵌口具を嵌めました。後頭部でピンと

錠がおります。ここに来て初めての嵌口具でした。口中一杯に押込まれた鉄球の表面の鋭い突起は、舌を少し動かしても痛く、そして口の上を掩ったマスク状のプラスチックはピッタリと顔面に吸いついて少しの空気すらも出入できないのです。

「朝ごはん抜きよ。おひるもどうかねえ。ホホホ、罰だって!!
フフフ、出来るものなら拾い喰いでもなんでもしてごらんよ。そろそろささと仕事するんだよ。」

やさしい奥様の慈悲深い取扱いに、何時しか慣れてしまつて甘えて居た自分を後悔し乍ら、飢えと渴きとそして排泄させて貰えない苦しさを忍び忍び奥様のお怒りの解けるのを待つて私は立ち働きました。奥様のお姿を見る度に両手を合わせてお赦しを哀願するのでしたが、全然相手にもして下さらず、おひるも過ぎました。

「ひもじいだろうね。フフフ」

お春さんが残り物をごみ箱に捨て乍ら私を見て嘲笑いました。ふらふらになった私はとうとう大へまをやらかしてしまいました。午後早くいらした婦人客が脱ぎ捨てたハイヒールを押載いて納う際に、取落した上、蹴飛ばしてしまったのです。その有様を垣間見た奥様はとうとう柳眉を逆立ててお怒りになりました。皆様の話によると、昨日ここで逮捕された良人殺しの女の記事の中で、白樺荘の名前が大きく新聞に出て居たそうで、奥様の不きげんは朝から募るばかりだったのです。内庭に回って縁側の下にひれ伏した私は全身が震えました。

「三太。お前は駄目ね。先刻も足をよく洗わないで上るもんだから廊下が汚れたじゃないの。性根を叩き直してやるからね。」

私はひたすら地べたに額をすり付けるのみでした。

「ともかく少し甘やかした過ぎた様だわ。矢張り分際を忘れてしまうものなのね。ともかく、ここから追い出してやるわ。そして奴隷っもののが、どんなものだか、世間様に教えて貰うといいのよ。」

私は売飛ばされて仕舞うのかと思つて悲しさに全身の血が冷たくなりました。せめて一言でも哀願したいものと、思わず身もたえして怨めしい嵌口具に手を掛け咽喉の奥で呻きました。

「何をするの!!」

ビクツとして再び両手をひれ伏した頭上で合わせます。

「手を後ろに回すのよ」

庭に降り立った奥様のお手で後手錠を嵌められた私は、何故かホツとしました。

「奥様。此奴、どうなさいますの？ 少し懲らしめてやらなきゃ駄目でございますよ。なんなら売払つて、もっといいのをお買いになつたら……」

おすみさんの冷酷な言葉が聞えました。

「そうねえ。けど、まあ今度だけは『追放』で堪忍してやりましょうよ。奴隷管理所に電話して手続きを訊ねて頂戴」

奥様の許を離れて売飛ばされるのではないと知った私は嬉しくて涙が出ました。

「追放って何あに？ どうするの？」

お芳ちゃんの声がしました。

「あのね、暫くの間ここから追出して仕舞うのよ。野良犬みたいにほつつき歩いて過さなきゃならないの。」

「ふーん。誰か盗んで連れて行つてしまわないかしら？」

「大丈夫よ。滅多にそんな奴隷泥棒はないわ。」



「逃げやしない？」

「ホホホ、逃げたりなんか出来る訳がないわ。鎖で縛っとくんだもの。」

おすみさんが出て来て小声で何か奥様と相談しました。

「じゃ、丁度いいじゃないの。これに背負わせて引張って連れて行

振返りますと、

「わき見するんじゃないの!!」

脇腹に鞭が鳴り、私は身をよじって悲鳴を挙げました。扱いなれた係員の手による久し振りの革鞭の痛さは骨身に沁みます。追い込まれた殺風景な倉庫の様な室の中には鉄の鎖錠の類が積み重ねられて居り

けば……」

衣類を脱がされた私は、漸く用便をさせて貰い、そして嵌口具を外されてお慈悲の食事と水を与えられました。

「奥様。申訳ございません。性根を入れ替えさせて頂きます。」

もはや革猿又も上衣も着せてはもらえず差出す両手に手錠を掛けられ足錠を嵌められ、そして昨日捕えられた客の荷物を背負わされて鼻繩をおすみさんに曳かれた私は悄然と白樺荘を出ました。

荷物を警察署に届けた後、奴隷管理所に連れて行かれました。手続きを済ませたおすみさんは、私の手錠足錠を外して所員に引き渡しました。

「こっちに來るんだよ。両手を上に挙げて……」

若い婦人の所員はいきなり革鞭で私の背を鞭打って追い立てました。心細くなつた私は鞭で追われ乍ら、おすみさんを

私の心は萎えてしまいました。

若い婦人所員は、私の「錠」を見下ろして覗き込み慣れた眼で検身した後、鋸打ち工具のコードをコンセントに挿込みました。

「えーと。これにしようね。手を後ろにお返し」

ガラガラと鎖錠の一つを引出した彼女は私の後ろに回りました。

手枷の鉄環を三個の鎖の環で繋ぎ、中央の環に別の五十センチ程の鎖がついて居て、その鎖の端は更に別の鎖の中央に結ばれて居ます。そして其の四十センチ程の鎖の両端には足枷の鉄環がついて居ました。鎖は物凄く太くて重そうで、枷の鉄環も幅広く分厚く、ずっしりと重量感を示して蝶番で開いて居ます。観念してうなだれて立ちすくんだ私の後手の右手首に冷たく鉄枷が触れ、そしてガタリと蝶番の口が閉じ、鉄環がずしりと巻き付きました。鋸を挿入する気配がして、鋸打ち工具がカタカタカタと鳴り響きました。ついで左手首にも鉄枷が鋸を打ち込んで嵌められます。連結されて居る鎖の重さを両手首にグッと感じました。

「ちょっと膝を曲げるのよ。そうそう」

更に両足首にも枷を嵌め込まれました。鋸を打込んで嵌め込まれる枷を受けるのは初めてで、諦めては居るものの鋸を打ち込む音は胸を掻きむしる様に悲しくも情無くて体の中に錐を打込まれる様に切ない悲哀でした。これで特殊な工具がなければ絶対に此の鎖錠を外す事は出来ないのです。枷も鎖も更に鋸もすべて特殊鋼だと聞いて居ました。

膝を伸ばそうとしますと、手枷足枷の鎖を繋ぎ合わせた鎖が重々しく張って、両足の枷が少しずり上って喰い込み、それ以上は膝を伸ばすことは出来ない我知道了。怨めしげに婦人所員を見やり

ましたが、彼女は無表情な顔つきで顎をしゃくります。少し離れた床のコンクリートの上に、直径十五センチ程の鉄丸が二個転がって居ました。上体を後ろにそらせ両足首を揃え、ずり上って喰い込む足枷の痛さを耐え乍ら漸く膝を伸ばして立って居た私は、膝を深く曲げて鉄丸の傍へ三四歩近寄り再び立ちすくみました。

「もう少し右に動いて……。ちょっと下って……」

私の背後にしゃがみ込んだ婦人所員は鉄丸を動かそうともしません。鉄丸についた二十センチ程の太い鎖の先が右足枷に鋸で打込まれて取付けられました。

「今度は少し右へ寄って……。よしストップ!!」

カタカタと打込まれる鋸と共に左足首の鉄枷が振動して骨に当り私は歯を喰いしばって痛さを堪えました。

「次は首環ね。面倒なこと。これで合うだろ。」

音響器が付いて居てずしりと重い鉄の首枷が私の首を巻いて合せ目に鋸が打たれます。正座してうなだれた首の後ろの合せ目に打込まれる鋸の音を聞きますと情無さに涙がこぼれました。首枷の左右にそれぞれ一本宛付いて居る鎖が、各々両腋下を潜って回り再び首枷の両側に鋸で留められ首枷が回転しない様にされました。

「あ、あの……いつ外して頂けるのでございましょうか?」

全部の鎖錠を鋸留めにされた心細さに、私は婦人所員を仰いで訊ねました。

「追放期間が済む迄よ。分ってるじゃないの。」

彼女は云い捨てて、ハイヒールを鳴らして出て行って仕舞いました。中々戻って来ません。久し振りに施された重い鎖錠、特に首に嵌め込まれた鉄枷の冷い感触は、囚われの分際を沁々と感じさせま

す。あんな若い娘一人にされるままになって、こんな浅ましい姿にされねばならないのかと思いますと、やる方ない無念さに呻いてしまいました。鞭痕がずきずきと疼き、奥様にさえ鞭打たれたことは一度しかないのにと思いますと口惜し涙が出ました。しかしもうどうすることも出来ません。私が悪かったのです。これからの何日間、何十日間かを、此の残酷な鎖錠のままで呻吟して過さねばならないのです。ハイヒールの音が響いて婦人所員が戻って来ました。

「これを首につけとくからね。」

彼女は私が読む暇も与えないで、首枷の後ろに鉄札を短い鎖で鎖留めました。縦二十センチ、横十五センチ程の分厚い鉄板の札で「追放期間」と「奴隷番号」「奴隷管理所名」等が記してあるのがチラと見えました。

「追放期間は三十日間だよ。今日は五月六日から六月四日迄ね。細いことはあとで云ってやるわ。さ、おいで!!」

膝を折曲げたままの両足は四十センチも開かず、一步毎に十二三センチある鉄丸をゴロゴロと引き摺って、無慈悲な鞭に追い立てられ乍ら管理所の門を出ました。

「駅前の交番へお行き。どうせ遅いんだろうから先にお行きよ。私は暫くして出るからね。あ、お前の整理番号は七号だよ。」

ピシッと鞭が腿に鳴り

「ヒューッ……」

私は身もたえして悲鳴を挙げて歩き出しました。その歩き難さはひどいものです。足の鎖を体の後側に吊上げられて過した事は余りありませんし、それ迄一年近くも鎖錠を殆んど無しで過させて頂いて居たものですから全くこたえました。一步毎に引摺らねばならな

い鉄丸には泣き度くなる程です。曲げたままの膝がガクガクして来て堪え切れない苦しさ痛さに、道ばたにとうとう坐り込んで喘ぎました。

「あの奴隷、独りでどうしたんだろ?」

「追放されてるらしいわね。可哀想に」

道行く人々に嘲けられ乍ら一息ついて居ますと、後ろからやって来た客引き風の男が

「何してるんだい!! とっとと失せないと邪魔になるじゃねえか。」

と頭を思い切り蹴り飛ばし、そしてツルツルの頭の天辺に唾を吐きかけて通り過ぎました。以前にアパートで働かされて居た時、定期検査にやって来た奴隷管理所の係官から聞いた事を思い出しました。「追放期間」が最高五十日間に延長された事、そして運の悪い奴隷は追放中に誰かに苛め殺される事も、ちよいちよいあると云う事、又追放奴隷の心得に反した振舞があれば容赦なく刑期を追加されると云う事等です。

私は歯を噛みしめて立ち上り、再びよちよちと歩き出しました。

一步毎に鉄鎖がジャラジャラと鳴り鉄丸がゴロゴロと地面に軋み、そして首枷の音響器がチリンチリンと響きました。賑やかな商店街を小さくなって喘ぎ喘ぎ歩いて居ますと、突然背後に自転車のブレーキの音がきしんで婦人の叱り声と共に鞭が尻に炸裂しました。

「ずい分と遅いじゃないの!! 何をグズグズしてたんだい? 馬鹿!!」

「ヒューッ。おゆ、おゆるし下さいまし。」

悲鳴と共に、身をよじる私を人々は笑い乍ら眺めて通って行きます。自転車に乗った婦人所員の手が延びて鼻環にカチリと曳き縄が

付きました。

「さっさと来るんだよ!!」

ゆっくりとペダルを踏む婦人は無慈悲なもので容赦なく鼻繩をグイグイ引張りました。鉄枷に痛められた両足首の疼きも吹飛ぶ様な鞭の一撃を内股に受けた私は夢中で脚を動かしました。二十歩と行かない中に強く引摺った鉄丸が勢余って前に回り、足を取られた私は俯向けに地面に倒れてしまいました。途端に鼻環が引きつれる激しい痛みが脳天に突き抜け私は悲鳴を絶叫しました。

「あんなに鎖つけといて無理よ。ねえ」

二人連れの娘さんが同情して呉れましたが、婦人所員は舌打ちして鞭を振り上げます。数百米先の駅前交番に漸く辿り着いた私は全身擦り傷と砂ぼこりだらけ、汗にまみれて半ば眼も見えず、敷石に身を打伏して呻き喘いだのでした。

「これね。これ、起きるのよ。」

頭をボンと足蹴にされた私は、喘ぎ乍ら交番の前の敷石に正坐しました。私を追立てて来た婦人所員と並んで制服の婦人警官が冷然と見下ろして居ます。

「今日から三十日間、追放されるのよ。お前初めてなのね。追放と云ったって勝手な所には行けないの。いいかい。」

婦人警官は敷石の上にチョークで略図を書いて呉れました。駅前から略直角をなして山手へ延びる二本の商店街の道路、そしてその道路と交叉する川とで作られる三角形の中が私に許された区域なのでした。

「駅の中は改札口から外なら入っていいよ。川はこちら側の川原迄だよ。それから商店街の道路から両側三十米以上は中に入っちゃ駄

目。その範囲で餌を漁って人様の邪魔にならない様に過すんだよ。」
我が身のみじめさが、ひしひしと心に喰い入ります。

「それからと。毎朝九時にここへ来るんだよ。鎖錠を調べてやるからね。その時に、余り苛められたら云いなさい。分った?」

「ハ、ハイ。」

「今、女奴隷が一匹追放されてるの。今どこをほっついて居るか知らないけど、すぐ会えるわ。」

「あ、そうね。あれ、未だ十二三日残ってたわね。」

婦人所員が口を出しました。

「街を汚したり、人様に迷惑を掛けたりしたら只じゃ済まないよ。さ、お行き!!」

バケツ一杯の水を頭から浴びせて貰った私はともかく交番の前を立ち去りました。どうしていいか見当もつきかねて道ばたに呆然と立ちすくむ私の前を、人々は或いは忙しげに、或いは楽しげに悠然と行き来し誰一人構ってはくれません。足の鉄丸を引摺って兎も角駅の便所に入って用を足し誰かが閉め忘れた手洗の水道から滴たる水を漸く届く舌の先で食ばり飲んで片隅にぐったりとへたり込んだ私は物悲しさに嗚咽したのでした。便所の隅で泣き乍ら寝入った私は空腹で眼を覚めました。もう日は暮れてネオンが映えて居ます。足は自然に奥様の居られる白樺荘の方に向きました。賑やかな通りを小さくなってノロノロと進みますと、鉄丸と音響器の音で人々は一度は私の方を眺めますが、それ切りで声一つ掛けて呉れません。うろつく野良犬同然に考えられて居るのです。飲食店の前を通る時は匂いで腹がグーグー鳴りました。いつしか長い商店街も尽きて橋の袂に出ました。ここから先へは行くことは許されません。手

足を鎖錠された身でも、どうやら降りられる所を見付けた私はズルズルと土手から川原に降り立ち、砂にめり込む鉄丸に悩み乍ら水際に坐って山手を仰ぎ見ました。半月に淡く照らされた川向うには大小の灯が点在し、川風に乗って微かに弦歌の音も聞えて来ます。白樺荘はあの辺だなと思いますと身を切る様な切なさでした。

「奥様。お赦し下さいまし、私が悪うございました。どんな罰でも受けますから、お手許に繋いでお心の済む様にして下さいまし。お願いです。こんな三十日間もあんまりでございます……」

所詮無駄とは知りつつも、暗い川原にひれ伏して涙を流し乍ら叫びましたが、其の声も水音に消され勝ちでした。身もだえすると鉄鎖が嘲ける様にガチャガチャ鳴り背中の中鉄札が風に吹かれて肌を叩きました。何時間そうして居たでしょうか、涙も涸れ諦めた私は川の水を少し飲んでよろめいて立ち上りました。餌を恵んで貰わねばならないのです。漸くの思いで土手に這い上った私は再び商店通りに入りました。土産物を売る店先で無駄話して居る二三人の娘さんを見て

「お慈悲でございます。何か残り物でも恵んでやって下さいまし。お慈悲です。」

思い切って哀願しました。娘さん達は顔を見合せて忽ち吹き出しました。

「此奴、今日初めてらしいわね。」

「あ、今日夕方近くだったかしら、鼻繩つけられてヒーヒー云い乍ら引張られて行ったのは、これじゃなくって？」

「お前、云つてやるけどね、他人様の奴隷に食べ物を作る物好きな人は滅多に居やしないわよ。お腹が空いたら、ごみ箱でも漁っ

たらいいのよ。」

世間の薄情さが身に沁みた私は、其の夜は飢えをこらえて橋の下に身を丸めて泣き乍ら眠ったのでした。翌望空が白む頃、空腹に堪えかねた私は人影一つない商店街の裏通りをうろついて、ごみ箱から食べ物を探りました。

鼻先でごみ箱の中を探って居ますと、みじめさと悪臭で胸が詰り涙で眼がかすみました。奥様の許でのぜい沢な食事に慣れた私の口に合うものは殆んどありません。次々とごみ箱を漁る私はいつしか商店通りから直角に大分奥の方に入り込んでしまいました。そこら辺にはB級C級の旅館が点在して居て、私はしめたと思いました。相当大きな旅館の勝手口に据えてあるコンクリートの大きな箱を見て鉄丸を引摺って近付きました。しかしその蓋には錠が掛けてあるのです。壁の向うの台所の投入口から捨てる構造で微かに防腐剤の臭いがし鉄蓋には奴隷食を作って居る会社の名が刻印してありました。がっかりして、その前でうずくまって居ますと、突然勝手口が開いて若い女中さんが出て来ました。続いて革褌一本両手を長い鎖の革手錠で繋がれた奴隷が一人掃除道具を手に出て来ます。胸のふくらみで女奴隷と分りました。私を見付けた女中さんは忽ち声を荒げて叱りつけました。

「お前一体なにさ!! 追放喰ってる奴隷は、こんな所に入り込んでや駄目の筈だよ。とっととお行き!!」

私はハッとして昨日の婦人警官の言葉を想い出しました。

「も、申訳ございません……」

「今度だけは堪忍してやるよ。次は赦さないからね。見付け次第電話して警察を呼ぶからね。」

小石を投げつけられ乍ら、うろたえて逃げ去る私の後で女奴隷の嘲笑が聞えました。

「フッフ野良犬は可哀想ね。性根入れて働かないからだよ。馬鹿な奴だこと。」

奴隷食にもせよ、食べ物を与えて貰える女奴隷を羨ましく思い乍ら、私は限られた範囲でゴミ箱を漁り続けました。漸く見付けた食

べ物を唇や舌で選り分け選り分け道ばたの溝の辺りに這いつくばって食べて居ますと、再び我が身のみじめさに泣けて来ました。こんな私の姿を奥様が御らんになったなら、おやさしい方故きつと哀れに思っけて赦して下さるだろうと考えますと、とめどなく涙が頬を伝いました。おそい商店街の人々も漸く起き出して来て、私は裏通りの片隅でうずくまって人眼を避けました。どこかで時計の鳴る音。



もう九時です。途端に全身が凍る思いでした。九時には駅前交番に出頭して居なければいけなかったのです。昨日私を見下ろして冷く云い渡した婦人警官の声をありありと思い浮べますと、恐ろしくて全身の血がサツと引く想いです。夢中でハネ起きてガクガクする膝に力を入れ駆け出した途端、鎖錠につまずいてどたりと倒れました。白樺荘に連れて来られる以前ならば、四六時中鎖錠の御厄介になっけて居ましたから、拘束に対しては殆んど反射的に動作範囲を判断する事が出来、こんなぶざまな恰好をしないで済む筈でしたが、一年近くもの間、分際不相応な自由を許されて過した報いです。敷石に打った痛みを呻き乍ら堪えて再び駆け出しました。上体を後ろに反り気味にし膝を曲げたまま精一杯に急ぎに急ぐのですが、半歩しか開かない両足が何とも

じれったく、其の上に後手錠と足鎖を繋ぎ合わせた重い鉄鎖が前後左右に揺れ動いて、どうかすると足を取られそうになるのです。人々は面白そうに笑って眺めましたが、私にとっては全く大へんな事で時々めって倒れ乍ら全身汗まみれに喘ぎ喘ぎ走り続けました。突然店先から棒が突き出され私の脚を払いました。思い切り前に倒れてしまった私は、息の詰る程の痛さに暫く起上がれず身をよじって呻きました。

「ホホホホ、いい気味なこと!!」

「朝っぱらからチンチン、ガチャガチャと喧ましく騒ぐからよ。」

「けど奴、一体何を急いで駆けてたんだろ? 逃げ出す途中なのかしら? まさかねえ。」

店をあけたばかりの小綺麗な洋品店の店先で、三人の娘さん達がキャーキャー笑い興じて居ました。

「ア、知らないの? 毎朝定った時間に警察が交番に顔を出さないといけないのよ。」

「あ、そう云う事、聞いたわねえ。それで泡喰って走ってるのね。フフフ」

「お前、早く行かないと、ひどい目に会うわよ。何グズグズしてるの!!」

娘さん達の一人が、きつき私の足をめがけて突出した簪の柄を持ち直して、私の頭を小突いて嘲けりました。云われる迄もなく必死にもがいて漸く立上った私の尻にピシリと簪の柄が飛んで私は再び鉄鎖をガチャガチャ鳴らし初めるのでした。

前方の道に水を撒いて居る若い婦人の後姿が見えました。私が鳴らせる音響器と鎖の音に振返った婦人は眉をひそめて私をよける様

な気配を示しましたので、真直ぐ進むのが精一杯の私はそのまま走りまわりました。さっき転倒して打った頭がフラフラし、汗で眼は半分しか見えませんので婦人が路上に、そのままにして身をよけたバケツに足を当てた私は又も転倒した上、バケツを引くり返し、その上婦人の脚に体を当ててしまったのです。婦人はよろよろして、水の流れた歩道に両膝と両手をついてしまいました。顔をしかめて起上った婦人の顔は驚きから怒りの表情に変わり、私は夢中で起き直って正座して深々とうなだれてお赦しを乞いました。

「フン。謝まった位で済むとは思ってやしないだろうね。ちょっとそうして待っていい」

はき直したサンダルで私の額を蹴上げた彼女は店の中に入ろうとしました。洒落た構えの喫茶店で店頭の札が未だ「本日終了」のままになって居るのが、狼狽した眼に何故かはっきりと映ります。

「あの…お慈悲でございます。先に行かせて下さいまし。九時迄に駅前の交番に行つてなきやいけないのです。あとで必ず参つて罰を受けさせて頂きますから…。お願いでございます。」

喘ぎ喘ぎ哀願しましたが婦人は赦してはくれませんでした。

「ホホホ。そんなこと私の知った事じゃないわ。懲らしめは今直ぐに受けるものよ。それとも何かい、警察が管理所に電話して欲しいの? フフフ」

私はひれ伏したまま身をもだえました。

「ちよっと顔を上げてごらん。」

婦人は店頭の飾り天幕から垂れた縄を私の鼻環に結びました。

「丁度いいものがあつたわね。そこじゃ邪魔になるから、もっと傍に寄つて坐つといい。フフフ泣いたって駄目よ。」

婦人の白い指先が鼻先で縄を結ぶのを怨めしく眺めて私は泣きました。これでもう此所から動けないのです。婦人が再び出て来る迄数時間も経った様に感じました。身繕いを済ませた婦人は手に鞭を持って現われました。

「お前、あわてたつてもう九時はとうに過ぎてるじゃないか。何してたのさ。可哀想だけど相当絞られるわね。ま、兎に角お立ち。」

喰いしばった齒の間から悲鳴を洩らし乍ら全身に鞭を当てられました。彼女は意地悪くゆっくりと鞭を振り、寄って来た人々に笑い乍ら説明したり等して中々赦して呉れないのでした。

「次は腿の内側よ。お尻の方は鎖が垂れてるのね。こっち向いて足をひろげて……。そうそう。あら奥さん、おはようございます。今日もいいお天気で結構ですこと。これ？ いえね、さっき私が水を撒いてましたらね……」

膝をグッと左右に開いて、内股に炸烈する鞭を今か今かと待ちおのいて居る私をそのままにして、彼女は近所の年かきの婦人とおしやべりを初めました。

「そりゃそうと、あんた早く済ませて解いておやりよ。内股なの？ 膝を開いて震え乍ら待ってるじゃないの。」

ヒュウピシリッ。両方の内股に二つつつ当てられ私は上半身をのたうたせて呻きました。

「さ、これで勘弁してやるわ。さっさとお行き」

婦人は片手で鼻の縄の結び目を解き、ペッと私に唾を吐きかけました。

「ありがとうございました。」

口惜し涙をこらえてひれ伏した後、全身に残る激痛に呻いて立去

る私の尻に最後の一撃がピシッと飛びました。

「ホホホ、可哀想なものねえ。遅れちゃって、どんな目にあうのかしら？」

「さあ、ま、半殺しにされて、二三年刑期が増えるだけでしょ。」私を鞭打った喫茶店の婦人の冷酷な声を背後に聞いて胸が煮える様な思いでした。

女 追 放 奴 隸

「九時三十分迄待って来なかったら、逃亡したものと認めて手配するつもりだったのよ。」

おそれおのいて眼も昏みそうに喘ぎ乍ら敷石の上にひれ伏した私を認めて交番の中から出て来た昨日の婦人警官が冷たく云いました。盗み見た交番の時計は九時二十五分を指して居ます。昨夜一晚の当直勤務を終えた彼女は少し疲労の色を浮べて居ました。

「逃亡奴隸は、どんな刑を受けるか知ってるだろうね。」

脅し半分とは思いつつも矢張り恐ろしさと、そして辛うじてそれを免れた安堵とで全身の力が抜けた様でした。

「兎も角、管理所には報告しとくからね。悪くすると三年ばかり刑が延びることだろ。あーあ、お前のお陰で大分待たされたわ。」

九時の交代時間が来ても帰れなかった彼女は、大分不きげんで私の哀訴や申訳等には殆ど耳をすしませんでした。

「お慈悲でございませうから、管理所には云わないで置いて下さいまし。何分にも途中で社会の方から罰を受けて居たものですから……」

三年も刑が延びると聞いた私は堪らなくなって、つい口を滑らせた勢でとうとう遅れた理由を途中での例の出来事のせいにしてしま

いました。婦人警官は眠そうに眼をこすって

「何だって？ そう云えば新しい鞭痕が随分ついてるわね。それはどこでなの？ フン。それで鼻環を繋がれて来るにも来れなかったと云う訳ね？ 本当ね？」

「ハ、ハイ……」

「よし。それなら管理所に報告するのは赦してやるわ。さ、ちょっと立ってごらん。」

私は浅墓な嘘が案外通った嬉しさに、いそいそと立った鎖錠の検査を受けました。

「その他には社会の方々から、叱られたり罰せられたりした事は無いね？」

「ハイ。ご、ごさいません。」

「そう。じゃ横手に回るのよ。体に水を掛けてやるからね。」

私が両足の鉄丸を引摺りかけた時、警官が二人の婦人を連れて駅の方から帰って来ました。

「あら、どうしたの？」

「いやね。スリさ。交代早々点数を稼いじゃったよ。フッフこら、入れ。」

両手に手錠を光らせ手錠に結ばれた捕縄を警官に握られてグイと引かれて顔をしかめた大柄な婦人は三十五六の女盛りで、奥様然とした地味な和服を着て居ました。少しは逃走を計ったか抵抗したか裾が乱れて少し泥のついた真白い足袋がキツチリと足首の奥深く迄包んで居り、アップ気味に結い上げた豊かな黒髪の頭を支える首筋はむっちり肉付きよく堂々と上にのぼして立てたままです。むしろ後ろからついて来た被害者らしいもう一人の同年輩の婦人の方が

おどおどとうなだれて居ました。

「何よ!! 痛いじゃないの。そんなに引張らなくても入るわよ。手錠嵌める時に壊した腕時計をどうして呉れる気なの？」

気の強い女スリは交番の中に連れ入れられてから両頬を激しく撲られ身をくねらせて喚いて居ました。

苦笑いし乍ら私を小突く婦人警官に追われて交番の横手の空地に回った私はそこに一人の女奴隷がうなだれて坐って居るのを見ました。私と全く同じ様に鎖錠された追放奴隷で、昨日聞いた女奴隷です。私達二人を並んで立たせた婦人警官はホースで全身にたっぷり水を掛けてくれました。

「おーい。君、済まんけど、もう少し居てくれよな。此の女を署へ連れて行くから。」

女スリの縄尻を曳いて出て来た警官が呼び掛けました。

「あら、もう調べは済んだの？ けど、そりやひどいわよ。じゃSさんを起して私は帰るわ。」

「それじゃ、彼奴が可哀想じゃないか。すぐ帰って来るから、頼むよ。」

「嫌よ。じゃ私がそれを連れてくわ。いいでしょ。ホホホ心配しないでも横取りじゃないわよ。どうせ私も一旦署に帰るんだもの。」
「仕様がなのお嬢さんだなあ。じゃそうしろよ。これ書類。こら、じつとしとれ。」

警官は外した自分の手錠を腰の革サックに納め婦人警官が近寄って自分の革サックからカチャカチャと手錠を抜き出しました。

「あんた未だ若いのね。ほんの小娘ね。癪にさわるけど仕方ないわ。ちよっと待ってよ。」

女スリは髪を撫でつけ裾の辺りを寄せ合わせた後、両手を差出してすねた様に横を向きました。

「さ、嵌めていいよ。けど気を付けてね。ホラごらん。此の腕時計のガラスを、あの男のお巡りが壊したんだよ。」

逮捕され乍ら人もなげに云う女スリの言葉に頬を赤くした若い婦人警官は、矢庭に女スリの左手首を掴んで腕時計をむしり取り制服のポケットに入れました。

「うしろ向いて。両手を後ろに回して」

女スリは唇を噛んで命じられるままに両手をのろのろと背に回しました。

朝陽にきらめいて思い切り強く叩きつける手錠の音が二度響いてさしもの女スリの横顔が歪んだのが其のなだらかな肩越しに見えました。婦人警官は更に捕縄を取出して後手錠の鎖に結び、それを首に掛けてグイと締め上げます。

「ウッ……痛いじゃないの。首が、首が苦しい……堪忍して……」

女スリは忽ち悲鳴を挙げて哀願の声を出しましたが、婦人警官は委細構わず女囚の背を突き飛ばして追い立てたのでした。

「凄く気の強い女ねえ。」

全身に浴びた水を朝陽を受けて立ちすくんで乾かし乍ら眺めて居た私は、並んで立って居る女奴隷の声に振り返りました。すらりとした中背の女で細い割に要所要所にはよく肉がついて居ます。

「あんたいつから？　そう昨日からなのね。どうして遅れたの？」

ああ、気持のいい陽差しねえ。思い切り手足を伸ばしてみたいわ。もう少しここに居ましようよ。」

私の話を聞いた彼女は首をかしげました。

「そんなに簡単に許すのおかしいわね、そうでしょ。」

私も不安になりましたが、今更どうする術もありません。

「まあ、今更心配したって仕方ないわね。あんたどこの奴隷？　私はね、ずっと山手の別荘なんだけど……。旦那様に色眼を使ったり云うのよ。奥様が凄くやきもち焼なの。そんなに心配なら売って呉れればいいのに。」

改めて彼女の顔を眺めると、頭は坊主刈りにされ永年の苦しみをやつては居るものの若い頃は、さぞ美しかったろうと思われる顔立ちでした。年の頃は四十を半ば過ぎて居るでしょう。

「奥様が心配する程、そんなに私まだ綺麗なのかしら」

彼女は自嘲する様に呟きました。

「もう坐ろうっと。鎖が重くて堪らないわ。もう追出されてから一カ月は経ったかしら。両腕はもう棒みたいよ。肩は石みたいだし。あんた三十日間なのね。昨夜どこで寝たの？　あら、そんな橋の下なんかで寝るから遅れたりするのよ。駅の隅で寝りや近くていいわよ。そりゃまあ、意地の悪い人や駅員に苛められるけど、中には食べ物恵んで呉れる人もあるわ。」

成程と思った私は今夜から、そうしようと思いました。

「アッ……痛い……」

鉄鎖を鳴らして尻を下した彼女は呻いて腰をくねらせました。

「私はこんなものの嵌められてるのよ。あんたみたいに簡単な環だけじゃないのよ。」

よく見ますと彼女には昔出征する十字軍とやらの将士が奥方達に施して行った錠と同じ様なものが、ガッチリと嵌め込まれて居ました。うかつにも単なる革褌だと思って居ましたが、考えて見れば革

禪だと工合が悪い訳で、そうかと云って酔漢等のいたずらも防ぐ必要がある訳でした。突然交番の横手の窓が開いて警官の怒声が飛びました。

「いつ迄そこに居るんだ!! さっさと、どこかに消え失せろ。」

「そら来たわ。早く行きましょう。まごまごしてると鞭が飛んで来るわ。ああ、鉄の玉の重いこと!!」

彼女は制限範囲内で通れる裏道を知って居ました。人通りも少くて余りおどおどしないで済みます。彼女は喰べ物のあるごみ箱をいくつか教えて呉れました。

「私ね、大抵はいつでも腹一杯食べれるごみ箱を知ってるんだけどそれは今は教えられないわ。私が帰して貰える迄には教えただけだ。薄情な様だけど仕方ないのよ。勘忍してね。」

私が彼女の立場になったとしても矢張り教えはしないでしよう。

「あ、坐って……土下座するのよ。早く」

彼女は突然、鉄丸を引摺るのを止めて道ばたに平伏しました。私もそれにならい、二人の頭上を数人の男女がどたとと乱れた足音で何か大声で話し乍ら通り過ぎて行きました。

「ああ、よかった。あれね、街の与太者達なのよ。いつも苛めるの。いつかお巡りさんに云いつけてやったら、その仕返しに物凄く痛められたわ。痕が残る様な事はしないのよ。水の中に顔を押しつけたり、死ぬ程擦ったり、汚いものを口に押し込んだり……。だからもう姿さえ見れば、ともかく這いつくばって拝むしか手はないわ。」

私達は相談した訳でもないのですが、いつしか川の岸边に来て居ました。土手を這い下りて橋の下に潜りますと本当にホッとします。

「ここが私達にとっては安住の地って訳ね。ここで喰べ物さえあれば云う事ないのにねえ。けど此の川の水かさが増して川原がなくなつた時追放されたら悲劇だね。私達まだ運がいいのよ。ねえ、ちょっと腿の内側掻いてよ。痒いわ。」

私は後ろ向きに体をすり寄せて手探りで掻いてやりました。

「ああ……ありがと。あんたも鞭痕の周りが痒いんじゃない?」

「ウン。未だずきずきする所の方が多いよ。」

「そう。けど私の手の指はもう云うこと聞かないの。痛いところ舐めただけ。」

私達は鉄鎖をガチャつかせて鎖錠に悩みながら、いたわり合いました。

「私ね、若い頃スチュワーデスだったのよ。それも海外航路の。本当に馬鹿だったわ。あんな事しなけりゃ、今頃はもう……」

彼女の頬に涙が伝いました。彼女は問はず語りに身の上話を初めました。いつしか寝入った私は鎖の音に眼を覚めました。

「あら、起きたの? ついて来ちゃいやよ。私おなか空いたから、少し喰べて来るんだから。」

「分ったよ」

寝返りを打って俯伏せになり暫く経つと私も空腹になりましたので、水際に這い寄って川水を少し啜り込み、餌を漁るべく土手に這い上りました。途端、拳銃の音が続けて二発、近くで鳴り響き、私はあわてて頭を土手の下に引込みました。橋に通じる通りから一人の男が駆け出して来ました。既に大分走ったらしく大きく喘いで左右を見回した後、土手の上の道を私の居る方に曲って再び走り出しました。跡を追って三四人の人々が私の眼前を走り過ぎました。逃

走る男の行手にも数人の人が角を曲って現われ、男は棒の様に立ちすくみました。土手から少し離れて料亭の塀が長々と土手に平行して走り、塀と土手との間の空地にはまばらに松の木等が立って居ます。逃げて居る男には見覚えがありました。白樺荘で逮捕寸前逃亡した男です。どこで手に入れたかパリッとした背広に黒い靴、そして帽子迄かむって居ました。追いつめられた彼は一瞬、川原を覗いたと思うと身を翻えして料亭の塀に飛びつきました。もう少しで手が届かず、彼の体は空しく地に落ちました。挟撃した追手は合流して扇形に散ってじりじりと網を縮めます。六人の男達に混って先頭近くを拳銃片手に犯人に近寄る唯一人の婦人は、白樺荘に乗込んで来たあの婦人刑事でした。立木を楯に構えた追われる男の右手にも拳銃が黒く光って居ます。

「おい。もう観念しろ。そのハジキにや、もう二発と、弾はあるまい。」

立木によりかかった刑事がドスの利いた声で威圧しました。

「ハジキを捨ててこっちへ来い。もう駄目だぞ。じたばたしても罪を重くするだけだぞ。」

「やかましいやい。どうせ死刑になる身だ。一人位道連れにしてやらあ。来い!!」

「馬鹿野郎!! 神妙にすりゃ、あの女に、そそのかされてやった事だ。命は助かるかも知れないんだぞ。」

追いつめられた男の肩がぐりと落ちた様に思え、刑事はたたみかけで浴びせました。

「十数える間に出て来い。出て来ないと射ち殺すぞ。いいか? 一……二……三……四……」

男は未練氣に背後の高い塀を仰ぎ見ましたが、観念したのか拳銃を前に放り出し両手を挙げて出て来ました。割合に落着いた足取りでした。

「さ、お嬢さん。あなたが行きなさい。あなたの手柄ですわい。」後ろの方から声を掛けた年配の刑事は、これも白樺荘で見た男でした。亡父の部下だった刑事の声を聞いた婦人刑事は、その理智的な彫りの深い白い顔を振り返り、そして周囲の刑事達を見回した後、つかつかと踵の低い白い靴で砂地を踏んで、両手を挙げたまま立ちすくむ男に近付きました。

「うしろ向いて」

婦人刑事は拳銃を男の背に当てたまま、手早く身体検査をしました。男の上衣の内ポケットから短刀を掴み出して自分のポケットに移します。差上げたままの男の両手が無念そうに握り締められ、そして再び開きました。

「よし。さ、両手を後ろに回して」

婦人刑事は拳銃をポケットに突込み、肩に掛けたバッグから手早く手錠を取出し右手に握って肩の辺りに振上げました。鎖の付根を握られた環が彼女の右肩越しにキラリと光り、もう一個の環がぶらりと垂れて彼女の左手が男の左手の先を握ったと思った途端、パシッと言音として鋼鉄の環は男の左手の腕時計の外側で手首に喰い込んで居ました。

「何してるの!!」

体側で垂れたままの男の右手を婦人刑事の右手が掴み、引き寄せて再びパシッと音がしました。男の頭がガックリと前に垂れるのが見え、手錠の鎖に捕縄を結んだ婦人刑事は、ポケットの拳銃をパッ

グに納め、取上げた短刀を鞘のまま右手に持ち縄尻を握った左手で男の右腕を抱えると、バッグを揺すり上げて振り向き微笑を浮べて優雅に会釈したのでした。婦人刑事に右腕を抱えられてこちらの方に歩き出した男の顔は無念そうに歪み二三度両腕をもがいて唇を噛んで居ました。

「お手柄お手柄」

手配の刑事が歩み寄って短刀を彼女から受取り乍ら云いました。

「みんな皆様方のお陰ですわ。有難うございました。」

男の右腕をしっかりと抱えた婦人刑事を囲んだ一団は、土手の下に這いつくばって居る私の頭上をどやどやと通り過ぎます。逮捕された男は、未だ未練たらしく時々両腕をもがき、其の度に婦人刑事はきびしい表情で舌打ちして横眼で睨みつけました。

「そ、そんなに邪怪に引張らなくてもいいじゃないか。」

「お黙り!!」

婦人刑事の右手が男の頬に激しい音を立てました。

「ち、ちくしょう!!」

男は右腕を抱えられたまま、上体を前後に揺すって無念の声を挙げ、そして曲り角を曲って連れ去られて行ったのでした。

追放奴隷の窄衣

其の夜は駅の片隅で邪魔にならないに様うずくまり、人々の視線を感じる度に精一杯の哀願を全身に表わして哀れみを乞いました。

元スチュワーデスの追放女奴隷加川京子も、その辺で時々鎖を鳴らして居ました。食物どころか唾さえ吐きかけて呉れる人もなく、世間の人々の冷たさを沁々と味わいました。ごみ箱漁りに慣れない私

は空腹で空腹で堪らず、駅の便所に水を呑みに行きました。見回しても、どの蛇口もキッチリ閉まって居ます。人影がなくなるのを待って流しの上に身を乗り出し頭で蛇口を回しました。もう少しの所で口が届かないのです。頭の痛さに顔をしかめ乍ら固い栓は締め漸く水を出すことが出来ました。やれ嬉しやとタラタラ流れる水に舌を差出した途端

「こら、どけどけ。邪魔じゃないか」

いつの間にか入って来て用を足した一人の着流しの浴衣の若い男が下駄の足を上げて私を蹴り飛ばしました。

「ハハハ、水を呑もうてんだな。」

男は意地悪く笑って蛇口を固く締めて出て行ってしまいました。

私は再び固い栓で根気よく叩き続け乍ら情なくて涙をこぼしました。泣き乍ら飲み終えた私は、締め切る事が出来ないで糸を引いて居る蛇口をそのままに力無く便所を去ろうとしました。出口の片隅のコンクリート床の上に、酔っぱらいが吐いた汚物が溜って居ました。飯粒や未だ形を留めた食物が沢山混って居り、私は一瞬這いつくばって啜ろうかとさえ考えて立止りました。しかし命じられてならば否も応もありませんが、自ら進んで其のドロドロした物を口にする勇氣はありません。再び鉄鎖をガチャリと鳴らし、足の鉄丸を引摺りかけた途端、若い駅員が入って来ました。

「おや、お前だな。今水を飲んだらう? 何故栓を締め切っておかないんだ?」

固い靴の足蹴が飛び、私は便所の床に仰向けに倒れてもがきました。

「気をつけやがれ!! 馬鹿野郎。それに鉄の玉をゴロゴロ引摺るも

んだから駅の床が痛んで仕様な
いじゃないか。奴隷は立入り禁
止にして貰わにやかなわんよ。
どこか暗い隅でじっとしてろ。
分ったか？」

嘔吐物を食べることを命令し
て呉れたら、ふん切りがついて
いいのにとさえ思ったのでした
が駅員は幣の先で私をそのまま
追い出してしまいました。手小
荷物扱所附近の薄い壁際に尻を
おろして居る女奴隷の傍へ行き
ますと居眠りして居た彼女は音
に気付いて顔を上げました。

「お腹空いてるの？ 私が情深
そうな人を見付けて上げるわ。」

彼女は少し這って行って待合
室の辺りを覗いて見回して居ま
したが

「ほら、あの女の人なら多分何
か恵んで呉れると思うわ。私も
一緒に行つたげる。」

彼女について私も鉄丸を引摺
って行きましたが、彼女の演技
はうまいものでした。



如何にも元気なさそうに膝で歩い
て少し離れた所で止って切なげに喘
いで見せるのです。ベンチに坐って
居た其の上品な老婦人は、私達の首
環の音響器の音に気付いて私達を眺
め、眉をひそめました。

「じゃまだよ。あっちにお行き。何
も恵んで下さる人は居ないよ。」

派手な洋装の娘が女奴隷の坊主頭
をハイヒールで蹴って通り過ぎまし
た。老婦人は傍らに坐って居た孫ら
しい女の子に何か囁きました。

「おばあちゃんがネ、これやるって
二人で仲良く分けてお喰べって……」

女の子が可愛い手で持って来て呉
れたのは少し喰べかけの駅弁の折で
した。額を床にすりつけた私達は、
御飯と副食の折の角をそれぞれ啣え
て薄暗い所に這い寄りました。

「ほらね。云った通りでしょ。」

「何事も経験だなあ」

「フッフ何度も口惜しい思いをさせ
られた末のことだわよ。私はいいの
あんた全部喰べていいわ。」

むさぼり喰べる私を彼女は見て居

ましたが

「ホホホホ。折の御飯を口だけで喰べるのは難かしいでしょ？ 私押えてて上げるわ。」

鉄丸をゴロゴロ云わせて足先を近付け、足指で御飯の折を押えて呉れた彼女は、駅の玄関の方を眺め乍ら大きな溜息をつきました。

「今、準急が着いたのね。楽しそうにして皆行くわ。あの二人連れは夫婦かしら？ それとも……。ああ、考えたって仕方ないわね。けど此の枷や鎖を早く外して欲しいわ。あと八日かしら？ やっと今日も過ぎたわねえ。私ね、時々考えるのよ。町を歩いてる人達に一日でいいから、こんな枷や鎖をつけてやったら、どんなに胸がスツとするだろうかって……。ホホホ。」

私の眼前にある彼女の足首には頑丈な鉄枷が黒々と鉄で打込まれて嵌められて居り、その枷で摺れた痕のむごたらしい程の痛々しさが薄暗い電灯の光で夜目にもはっきりと見えました。

翌朝、駅前の交番で点呼を受けた私達が、横手の空地で浴びせられた水を乾かして居ますと、昨朝の婦人警官が颯爽として現われしました。充分寝足りた顔も晴やかに制服にはよくプレスが利いて居ます。長目のスカートが風に揺れました。

「おそいじゃないか。コーヒー一杯おごるんだな。ハハハ……」

「御免なさい。だって一仕事して来たのよ。」

「へーえ？」

「こら。お前、ここにおいで」

顎をしゃくられた私は、おそるおそる近寄って足許に坐りました。

「お前、昨日嘘ついたわね。喫茶店の前で鞭を買った時には、もう

九時過ぎてたじゃないの。」

私は恐ろしさに震え上りました。

「も、申訳ございません。恐ろしさの余り、つい……。お赦し下さいまし。」

「ホホホホ。私はね、お前が嘘ついたのを、怒ってるんじゃないのよ。奴隷は嘘ついたって法的な責任はないんだから。さっき奴隷管理所に遅刻の事を報告しといたからね。ここでちょっと待っというてよ。誰か来るって云ってたわ。」

私は声もなくうなだれて身をおののかせました。女奴隷は追い払われて鎖を鳴らして立ち去りました。一時間程してやって来た管理所の婦人係官は、全身を硬直させて喘ぐ私を蹴り飛ばし鞭を三つ程当て、そしてポケットから小さな鉤を取出して鼻環に引掛けて釣上げる様にして立たせました。そして持って来た革の窄衣を胸の前後に当てて両側を締め上げます。初めから終い迄黙ったままで私の上膊が下って来ると邪魔になると、締め付けるのに使用して居るペソチの様な道具で腕の内側をつねり上げて、上膊部を左右に張って居る様にと無言で命じるのでした。窄衣の両側の締金具に錠を下ろした婦人係官は煙草を吸いつけ私は苦しさに喘いで膝を地につけて彼女の胸の辺りのふくらみを仰ぎ見ました。彼女は未だ長い煙草を私の頭に押当てて悲鳴を挙げさせてからポイと捨て婦人警官を振向いて云いました。

「此奴ね、明日の朝、私が来る迄こうしときますからね。どんなに苦しんでも放つといて下さいよ。」

「そりゃ分つてますわ。けど凄くきつく締めたじゃないの？ 若し死んだら死体を探すのに一苦労だわ。」

「ホホホ大丈夫。十中八九迄死にやしませんわ。えーと。お前ね、昨日の遅刻は逃亡に準ずるものとして処理されたからね。そのつもりでおいでよ。追放中は一週間に一回、廿四時間宛その窄衣を着せてやるからね。追放が済んだら言渡しがあるでしょ。まあ、多分三年は長くなるわね。フフフさ、どこへでもさっさとお行き!!」

革鞭が腿に鳴りました。少しでも体を動かすと苦しくて眼前が暗くなります。しかし兎も角どこかへ立ち去らねばなりません。両足は引き摺った鉄丸が十倍も重くなった様でした。とても橋の下迄は行けず漸くの思いで駅の軒下の外れに辿り着いた私は涎れを垂らし放しにしてポロ切れの様に崩折れ、失神と正気の境をさまよい続けたのでした。夢うつつの中で相棒の女奴隷の声が途切れ途切れに聞えました。

「しっかりおしよ。お尻の穴で息をするつもりでやってごらん。」

彼女は肩で私の体を押し揺すり唇を私の口に密着させて息を吹き込み、そして吹い出すのを繰返して居ました。

「少しは楽になった? ちょっと待ってて。ああ、じれったいねえ、一ぺん一ぺん行かなきゃならないなんて……」

口に水を含んで来た彼女は私の顔に吹きつけました。

「み、水を飲ましておくれ……」

「ちょっと待って……」

彼女はままにならぬ体を起し重い鉄丸を曳きずって再び水を含みに行きました。

口うつしに飲ませて呉れる水を夢中になって飲み込もうとし激しくむせ返った私は七転八倒の苦しみを味わいました。再び気が遠くなりかけると今度は彼女は私の腿を強く噛んで呉れます。

「しっかりしなきゃ駄目よ。気を失っちゃ、そのままお陀仏になるかも知れなくてよ。苦しくとも辛抱して、じっと待ってるの!! いい?」

「……」

「口利かなくてもいいわよ。物を云うと余計苦しいからね。けど此の窄衣は随分と長いね。お臍の所迄あるじゃないの。これじゃ苦しい筈ね。じっと壁にもたれてるのよ。お水欲しい?」

私達の姿を眺めて人々は或いは嘲笑し或いは顔をそむけました。

「介抱してやってるさ。いじらしい様なもんじゃないか。」

「本当だな。あんな不自由な体でさ。使えるのは口だけなんだからな。」

「あの男……でしょ? ああ、男だね、あの男の奴隷どうしたの?」

なんだ窄衣掛けられてるのね。」

「そうよ。窄衣で締め上げられて息が出来なくて半死半生なのね。」

介抱なんかしてやらないで、早くくたばらせてやった方が楽なのねえ。」

冷酷な人々の視線や言葉を浴び乍ら、彼女は意にも介しないで私を懸命に介抱してくれました。

「食物がどっさりあるごみ箱を教えて上げるから元気出すのよ。このままで死んでしまっちゃ、あんたも死に切れないでしょ? 今迄の辛苦が水の泡よ。一度は自由の身になってからでなきゃ死んじゃ駄目よ。」

彼女の介抱と元気付けを受けて居る中に、体が窄衣に順応して慣れたのか少しは楽になりました。

「あ、ありがと。少しは……」

「そう。よかったわ。矢張り嘘がバレたんでしょ？ 馬鹿ねえ。」
壁にもたれて尻を地面について、身じろぎもしないで永い永い時間を楽しみました。

突然例の婦人警官の鋭い声を耳にして眼をノロノロと開きました。女奴隷が私を庇う様にして見上げて居ます。

「お前、ちょっと交番の横手迄おいで!! 馬鹿、お前じゃないよ。そっちの七号の方よ。」

暫くして私は自分の整理番号が、七号だったことを思い出しました。

「来いと云ったら来るんだよ。聞えないの？ それとも反抗する気かい？」

女奴隷は恨めしそうな眼付でチラと婦人警官を見上げ、そして私のために何か云い掛けた様でしたが、声をのみ込んで黙ってしまいました。支配者や管理者の命令には、どんなことがあっても服従しなればならない奴隷の身です。

「ハイ……」

かすれた声を振絞って漸く返事した私は死力を尽して立ち上りました。女奴隷がおろおろとして見送る中を、私は二歩あるいては膝をつき三歩進んでは倒れ伏し、けれども必死の努力で駅前広場を横切って交番へと這いずります。シートに深々と腰をおろしたお客を乗せて行き交う自動車の運転手が舌打ちして罵声を頭上から浴びせては走り過ぎました。

「フッフ割と早く来たわね。はたから見る程苦しくはない様ね。締め方が足りないのよ。」

婦人警官はホースを握って待って居ました。窄衣の上からタップ

リと水を掛けられた私は少し気を取直して元氣付きました。けれどもすぐに猛烈な苦しみがやって来るのは分って居ます。冷い笑みを頬に浮べて居る婦人警官を思わず怨めしく見上げました。

「そこに居ていいよ」

婦人警官は云い捨てて交番の中に入りました。五分と経たないうちに収縮し初めた革の窄衣に、私は白眼を剝いた両眼が今にも飛び出す程の苦しみを味わいました。呻いても喘いでも誰も何ともして呉れず、近寄ろうとした女奴隷が鞭で追ひ払われるのを微かに耳にし乍ら、私はとうとう失神してしまいました。気が付いて見ると両便を洩らして居ました。窄衣は弛められた様子はありませんが大分乾いて居ました。出て来た婦人警官が

「どうしたの？ 未だ死ななかったの？ フッフフお慈悲で強心剤を射っというてやったわよ。さきで消えてなくなるがいいわ。おっとその前にそこら辺を綺麗にしないとよ。口がありゃ出来るわね。」

地面を腹這いになってうごめいて舐め取った物を土と共に飲み込んで回りましたが、苦しくて苦しくて汚ないと思う余裕もなく、唯もう絶対服従の観念だけで以て萎えた様な体に鞭打って云いつけ通りにしようと死物狂いになるだけでした。近くで立って見下ろして居る婦人警官の眼を感じますと、ただ恐ろしさにすくみ上るだけで、さっき迄は微かに感じて居た無念さも吹き飛んでしまっただけでした。

「窄衣の前を汚したわね。私はいけど、管理所の人に叱られるわよ。水を掛けて洗ってやろうか？ フッフ」

顔を地面に押当てたまま、微かに鎖の音を響かせて全身で声もなくて哀願する私は彼女の靴先で蹴り追われ再び広場を横切って駅の

の方に帰りました。女奴隷は遠くの方から心配げに見守って呉れて居たらしく、いろいろといたわって呉れました。

「ずい分ひどいことされたのね。ここが日当りがいいわ。ここでよく乾かしたら……」

「……もう……夕方に……近いんだろ。ウー。お前……さん……いいのかい？ 餌は……」

「いいのよ。水持って来て上げるわ。」

私は眼をつぶってじっと壁にもたれて居ました。彼女はずい分長い間かかって戻って来ました。私の口の周りに付着した汚物が乾いてポロポロして居るのにも構わずに、口うつしに水を飲ませて呉れます。

「もっと欲しい？ さっきはね、便所にとっても意地の悪い娘が二人居たのよ。さんざん苛められて中々赦して呉れなかったの。あら、泣いてるのね。」

私の頬を伝う涙を彼女は舌の先で舐め取って呉れるのでした。

「ありがとう。あんたが居なけりゃ死んでたかも知れないね。」

「あら、お礼なんか云わないでいいのよ。お互い様ですものね。けど人間で中々死に切れないものよ。あんた、窄衣掛けられるのは今日だけ？ そう、一週間毎になのね。」

「その上……刑期延長だってさ。畜生!!」

「そんなことだろうと思ってたわ。奴隷を勤め終えたら又監獄にブチ込まれる訳ね。可哀想だわ。」

「監獄だって？」

「あら、知らないの？ 刑期延長と云ったら懲役に決ってるじゃないの。」

「だって裁判も受けないでかい？」

「私達はね、裁判なんか受ける資格はないのよ。勝手に定められてさ、碌に云い渡しもして貰えないわ。みじめなものよ。そんな事、あんた知らなかったの？ 呑気ねえ。」

すべての権利、人格を剝奪された境涯の悲哀を泌々と思って再び涙が頬を伝いました。

「ホラ、お澄ちゃん、あれ御覧よ。昨日話した奴隷よ。罰を受けて居るのね。」

「ああ、窄衣掛けられて苦しそうね。」

若やいだ話声に薄眼を開いて見ますと、昨朝の恨めしい喫茶店の婦人が若い娘を連れて眺めて居ました。ショートパンツの脚がスラリとサンダルをはいて居ました。

「畜生!!」

笑い合って立去る彼女の後姿を睨んで、私は思わず呟きました。

「あんた、それは逆恨みじゃなくて？ あの女の人に捕まらなくても遅れてたんでしょ。」

「そりや、そうだけど……ウ、くる……しい……」

「氣を立てるから苦しくなるのよ。ジーンとしてるの。」

永い苦しみ的一天が漸く暮れました。今夜中こうして未だ苦しみ抜かねばならないのです。餌を漁りに取掛けた女奴隷が口に食物を含んで戻って来て、よく噛んでから私の口に移して呉れました。

「まだ食べれる？」

何十日間も後手錠にされたままの両手に、彼女は煮魚の食べ残しを辛うじて掴んで帰って居ました。路上においた煮魚に口を寄せた彼女は器用に舌と歯を使って身を噛み取り、少し噛んでは私に口移

しに食べさせて呉れました。

私達が二人並んで尻を地につけ壁にもたれてボンヤリと行き交う人々を切ない思いで眺めて居ますと、鎖の音がして若い娘さんに鼻鎖を曳かれた女奴隷が立ち止まりました。ピンクのブラウスに白いスカートで軽やかに着こなした娘さんと同年配の女奴隷は、むっちりとした白い体に黒い革褌を締め両足を繋いだ鎖は吊鎖なしで路上に曳き摺り、何の用で曳かれて居るのか知りませんが何の荷物も持たされては居ません。

「お前よく見ておくんだよ。ボヤボヤしてるとあんな風にしてしまふからね。」

「ハ、ハイ。よく分っております。お嬢様。」

女奴隷は手錠の嵌まった両手で乳房の辺りを押えて、おそろしうに身を震わせました。

「さ、おいで!!」

「ヒューッ」

邪怪に引かれた鼻鎖の痛さに女奴隷は悲鳴を挙げ乍ら娘さんの跡に従いました。

「あの女奴隷は御主人様の所に戻るのね。」

私と並んだ女奴隷、追放整理番号第六号は、さも羨ましげに呟きました。彼女に励まされいたわられて漸く永い一夜も明けました。駅前交番の前の敷石に坐った私は、もう正坐して居るのが漸くのことで、ともすれば体が倒れてしまいそうです。婦人警官が靴を鳴らして出て来しました。

「昨夜、二回程見回ったけど、二人共よく眠ってたわね。蹴っても気付かないでさ。呑気でいいわね、お前達は。さ、横手に回って」

△告白▽

サディスティンの便り

原口 里子

初めてお便り申し上げます。私はサディスティン。もう十年以上も前からのKK愛読者で、今は夫や小供も居る三十八才の姥桜です。私達は世間態は極くありふれた夫婦なのですが、夫婦生活では私が主人、彼は終身の奴隷囚と云う訳です。同好の方々の御参考にも、と思ひまして私達の秘密のヴェールを一寸だけ開いて御覧に入れますわ。彼に対するお仕置は、私の欲する限りでは何時でも出来るのですけど、一番思い切ったプレイをするのは、一寸恥かしいのですが――毎月の生理の時なの。私の生理が始まると彼にも

初めてお便り申し上げます。私の使い古した生理バンドをつけさせ、胸のところに、奴隷囚番号（毎月一番宛増えて今月は六十四号）を書いた布切れを銀製の安全ピンで直接に止めつけ私の生理が終るまでは、そのままにします。勿論、会社に出勤する時もよ。

自家製の手錠、足枷、縄、鞭（これは余り大きな音のするのは困りますので、専ら犬用のもので我慢しています）や猿轡（これは私のメンスバンドがそのまま使われます）等については省略しますが、一番特異なのはこの間の奴隷食です。会社での昼食は普通にさせていますが、

遠慮会釈もなくホースの水をしたたか浴びせられた後、女奴隷は警棒で小突かれて追い払われ、私は管理所の係官を待ってうずくまりました。革の窄衣は又しても無慈悲に緊まって来て私の肋骨はみしみし音を立てんばかり全身に冷い脂汗が流れ、私は舌をダラリと出して小刻みに喘ぎに喘ぐのでした。窄衣が乾きかけた頃、昨朝の婦人係官が自転車であって来ました。無慈悲に鼻環を釣り上げられた私は死物狂いで立ち上がり、そして再び崩折れました。婦人係官は舌打ちして

「立つんだよ。立たないと窄衣を、そのままにしとくよ。何よ、其の恨めしげな目は!!」

グレーのスカートの裾で顔を蹴られた私は脆くも地面に倒れます。鎖骨が折れそうに痛みました。全く無慈悲なものです。

漸く立ち上った私の鼻環に鉤を引掛けて短く左手で握った婦人係官は、右手の鍵で面倒臭そうに、しかし至極簡単に窄衣の両側の締金具を外しました。全身がふくらむ様な解放感を感じ膝がガクガクします。婦人係官は小さい木の槌を取り出し、極めておさなりに私の上半身の骨をあちこち叩いて調べ、太い注射針をプスリと腿に突き刺して何か注射しました。

「一週間経ったら又掛けてやるから待って。」

彼女は冷く言い放って鞭で私を追い立て、婦人警官と一緒に交番に入ってお茶を飲むのでした。其の姿を横眼でチラと眺めた私は女奴隷の姿を求めて橋の下をめざして鉄丸を曳き摺り初めました。何だか体が宙に浮く様で足許がふらつきます。首環の回転を防ぐために両腋下を潜って居る鎖が窄衣に締めつけられて当って居た箇所、骨がズキズキと激しく痛み出しました。

(未完)

家庭では、人間の食事らしいものは一切与えず、お茶は勿論、水道の水も禁止なの。ノーマルな人には少々お氣持が悪いかも知れませんが、今回は奴隷食について説明します。

私は生理が始まると、綿や紙の替りに食パンを使うの。彼のえさ、と云う訳ね。尤も、腐ったりするといけないので、使用済みになるとプラスチックの蓋つき容器に入れ、少量のお砂糖を加えたブランデーをそそいでおきます。これに私の食べ残した食事の屑を混えて彼に与えるのです。飲み物は、申すまでもなくネクター（これも彼の出勤中のものは洋酒を加えておきますけど）。

囚人食を摂らせるようになってから、もう足掛け六年になりますけど、彼の健康は全然心配ありません。この点は充分実験済みですから、S女性の方で興

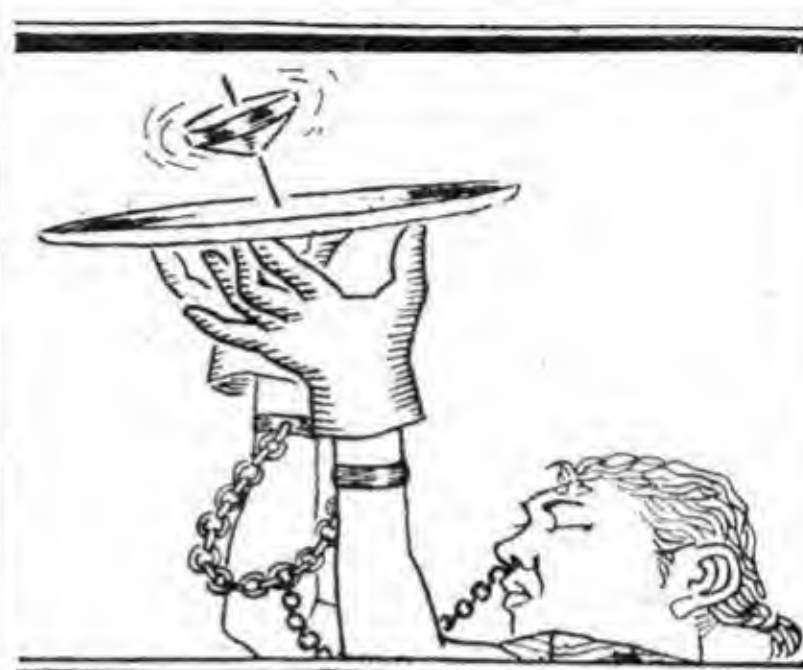
味のおありの方は一度実験して御覧あそばせ、KOTは今までに四回位、無理矢理に食べさせて見た事があります。健康上は大した影響もないようですけど私自身、氣持が悪くなりますし彼もこれだけは徹底的に嫌悪します。余程の時でなければ与えないことにしています。

メンスバンドと囚人番号をつけ。後手錠と足枷で拘束された彼に、そのよく働く舌で一晩中「足舐め」の奉仕をさせ乍ら、うとうとと寝入るのが、私にとっては無上の楽しみです。

猶、私は今の奴隷で十分満足していますから、世間の男性M共がどんな請願をしようとも、これには一切応じる氣持がございませんから念のため。

終りに、サディスティンの皆様、もっともっと活発にお便りを出しましょう。

原口里子（東京）



〔奴隸国探検〕

サルジニア探訪記

(第四回)

阿留品 又 怒

籠の中での奴隸の身体は、不自然な姿勢をより不自然にしようと、するかのようになれ、油汗をふき出し、大きく喘いでいた。そしてその眼は、苦しさに耐えようとする努力で、異様なほど大きく見開られ、まばたきさえしなかった。

「鎮静剤がきれると、奴隸は全部あなるようにしてあるんだよ」

とナハール君は冷酷に説明した。

「あの苦しみは丁度頭の中で蜂が何万匹とむらがり刺しているようなものだ」という奴隸が

いるくらいだから、多少の誇張があるとしても相当なものには違いないんだよ。あのたうちようを見たまえ。あれでは絶対服従せざるをえないわけだし、入れ墨が消えない限り僕の手の中から逃れでることはできないわけだよ。逃げたって、薬のないところでは、結局あして苦しみもだえて死ぬより仕様がななんだからね。それでも簡単に死ねれば良いのだけど……」

ナハール君は四つん這いになって鎖をひきずる女人馬を二人呼び寄せ、それにまたがる

と、僕にも残りの一人に乗るよううながして籠の近くまでおもむいていった。

そばで見ると、籠の中の女奴隸は、果してそれで身体がもつかと思われるほどに、鉄の籠に身体をこすりつけ、それが皮膚にくい込むのまかまわずもがいていた。

「大丈夫だろうか？」

「分らんね。見せしめのために一時間くらいは薬をやらない積りだが、死ぬということはないね。幸運な奴隸は気絶して、一時間の中のなん分かは苦しみを知らずにすまずことが

できるのだが、気つけ薬を注射してやると直ぐ蘇生してのたうちを続けるよ。しかし、こいつをやるとしばらく役に立たなくなるんだよ。鞭や電気棒くらいでは、ぴくりとするだけで動こうとしないからね。しかしこんなにもがいていても、死んだら餌にされて食われなければならないという恐怖だけは消えないのだね。どんなにぐったりなってしまうっていても、自分が死んではいけないという意思表示だけは、なんとかしてやるからね」

別の籠に入れられた女奴隷は、やがて自分の身にふりかかってくる苦しみを想像してか不自由に首をふり向け、のたうつ隣りの籠の中の同類をおそろおそろ眺めながら、顔蒼ざめ顫えていた。

「嵌口具があるからこそ、この程のうめきで済むが、これがなければ、ちよっとそばにはいられないほど騒がしいものだ。この嵌口具だって、ずいぶん上手くつくってあるんだけど、それでも、すこしはうめき声が洩れるからね。」

そして女奴隷の身体から出る油汗を見ながら、執事にさりげなく命令した。

「全身をつつむゴムの服をつくっておいてくれ。籠の中へ入れる時は、その方が良いでしょう。」

だから。もちろん顔だけ出すやつだよ。首でぴっちりとめてやれば、この汚らしい汗も見なくてすむからね」

ナハール君は、それからしばらく、籠の中の女奴隷の苦しみを面白そうに見物していたが、やがてあきたものか、女人馬にまたがったまま、僕をうながして椅子の方へ引き返しはじめた。

僕たちが女体椅子に腰を下して、しばらくすると、女監督が一人恭々しくすすみ出て最敬礼をした。

「なんじゃ」

ナハール君は憂鬱な表情で果実を口に含みながら云った。そこには貴族の悠々としたサディズムが仄見えていた。

「反抗奴隷はもう限度にございます」

「どのくらいためよった？」

「ゴムのズボンはすっかりきれいになりましたが、床に流れた分が未だ……」

「差はついておるか？」

「いささか」

「引き出せ」

女監督は丁寧に礼をして引きさがり、やがて前とちっとも変らない拘束を受けた反抗奴

隷の首枷の鎖を曳いてあらわれた。

その反抗奴隷の下半身には、互いになめあってきれいになったというものの、あい変らずゴムのズボンが穿かされていた。

彼女たちは、女監督に鞭を当てられると、鎖とゴムのズボンの音をさせて、あわてて膝まづいた。

「おしおき有難うございました」

かの女達ちの表情は、耐え難いものを口の中にいれた不快感に、嘔吐寸前の奇妙なゆがみを見せていた。

「未だしおきはすまぬぞ。」

ナハール君は意地悪く云った。

「懲戒はこれからじゃ。いまおまえたちがしたことは懲戒などではない。余の前に膝まづくことができるよう。互いに身体を清めてまいったのにすぎぬのじゃ。」

そしてどちらがなめあいの競争に勝ったかと女監督に訊ねた。

女監督はそれを指でさし示した。

女奴隷の表情に、瞬間愉悦とおそれの差があらわれた。

「なんじは、ふとどきなやつじやのう」

ナハール君は負けた奴隷に云った。

「主人の前に美しい身体で出ようとするのは

奴隷として当然のつとめじや。それはないがしらすにすると、ちと痛い目にあわねばならないぞ。電気棒で三回あぶってやれい。勝った方は、奴隷の分際を得おった殊勝なやつとして、作業が不充分であつたことは許してつかわすのじや。反抗にたいする懲戒はその後でゆっくり行なわれるのじや」

命令は即座に実行あれた。

女監督は負けた反抗奴隷の身体に容赦なく電気棒を押しあてた。

おそろしい悲鳴と氣狂い染みた跳躍……三度目が終ると、奴隷は失神したように動かなくなった。しかし直ぐ引き起こされた上、膝まづかせられると、電気棒のお札を喘ぎ喘ぎ言わされた。

「反抗というのは奴隷として最も重い犯罪じや。その罪は死に価する。しかし死刑の執行は何時でも出来るのじや。今まで鉄の箱の中で生命を長びかせてやったのは余の慈悲であると共に、おまえたちが苦しみにより反省する余裕を与えてやるためのな。これからも刑の執行期間中は、おまえたちはかずかずの試練を受けねばならぬじやろう、生命の灯ぎりぎりのな。これからその手はじめを見せ

てつかわそう。しかし覚えておくがよい。これはあくまで、懲戒のはじまりにすぎぬのじや。余が命令さえ下せば、その方たちの手足を引き千切り、火にあぶることさえ出来るのじや。が、その方たちの現在の神妙な態度を賞で、そのような懲戒だけは許してつかわそう。しかしその方たちの神妙さがうしなわれたら、千切ったその方たちの手足を眼の前で女人犬に食わせてしまふぞ」

反抗奴隷はナハール君のそのおそろしい言葉に、ただ蒼くなつて顫えていた。

そんな間にも、檻の中の女奴隷ののたうちは続いていた。僕はその方をちらちら見るにすぎなかったが、それでも女奴隷の身体に、ぴくりぴくりと大きないれんの走るのを認めた。僕はそれを檻から出してやってはどうかとナハール君にすすめようとしたが、その時ナハール君は反抗奴隷に云っていた。

「手はじめに舌を切りとつてつかわそう、それで嵌口具など使わずとも口ごたえなど出来なくなるじやろう。もっともお札の言葉はいえなくなつて鞭を当てられることも多くなるうがのう。お札の云いおさめじや。舌切りのお札を百回唱えるがよい」

僕はナハール君に言葉をかけるのをためら

った。しかし反抗奴隷たちも、その残酷なお札の言葉をためらっていた。

「どうしたのじや」

ナハール君は冷酷にうながし、その意を汲んだ女監督は、鞭を女奴隷の背に振りおろした。パシッという鋭い音と悲鳴。……やつと反抗奴隷は、途切れ途切れに云いはじめた。

「舌を切りとつていただき、ありがとうございます」

「舌切りのお仕置、ありがとうございます」

反抗奴隷は次第次第に涙声になつてきた。百回目がおわれれば、必ず舌を切られなければならぬ、おそろしい運命が待っているのだから、それは無理もなかった。

しかし言葉が後れると、女監督が容赦なく鞭をふるうのだから、云いつづけるより仕方がなかった。

「舌切りのお仕置、ありがとうございます」

ずいぶんのためらいの後、鞭を当てられた反抗奴隷は、口々に最後のお札の言葉を悲愴な顔をして云いおえた。

直ちにかの女たちは鉄の椅子に固定され、顔を上向けにして額にバンドが回された。そして手術用具が準備され、白衣の女医らしいのが現れると、ナハール君に一礼してメスを

執った。

手術はあつてなかった。

ペンチやうのもので舌が引つ張りだされ、手際よくメスが滑ると、たちまち舌は分離してしまった。途端におびたらしい血があふれ出たが、女医の鮮やかな手並みはそれを直ぐとめてしまった。

「あの外科医はどこへ出しても恥ずかしくない一流の腕を持っていて、生体解剖なんか幾度も手がけているのだよ。ある政治的な理由から身を隠さねばならないので僕のところにかくまってやっているのだが。そのため両方が利益を得ているというわけだよ。重宝な外科医だよ。産まれがドイツだといえば、まあ後のことは大体想像できるだろう」

処置がすむと、その女医はナハール君の招きで僕たちの傍へやってきた。

手術間の白衣やゴムの手袋を女奴隷が片付けると、質素な服装をした、只の女性の体であられた。

僕たちは紹介され、互いに葡萄酒の盃を交わした。僕にはその一見柔和な女性が易々とあの残忍な手術をやったことが不思議でならなかった。いやあるいは、ここへ来てからはじめて見た女性らしい服装に僕は幻惑

されていたのかも分らなかった。

「なかなか見事ですな」

僕はアラビア語で云ったが通じなかった。「この女性は未だアラビア語を充分知らないのだよ」

ナハール君は説明し、ドイツ語で僕の言葉をその女医に伝えてくれた。

女医は微笑し、ドイツ語で何か云った。しかし残念ながら、僕はドイツ語を殆ど知らない。ナハール君の通訳するところでは、その言葉はこうである。

「あの程度の手術なら簡単なんです。首をすげかえたり、手足をつけかえるといったむづかしい手術と違って、ただ切りとってしまうだけですから」

僕は彼女に過去の事柄について話題を提供してくれるよう頼みたい誘惑にかられたが、ある遠慮とおそれが、口をつぐませてしまった。そして平気で女体椅子に腰を下ろしているその美しい女医の心の中に、どのような魂が巣喰っているのか、いぶからずにはいられなかった。

「切りとった舌は矯正所へ送らせい」

ナハール君は女監督に命令した。

「その二匹の奴隷どもは鉄の箱に入れてしば

らく休ませるとよい。傷口が癒着したなら改めて懲戒してつかわそう」

ナハール君はそれから女医となにか云って笑ったりしていたが、僕にはちっとも分らなかった。しかしやがてナハール君は僕の方に振り向き説明してくれた。

「大体これで懲戒は一応終わったようだな。どうだった？ 今迄の見世物は。未だ小さい罪を犯した奴隷に踊りをおどらしてやらねばならんのだが、実はグレッタ君が矯正所で研究に使う奴隷を見つけてきたいというんですね。よかったら君も一緒に行ってみてはどうかと思っただけだ。なに公式に行くわけじゃないから大層に考える必要はないんだよ。今迄の懲戒のあいだ君の表情は多少不快感とおそれに蒼ざめていたようだけど、その様子じゃあ矯正所を最初から見物するのは無理なように思うんだ。それでグレッタ君と一緒に行って大体どんなところか、あらかじめ予備知識を得ておいた方が良くと思うのだ」

僕はナハール君とグレッタ君と呼ばれた女医と籠の中で未だのたうち続けている女奴隷を見比べた。

「あれには未だ薬をやらないの？」

僕が心配そうに云うと、ナハール君は軽く

笑った。

「そうだいぶ気になっている様子だね。時間もきたようだから注射してやろうか」

ナハール君の合図で女監督はすすみ出てきた。そしてナハール君から鍵を受けとり、一方の壁にしつらえられた巨大な金庫の扉を開けた。そして中からちっぽけな、きらきら光る硝子のアンブをとり出し、再び扉を厳重に

閉めた。

「監督といっても奴隷の中から忠実そうな、そして腕っぷしの強そうなものから選んだのだから、且での入れ墨は消えていないのだ。奴隷時代から較べたらその効果は半減しているけど、薬が切れれば苦しまねばならぬのは監督だって同じなんだよ。そしてその薬を保管している金庫の鍵は僕が持っている。どうだ



い。この邸が安全な統制下にある理由が分っただろう。それに切角監督になったって、僕の意味一つで奴隷に引きおろされることはいくらでもあるんだよ」

女監督はナハール君の前に膝まづき、掌に薬のアンブル一つと鍵をのせてさし出した。

ナハール君は鍵を受けとり、注射器を代りに渡してや

った。それらの動作のあいだには、なにか儀式のような重々しさがあった。

そしてやっと女監督は注射器に薬を満たし籠に近づくと中の女奴隷の太股に外から荒々しく針をつきさし、薬液を注入した。

苦しみに痙攣してしまっていたのか、女奴隷は針をつきさされても、反応を示さずのたうちを続けていたが、薬を注入されるに従っ

て、次第に大人しくなってきた。

「グレタ君の才能は素晴らしいよ。入れ墨を
発明したのも、それにたいする即効的な薬液
を発明したのも全部グレタ君なのだ。そんな
ことはよもやないけれど、僕が奴隷の反乱に
逢着したら、あるところに隠してあるボタン
を押せば良いのだ。すると瞬時にしてあの金
庫の中の薬液のアンブルは粉碎される仕掛け
になっているんだよ。薬がなければ奴隷たち
の生命は一日ともたないんだから後は簡単に
想像できるだろう」

籠の中の女奴隷ののたうちはやんだ。しか
しくったりとなった身体は喘ぎに、なお大き
く波打っていた。

僕はグレタ医師と一緒に矯正所へおもむく
ことをナハール君に承諾しようとした。

しかしその時、ちよつとした珍事がおこっ
て僕の口をつぐませてしまった。

その珍事というのは恐らくナハール君やグ
レタ医師にとっては珍らしくもなんでもない
のであるが、僕には最初の経験だった。つま
り食い散した料理の皿を運び去ろうとしてい
た女奴隷の一人が、女人犬の鎖かなにかにつ
まづき、持っていた皿をすべらせてしまった
のである。

ガチャンという音と一緒に女監督がとんで
きて、矢庭に鞭を振りあげた。皿を破った女
奴隷は、おどろきと恐怖に顫えながら、女監
督の鞭に悲鳴をあげ、とび散った皿の破片を
おろおろして動作でかき集めていた。

「ぼやぼやしているからだよ。このとんま」

女監督は、ざっとそんな意味の悪態をつく
と、他の女奴隷に鉄の手袋をとってくるよう
云いつけた。云われた女奴隷はとぶようにし
て姿を消したが、やがて重々しい首枷と鉄の
手袋、そして足枷をかついできた。

ナハール君はその時、女監督に合図して劇
の進行をとめさせた。そして僕に云った。

「どうだい、君は手袋をあ奴隷にはめてや
る気はおこらないかい？」

僕が女奴隷の真つ着になつてぶるぶる顫
えている様子が哀れで言葉をためらっている
と、ナハール君は容赦なく云った。

「お客様がお手ずからはめられるから、奴隷
と手袋を傍近くまでお運びせい」

女監督は一礼して、皿の破片を持って顫え
ている女奴隷を僕の目の前まで鞭でこずいて
連れてきた。と共に首枷と鉄の手袋と足枷が
それについている鎖と共に運ばれてきた。

僕は目の前に置かれた残酷な器具と、女奴

隷の哀願の眼差しを見較べた。

「先ず、こいつにつけてある金の枷を外すの
だよ」

ナハール君は、僕の躊躇を面白そうに見な
がらうながした。そしてその鍵を女監督から
僕に渡すよう命令した。

僕は受けとった小さく可愛い鍵で、仕方な
く女奴隷の金の首枷を外してやった。

外されるままじつと大人しく首をさし出し
ている奴隷の身体から、ほのかな女の臭気が
した。

外した金の枷は細く美しかった。僕の力で
ならあるいは曲がつてしまうのではないかと思
えるほどだった。

「それは単なるアクセサリーだよ。もっとも
首にはめてしまうと、なかなか曲がりしな
いけどね」

ナハール君は僕の気持を察したものが、直
ぐ説明した。

「鍵なしで外そうとしてら怪我をしてしま
うよ。そんな奴隷なんかいないけどね。これ
を外したら代りに待っているのは鋼鉄の枷なん
だから。さあ、次は手枷だよ」

僕は別の鍵で、両手を従順にさしだしてい
る女奴隷の手枷を外してやった。そしてほん

とうに裝飾としか思えない足枷も。

「お礼を忘れてるじゃないか」

僕が外した金の枷のチーンチーンというきれいな音に感心していると、いきなり女監督の叱鳴り声がした。そして鞭の音と悲鳴。

「枷を外していただき、ありがとうございます」

「そうして鉄の手袋をお願いするんだよ」

「どうか大切なご主人様のお皿をこわしたわたくしめに、おしおきの鉄の手袋をはめていただきますとございます」

僕はナハール君の顔をうかがいながら、ずっしりした鉄の手袋をとりあげた。それは外側つまり小指の方に蝶つがいがついていて手の平と手の甲に当るところが交互に開くようになっていた。僕はふと日本の夜店でやっていた鯛焼の器械を思い出した。そしてその内面には、指の形にくり抜かれたところはいうに及ばず、手の平にも手の由にも、びっしり鈍角の刺が突き出ていた。

「さあ、もう一度おねがいするんだよ」

僕のためらいを見ていた女監督は、軽蔑したような表情で女奴隷を鞭で小づいた。

「どうぞ鉄の手袋をはめていただきとございます」

打ち顛える奴隷の眼に涙が光っていた。

僕は周囲の視線が全部僕に集まっているのを感じた。ナハール君の、グレタ医師の、女監督の、女人犬の、料理を運ぶ女奴隷の、いやそればかりでない、籠の中に押し込められている女奴隷までの。

軽蔑されてはならない。それに僕がしなくても誰かが必ずやるだろう。

僕は冷酷を装いながら、さし出された女奴隷のきれいな手に手袋を押しあて、蝶つがいを閉めた。

ガチンという鍵のかかる音と、苦痛をおしこらえた女奴隷のうめき声がした。

そうしてもう一方も。

「鉄の手袋をはめて頂き、ありがとうございます」

女奴隷は喘ぎ喘ぎ云った。

僕は続いてずっしりと重い首枷を女奴隷にはめてやり、鉄の手袋をとりつけられてある頑丈な鍵で固定してやった。

女奴隷はその度に神妙にお礼を云った。

足枷は女監督がはめてくれた。僕を膝ましかすような姿勢にさせないための配慮からであらう。

既に喘ぐ女奴隷の身体には、痛みからくる

脂汗がじっとりじんできていた。かの女は土下座してもう一度お礼を云った。

「こうして見ると、僕の発明品もまんざらでもないね」

冷やかな、そして興味ありげな視線を僕に向けていたナハール君は、やっとして云った。そして傍らにある長い棒で、女奴隷の手袋を激しく打った。

金属音と悲鳴。そして途切れ途切れの女奴隷のお礼の言葉。

女奴隷の身体からは、更に激しい脂汗がふさ出てきた。

「いくら懲戒しても奴隷の失策はあとをたたないなあ。未だなまぬるいんだろうか」

その時グレタ医師が言葉をさしはさんだ。

ナハール君の説明によると、いっそ手首を切りおとしてやれば良いではないかといったそうである。

「でも、それではあまり奴隷を苦しめないからね。鉄の手袋の方が、奴隷をちぢみ上らせるにはずっと効果があると思うんだよ。もっと良い名案があるかい？」

僕は残念ながら名案はないと答えた。

突然、ナハール君は女奴隷の方を向いて云った。

「むさい姿を何時までもさらしておるな。勿々拘置所に失せい。見苦しい」

女奴隷はお詫びの言葉もそこそこに、おろおろしながら女監督に鎖を曳かれて姿を消した。

ナハール君はしばらくして執事と呼んだ。

「奴隷の補充はついておるか？」

「はい、とどこりなく」

と執事は恭々しく答えた。

「この前競売でお願い求めになった奴隷は二匹今夕着く予定でございますし、B機関に御注文の金髪の奴隷は三匹それと前後して着く予定になっております」

ナハール君は満足げにうなづいて。そして僕に向って云った。

「グレタ君と一緒に矯正所を夕方まで見物してくるかい？ それまでに見世物を用意させておくから」

「君は行かないの？」

僕は言葉の通じないグレタ医師との同行の不便を考えて云った。

「そうだなあ、執事に任せておけば全部とどこりなく準備してくれるんだから、散歩がてら一緒に出かけることにするか。そうして僕たちは、玄関までは女人馬、そしてそこから

後は、六人、いや六匹立ての馬車に乗って矯正所に向った。

ついでに書き添えておくが、この馬車は後ろ手に枷でとめられ、ビニールのパンティを穿かされた女奴隷が六人、それぞれ轡をかまされ、長い手綱に結びつけられていた。そして馬車から出ている太い棒がそれぞれ鎖で女奴隷の腰枷に連結されていた。

ナハール君が手綱をとり、上半身裸の女奴隷たちの背に鞭を振うと、かの女たとは一斉に駆けはじめた。ナハール君と僕、そしてグレタ医師の三人がゆったり座れるほど大きい馬なのに、それは意外なほど早く走った。

やがて広大な畠が見え、そこで男の奴隷たちが鞭に追われ、腰に吊るした太い鎖を鳴らしながら働いている姿が認められた。

彼らはナハール君の姿を認めると、遠くいる者のも近くににいる者も、皆監督にうながされて一斉に土や泥の中へ土下座した。

そんな中でナハール君は見向きもしないで女人馬を鞭打ち、馬車を走らせつづけた。

女人馬の背には汗が光り、肩は苦しげに喘ぎはじめていたが、ナハール君の鞭は容赦なく、鞭の赤い跡はその背に等しくしるしづけられていた。

「年に二度、あいつらを女奴隷とつがわしてやるんだよ」

やがてして矯正所の陰鬱な建物が山蔭からあらわれると、ナハール君は男の奴隷たちを顎でしゃくりながら云った。

「はらんだ奴隷は適当な休息をやるし、男の奴隷はそれをけものように待ちわびてるし子供は実に簡単に産まれてくるんだよ。そしてそれらの子供たちは保育施設に入れ、集団的に奴隷としての教育をおこなうのだよ。入れ墨と檻と枷と鎖と鞭に子の時から慣れた奴隷は、これこそ完璧な奴隷だよ。そういう奴隷はセピアと云って、競売でもずいぶん高い値がつくんだ。教育とかなんとか、つまらぬ手間が省けるからね。尤も子供の頃の教育にはずいぶん費用がかかるんだけど。」

矯正所の建物はみる間に近づいてきた。それは明らかに監獄の構えだった。高いコンクリートの塀、見張台、そして電流が通じているのであろう。碍子に支えられた鉄条網。やがて六匹曳きの馬車は、矯正所の巨大な鉄の門に到着した。

……… (未完)

或る集い

△ 架空女装座談会 V

和 葦 憂 子



以前K紙に於て、M・ゴムフェチシスト古川裕子さんも言われたことがあった。

私達は皆孤独なのだと、この事は女装愛好者についても、言えるのではないかと思う。たれ一人として同じ好みはない、大きく分け

て見たところで、和装、洋装、また多く分枝した趣向に偏執している。

私の女装について以前小文をK誌に載せていただいたが、何の反響も無さそうである。とにかく、なぜ私達は異性に変態すること

を願うのであろうか、男性である、でもそこに「物」(フェチッシュ)が加わると、たちまち女性と変態できる空想力を私達は持っている。さなぎが美しい蝶々になるような当然たる瞬間が来るのだ。

他人から見れば女とは見えない扮装で初めは十分満足だった。でも次から次へと完全な女を創り上げたい欲望がおこって来る。陶然たる快楽を求めて、：

自分のイメージの女を自身で演ずるナルシス的な喜びであらうか。同性に愛されたいためにするのであろうか、そこで演じられる女は世間風俗の習慣からだけであり、ホモセリシユアルには無意味ではなからうか。

分らないことが多すぎる。要は男性と生れた私達を女性として世人が見てくれないものかと夢想するのが我々だ。虫が良すぎることだ。ではもし、私が肉体的にも完全な女となれば、何と感じるだろう。女装することは当然であり、今、背広を私達が着るのと同じで何の感動もないだろう。我々は性の異なった二人を自分の中に共存さすことに喜びがあるのだろう。

多くの女装マニアと語り合いたいと思う。今、空想ではあるが一つの座談会をお目にか

けよう。そこでは私が自身考えている女装の観念をまとめて見たものである。たまたもし本当にこのような会を開こうと思われたら読者通信へ……

暫く秋の気配が感じられるようになってまいりました。これから化粧壞れの心配もなく十分に女装が楽しめます。ごつごつした体も美しいドレスが包み隠してくれます。というわけで初秋第一回的女装ブレイの会が、B氏の離れ家で開かれました。B氏は自身女装はされないけれど、女装男子の美しさに魅せられた方です。K氏でもSの座談会を開かれた様子、一度女装ファンの座談会を催したいと思っていたところ、ブレイ前の一刻を削いで下さいましたので、編集部S氏に司会役になっていただいて座談会をもった次第です。

出席者はN氏、四十才 日本舞踊家

K氏 二十九才 会社員

R氏 二十才 学生

N氏は古代紫のお召がよく映る和装の代表として、K氏は黒サテンのカクテルドレス、洋装マニアとして、R氏はまだ女装は初歩で男装である。司会役S氏は正統派サドだが、美女二人にはさまれては、この目つき、どう

やらお二人を縛り上げたそうに見えるようです。それほど今夜のお二人は美しいのです。

S「女装といっても種々雑多でしょうが、今夜は和装のNさん、洋装のKさん、それにまだ完全な女装はなさらないが、その願望はすこぶる大きいRさんと、会場を提供されたオプザーバー格のB氏と四名の方々です。さてNさん、いつごろから初められましたか」

N「はい、私の生まれました家と申しますのが芸者屋でございまして、もう三つ四つの時からなんとなく男の地味な服装よりもあした、あてやかなものに引かれておりました。また姉さんたちにお化粧してもらったり女装したりして遊んだ思い出が御座います。だから大きくなりましたも、女のようなと言われるようになりました。自分ではっきり女装というものを意識しはじめたのは十五・六の時だったでしょうか。」

S「では、Kさんは」

K「完全には九才頃でした。でも中学の時から家人の出払った時など、母のスカートを被ったり、そっとお化粧して、興奮を覚えて居りましたね」

R「私はまだ完全な女装はした事がないんです。でもハイティーンのころから、そんな事は

かりで頭が一ぱいで、下着なんか見るだけでぞくぞくしました。」

S「なるほど、皆さんは十代の中ごろには女装に対する願望は、もうはっきり芽ばえていたわけですね」

B「思春期と同じですよ。男女装期だな」

S「やはり、こういった性癖は、サドにしてもマゾにしても、割合早くから無意識であっても芽があるのだと思いますね。」

B「小児期には何らかの形で型成されているものだろう」

S「女にあこがれる場合、先天的な半陰陽であるといえるのは」

B「今日の場合は考えないほうがよい」

K「女装の趣味も人々によって大へん異なりますね、私なんか腰巻なんか興味ないけれど、Nさんのように和装の人はたまらないんですよ。生活してきた環境の影響も大きいでしょうね。映画なんかで美しい女を見て、あんなになりたいと考えて女優の真似をしたり」

S「それじゃ、子供が西部劇ごっこをするようなものですか」

N「だれでも、そうなるわけではない、女性としての素質があるからです」

B「肉体的には女性的な人が女装マニアにな

るとはかぎらない。Rさんのように男以上の男もいる」

N「遺伝か先天的なものじゃない」

B「そうは言いきれないでしょう」

S「女装していると、次第に女性化して来ると言われますが、私には信じられないが、いかがです」

N「それは本当です。私なんか乳ぶさまで張ってくる感じですよ」

S「それはあなたの偏執じゃないかなあ」

K「実際はどうかしらないけれど、心なしかそんな感じがします。私達は一日中、女になって居ないし社会生活というものがありますのでね。でも女装した自分を鏡に映して見ると本当に別の女の人の様に見えて」

N「確かに別の人が居るといふ気になります。

男でいる時の自分が仮の自分で、この時に、本当の自分がとりもどせたような感じです」

B「ナルシスの段階では別の自分を愛するところで満足するが、しばらくすると、人前に出たいとか、パートナーが欲しいとか、あつましといええば悪いけれど……」

N「たしかに、そう」

R「でも、そこまで行くまで色々女装するのが大変ですね……。元々の男の服のほかに女

の服にね。買うのも気が引けるし」

S「そうですね、女装ファンの悩みで一番多いのは、そのことでしょうね。衣服の入手方法などはどうされますか」

B「読者通信などにも、よく悩みが出ていますね」

K「私もはじめ女のを買いに行くのがはずかしくて、特に買った品物を男の自分が付けるのだと思うと、ほんとに屈辱感で言いますか、ドキドキしてね。でもでも欲しいと思う気持ちが大きいものだから」

N「この世界の人は、女性的な内攻的な人が多いものだから」

R「罪悪感がつきまとうのです」

N「自分のお金で売っているものを買うのだから、何が悪いのかしら」

K「悪いと思う心はだれでも最初は持っています。でも、それがだんだん変わってくるの、デパートなんかで、このコルセット下さいていたり、サイズや型なんか指定するのがね。女の店員さんの前でね、それが快感に変わるのね」

R「私なんか出来そうにない」

N「自分だけで悩むことはない。貴方が思うほど人は思っちゃいない」

B「外国なんかのように通信販売があれば良いね。理解ある婦人を知り合に持って、その人にたのめばいい」

S「外に出て人に見られたいと思われるんでしょう」

M「ええ」

S「それには女と見えるまで技巧的に大変でしょう、メイキャップとか着付とか」

N「でもだんだん自分が女になっていくという時ね、これも女装の楽しみの一つなの」

R「私なんか外出なんか夢みたいな話です」

B「NさんKさんも水も滴ると言えば月並な表現だが、ほんとにすばらしい。だれでも女装に恵まれていないと思う。R君のような人が多いんじゃないか、体格的にも家庭的にもね。お二人は幸せですよ」

S「技巧など話して下さいませんか」

K「私は本当に骨ばった体でね、だから下着なんか大切です」

B「下着はフェチズムの対象でもあるしね。おしりや胸のふくらみから話しては」

N「私は素はだに歌舞伎の腰ぶとんを付けてお腰まきです。乳房はブラジャーにつめ物をいたします」

K「私はコルセットの下にサイドとヒップパ

ットこれは市販されています。その上からジッパーで締めるのですが、おなかが出ますので、コルセットは本格的な前布のある方が良いと思います」

N「腰紐でウエストを締めるとたまらない」

S「それはマゾヒストの感覚ですね」

B「たしかに女装マニアはマゾの傾向がある。縛られたがる人が居ますね」

S「純粹な男性マゾで女装を好まない人でもドミナから女装を強いられると言うシチュエーションがありますね、今日の問題ではないけれど」

K「それからストッキングに足を包まれますんなりと女の足のようになりますね」

S「Nさんは白足袋に関心ありますか」

N「和装マニアの方はやはり、お腰、足袋には大なり小なりフェッチじゃない」

B「愛するコルセットや白足袋にうんと自分を締めつけられる快感じゃないかな」

S「フェチズムとマゾヒズムですね」

B「フェチシストの進化した、と、これは変な表現だが、総合フェチシズムが女装マニアと言えらると思う。今思い付いたが世の男性は女性に対しフェチッシュな心で対すると考えて良いではありませんか、女装マニアは女自

体より、その表面的なものにフェチッシュする。しかも自分にもって来る」

K「ナルシスですね、私も街で美しい人を見ても、あのひと一しょになるより、あの人になつてみたいと願いますね。あんな服装のできる、あの人がうらやましいと感ずります」

S「自分で女を表現される次の喜びはやはり化粧でしょうね」

B「男の顔は派手だし、骨の具合なんかも、異なっていて、なにしろ露出した部分だから大変だ」

N「日本髪の時なんか、舞台のような派手な化粧をしますが、普通は、私ほんとに女性的なものでたすかります。女の人と同じです」

K「Nさんのような良いのですが、一皮マブタの上に小さな目でしょう。顔が大きいので大変です。だからアイシャドウやつけまつげの手をかりますが、プロの女性のようになりやすいです。男の皮膚はどうしても荒っぽいので、パンケーキのような白粉がよいでしょうね。でもつくづく女性が良いと思います

ね。あるていど人工的に自分の顔を直せますからね。女装でも男前の人が美しくなるとお思いでしょうが、どうしてどうして、だから三枚目の私でも美女に化けられるのです。そ

りやNさんは男前ですがね」

S「さて外出ですが」

K「人が女だと思ってくれたと考えるとたまりません。最初は暗いところばかり歩いていますが、だんだんと横着になって。男の人がおもしろいいたずらなんかして来ますよ」

S「いずれ体験談はK誌に発表して下さるとして、次にうつりましょう。将来の進路なんか考えていられますか」

N「私は今のままで満足ですが、身体の方も完全に女となれたらなあと思います。そして夫と呼べる人が得られたらとねえ」

S「ホモセクシュアルな感情と言って良いですか」

N「はい」

S「Kさんは」

K「私は同性よりやはり女性に関心があります。妻が男装マニアだったら申し分ありませんがねえ」

S「お二人とも倒錯した生活を望んでいられると思いますが」

B「お二人とも理想だからねえ、それからホモの感情というものは厳密には女装と切り離して考えた方がよい。女装は方便だからね」
R「私、本で読んだのですけれどニューメキ

シコのインデヤンに宗教的儀式に女装男子を作るそうですが、社会的にみとめられて女装生活が出来ればと思いますね」

B「習慣というものが道徳になるのが世の習いです。或る国で悪徳は他の国で美徳に変わる事だってありうる」

R「でも今の地上には、私共の天国は無さそうですね。哀れでしかたがない」

N「社会になんの害もない私達だから、それでいいと思いますよ」

B「悪い意味に人間は人と異なるということに孤立感があるものだ」

K「でも一人一人の女装マニヤが、じっと悩んで毎日を送っている、そして退けない性だと思うと、少しでも満足な生き方が出きないものかと思ひます」

B「種の保存を考える生物学的な考えや宗教的な考えは、確かにあなたからはずれて来るが、今、男女の関係もそれになつたものばかりだろうかと思へば、そうでない」
S「習慣を尊重する社会では、しかたがないですね。来たるべき両性時代の先駆者が女装マニヤと考えられたらいかがですか、いやいや、ひやかして言ったわけじゃないんです」
K「筋肉労働を要としない男がスカートをは

いたとしても、背の低い人がハイヒールをはいても、レースのブラウスを付けても、変じやない、美しい女装の男子なら女性とても嫌悪はいだかないと思います。今の男性の細いスラックスにしても、私達と同類のゲイボーイたちのはじめたんじやないですか、それが今男のファッションの主流なんです。良いものは取り入れて行かれるんです。初めは勇気が要りますがね。女装にしても何人か連れだつてなら街を大手をふって行けるんじゃないかと思ひます」

S「さて時間もあまりないようですが、女装愛好者はどういど心がけが必要でしょう」

N「歌舞伎の女形は女になることを、だれ一人変な目で見ませんよ、社会的な地位もあります」

B「社会的にみとめられることですがね、じや皆女形になりますか」(笑)

K「私はまずグロテスクな女装を無くす事だと思ひます、無暗に女に近づく事ばかり考えて、他人が見れば変な姿の時があるんじゃないですか、私なんかも鏡に映る女の姿にボーとしてしまつて冷静に見られないと思つて、写真に写して置きます。大げさですが、そのために先年暗室を作つたのですよ。そして写

真を第三者に見せて女だと思つたら良いと考えるんです」

R「だれが見ても、美しいと感じさせる事ですね」

B「ジイドが『コリドン』の中で可憐な女装男子を見れば男は皆夢中になるにきまつてゐるってね。それから、今の女性の美とは結局化粧とか服装といった人工的なものであるんだとね。教養を持った男子が女装して十分美しければ、それはもう女以上の女ですよ」

S「宇宙旅行の時代に入つて来かけているんだからね、人間孵化される時代になるかもしれませぬ。そうなれば新女性として女装男子の社会的地位も出て来るかもしれませぬ」
R「女らしいとか女は美しくとか、あれは考へれば真理ではありませんね」

B「女は一がいには言えないが、古代から美しく装つて来た、それは男性を魅するためと言へるが、また男がそうさせたとも言へる。男には労働とか戦いと言うものがあつたのだからね、動物は皆雄が美しいんですね。男も働かなければ美しさを求めていたかも知れないんだ。でも文化の進んだ結果、女は社会的地位を求めて来たんだね。今まで封建的な男性の地位をね、だから男性的な女性が生れて

来るんです。反対に男は家庭的になる、女性的になるんだ。それが現在だな。将来はまだ性が近づくかもしれない。これらの事は女装マニヤは直接ではないが大いに関心を持っていい。」

S「古代にも女装願望というものはあったでしょうね」

B「私もそれをしらべているんだが、有りうることだ。フェティッシュと言うものは、今の文化史的な問題外の事だからね」

K「いろいろお話を聞きましたが、私達はこの世に生きたとしても、やはり女になりたいと言ったと思います」

N「男であるからこそ、女になるのが楽しい

んですね」

S「いろいろと、お話ありがとうございました。座談会は、これをもって終りいたします。Nさん、ぜひ私のおなわをちょうだいしていただけますか」

N「はい喜んで」

(終)

限定版 特別号 案内

第一弾、第二弾、第三弾、第四弾と引続いて刊行された本誌の限定版特別号は、その豪華なモデル陣の美女を縦横に駆使して、素晴らしい緊縛ポーズを展開しております。第二弾はいち早く売切れとなりましたが、第一弾、第三弾、第四弾も今や残り少なくなりました。縛られた美女ばかりの艶妖ポーズと四馬孝画の緊縛画集とによって、どうか痺れるような責めの醍醐味をお楽しみ下さい。きつとマニヤの皆さまの琴線に触れ、十二分の御満足を与えることでしよう。

第一弾

緊縛フォト・アラベスク

略号「あらべ」 定価五〇〇円

本誌の黄金時代のモデル嬢の素晴らしい緊縛姿ばかりを集めた匂うばかりにあでやかにも美しいフォト集です。全巻二十六項目、七十七葉に亘り、文字通り表紙から裏表紙のハシに至るまで、すべて緊縛女体のむせかえるような、むんむんするムードで埋めました。まだお求めにならないマニヤの方は、是非コレクションの一端にお加えになって、その妖美のエキセントリックをお楽しみ下さい。

第三弾

緊縛写真グラフィック集

略号「グラフィ」 定価五〇〇円

絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子、等の本誌で育てたベテラン・モデル嬢の活躍による最も優秀にして鮮明、且つ魅力的な緊縛艶姿ばかり百十五態を集録した「グラフィ」です。誌面いっぱいに所狭しと盛り上げる大型グラフィの迫力は、きつと皆さまを、この妖しい異常美の縛りムードの中へと誘い込むことでしょう。女体緊縛マニヤの皆さまに自信を以ておすすめ出来るグラフィヤ・フォト集です。

第四弾

緊縛フォトと緊縛画帳

略号「別特」 定価五〇〇円

三十六葉に及ぶ四馬孝描く粒選りの傑作貴画集のケンランたる陳列に加えて、本誌の発掘した新人モデルである、四方清美、花本京子、柳初子、山路ミヨ子、館典子、熱海容子、前本妙子、浜千代子、大井小夜子、加茂良子等の新鮮な悦虐姿態と加賀利江子、藤田節子、萩千恵子、桜井葉子、絹川文代、大塚啓子、須川令子などの代表的ポーズによって味をつけました。どうぞ御一見下さるようおすすめします。

【懸賞応募入選作品】

画^が鋌^{びよう}の部^へ屋^や

朴 太 仲

(一) 火 焙 り

洋子は、昨日、課長室へ行った時、課長の上野が、

「明日は留守にしないようにしてくれね。」

と小さな声が云ったのを、朝の寝床の中で思い出して居た。このアパートは、勤め人が多いせいか、日曜日の朝は、例によって、皆んな朝寝をして居るらしく、人形棚の上の置時計が、もう九時を差して居るのに、廊下を通る足音もまだ殆んど聞えない。閉め切った雨戸の隙間から、夏の太陽がしのび込んで来

て居るのを感じ乍ら、洋子は、またもう一度布団の中で、海老のように体を丸めて、柔かい膝小僧を抱いて見た。赤い花模様をついたネルのパジャマは、いつの間にか、一番下のボタンがはずれてしまったらしく、じかに、太股が、お腹にさわって、我乍ら不思議な感触である。

洋子が、福岡にある大学を出たのは、もう二年程前だったが、丁度その頃、兄に嫁が来たばかりだったので、都城の故郷へ帰って、就職口を見つけるのも何となく臆却で、友達と一緒に上京して来たのだった。そして、幸

い現在の会社に仕事が見つかって、それから少時は、このアパートで呑気な、女の一人暮らしが続いた。別に親の面倒を見るわけではなく、また到って放任主義な洋子の両親は、間違ひさえなければ、洋子自身が青春を謳歌するのには、兎や角云う筋合はないと、半年に一遍位両親のうちのどちらかが、上京して来て、二、三日泊って行く位で、後は、すべて解放された洋子の世界だった。

収入も年齢の割に少い方ではないし、四季折々の洋服を揃えて、後は、映画を見て、お茶をのんで、それでも多少の余裕が出来た。

だから、別に嫁入道具と云うわけでもないがたまには、洋服ダンスを買って見たり、レコードプレーヤーを探して来たりした。しかし、それらも一段落つくと、会社の友達を語らって、一泊か、二泊位の旅行を嬉しむようになった。始めは、熱海だの箱根だのと、きまり切った所へ行つて居たが、そのうち、あまり人に知られて居ない処を探すようになった。そして、福島や山形の方にまで、足を伸ばすようになった。ところが、洋子達、若い社員達とは別に、課長、係長のクラスにも、同じような旅行のグループがあつて、そして洋子の課の会計課長の上野も、その常連の人だと云うことをいつとはなく知ることになった。勿論、上野も、洋子の旅行好きのことを薄々どこかで聞いたらしく、用事があつて、課長室へ行った時など、煙草を吸つて居る上野が、ポツリポツリと旅の話などすることもあつた。

上野は、もう、四十を二つ三つ、過ぎて居て、髪には、そろそろ白い毛も見え出して居たが、若い頃会社の柔道の選手だったとかで、背の低い割には、がっしりした体格だった。でも、額にはいつも油がういて居るような体質は、洋子は好感が持てなかつたし、鼻

が、横にヒジを張つて居るのも不快な感じを与えた。

その上野が、或る日、それは丁度、七月の始め頃だったが、

「H温泉へ行つて見ませんか。」

と誘つた。洋子は、最初余りいい返事をしなかつたが、一緒に机を並べて居る咲子も、行くと云うことだったし、第一、汽車を捨ててから、二時間もバスにゆられなければ行けない山の中だと云うことが、洋子の気持を動かした。

「私も、行つて見ようかしら。」

昼休みの屋上で、国電の突走るのを遠くに見ながら、洋子は咲子につぶやいた。

「本当に行つてくれる。実は、是非あなたにも行つて貰いたいって、山田さんも云つてたのよ。」

と云つて、咲子は喜んだ。しかし、その時の咲子の喜び方は、単に同行の友達が一人増えたと云うには、少し大仰過ぎたと、後になつて、洋子は思ったが、でもその時は、咲子が、自分が一緒に行くと云つたことを、こんなにも喜んでくれるかと、乙女の感傷をちょっと刺激しただけだった。

山田と云うのは、咲子のもう三年來のフイ

アンセで、そして、上野のお気に入り部下でもあつた。

当日、洋子が、予定の時間に駅に行つて見ると、咲子達は、もう発車ホームに入つて来て居た汽車に乗り込んで居て窓から半身を乗り出して、こつちこつちと手を振つて居た。

洋子は、自分が一番遅く来たのだとわかると皆の視線が、何となく面映ゆく、

「遅くなりました。」

と、うつむいたままであやまつた。

「いやいや僕達の方が早過ぎたのだよ。」

と云つて、一同は声を揃えて笑つたが、洋子は、一人取り残されたような気持で、そつとグリーンのポストンバッグを膝の上にかかえて、取つて置いてくれた座席に坐つた。

しかし、汽車が東京を離れるにつれて、洋子の気持も、皆の中に溶け込んで行つた。そして、それにも増して、あの軽快な汽車の震動が、洋子をいやが上にも、旅行気分浸らせて行つた。そして、それから五時間近い汽車の中と、二時間もかかるバスの中での解放されたような気分は、何度味つても味わい切れない、旅の数時間だったが、しかし、此処では、それを書くのはよそう。ただ、一行は洋子と咲子と、上野、山田、それに、庶務課

の邦子と木下の男女、三人ずつの六人だったと云うことだけ記して置こう。

洋子達が、目ざすH温泉へついたのは、もうそろそろ三時に近かったが、成程、山の中で、彼等が泊った温泉宿以外は、附近に人家は一軒も見えなかった。そして、宿も、ここらは、紅葉と、スキーのシーズンがかき入れで、その他の季節は、比較的空いて居るとかで、隣の部屋もその隣の部屋も、客は居ない模様だった。

「夕食まで、まだ大部時間があるから、附近を散歩してくるか。」

誰からともなくそう提案されて、一同は、宿の下駄を借りて外へ出た。山田や咲子は勿論、邦子も木下も若いので、下駄をガラゴロ云わせてはしやいで居るのが、別に不似合ではなかったが、もう中年の上野が、ひぎずりそうに長い浴衣を着て、外に立った姿は、どこか、猿芝居の猿のようで、可笑しかった。でも、近くに天然の池があつて、その池の水に自分の姿を映して見た洋子は、周囲に人の居ることも忘れて、水の色と中和して、青白くなった自分の顔を、女の精のように美しいと思つた。そつと頬に触れて見たいような、かすかな興奮さえ感じた。そして、この汚れ

のない自分に、手をそつと差し出す男性が、今、眼の前に現われたら、どんなに素敵だろうと、他愛なく空想して見た。

「こりゃ、何と云う花だろう。矢張り高山植物だろうか。」

山田の足許に、小さな紫の花が一輪咲いて居た。

「およしなさいよ。取っちゃ駄目よ。折角、そうやって咲いて居るんだから、そのままに置いて置きなさいよ。」

「僕はどうも、山の中で花を見ると、そつと折って見たくなるんだ。」

「折ったって、すぐしぼんじゃうわよ。それより、そのままにして遠くから眺めて居る方が、どんなにいいか、わからないわよ。」

「そうかなあ。しかし、僕は、やっぱり、手に取って見たいよ。」

そして、そんな会話を、二、三度往復して居たが、紫の花は、結局、そのままに、そつとして置かれた。洋子は、別にその会話に仲間入りしたわけではなかったが、でも、彼女も、やはり折らないで欲しいと、ひそかに希望して居たので、自分の願いがかなったことがうれしかった。そして、この旅行は、生涯に取って忘れられない嬉しい思い出になるだ

ろうと、思った。

山は、本当に緑一色だった。しかも、どの葉もどの葉も水に濡れたばかりのような顔を、して居て、生々と洋子を見て居た。洋子に大きく両手をひろげて、その緑の中に一人で飛び込んで行きたい誘惑を感じた。素足の指先が、夏だと云うのに、少しひんやりするようだったが、でも、それも、何か、清々しい緊張感になって、若い血をたぎらせることが出来た。そして、いつの間にか、咲子は山田と、また邦子は木下と、山鳥の声を尋ねて、どこかに消えてしまつて居るのに気がついた。上野も、やはり一人どこかに姿を消してしまつて居るらしかった。でも、洋子は、この山の中で、一人になつてしまつて居ることが、この上もなく嬉しかった。そこで、そつと、とある岩の上に腰かけて、甘い空想にふけろうとすると、岩にかすかな苔が生えて居たらしく、木綿の浴衣を通して、お尻にひんやりと冷いものを感じた。

皆が宿へ戻つて来たのは、長い夏の日も、やつと西にかくれ始めて、太陽が広いベランダに紅を投げかける頃になつてからだった。咲子や邦子と白い温泉の湯に、思い切り浸つて、肢体を存分にひろげたことは云うまでも

ない。そして、幸福だと思った。

夕食には、小さな山の魚が、三匹ついて居たが、他の山の宿には不似合な、豪華なお菜より、気に入った。

「このお魚、なんて云うお魚かしら。」

洋子は、はしやぎ乍ら聞いて見た。女中は口の中で、もぐもぐ答えたが、よく聞き取れなかった。それに、方言もひどいので、仮に聞き取れたとしても、はっきりはわからなかったかも知れない。

「あの池で取れたの。」

と、先程の池のことを思い出して聞いた。しかし、これも、女中はただニヤニヤ笑って居るだけで、確かな答えは得られなかった。

男達は、もう先刻から盛んに盃のやりとりをやって居る。殊に上野は酒が好きらしく、普段から少し黒い顔を、益々赤黒くして呑んで居た。咲子や邦子も、男達に差されると、別に遠慮する様子もなく、ムシヤムシヤ箸を動かして、その合間に盃をあけて居た。洋子も、そっと二杯ほど盃を乾して、幾らか体が上気して来るのを感じた。

しかし、それから僅かの後に、思わぬおとし穴が口を聞いて待って居るとは、洋子は想像もして居なかった。そして、それ程、同行

の咲子や邦子や、また山田や木下や、そして上野を、自分と同じように、清く美しい人間だと思つて居たのだった。

やがて、男達の眼が、酒に濁つてどろんとして来る頃、女中達の手で、食卓は綺麗に片づけられた。洋子は、ベランダに出て少し酔った顔を、涼しい山の風に吹かせて居た。細い月が、もう中天にかかつて、その淡い光で山の尾根の線だけが、ボウツと浮き出して居た。洋子は、ボンヤリと籐椅子に腰かけて居た。でも、まだ床につくのは、勿体ないような晩だと云うことだけは、体のどこかでささやいて居た。

「おい、そろそろ始めるか。」

かねて打合わせがしてあったらしく、そう木下が云うと、誰も何も云わないうちに、荷物の中から、麻雀牌を取り出して来た。

「よし、負かしてやるかな。」

咲子が云った。邦子も、私達は酔つて居ないんだから、男共にひけは取らないと云う氣勢を示したが、どうも、足許は大部ふらついて居る様子だった。

「洋子さんも、やるんでしょう。」

山田が聞いた。それをひったくって、咲子が、

「やるわよ。此の間なんか、私がこてんこてんにやられたんだから、今夜は、うんと仕返しをしなくちゃ」

と意気ばつて見せた。そう云えば、半年程前に、A湖へ行った時、確か洋子が馬鹿にツイたことを思い出した。

「それじゃ、幾ら賭けるんだい。」

「千点で、五十は相場だろうが、今夜は、特別に百で行くか。」

「そりゃ、大勝負だなあ。」

「けど、お金じゃ、つまらないな。：折角、こんな山の中へ来たんだもの、何か思い出になるような、面白いものを賭けないか。」

木下は、そう云つてニヤリと山田の顔を見た。それから、上野の方にも、それとなく愛想笑いを送った。上野は、どうでもいいような、ムツとした顔をして居た。しかし、それは、ボーカー・フェイスだったのかも知れない。いや、確かに、ボーカー・フェイスだったのだ。それが証拠に、この仕組みれた麻雀には、上野も、明らかに、参画して居た筈なのだから。

「一体何を賭けるの。」

邦子が、ニヤニヤして聞いた。咲子も薄笑いを浮べて居た。恐らく彼女等も、前々から、

聞いて居た。そして、やがて、これから始められる芝居の成行を想像して、お腹の中で、舌を出して居たのかも知れない。しかし、洋子は、何も知らずに、女中から借りた毛布を、叮嚀に卓子の上に開けて居た。

「負けた人は、罰に、皆にお仕置きして貰うのさ。」

「へえ、例えば……。」

「シッペを一つづつ戴いて廻るとか、三べん廻って、両手をついてお辞儀をするとか。」

「何んだ、そんなことか。そんなことわけないわ。」

洋子も、座興に両手をついてお辞儀をする位、別にかまわないと思った。

「じゃ、負けたら皆にあやまればいいのね。」

「いやいや、あやまればいいか、どうかは、まだわからないんだ。——お辞儀は例えばの話さ。」

「すると、どうするの。」

「今、皆に紙をくばるからさ。それに各々負けた人に、どんな罰を加えるかを書き込むんだ。そして、その中の一枚を負けた人は引くわけだ。そして、その紙に書いてある罰を、その人は受けるんだ。」

「もし、自分が書いたのを、自分が引いたら

どうなるの？」

「その時は、仕方がないさ。自分が書いた通りにするのさ。自縄自縛って訳さ。だから、余りひどいことは書けないし、そうかと云って、お手柔かなこと書いて置くと、もしそれを相手が引くと、その相手は、大いに得をするって寸法だ。そこに、このゲームの面白さがあるのさ。……じゃ、紙を配るからね。」

木下は、これがかねて用意がしてあったらしく、便箋を出して、器用に六つに切って、各自に渡した。洋子の手にも、その小さな紙片が一枚廻って来た。山の宿の電灯は、薄暗い。邦子は書き込み乍ら、自分の考え出した案に、ちよつとした滑稽味を覚えたらしく、鉛筆のお尻を口にくわえて、クツクツと笑った。洋子は、そつと、

「歌をうたう。」

と書いた。そして、もし咲子か邦子が負けて、このカードを引いたら、きっと女学校時代に覚えた歌を、歌うに違いないと思った。

やがて、麻雀は開始された。四人でやるものを生憎く六人居るのだから、結局、始めは二人抜けなければならなかったが、籤で洋子と上野が抜けることになった。そして、半荘終わった処で、勝った二人が洋子と上野の二人

と入れかわり、そして、後の半荘で負けたものが、罰を受けると云う約束が出来た。

「どんなカードを引いても、逃げちゃずるいぞ。」

と山田が念を押した。

「そんな卑怯なことしないわよね。」

と咲子が、洋子に同意を求めた。邦子が、

「もし逃げ出したりしたら、皆で捕まえちゃうのよ。」

と云った。

最初の半荘は、すらすらと終って、僅かな差で、咲子と邦子が勝って、洋子と上野とが入れ代った。洋子は、出来たら、咲子と邦子のどちらか一人でも残ってくれればいいと思ったが、現実には、男三人の中に、一人で混じるとなると、益々、その感を深くした。そして、そろそろ熱を帯び出した男の体臭が、急にありありと感じられて来た。握って居る牌にも、男の油が、乗り移って居るような、戦慄を感じた。

「碰」

山田が熱い息を吹きかけた。木下も眼が笑って居るようだった。上野だけが、洋子の対面で、じつと皆の手のうちを読んで居るように静かだった。しかし、幸いに始めの一廻り

は大過なく過ぎた。ざっと勘定して見たら、いくらか浮いて居るようでもあった。この分なら、後の一廻りを、大急ぎで逃げ込めばいいのだと、腹を決めた。だが、その最後の一回りに入ると、急にツキが代ったらしく、軽

くあがろう、軽くあがろうと思って居るのに聴牌まで持って行って、どうにもあがることが出来なかった。そして、洋子の応援をするんだと云って、背後に廻った、咲子と邦子のはしゃぐのだけが、実に小うるさく、気をい

らだたせた。

「ねえ、悪いけど、あなた達、私の背後に居ないで。」

とうとう洋子は、そう云った。けれど、「何云ってるのよ。応援団に対して失礼だよ。」

と云っただけで、

二人は、動こうともしなかった。それも実は、彼等の策畧だったのだろう。洋子の手を見ては、何かの方法で、男達は氣脈を通じて居たに違いない。しかし、最後の一局になるまで、別に大きくあがりもしなかったが、振り込みもしなかった。だから、この一局を無事に通過すれば、何事もなく終って居たのだろうが、麻雀の神は、洋子に幸いしなかった。い



や、あの邦子の一言がなければ、昼間、山の中の池に、自分を映した洋子は、そのままの洋子で、この旅行を終って居たことだろう。

その最後の一局の洋子の手は、決していい手ではなかった。ただ、前にも書いたように負けさえしなければいいのだと思って居た洋子は、この時も、簡単にあがることだけを考へて居た。そして、断念なら、どうにかあがれそんな気配だった。しかし、自摸が悪く、もたもたして居るうちに、一萬が後になるまで残ってしまったのだった。洋子は、相手の手を見た、山田は、索子の混一色らしいし、木下は筒子らしかったので、この二人は、一萬とはまず縁がないとわかったが、対面の上野が切る牌は、この時に限って、実に乱雑で握みようがなかった。そして、洋子に待ちに待った七萬を嵌張自摸して、正に一萬を切れば聴牌と云う場面がやって来た。上野は、じつと洋子の顔を見て居た。それは、聴牌して居るようでもあり、聴牌して居ないようでもあった。邦子が云った。

「大丈夫よ。もう三枚出て居るじゃないの。」
これが誘いの一言だったのだ。成程、木下の前に二枚、山田の前に一枚出て居た。しかし、上野は、蛇のように、じつと、この最後

の一枚を待つて居たのだった。洋子は、大きく深呼吸すると、

「一萬」

と声を掛けて、牌を置いた。

「それだ。」

上野が、ボツツと云った。上野の手は、国士無双だった。洋子は、眼をつぶった。その洋子を取りまいて、喊声が上がった。

「役満貫。役満貫。」

「逆転だ。」

「洋子さんの、一人負けだぞ。」

そして、その興奮は当分の間、静かな宿の部屋の中を駆け廻った。洋子は、急にどうにもならないやる瀬なさを感じた。一人ぼっち一人ぼっちにされてしまつて、その一人ぼっちの洋子を取り巻いて、皆が興奮して居た。

同性の咲子も邦子も、洋子の同情者ではなかった。寧ろ、湯上りに薄化粧した頬を染めて、男達と一緒に洋子の項を眺め乍ら笑つて居た。

「さあ、洋子さんの負けよ。」

「まさか、洋子さんが負けるとは思わなかったね。」

「いえ、私は、何だが、そんな予感がして居たの。」

犠牲の小羊を弄ぶように、彼女等は、声高にしゃべつて居た。そして、その喧噪がやがて納まると、細い指で牌を片付けかけて居た洋子の前に、先程の紙片が、バラツと六枚出された。それは、小さく折り畳んであつて、どれが、誰が書いたのかわからなかったが、洋子は、ひそかに自分が書いたカードを引けばいいと思った。

「鬼が出るか、蛇が出るか。娛しみだなあ。」
木下が云った。

「遠慮なく、好きなものを取つて下さい。きつと面白いのが出て来ますよ。」

小さく畳んだカードは、どれがどれだか見きわめがつかなかった。でも、洋子は、自分が書いたカードをひけば、歌を一つ歌えはいのだと思った。そして、*「埴生の宿」*を歌おうと思った。宿の女中達も、もう客が少いので、寝てしまったのか、廊下を通るスリッパの音も途絶えてから、大部になる。洋子は観念して、一番はしのカードを取った。そして、膝の上で開いて見た。

「火焙り」

そのカードには、下手な字で、こう書いてあつた。洋子には、何のことかわからなかった。そこで黙つて、そのカードを咲子の前に

差し出した。

「わあ、火焙りだ。」

咲子は、喊声を上げた。そして、興奮のあまり、邦子の腕を握んで、二、三度振った。

男達は、各々天井を見たり、畳を見たりして居た。でも、それが、いかに惨酷な罰であるかは、まだ、洋子には想像もつかなかった。

そして、咲子に、

「私、何をしたらいいの。」

と聞いた。

「先ず、裸になるのよ。」

咲子は、事もなげに云った。

「裸に？」

洋子は、先刻、咲子や邦子と、温泉につかった時のことを思い出した。でも、此処は風呂場ではなかった。それに、山田や、木下や上野も居る。

「そんな、そんなこと、私、いやよ。」

「駄目よ。約束じゃないの。負けたら仕方がないわよ。」

「あんた、負けたんじゃないの。もし、私達が負けたら、私達が火焙りになる処だったのよ。いまさら、いやだなんて、ずるいわよ。」

「いさぎよく、脱ぎなさい。——大丈夫、今夜のことは、今夜だけのことで、東京へ帰っ

てから、誰にも話しやしないから。」

洋子は、固く坐ったまま動かなかった。そして、事の重大さに驚いてしまった。しかも皆が始めから仕組んで居たのだと云うことを、薄々乍ら感じ取ると、そんな連中にこのこついて来た自分が口惜しかった。

「よし、一人で着物が脱げない赤ちゃんなら、仕方がないわ。面倒だけど、私達が脱がしてあげる。」

咲子と邦子が立って来た。そして、細い帯に手を掛け始めた。洋子は、胸の処に腕を組んで、いやいやをした。そして、女三人の組み合わせは、少時続いた。邦子の厚い胸が、洋子の背中にびったりくっついて、背後から羽交い締めにしてしまうとさえした。でも、女二人の力では、いくら洋子が可弱くても、自由に出来なかった。やがて、お互の汗ばんだ肌がハアハアと波立つのを感じ始めた。そして、とうとう二人は、あきらめて手をはなした。

だが、前髪が、汗が額にこびりついた邦子は立ち上ると、こう宣言した。

「洋子さん、あんたは、私達の手では、どうにもならない事がわかったわ。だから、今度は、男の人達の手を借りるわよ。いいこと。」

洋子は、ハッとした。山田と木下は、汽車

の中で吞んで居たウイスキーが、まだ残って居たらしく、チビリチビリとなめ乍ら、洋子達の格闘を眺めて居た。洋子は、邦子の言葉を聞くと、男達に、自分の肌に触って貰いたくないと思った。そして、もし男達の手が、出て来たら、ひとたまりもないと云うことも考えた。両手を顔にあてて泣いた。だが、いくら泣いても、近処の部屋には、誰も居ないらしく、洋子を救いに来てくれるものはなかった。

「おとなしくするのだよ」

泣き疲れた洋子を、抱きかかえるようにして邦子が立たした。咲子が、簡単に帯を取った。だらっと前がはだけた。ひやっと前肌に風がしみた。そして、もう人形のように抵抗しなくなった洋子の肩から、浴衣は、ずり取られてしまった。夏のことなので、肌着は何も着て居なかった。乳バンドさえ、風呂から出ると、みだれ籠に投げ込まれたままになって居た。夜の黒い山肌を背景に、白い洋子の肉体は、塑像のように置かれた。そして、桃色のパンティだけが、最後の抵抗を示すかのように、キッチリと腰について居た。

「さあ、お仕置台は、どこにしますかな。」

邦子が、出っ歯の口で云った。

「私、その床柱がいいと思うんだけど。」

洋子は、涙でかすんだ眼に、ボンヤリ男達の中の誰かが、横になって、腕枕をし乍ら比方を見て居るのを認めた。しかし、誰の口からも、もうこんな悪戯は、止めようと云う声は聞えなかった。

「ちよっと、その手拭取って頂戴」

ベランダの手すりにかけて、干してあった生かわきの手拭が、冷く、洋子の腕にからまった。以前、七才位の男の子が、親に叱られて、柿の木に縛られて居るのを、見たことがあったが、果して、自分が縛られると云うことは、どんな気持なのか知らなかった。二本の腕を前で、十字に括られると、その余ったはしを取られて、洋子は引き立てられた。

「歩いて。」

いつの間に持ったのか、団扇の柄で、咲子は、洋子のお尻を小突いた。洋子は、もう半分気を失ったようになって、部屋の中央を横切った。

「この卓の上に乗って頂戴。」

先程まで麻雀に使って居た卓子が、床柱の前に持って来られていた。しかし、それは、いざ、その上に乗ろうとすると、かなりの高さがあった。洋子は逡巡した。すると団扇の

柄が、グリグリとお尻を突き上げた。洋子は泣きじやくり乍ら、それでも、なるだけ股が開かないようにして、卓子に片足をかけた。

「段々、云う事を聞くようになったわね。すぐ終るんだから、あんまり世話をやかせないことよ。」

洋子は卓子の上に立つと殊更に皆の視線が下からチカチカと射始めたのを覚えた。もう今にもくず折れてしまいそうだった。

「さあ、手をあげて。」

邦子が命令した。咲子が、手拭のはしを、ぐいっと上に引ばった。くくられたままの腕でかばって居た、洋子の白い肌は、腕を持ち上げられるにつれて、ピンと張りつめ始めた。そして、乳首が、キュンと固くなった。

手拭は、床柱の上の方に空いて居る穴に通されて、思い切り、グイッと引っぱられて、固定された。手首に、手拭が喰い込んだ。そして、その痛さに殆んど爪先き立つようにして、洋子は立った。もう完全に洋子は、罰を受ける人間になってしまった。しかし、火焙りと云うことが、どんな処刑であるのか、まだ洋子には見当がつかなかった。そして、煙草の煙りの向うに見える、山田や木下や、また課長の上野の顔を見た。しかし、彼等は、

丁度、映画でも見るように平然として居た。

此処へ来る途中の汽車の窓から見た。平和な田園の姿や、ゴウと大きな音を立てて渡った鉄橋のことなどを。走馬燈のように思い出した。そして、その時の自分の甘い気持と、今の惨めな気持とを比較して見た。爪先立って居る自分の体に、自然に力が入って、お腹がへこんで居ることもわかった。そして、こんな哀れな姿を、いつまで晒して居なければならぬのだろうかと思った。

「誰か、ライター持って居る。」

邦子が男達に聞いた。山田がボンと投げて寄こした。邦子は、洋子の前に立って、そつと、その体を味うように触った。そして、パチンと洋子の鼻先で、ライターの蓋を開けた。

「何、なさるの。」

洋子は、何がこれから起るのか見当もつかなかったが、でも容易ならぬ事態が、眼前に來たことを感じて戦慄した。

「心配しなくてもいいわよ。火傷なんかさせないから……。ただ、あんたは、じっとして居ればいいの。」

もう殆んど、身動きも出来なくなって居る洋子は、それでも、顔だけは邦子の方を向け

て哀願した。邦子は、二度、三度、ライター
の蓋を開け立てて見せて、それから洋子の
鼻をつまむと、ぐいっと正面を向けさせた。
「あなたの罰を受ける時の顔を、皆んなによ
く見て貰うのよ。真直ぐ向いて居ないと、何
度でも、こうやるわよ。」

と云つて、鼻をきつくひねった。涙と一緒
に、鼻からも水が出たようだった。そして、
それが下唇で止って、口の中へ少し流れ込ん
だ。

洋子の肉体は、伸び切つて、白い細いハム
のようだった。爪先立った足の尖端は、親指
と親指とが、アラビヤ糊でくっつけられたよ
うに、きちんと揃えられて、そして、その桜
貝のような小さな部分で、全身の重さを、必
死に支えて居た。ふくらはぎは、一本の太い
針金が入つたように、硬直して居た。腰はく
りっと緊張して、両側に握りこぶしが入りそ
うなくほみが出来て居た。また、隠しようの
ない胸は、男を知らぬ処女のはじらいが、極
限まで来て居て、朱に燃えて居た。そして吊
り下げられた両腕は、格好のいい、長い正三
角を描いて居た。

「あなた、こんなに真っ白な肌をして居るわ
りに、濃いね。」

邦子がライターの火と、洋子とを半々に見
乍ら云つた。しかし、洋子には、邦子の云つ
た言葉が、何を差して居るのか、わからなか
った。夜も更けて来たので、どこかの電燈が
消えたのか、この部屋の灯りは、一段とさえ
て来たようだった。男達の眼は、少しずつ酔
がさめて行くようだった。

「さあ、皆さん、大変、お待たせ致しまし
たが、いよいよこれから麻雀に負けた罰を、こ
の一人の若い女性に加えることに致します。

——洋子さん、あなたはちゃんと、眼を開け
て、自分の罰を噛みしめるのよ。——そうそ
う咲子さん、あなたは、誰か男の人のバンド
を借りて、そこに立って居て頂戴。もし彼女
が、眼をつぶるようだったら、かまわないか
ら、それで、思い切り叩いてあげて。」

洋子は、止めてくれと頼む気力も無くなつ
て居た。そして、睫毛の長い眼を僅かに開け
て、向うの鴨居に掛つて居る、横額の古ぼけ
た画を見て居た。咲子がずっと脇に立った。

邦子は、冷い手で、もう一度洋子の体に触れ
たが、やがて、その手を脇の下に持つて来
た。くすぐられるかと思つたが、そう思つた
瞬間、チックと僅かな痛みを感じた。そして
消えてしまつて居たライターを、もう一度つ

け直して、その痛みを感じた辺りへ近づけて
来た。

「ああ。」

かすかな叶びをあげると、洋子は眼をつぶ
った。

「ピシリ。」

咲子の手が、すばやく一廻転すると、洋子
の太股の上で、皮が鳴った。子供が、白墨で
地面に悪戯画きをした時のように、股に一本
の紅い線が画かれた。

「眼をつぶっちゃ駄目よ。まだ、始まつてな
いんだから。」

洋子の全身に、冷い汗が薄くじんできて来る
のを感じた。でも、洋子は、仕方なく眼を開
けた。そして、奥歯を噛みしめ乍ら、じつと
中天をにらんで居た。やがて、脇の方で、チ
リチリと、かすかだが、素早い音がした。そ
して、きなくさい臭いが、洋子の周囲にただ
よい始めた。眼をつぶることの出来ない洋子
は、それでも、自分の肉体に加えられて居る
ことを、一生懸命見まいとして、心はあらぬ
ことを考えようとした。でも、あのかすかな
そして素早い音は、何度も、断続的にくり返
された。それは、決して、痛いとか、かゆい
とか云つた苦痛をとまなうものではなかつ

た。しかし、それにもまして、無惨な罰であることは、洋子の青ざめた美しい顔が、充分に物語って居た。

邦子と咲子の立って居る位置が入れ代ったのは、それから少時してだった。そして、その後もライターは、ジワジワと洋子の肌に近づいて、火をつけると、サッと遠のいた。しかし、一度燃え移った火は、しまいまで燃えつくさねば、消えなかった。それは枯草についた野火のように妖しく、悪魔のように敏捷だった。そして、邦子の手は、機械のように執拗に間断なく、同じ行動をくり返して居た。

「どうお。いい気持でしょう。少しは、嬉しそうな顔を見せたら、いいじゃないの。」

洋子の耳許で、皮肉にも、こんなささやきが聞えた。洋子は、それに答える気力さえ失って、ただ早く、すべてが終りを告げてくれるのを願った。

やがて、邦子が、ライターを近づけるのを止めた。そして、普段吸いもしないくせに、男達の誰かから煙草を一本せしめると、それに火をつけて、フウッと大きく一息ついた。それから、ちよっと離れて、自分のやった仕事の仕上りを眺めるように、洋子を、上から

下へ、下から上へと視線でなめ廻した。

「これで、三分の二終ったわ。あと、三分の一。こんなことは滅多にないことなんだからよく味っておくのね。」

もう手拭をほどいて貰えるんだと思って居た洋子は、まだ終らないのだと聞いて、かえって、くずれかかった気持が、また弦を張った。そして、邦子の顔を凝視した。既に、他の見物人達を非難して居る気持など、とうの昔に打ちひしがれてしまつて、ただ、洋子の体に、直接爪を立てて居る。邦子をのみ憎悪した。だが、獲物を喰いちらかした邦子は、残りを、少しでも余計娛しみ乍ら喰おうとするかのように、浴衣の前をかき合せて、帯をきちんと締め直した。そして、おもむろに洋子が立たされて居る卓子の一端に、腰を下した。

邦子の下から覗き込む眼と、洋子の見下す眼とがあつた。男達の方から見ると、小太りな邦子の体が、洋子の下半身を覆いかくして居るように見えた。邦子は、わざと洋子の足先のすぐそばで、卓子に押しつけて煙草の火をもみ消した。煙草が、海老のようにまがつて、ころがった。邦子は、そつと洋子の脚に唇を近づけた。そして舌でベロツとなめる

と、こんどは、ライターの金属の肌を、押しつけた。ヒヤツと身ぶるいの出るような、冷たさだった。

「いいわね。」

念を押すように云うと、カチツと音がしてまた火がついた。

「アッ。」

思わず洋子は、声を出してしまった。

「熱かった？」

実際には、火との距離は、大部あつたので別に熱くもなるともなかったのだが、そして点火されたライターは、螢の火のように小さかったが、洋子は、豹の眼のようにこわかった。そして、それから逃れようとあせつたが、しかし、括られたままの洋子は、腰を三十八度程回転させたのがやつとだった。

また、先程と同じような異様な臭いが、今度は、下から燃え上つて洋子の鼻を突いた。そして、その煙は、だんだんと部屋中にひろがって行くようだった。

「勘忍して。」

数回、そう洋子は叫んだようだった。だがそれには、夜だと云うのに、蠅が一匹飛んで来て、洋子の汗をなめて行つただけだった。そして、どれだけの時間がたっただろう。

燃えるべきものは、全部燃し尽くして、あの煙の臭いも、少しずつ去って行って、洋子が気がついた時には、邦子も咲子も側に居なかった。山田も木下も見えなくなって居た。彼等は、それぞれ別の部屋に去ってしまったらしかった。そして、上野が、側へ来て、手拭をほどいてくれた。それから、病人をいたわるように、静かに、毛布をかけてくれた。洋子は、自分が許されたのと知ると、無性に腹が立って来た。始めに、卓子の脇に正体なく倒れて居たが、数分が過ぎると、体に血がよみがえって来た。そして、純毛の毛布が、そつと、肌をさすのが感じられるようになった。

だが、やがて意識を回復し始めるにつれて、羞恥も戻って来た。なぜ、こんなにもひどい目にあわせて置き乍ら、息の根だけは残して置いたのだろうか。一層、こなごなに叩きつぶしてくれば、かえって安心出来たろうに、さんざなぶって置いて、その打ちひしがれた洋子の心の中までも、今後、じっくり眺めようとするのだろうか。余りにもひどい。

そう思うと、洋子は、矢庭に、側に居た上野にむしゃぶりついた。そして、平手で、少し薄くなりかかった彼の頭を二つ三つ続けざまになぐった。それから、胸に飛びついた。

上野は、その勢いに押されて尻餅をついた。今度は腕に噛みついた。そして、それから少時の間、獣のように、上野の体に向って、洋子は暴力を振り続けた。

しかし、始めのうちは、その様子に驚いて受太刀だった上野も、やがて、攻勢にかわって来た。

「静かにしないか。」

口ではおだやかだったが、上野の手は、洋子の可細い腕を、逆にねじあげて居た。でも洋子はおとなしくならなかった。

「よし、それじゃ、僕がおとなしくさせてやるぞ。」

上野は、洋子の背中に膝をあてがうと、男の力でぐいぐいと押した。それは、四十を過ぎた、固い筋肉質の膝だった。洋子は、悲鳴をあげた。

洋子の気持が静まって行ったのは、それから数刻してだった。決して、好きだと思ったことのない男だったし、しかも、妻子のあるくせに、他の女に手を出すような醜い男でもあったが、そんな嫌悪すべき男だったからこそ、今の洋子には、打ってつけだった。なまじ、やさしい言葉なぞかけてくれる男より、野獣のような男の仕打ちを期待していた。

その晩は、夏だと云うのに、山が深いせいか、虫がかすかに鳴いて居るようだった。

(二) 画鋌の部屋

山の一件があつて以来、上野は、時々洋子のアパートに訪ねて来るようになった。それは、大抵二週間に一度位だったが、でも、そんな関係がそれから三月程続いてしまった。そして、訪ねて来るときは、いつも昨日のように、前日にそつと訪問の意志をつけるのだった。だが、それは、あの山の時のように、烈しく、また陰惨なものではなかった。寧ろ遠慮深く、常に洋子の気嫌を損じまいとするように、弱々しかった。それが、いかにも四十男の、若い女に対する自己卑下から来て居るようで滑稽だった。洋子は、いつも女王のように振舞った。気に入らなければ返事もしないことがあった。それでも、上野は、易々として、洋子の要求にこたえた。叩きあげて余り教養のない上野に、数学を教えてやると云うと、これも飼犬のように応じた。そして、余りよくない頭で、洋子の出す問題を解こうとした。だが、それだからこそ、洋子には、どうにも退屈な交渉のように思えて、仕方がなかった。そして、課長の上野と

出来てしまったので、邦子や咲子や、山田や木下も、あれ以来、あのことには一言も触れず、かえって洋子に、一目置いて居るような様子が見えるのも、面白くなかった。いっそあの時のことが話題になる方が、刺激にさえなるような気がして、そんな風に変ってしまつた、自分の神経を不思議にも思つた。

だが、いずれにしても、また、今日上野が来るのかと思うと、あの無気力さを考えるだけで、うっとうしかった。一層外出して、すっぱかしてやろうかとも思つたが、でも、そうしたからと云つて、それっきり、上野との関係が断たれる訳でもないだろうと思うと、そんなレジスタンスをするのさえ、面倒臭かつた。そこで、仕様こともなく、枕許にあつた週刊誌を広げて見た。

上野が姿を現わしたのは、それから数時間してからだった。そつとドアをノックして細目にあげると、しのび込むように入つて来た。そして、部屋の中を、素早く見廻した。それは、いつ来た時も、きまつてくり返す同じ動作だったが、他人に自分の姿を見られるのを、極度に警戒して居る風だった。洋子は自分が上野の隠し女になつてしまつて居ることとは仕方がないとしても、それを、世間か

ら、こんなにも隠して居なければならぬのかと思うと、四十男の打算が、惨めでもあつた。でも、そんな気持とは逆に、やはり上野には、いい顔が出来なかつた。だから、背中をむけたままで黙つていた。

「これ、買って来たんだけど。」

洋菓子の包みらしいものを出した。洋子はまだ黙つて居た。上野は、手持無沙汰に、タンスを背にして坐つた。夏の舗道を歩いて来たせいか、汗の臭いがぶんとした。隣の部屋で、ラジオをかけたらしく、かすかにジャズが流れて来た。洋子は、聞くともなしに、それを聞いて居た。隣はG大の学生と、その姉さんとの二人暮らしだったが、二人とも感じのいい姉弟で、この間の夕方、お茶を呑みませんかと誘われて、三時間ばかりおしゃべりをして来た。そして、それは、且つて洋子自身も持つて居た何の汚れもない、静かで健康な雰囲気だった。やはり旅行が好きだと云つて居たし、出来たら、秋には御一緒にしませんかと云うような事も、どちらからともなく云い出した。しかし、その清純さの中に溶け込んで行けるだろうかと思うと、覚束なかつたし自分がもう他の世界の人間になつてしまったことが、口惜しかった。

「何かあつたの。」

上野が、また口を開いた。

「いいえ。」

洋子は、ぶっきら棒に答えた。

「だって先刻から、だまり込んで居るじゃないか。」

「黙つてたつていいでしょう。」

誰の前にも云つたことのない、伝法な言葉も上野の前には吐いた。

「たまに来るんだから、笑顔の一つも見せてくれたらいいじゃないか、それに、家を出て来るんだって、女房の手前、いろいろ口実を作つて、大変なんだから、僕の身にもなつてくれよ。」

「たまに来るんだからって、何よ。―私は何も来てほしいなんて云つてはいないわよ。それに、奥さんをだましてまで、この暑い日中、来てくれなくなつていいの。」

「そう、つんけんに云うなよ。」

上野はちよつと鼻白んだ。

「つんけん云つて居るんじゃないけど、課長さんの云うこと、少し恩着せがましくない。私は一体課長さんの何だつて云うの。私はだまされただけよ。あの最初のH温泉のこと、本当は皆で仕組んで、私をこんなにしてしま

「たんじゃないの。」

「人聞きが悪いな。」

「だって、本当のことでしょう。弁解の余地ない筈よ。」

上野は、こう畳み込まれると、苦笑するより他になかった。そして、仕様ことなしに、花瓶の花を眺めて居た。

「今日は帰って頂戴。顔を見るのも、いやなんだから。」

洋子は云い放った。上野は、大きく伸びをした。そして、ゴロツと横になった。

「また、数学でも教えて貰おうと思って、来たんだよ。」

「いやよ。誰があんたなんか。―あんたなんか、実力で課長になったんじゃないんでしょ。上の人に、へえこら、へえこら、おべっか使って、それで課長になったんだわ。そんなだらしのない人と、口を聞くのもいや。」

「そんなに、口から出まかせに、俺をいじめるなよ。」

「私は当然のことを云ってるだけよ。気に障ったら、帰ったらいいでしょ。」

上野は、横になったままで、くるっと向きをかえて、此方を見た。

「君は、好きな人でも出来たのかい。」

突然、そう聞かれると、洋子は言葉につまった。

「それとも、俺が嫌いだって云うのかい。」

「嫌いよ。嫌いだって云ってるじゃないの。」

「つまり、俺以外に好きな人が出来たって云うんだな。」

嫌いだから、別に好きな人が出来たと云うのは、ちよつとロジックに合わないような気がしたが、ふと隣のG大の学生のことを思い出して、洋子は、脇を向いた。窓の外では、銀杏が青々と繁って居た。上野がゆっくり起き上って。

「その男、一体、何処の誰だい。」

「そんな、好きな人なんていないわよ。男なんて、皆、嫌いよ。」

「ごまかすな。恋人が出来たら、出来たと云ったらいじゃないか。」

上野の声は、段々真剣味を帯びて来た。

「僕は何も、君に男が出来てるのに、それでも、通って来るような女々しいことはいやなんだ。」

洋子は、相手が興奮してくるにつれて、少しずつ落着いて来た。そして、上野が大見得を切り出したのが、可笑しかった。あんなことを云ったって、私がもし恋人を連れて来た

ら、素直に別れると云うかどうか、わかったものではないと思うと、幾らか勝ち誇ったような気持になった。

「おい、ニヤニヤ笑っていいいで、返事をしなさいだろ。」

「どう返事したらいいの。」

「男が出来たのなら、出来たと云うんだ。」

「そんなものないわよ。」

「嘘をつけ。」

「嘘じゃないったら。」

矢庭に上野の平手が飛んで来た。あわてて首を引こめて、それをよけたが、上野が手を出したことに驚いた。まさか、あの下僕のように、いつも、この部屋では振舞って居た上野が、そんな腕力を見せるとは思わなかった。洋子は、体を固くした。上野も、いつの間にか、キチンとした正座に変わって居た。

「女の私に、手を出すなんて、卑怯じゃないの。」

「何云ってるんだ。君だって、僕に隠しごとしてるじゃないか。」

「何も隠してなんか居ないわよ。―私は、課長さんが嫌いなだけ、恋人なんか居やしないわ。幾度云ったかわかるの。」

二人は、にらみ合った。それは、憎悪と憎

悪とのからみ合いだった。しかし、その憎悪が、ある点まで達すると、何故か互に相手が男であり、女であることを、いやでも思い出さずにはいられない瞬間でもあった。

「本当に、誰も居ないんだな。」

「しつっこいわね。」

「思い出して見ろよ。君みたいな綺麗な娘が、男の一人や二人居ない筈はないんだから。」

「いくら思い出そうとしたって無いものは、思い出せないわよ。」

洋子はムキになって否定した。

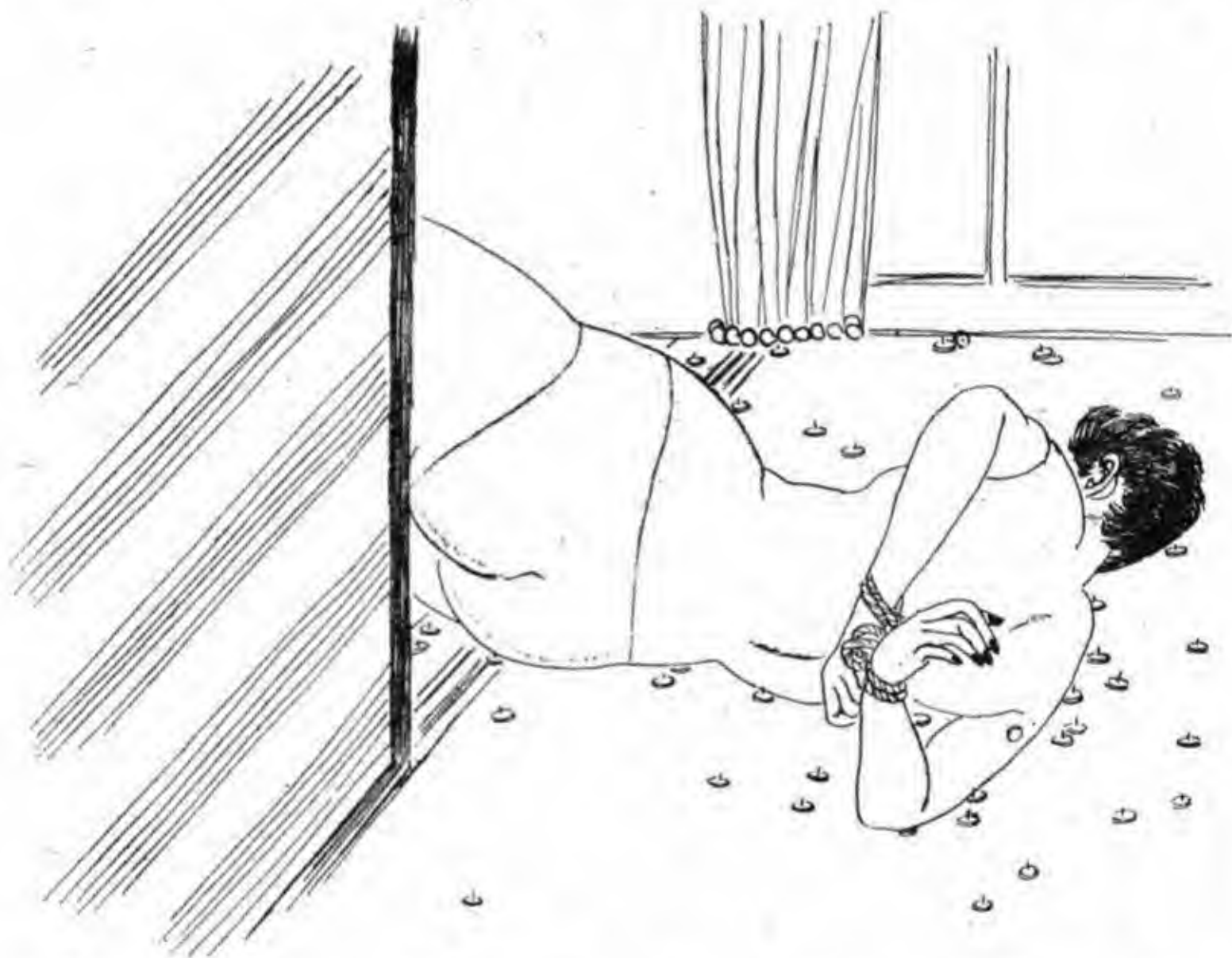
「よし思い出させてやろうか。君は忘れてしまっただけで、君の体は忘れてない筈だからな。」

上野が、片膝立てた。

「何をしようと云うの。」

「いや、別に……。」

そして、少時考えて居たが、やがてポケットから、百円銀貨を二枚出して、



「ここいら辺に、文房具屋があったね。これで、買えるだけ、画紙を買って来てくれないか。」

と云った。洋子は、何に使うのと聞こうと思ったが、これ以上、上野とやり取りするのが、臆却だったので、ついと立ち上った。どうせ、まだ帰る気色はないのだから、ちよつとの間でも自分の方からこの部屋を出て行けたら、気分が晴れ晴れするだろうと云う心算もあった。隣のラジオは、いつか聞えなくなって居た。外は、夏の太陽が健康に輝いて居るだろうと思うと、この情慾の亡者のような男と向き合っただけで居るのが益々いまいましくなった。簡単に髪を直すと、洋服ダンスから黄色のサマーコートを出してひっかけた。

「外は暑いよ。脱いで行ったらいいだろう。」

洋子は、サマーコートのことだと思っただけで、

「だって、こんな部屋着のままじゃ見っともないもの。」

「だから、上だけ羽織って行くの

さ。」

洋子は、少しの間、上野の云うことが解せなかった。だが、やがて上野の云うことが、はっきりイメージされて来ると、思わず、サマーコートの襟を両手で押えた。

「変なこと云わないでよ。そんなこと出来やしないじゃないの。」

「誰にもわかりやしないよ。外から見りゃ、当り前だからな。」

洋子は、ぐっと上野をにらみつけると、そのまま出て行こうとした。

「おい、俺の云うことが聞けないのかい。」

上野の眼は、少しずつ光を帯びて来た。それは、今までの、あの臆病そうな眼とは、違っていた。もし云うことを聞かなければ、何をするかわからなかった。洋子は、少時、その上野を見ていたが、面倒臭くなって来た。

どうせ、争ったって、男の力には抗し切れないうことはわかって居た。洋子は、背中を向けると、スナップをパチンパチンとはずして、ワンピースを脱いだ。下には僅かな薄物しか着て居なかった。どうせ、それも取れと云うにきまって居ると思うと、催促されないうちに、クルクルと、はじけそうな体を、縦横に動かして、脱いだ。臀部のふくらみが、勝手

にしると云うように、動いた。

「これでいいのね。」

捨て鉢に一言云い放つと、サマーコートを羽織って、サンダルをつっかけて外へ出た。上野が、どんな顔をして居るかも見なかった。

大きな音をたてて、アパートの階段を降りると、股と股とが直かに触れあって、変な気持だった。それに、コートの肌触りも、全身で感じるのは始めてだったので、その異常さに、身の毛が立った。

文房具屋は、表通りへ出ると、ものの三分も行かないうちにあったが、行き交う人が、じろじろ見て居るような気がして、顔をあげては歩けなかった。それに、前ボタンのコートは、うっかり大股に歩くと、前が割れて中が透けて見えそうで、どうしても、両手でそれをかばうような形になった。ただ、洋子の気持は、そんな世間の誰にも話せないような状態で、街頭に立ったことで、何故か、ときめきを覚えて来るのを感じた。そして、文房具屋へ入ると、ガラスケースの角に、コート一枚だけを通して、素肌にあたる、感触を確かめて見た。

「画紙を二百円ですか。」

文房具屋のお内儀さんは、びっくりしたような顔だったが、表へ出してあるだけでは足りないらしく、奥へ入って、一抱えも持ち出して来た。洋子は、左手で裾を押え、右手で銀貨を渡した。そして、そんな筈はなかったのだが、お内儀さんの眼が、コートの下を見抜いて居るような気がして面映ゆかった。しかも、ふと、脇に上野が立って居て、そんな洋子の気持を見抜いていて、薄笑いを浮べて居るような錯覚に捕われた。

文房具屋を出ると、もう我慢にも、こんな恰好で、外を歩いて居る気にはなれず、人通りの少ない横町をえらんで、自分のアパートへと急いだ。途中で、顔見知りの、クリーニング屋の小僧に声を掛けられたが、返事もなかった。一気にアパートの階段を駆け上ると、一瞬でも早く安息の地を求めるように、ドアを開けた。

上野が、肩幅の広い体で、入口の処に立って居た。洋子は、その脇をすり抜けると、鏡台の前へ行行って、べたんと坐った。動悸が烈しく打って居た。

「買って来てくれたかい。」

洋子は、画紙の小箱を一杯入れた包みを投げ出した。小さな画紙なのに、数が多いので

まるで、大きな金具でも放ったように、ガシヤと音がした。洋子は、放心したように、鏡の中の自分を見て居た。

上野が背後に近づいたなと思うと、サマーコートのボタンに手が掛った。反射的に身をかめたが、それは僅をの間の抵抗でしかなかった。クルッとむかれた洋子は、パンティ一つの姿を、昼の日射しの中にさらけ出した。

「さあ、しっかり自分の体を見て見るんだ。」

上野はグイッと、洋子の髪を引っばって顔を上にむけた。髪を引っばられた痛さに、両手で上野の腕を押えた。その時、否応なく、自分の肌を、鏡の中に見せつけられた。

「どうだ、自分の体を見て、恋人のことを思い出したらいだらう。」

ねばりをふくんだ上野の声だった。

「そんなもの、知らないったら。」

上野の腕に少しずつ少しづつ力が入って来るのだった。洋子はその度に、上野の腕を幾らかでもゆるめようとして、伸び上った。そして、益々洋子の体は、窓から入ってくる光にさらけ出されて行った。

「そうか、知らないのか。だけど、その恋人には、ここを触られたことがあるだろう。――

ここも触られたことがあるだろう。――ここも。」

上野のあいて居る手は、一言云うごとに、洋子の体の各部を、なせまわしたり、強く押えたり、つまんだりした。洋子は、かぶりを振った。本当に、或る意味では、不幸にも、この嫌悪すべき上野以外の男に、肌を任せたことのなかった洋子は、どんなにされても、思い出すものはなかった。また、先程、あれだけ恋人なんか居ないと云い切った手前、例え相手が、こんないやらしい上野でも、意地でも、前言はひるがえすまいと、思った。上野は少時の間、耳許で同じことをくり返す乍ら、洋子の体をさんざんいじり廻すと、

「強情な奴だ」

と吐き捨てるように云って、洋子を放り出した。洋子は、畳に投げ出されると、ポロボロと涙をこぼした。別に口惜しいことも悲しいとも思わなかったが、痛さから解放された安堵感が、涙の堰を切ったのだった。そしてみるみる畳をぬらして行った。

「泣くことはないだろう。別に僕にかくれて男を作って居ないのなら、それでいいんだ。」
「そんな、私、あんた以外の人、知らないわよ。」

洋子は、泣きじゃくりながら云った。

「そうか、確かにそうなんだ。だけど、もう一回だけ、君の体に聞いて見るよ。念の為に。それでないと、俺の気持がすまないんだ。」

今まで、三月の間、あんなにおとなしかった上野が、一変狂い出すと、こんなになるものかと思う程、それは強引で、際限がなかった。

「まあ、水でも飲んで、そして、もう一度考えて貰おう。」

上野が持ってきたコップの水を、うつぶせになったままで、一口呑んだ。冷い流れが、お腹の中程まで入って行って、消えた。上野は、画紙の包みを解くと、無難作に、一つ一つ、部屋の中にまき始めた。黄金色した画紙が、その度に、蜘蛛の子を散らすように、パツと開がって、すぐ静止した。そしてそれは細かく見ると、横を向いて居るのもあり、後を向いて居るのもあり、また、小さな針を立てて居るのもあった。全部まき終ると、あたかも風に吹かれる麦畑のようにちらちらし始めた。

「さあ、ちよっと立って見な。」
素直に立ち上った。もう裸にされてから大

部時間が立って居るので、殆んど羞恥心はなくなつて居た。

「氣をつけをして。」

これも黙って応じて、足を揃えた。その足首と股の処を、洋服ダンスの小引出から出した長靴下で縛った。それから、手首を赤いネッカチーフで前に縛ると、その余りを腰に巻きつけて、固定した。

「歩けるかい。」

勿論、丸太棒にされてしまった洋子は、歩くどころか、身動きすることも、容易でなかった。ふと、あの山の宿のことを思い出した。すると、ジーンと身体中が熱くなつて来た。

「もう一度聞くけど、云うことはないんだな。もしあるんなら、この際、みんな云ってしまいな。そうしたら、勘弁してやる。」

そして、上野は、ラジオにスイッチを入れた。アナウンサーの声が、ガンガンと部屋の中にこだました。

「大きな声を出されて、外に聞えると、みっともないからな。」

上野は、ニタリとした。

「さあ、始めるぞ。」

洋子の腰に手をかけると、軽々と抱きあ

げた。あたかも洋子の姿は、尾鰭で泳ぐ人魚のようだった。黒い髪が、ドラツと下にたれた。上野は、こわれ物でも抱いて居るように大事に大事に抱えて居たが、画紙のちらかつて居る側まで来て、片膝ついた。洋子の体と畳との距離は、五十糎位しかなかった。洋子は、全身に上野の熱い息を感じて居た。しかし、それは妙に静かな瞬間でもあった。ラジオだけが、しきりに、明日の天気予報を知らせて居た。

「眼をつぶって。」

洋子は自然に、云いなりに眼をつぶった。

上野は、坂をころがり落す時のように、ゴロツと、洋子の体を画紙の上に落した。

「あつ。」

声にならぬうめきを上げた。落されてから畳につくまで、相当、長い時間のように感じた。そして、その間に、さぞ痛いだろうと思つたが、画紙の上に落ちた時は、痛さではなかった。ただ、体のどこかが、うずいたような気がした。いくつかの画紙は、確かに、洋子の肌に容赦なく突きささって居た。だが、洋子の表情は殆んどゆがんで居なかった。いつものように、澄んだ美しい顔をして居た。寧ろ、上野の方が、醜くゆがんで居た。

「痛いのか。」

上野は、病人を看護する時のような声を出した。洋子は、だまって首を横にふった。すると、上野は、急に獐犢さを取り戻した。そして、もう一度、洋子の体を抱きかかえるとドシンと落した。そして、また抱いた。丁度、餅を板の上にたたきつけるように、上野は何度も何度も、洋子の体を抱いて落した。いつの間にか、血がにじみ出して来て、上野を腕を染めた。それでも、上野は止めなかった。しまいには、抱きかかえる力が尽きたのか、洋子の体を、画紙の上でころがし始めた。それは、ウドンをこねる棒をころがして居るようにも見えた。そして、それを側から見たら、いかにも他愛ない、犬が二匹じゃれて居るような格好に見えただろう。しかし、上野の眼は血走り、

「云え。云え。男の名を云え。」
と口走って居た。

だが、洋子は口も眼も閉じたままだった。しかし、体の中では、上野の腕に、体を棒のようにこねられる度に、熱い血がたぎり、プスッ、プスッと肌に画紙が突きささる度に、くすぐられるような快感を覚え始めて居た。そして、心の何処かでは、

「もし、私に男があるとしたら、やはり、それは、上野と同じようなことをする男に違いない。」

と思ったりして居た。

いつの間にか、ラジオの天気予報も終り、

連続放送劇のテーマソングが、その甘がなしにメロディを部屋いっぱいにふりまいて奏でていた。

この泥沼のような、ぬきさしならぬ『画紙の部屋』にふさわしい、やるせない歌を洋子

は身につまされる思いで、畳の上に横になりながら、聞いていた。
窓の外の銀杏の葉には、夏のきつい残照が照りつけて、まぶしく輝いていた。

(了)

〔新版〕女体悦虐フオト七十選

Z組七十集

大手札判印画紙(9×13種)焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇〇円

Z 8	ザリガニ	(梨花悠紀子)
Z 9	引き回し	(東浦ひかる)
Z 10	全裸後手縛	(加茂良子)
Z 11	豊満被虐	(大井小夜子)
Z 12	黒髪いじめ	(大塚啓子)
Z 13	足吊り嬌態	(絹川文代)
Z 14	黒縄高小手	(四方清美)
Z 15	強烈荒縄責	(梨花悠紀子)
Z 16	喰込む白縄	(東浦ひかる)
Z 17	くの字の足指	(桜井葉子)
Z 18	裸身の受縄	(前本妙子)
Z 19	無茶な猿轡	(竹野ひろ子)
Z 20	ハリッケ	(梨花悠紀子)
Z 21	臍なぶり	(大塚啓子)
Z 22	逆手足吊り	(東浦ひかる)
Z 23	美肌いじめ	(絹川文代)
Z 24	鼻ゼメ仰向	(加茂良子)
Z 25	恐怖の瞬間	(若原明子)

Z 26	火箸責め	(梨花悠紀子)
Z 27	全裸海老責め	(熱海容子)
Z 28	ベッドの痴態	(絹川文代)
Z 29	足の裏擦り	(大塚啓子)
Z 30	闇の女体飾	(竹野ひろ子)
Z 31	首絞めゼメ	(大塚啓子)
Z 32	鼻孔責め	(若原明子)
Z 33	悦虐放心	(梨花悠紀子)
Z 34	手枷足くさり	(四方清美)
Z 35	寝室のプレイ	(花本京子)
Z 36	猿轡の妙味	(梨花悠紀子)
Z 37	首縄柱しばり	(絹川文代)
Z 38	巻煙草責め	(大塚啓子)
Z 39	尻立てポーズ	(桜井葉子)
Z 40	エビ責	(東浦ひかる)
Z 41	彼女の好物	(竹野ひろ子)
Z 42	ワンピース	(花本京子)
Z 43	荒縄竹棒責	(梨花悠紀子)
Z 44	浣腸責ポーズ	(大塚啓子)
Z 45	鏡に映す裸	(山路ミヨ子)
Z 46	苦悶に喘ぐ	(大塚啓子)
Z 47	酔後の緊縛	(絹川文代)
Z 48	逆十字エビ	(大塚啓子)

Z 49	全裸猿轡	(東浦ひかる)
Z 50	欄間宙吊り	(梨花悠紀子)
Z 51	全裸逆エビ縛	(絹川文代)
Z 52	荒縄仕置室	(梨花悠紀子)
Z 53	庭園の惨虐	(館典子)
Z 54	被虐の果て	(大塚啓子)
Z 55	痛めた全裸像	(大塚啓子)
Z 56	鏡の中の全裸	(愛川悦子)
Z 57	セーラー服	(梨花悠紀子)
Z 58	檻の緊縛裸体	(愛川悦子)
Z 59	全裸股間縛り	(絹川文代)
Z 60	オムツ逆エビ	(田中芳代)
Z 61	胴縄の重量感	(桜井葉子)
Z 62	ゴム人形	(竹野ひろ子)
Z 63	縄トゲ責め	(梨花悠紀子)
Z 64	女大生恥態	(田中芳代)
Z 65	白肌全裸縛り	(絹川文代)
Z 66	強制的開股縛	(絹川文代)
Z 67	強烈な全裸晒	(愛川悦子)
Z 68	亀甲乳房責	(梨花悠紀子)
Z 69	ベッドの悶え	(愛川悦子)
Z 70	恥しさに耐えて	(館典子)



時評

麻生保氏の生活と意見

麻生 保

「近代映画」十一月号

幾つか、興味のあるページがあります。

まず、グラビアで、星由里子さんの乗馬姿が、二ページにわたって紹介されています。記事には、最近はじめたばかりと書いてありますが、まさに、そのとおりなのでしょう。手綱の持ち方は、大勒小勒が逆だし、馬はぜんぜん緊張していないし、星さんの姿勢も何やら危っかし、ただただません。こんな位なら、もっと上達してから発表すればよいのと思いました。

最終ページに、仲曾根美樹さんがロスアンジェルスの子ズニー・ランドを訪問した折の写真がありますが、彼女と並んで写

真におさまっている外国女性が一寸いかします。多分、ディズニー・ランドの馬車か何かの女性御者じゃないかと思いますが、よくわかりません。乗馬帽に鞭、ただしスコットランド風のスカートです。

記事では、石原裕次郎君と、吉永小百合さんの対談。なかなかいい会話がありました。

石原……そういえば、小百合ちゃんは馬が好きだったね。

吉永 はい。将来、お金を一生懸命ためて馬を買うの。

石原 で、乗りまわすのかい？

吉永 そうなの。むこうの山、こっちの野原を。ですから、乗馬をうんとやって、そのときにそなえておくの。

石原 小百合ちゃんに乗りまわされる馬はいるかな？ (笑)

吉永 います。そこまで馬をならさなきゃ……。

石原 (笑) たのもしき少女小百合ちゃんだ。大いにがんばってくれよ…… (笑)

全く「そこまで馬をならさなきゃ」と言うあたりは胸がスカッとするようではありませんか。あんな、虫も殺さないような可愛らしい顔の小百合ちゃんのどこに、こんなファイトがひそんでいるのでしょうか。きっと、馬に跨ったら、堂々と馬を支配し御すことでしょう。そんな時、馬が言うことをきかなかつたりしたら、どうでしょうか。ピカピカに磨いた長靴に包まれた小百合ちゃんのおんやが活発に動いて馬のお腹を拍車が蹴るのです。その上、ピシリッ、ピシリッって鞭でぶたれ、馬は結局小百合ちゃんの思いどおりになって馴らされてしまふのです。

早く小百合ちゃんの乗馬姿を見たいものです。



二百十日も無事に過ぎ、樹の葉のそよぎにも、秋の気配がそれとなく感じられる、九月中旬、「京人形」の拡張が決定しまして、支配人さんと私が、京阪神に五日の出張をすることになりました。都会の業界の経営状態や

建築技術の習得がその目的との事でございました。でも無学な私が、此の様な男の方でも困難なお仕事が出来るとはございません。まして何の基礎技術もなく、知識もないのでございます。唯々、お客様大事に勤めて参ります。

田舎者の私ですもの、都会のお店の機構の大きさに、唯々、驚くばかりでした。それでも、気に入った建物の造作は、しっかり頭の中に入れメモも致しました。そしてこの間を見ては白足袋を見て廻ったのでございます。

した私ですもの。
再三の辞退も致したのでございますが、唯見て来るだけ、見学位の気持でよいから是非との事でしたので、半分はあきらめた様な形で、この大役をお引受け致しまして先発したのでございます。経営方面は支配人さんをお願いし、私は建築の方を受け持つ事にしたのでございますが、何と申しましたも知識のない悲しさ、冷い鉄路を走る列車の中で、胸がドキドキするばかりで計画も何も樹立する様な余裕は全然ありませんでした。でも都会のいろいろなお店を廻らせて戴きました。
もちろん、日本趣味の溢れるお客ばかり廻ったのでございます。

「福助」「白鹿」「東京」「大黒」「ぜにや」「廊」「千代鶴」「浦島」等々のメーカーを知りましたが、コハゼは最高五枚までで、私の様に七枚から八枚コハゼは、やはり注文品でなければ売っていない様でございます。

布地もキャラコ、ナイロン、テトロン、絹が一番多く、白綾、羽二重、サテン、等は少い様でございました。大阪でも、京都でも、白足袋姿の男の方を二三お見受け致しましたが、大体御年配の方で、若い方は一人も居られませんでした。

出張の少し前、私は京人形の住み込みから、小さいながら、独立した家を持ち、此処から、お店に通って居りました。そして私が妹の様に可愛がって居た、照美と一緒に住んで居ります。照美はもと、照子と名乗っていたのでございますが、私の明美の「美」をあげて、照美としたのでございます。

照美は、白足袋は三枚コハゼの白キャラコ足袋ばかりでしたが、今は五枚コハゼのテトロン白足袋を使用して居ります。彼女が始めて私の白足袋を見た時、ひどく驚いた様でございます。三枚コハゼの筒の深さは、一〇八耗。五枚コハゼは、一三五耗。そして私の八枚コハゼの白足袋は、一九五耗ですから、照

美の白足袋の約二倍近く深いわけでございます。

「お姉ちゃん、この足袋どうしたの？」と聞きますので

「これは特別注文で作ったのよ、筒が深いとはいった時、とっても美しく見えるのよ。いいこうしたらよくわかるわ」

私は右足に八枚コハゼ、そして左足に三枚コハゼの照美の白足袋をはいて見せたのでございます。美しい光沢のある八枚コハゼの私の白足袋と、三枚コハゼの白キャラコ足袋の比較をした時、彼女はひどく感動した様に見受けられほんとうに驚いた顔をしたのです。「お姉ちゃん、えらいわ。白足袋にまで気を配って居たのネ」

照美はため息まじりで云ったのでございます。それから照美は五枚コハゼのテトロン足袋の愛好者になったのです。もう少し私にお金が稼げる様になったら、お姉ちゃん見たいに八枚コハゼの白足袋を注文するのだと申し居ります。この妹の為め、私は絹と羽二重の五枚コハゼの白足袋をお土産に買って帰る事に致しました。

「京人形」の新しい工事が明日から始まり当分は休業になることが決まりました。私のメモ

した都会のお店の建築デザインが大いに役立ったとかで、特別に慰労金を戴いた時は、とても嬉しく、まして明日からは休養もとれるので、「久し振りでゆっくり何処か温泉でも行って見ようかな」と考えて居りました。お店の他の人もそれぞれ、明日からのプランを話して居ました。照美も山の故郷に帰って来るとして楽しそうです。でも此の私には帰る故郷も、肉親もなく、それだけは淋しい限りでございます。その夜十時頃一人の和服の男の方がお店に入って来られました。足許には新しい白足袋が輝いていました。

私が忘れようとしても、忘れられず、でも半分はあきらめていたあの方です。

お店に入って来られたその時、その方のお顔を拝見して、鮮やかに忘れかけて居たあの方のお顔が、ハッキリと思い出したのでございます。早鐘の様に高鳴る胸をお振袖で抱く様にして、私はすぐその方のお相手を致したのでございます。

お店に来られる白足袋姿の男の方は、十人が十人まで、私を指名して下さるので、お店の女給の方も今では、白足袋姿の方は私にまかせた様な状態でしたので、今夜の方も、私がすぐお側に参っても、ごく自然でございま

した。ビールを注文された、その方は私の顔をじーつと見ながら、

「君は何処かで見た様な気がする」

とおっしゃいました。私は又それが嬉しく顔は真赤に照り、胸は異様な早さで高鳴るのでございます。その方はビールを二本位でお帰りになる御様子でした。

今この機会をのがしたら、又何時の日かお会い出来よう。まして唯のお客様と女給の關係ですもの、私は一生懸命になり十二時頃まで、お引止め申し上げたのでございます。

お店が薄暗いので助かったのですが、明るければ、私にはとてもこんな勇氣も出ず、真赤になった自分はずかしく、きっとその方のお側にも行けなかったでございましょう。

お店が看板になり、全員に支配人さんから正式に「明日から当分の間休業するからゆっくり体を休める様、開店の暁には又お願いしたい。今後一そう成績を上げて下さる様、京人形がこうして拡張できるのも皆さんの努力の賜であり、少額だが、一律に慰労金を差し上げたい。」との挨拶があり、金一封を渡されました。夜行で帰る照美を送って行く筈でしたが事情を話すと、片目をつぶり、ニッと笑いなが、コックリうなずいて

「姉ちゃん、おめでとう」

と云ってくれました。若い白足袋姿のその方と二人で、私は夜の街を歩きましたのは、それから十分程してからでございます。

何時しか二人は海岸に出ました。酔の顔を夜風に吹かれる気持は、とてもいいものでございます。此の夜は満月、月の光を受けて、

金波、銀波の寄せる波が素晴らしく美しく天然色の映画を見る様でございます。

松原の続く海岸、白い浜辺が遠くまで見える今夜の景色は、そのまま一幅の墨絵を見る様でございます。その白浜を二人並んで歩きました。二人の白足袋が月の光を浴びて、美しく浮び、私は堪らない切なさ、情感と、倅せに涙ぐんでくまったのでございます。

海岸の砂浜に腰を降し二人で火照った頬を夜風になぶられながら、お話を致しました。

私はお振袖をひざの上に重ねて、その方のお側にそっと寄りそっています。

前に長々と投げ出した二人の足に夜目にも美しく、白足袋が四つ並んでいます。

その方は菊田二郎とおっしゃり、お家は京都で呉服屋さんを営んでいられるとか。

二郎さんは次男で、やはり呉服屋さんをやりたいと申されて居り、時々取引のこととてこ

ちらにも見えられますのです。御両親や、お兄様の許で、独立に備え目で勉強中だったので。大部分は京都のお店に居られるのだそうですが、お兄様が御病氣とかで、代理で来られたそうでございます。二年前もやはり代理だったとか、あれから二年振りに来られたのです。

私が首を長くして待っても、お逢い出来なかったのも、京都の方で、それもあれから二年の間、全然お見えにならなかったからでございます。

夜風が私のお和服の裾をなぶり、緋の長襦袢がまくれて、八枚コハゼの白足袋が全部をくつきり、月の光を浴びて顔を出しました。

あわてて裾をなおす私を見ながら

「おや、君の白足袋は変っているネ」

と二郎さんが一早く見て云われたのです。

私は一世一代の勇氣を振って、最初の時からこの事を詳細にお話したのでございます。

「僕も白足袋は小さい時から好きだった。汚れない、美しい真白な足袋がね」

ジッと耳をかたむけて、私の話を聞いて居られた二郎さんは、そう云いながら裾をめくって見せて下さいました。

「テトロンの五枚コハゼです」

「私のテトロン、でもコハゼは八枚よ」

私も裾を開いて二郎さんの白足袋に、私の白足袋をそっと寄りそわし、顔を見合せニコリ笑ったのでございます。そして何かとても親しみをおぼえたのでございます。

「お店に居る時も、御旅行中も、白足袋をはいていらっしやいますの」

「ええ、大ていはネ、でも男が白足袋をはくなんて、時々云われるのですよ」

「いいわ、男の方でも、白足袋姿はいいものですわ」

「有難う、実はネ、家の者にもはくなんて云われる事があるのです。しかし、家が呉服屋でしょう。はいても不自然ではないと思うよ、そして何より、僕自身が白足袋が好きなんだ。」

「私は、男の方の白足袋も好きなの、清潔で気品があつて」

「君、ほんとうにそう思ってくれる。」

「ええ、ほんとうよ」

「嬉しいなあ、君はきっと僕の良理解者になつて呉れると思うよ。君を知って嬉しい」

白足袋が二人の仲をより親密に、より理解に、してくれた様でございます。

何時の間にか、手を握られて居い私はハッ

として手を引いてしまいました。二郎さんを嫌ではないのに……女の本能とでも申しましようか。そして何時の間にか時間も三時になつて居たのです。照美はもう汽車の中で眠っていることでしょう。ふと彼女の顔が浮んで「お姉ちゃん、お目出度う」と残して行ったあの声が聞えたのです。私は赤くなりながら「もう三時だわ、帰らなくちゃ、二郎さん、お宿何処？」

「うん、菊水なんだ」

私はもっとお話しがしたかったのですが、二郎さんには明日のお仕事もあることだし、逢いたい逢いたいと思つていたお方に、逢えたのですもの。このまま逢えなくなつても、私は思い残す事もないのだわ。

私の初めての恋心であつても、死ぬ程好きであつたとしても、あの方は京都の大きな呉服問屋の次男。私は幼くして両親を亡くし、それから祖母に育てられ、今はその祖母も亡く、天にも地にもたった一人。他人様のごはんを食べながら、涙で成長し、酒場やバーを流れ歩いた根無草。いっそ死んでしまいたいと何度思った事でしょう。生きて行く為に、此の身体をお金に替えた事もある泥沼に生きる女ですもの。釣り合はぬは何とやら、私は

このままお別しても泣くまい。今夜の夢の様な楽しさを胸に秘め、一人で静かに生きて行こう。風の吹くまま、明日は何処の岸边に流れて咲くのか、浮草の様な私だけれど、私にはそれに似合った人も居るだろう。何処の空に流れても二郎さんのお倅を祈るだけで満足すべきなのだわ。

二郎さんの後について歩きながら、私はこんな事を考えていると、悲しくなり泣けるのを我慢するので懸命でした。うつむいて、夜眼にも白く浮ぶ白足袋をみつめているうち、その白足袋がポトとかすんで来て、止めても止めても涙がポトポトと落ちるのです。

思わず立止りハンケチで口を押えました。でもでも、嗚咽の音が、そのハンケチを押しのけるように口に出てしまったのでございます。

「どうしたの？」

先に立って歩いてた二郎さんが、驚いたように振り返り、そして引返して私の肩に手を置き顔をのぞき込む様にして、

「ねえ、急に泣き出したりして、どうしたの僕が何か悪い事、云つたかな」

「……………」

「気にさわつたらご免よ、さあ涙をふいて」

二三度、肩に置いた手を強くゆさぶられました。二郎さんの両手を肩に感じた時、電流の様なものが私の全身を流れ、それが又切なくて、私は激しく首を振り、そのまま、ワツと二郎さんの胸に顔を埋めてしまったのでございます。二郎さんはそんな私をしっかりと抱きしめながら、優しく背を叩いて、いたわってくれます。やがて泣き声もおさまって来た頃、二郎さんは私の涙をふき、私の顔を見つめながら、

「馬鹿だなあ、急に泣きだしたりして」

「ごめんなさい。でも……」

「でも……?」

「ウウン、何んでもないの。ほんとうに、ごめんなさいね」

「君の気持、解る様だ、僕も君が好きだよ」

「いけないわ、私はあなたに愛される資格はない女なの」

二郎さんは今度は返事をする代りに私の唇に激しい口づけをされたのです。

甘い甘い口づけでした。二郎さんの背に廻した両手を痛い程感じながら、私のこのまま死んでもいいと思いつつ、二郎さんの首に手を廻したのです。

菊水はもう門灯も消えてしまつて、深山の

様に静かです。無理ありません、もう三時三十分ですもの。

「私の家で、もしおよろしかったら、お宿りになったら」

「始めてお近づきになったばかりなのに……」

「いいのよ、御遠慮なさらないで」

「御迷惑じゃ」

「ウウン、迷惑なんて……」

「そう願えたら、ほんとうに助りますよ」

「じゃ、御案内致しますわ」

「これを機会に出張したら、君の家を定宿にしようかな。ハハハハハハ」

「どうぞ、せいぜいサービス致しますわ」

「ハハハハ、今のは冗談ですよ」

私はほのぼのとした楽しさに、浮き浮きとして参りました。今泣いた鴉がもう笑った。

その通りに嬉しさと楽しさに、私の顔は日本晴れに輝くのが、自分でもわかるのです。

炊事場と食堂とお座敷、それに風呂場をつけたのですが、その小さな私の城に案内申し上げたのが四時頃でしたでしょうか。

八畳の間のお座敷と申ししましても小さな床と押入れがあるだけでございます。そこに照美と私のダンスや鏡台等が並べてあるので、実際は四畳位の広さしかございません。

女の香りが流れる様なお部屋の中に立って二郎さんはキョロキョロしていられます。

三面鏡、全身を写す姿見、衣桁掛、ピンクのカーテン。そして床の生花から、ダンスの上のお人形から、女の香りが立ちのぼって来るのです。私は新妻の様に、いそいそと夜具を敷いて差し上げまして。炎ゆる様な夜具の色が、枕屏風に映えます。私は照美の夜具を敷きました。男の方の物とて何一つない私の暮しですもの、二郎さんのお寝巻がなく困りました。

「もしよかったら、私ですけど、お寝巻のかわりに、お召し下さい」

上しいお振袖の長襦袢。それも真赤な色なのです。他にピンクのものもござりますが、頂度洗い張りに出して居たので、致し方なく此の長襦袢を出したのでございます。

「へー、これは大変な事になっちゃった」

「お嫌いでしたら、よろしいの。でも私の所男の方の物、何もないのですもの……」

私のチョトしよげた顔を見て

「嫌じゃないよ、だけどさ……これ新しいのだろう」

「ウウン、いいの」

「悪いよ、下着のまままで寝るからいいさ」

「お下着が、しわになりますわ。やっぱり女のもの、お嫌なのね」

「着るよ、着るよ」

私は少し、いたずらッ娘の心が出て来たのか、二郎さんを困らせながら、彼の後から緋の長襦袢を着せて差し上げ、ピンクの伊達巻を締めて上げました。

長いお振袖をヒラヒラさせながら二郎さんは困った様な、はにかんだ様なお顔をして、

「何だか、変な気持だよ」

私は私がおすすめたのですが、男の方が女の長襦袢を着た姿のおかしさ、長襦袢の裾から二十糎位も足が出て、その足に五枚コハゼの白足袋がチラチラしているのですもの。でも少々のお色気、普通のお色気と異ったものも感じました。二郎さんは照れくさいのか

「おやすみ」

と一声云ったかと思うと、急いで夜具にもぐり込んでしまったのです。

クスッ、と笑いながら私もお振袖を脱ぎ、緋の長襦袢と白足袋姿になり照美の夜具に身を横に致しました。電燈をスタンドに切替えました。和風スタンドの投げる、やわらかな光が、お部屋を照し、私の工夫した夜のムードが激しい、素晴らしい色調の中に浮き上って

来るのでございます。

翌朝の食事の時は、二人共何んともなく照れてしまいましたが、私は昨日と違い、明るい朝の日ざしの中ですので、はずかしく差し向っては見たものの、とても顔さえ上げられなく、胸ばかり高鳴らして居りました。

二郎さんは明日を約してお仕事に出られましたが、私は終日ワクワクして暮しました。

バラ色の人生、そうです。何かしら楽しい日でございます。二郎さんはお仕事を終えられ三日間の暇をつくられ、二人で北陸の温泉に出かけたのは、それから五日後でございます。私は淡いピンク地に赤紅の乱れ菊と水模様の和服、別にお振袖の緋の長襦袢も用意して参りました。白足袋は四足程いずれも八枚コハゼのテトロン足袋を持ちました。

静かな温泉町で私は二郎さんと楽しい三日間を過したのでございます。冷い流れに白足袋を脱いで足をつけたり、谷川の岩伝いに、二郎さんに手を引かれて渡ったり、二人で流しを聞いたり、家族風呂でふるえたりしているうち、もう私は二郎さんなしの生活は考えられなくなってしまったのであります。

二郎さんと別れる時、私はおねだりして彼の白足袋を戴いてお別れ致しました。彼の白

足袋を胸に抱き、列車が見えなくなるまで泣きながらホームに立って居りました。でも私はこれで満足でございます。過去には何人もの男を知った私でしたが、それは生活の為でした。二郎さんとは他人でなくなったのです。これきり逢えずとも私の心は通じたのです。二郎さんも私を好きだと云ってくれました。これでいいのです。今度は一人で温泉に出かけ、二郎さんから戴いた五枚コハゼの白足袋を抱いて想い出にふけるのが私の唯一の楽しみになりました。

私は二郎さんの足に合った八枚コハゼの白足袋を注文しました。又何時の日か逢う事が許されたら差し上げるつもりだったので。淋しいながら一カ月近く流れた頃、思いがけなく二郎さんからお便りがありました。

話があるから京都まで来いと云う事です。

飛び立つ想いで翌日、指定された時間に京都に行きました。今度は白と紫の色違いに波模様にあしらわれた金糸の刺繍の唐草模様の名古屋帯でした。駅で二郎さんとお逢いしすぐにハイヤーに乗せられたのでございます。

「何処へ行くの？」

とお聞きしても二郎さんに笑いながら、「びっくりすることさ、だまってついておい

で」

と、云われるだけでございます。勝手のわからない京都の街を、どこをどう走ったのか、ハイヤーが停ったのは緑深い街はずれの山裾のお家でした。車から降りた私の臉に菊田の二字が飛び込みました。

確かに呉服屋さんと聞いたのですけど、此処は、お金持ちの別荘と云った感じのお家です。

「びっくりしてゐるネ、ハ……ここは僕の家だよ、両親が住んでるネ」

「まあ——私どうしましょう」

私は突然の事なので、ほんとうに、どうしていいか困ってしまったのでございます。お座敷に通され、泉水にはねる鯉も見る勇氣もなく、私は唯オドオドするばかりでございました。私は此の家で二郎さんの御両親に逢されたのです。相当の御年配の上品な方でしたが、恐縮している私を優しく、いたわる様な、なごやかなお眼を私にそそがれながら「実は、これが」

と二郎さんをチラチと見られました。

「急に嫁がほしいなどと云い出しましてね」

「……」

私はハッとして二郎さんを見ますと、彼は

照れながら、髪の毛をなでて居られました。

「いろいろ聞いて見ると、どうもあなたが好きだ様です。実は今迄でも嫁にどうかと云う話は沢山あったのですが、どれもこれも受けつけてはくれませんし、私共も当分は一人にしておこうと思つていたのです。私共がいくらいい縁談と思つても、貰うのは二郎ですからなハハハ、その本人がどうもその意志がない様ですの、どうにもなりませんのじや」

お父様に引継ぐ様に今度はお母様が……

「それが、急に十日程前から嫁がほしいなど申して、私やお父さんをびっくりさせましてね。いろいろ問い訊すうち、あなたが好きらしいと判りましたよ。でもね、私共にも一度お逢いして、それからの事にしよう云う事になり、突然でしたが、お呼び致した様なわけで……」

もう私はどうしていいやら、それならそれと前以つて二郎さんも云つて下されば……

私は汚れた身体、こんな大きなお家にお嫁に来る資格はないのです。

その日は、少しおつき合してからと云う事でやっと解放して戴きましたが、私は全く冷汗をかいてしまいました。好きな方からの申込みですもの、飛び出つ様な嬉しさですが、

やはり過ぎた日の汚れた毎日が、私の炎ゆる心を、引止めてしまったのです。御両親も理解のあるおやさしい方にお見受け致しましたけども、私が過去に歩いた姿を見られたら、必ず反対されるでしょう。京都のお店やお家に出入を許された私ですけど、二郎さんにも話し出来ない私の秘密でございます。私は一体どうしたらいいのでしょうか、倅せな生活が突然眼の前に拡がったのですが、このまま黙っている事は出来ないし、打ち明けるのは何更出来ません。二郎さんの八枚コハゼの白足袋が出来て参りましたので、それを持って京都に行った折、私は京都の二郎さんのお店が新築中である事を知ったのです。二郎さんは私の差し出す白足袋を喜んで、お召しになり、その夜、私は又離れられなくなったのでございます。

私は今夜が最後と決心して参つたので、二郎さんに、私の悲しい生立ちと秘密を打ち明けてしまいました。そして泣いて泣いて涙も枯れ果ててしまったのでございます。

再び逢うこともありませんまい。二郎さんもこれで私をあきらめて、もっとお美しい清らかなお嫁を貰われる事でしょう。帰る列車の中でも、私はポロポロ泣きながら、そう思っ

たのです。もう私は結婚なんか考えず、大好きな白足袋を研究しながら、暮して行こう。

二郎さんと御両親が、突然私のお家をお訪ねになったのは「京人形」が二十日すれば開店出来る薄寒い日でございました。

私はお家の中を掃除し、「こたつ」にひざを入れて、二郎さんの白足袋を見ながら、ボンヤリしていた十時半頃でした。

二郎さんは過去は過去、誰にでも一つや二つの悩みはあるもの。過去のあやまちを掘り出せば限りはない。現在立派であればそれでよい……。私立探偵で私の素行も調べられたそうです。もちろん私が打ち明けた以外の物は出て来ず、京人形での働き振りが申し分なかったとの事でした。御両親も二郎さんの熱意に負けた様な状態で、あらためて結婚の申込みに来られたのでございます。

でも嬉しい中でも長い一生を考えるとやはりお断り申し上げるのが良いのではないかと存じ、ていねいにお断り致したのでございます。その時二郎さんは恐い顔で私に

「君は僕に死ねと云うのか、僕は呉服屋はみれんはない、君を得る為なら何でもやるつもりなんだ。釣り合わぬと云うのなら、僕は君

と釣り合う様身も落そう、君を得るか、君を失って死ぬか。二つの一つだ、もう一度だけ考えて返事してくれ」

と云う意味の事を、三十分程も申されたのでございます。その言葉は嬉しく痛い程、胸に感じました。二郎さんの熱情が焰を上げて、私を焼きつくしました。女としてこれ程に求められたなら、たとえ一日だけに終わってもいいと云う気になってしまったのでございます。

「嬉しいわ、嬉しいわ、それ程まで想われて私はこのまま死んでも惜せよ」

ワツと泣きながら、私は呼ぶ様に云うと、もう後は何も云えず、畳に泣き伏してしまいました。

私はこうして、二郎さんと結婚する事になったのです。私はそれから、お嫁さんの修業を懸命に致して居ります。

お式は十一月三日と内定して居りますが、十日後には、この家から京都に移る事になって居ります。昨年六月御誌に投じた私の拙文「白足袋のこと」が快く採用されてから一年半。この「続々白足袋のこと」で一応完結する事に致します。つれづれに記した私の半生記でしたが結婚すれば、縁を忘れて二郎さ

んのよき妻として励みたいと存じます。原稿を書く事もあるまいと思います。一年半でしかけど、お世話下されました編集部の皆様に厚くお礼申し上げます。

白足袋の研究は更に続けて行きたいと存じます。白足袋の代用と申しますか、足袋ソックスはやはり筒が深いだけで、足袋の持つあの優雅な美しさはありません。甲の処の一本の線やコハゼの所等に見れる何とも云えない形と申しましょうか、それに生地のもつ真白い光沢、それは白足袋のみが持つ独特の美しさでございます。私は一生お和服で白足袋を愛して行きたいと存じて居ります。

お呼びかけ下さいました阿部能丸様、浜路恵之助様。御元気で御活躍下さいませよう。阿部様からは特に「特選白足袋」を送りたいとの温い言葉、身にあまる光栄でございます。「特選白足袋」が、どの様な白足袋か不明でございましたし、照美も同居して居り私だけが頂戴するのも何となく気がひけた様なわけで、お呼びかけに對しまして、御返事も致しませず、申し訳なく思っています。お二方様共、どうぞ、これから白足袋を愛して下さると共に、数少い白足袋ファンの方のため御活躍下さる様お願い申し上げます。

川柳お臍漫考

須藤 律夫

昭和六年四月刊、大阪の『奇抜全集』をみ

ていたからお臍を詠み込んだ川柳が大分出ていた。何れも時代ずれのしたものであるが、川柳は何時の世にも人世の機微をうがち、処世哲学としても面白いので茲に抄録し、その他全部蔵書の中から抄出して筆者独自の註釈を付した。猶、最後に引用参考文献を記したが、もとより薄学の徒、この他にもお氣付の点、御教示願えれば幸甚です。

臍の垢溜めたるまんま嫁に行き

金欄どんすの帯締め乍ら——その帯の下、

お臍のゴマは取らぬ人の方が多し事だろう。

うたゝ寝の出臍はつきり見つけられ

レビュー団臍まで出したのが踊り

現代ではストリップと言う過激なものがあり、お臍の展示会は大して珍らしくなくなつた。

写真屋でまる一年の臍を見せ

お誕生日に撮す、全裸の記念写真か。

お臍まで出して新妻塗っている

大正末期の頃まで鏡台の前で双肌脱ぎとなり、切腹の様なこの恰好はよく見られたものである。

何故臍を取りに来るのと乳母にきゝ

坊や、腹がけをしないとお臍をとられますよ。

(以上は大坂滑稽新聞社発行『奇抜全集』よりの抄出、以下年代不順に記してみよう)

臍までの深さ金切り声を挙げ

弁当屋のおせいちゃん、夜河を亘
る——と言ったとこ。

臍の脇こゝかこゝかと医者押え

台湾流行のコレラに非ず、妙令婦
人の急性虫垂炎か。

祝言に臍のあたりを蚤が喰い

臍もっているので雷が恐ろしく

今年の夏、茨城県下での事、耕作
中の農夫がお臍を取られた実例があ
った。つまりズボンのバックルに落
雷した訳だが、軽傷で済んだのは不
幸中の幸い。

売り出しのスター

臍までまるで出し

何時見ても

閑そうなのは臍の穴



余りにも江湖に知れ渡った句、然
しお臍が忙しくなるようでは大変。

生きるためモデル

臍までさらけ出し

煩惱の未だ悟られぬ臍の穴

古書に曰く、臍穴の下を向いた者
は未だ人間として完成されずと、蓋
し脐天運動提唱の所謂である。

孝は釜不幸は母の臍を掘り

道楽息子にお臍をほられてはお袋
たるもの操ったくてやり切れまい。
然し息子にしてみればとるに足らぬ
金、お臍のゴマだよおっ母さん
——なんて言うかも知れない。

おとなしい裸覗けば臍のゴマ

裸の坊やが余りおとなしいので縁
側を覗くと、しきりにお臍のゴマを
取っていた。

あんぱんの穴想い出す臍のゴマ

臍の垢ふと取り出してかいてみる

一般にチーズの匂いがすると言うのが通説である。

雷も及ばぬ蚊張の臍と臍

佳境よろしく御想像あれ。

辻番の臍から下に屏風あり

昔、辻番所には背の低い屏風があった。一寸起き上げれば人通りの覗ける辻番、屏風は恰度お臍の高さだったのである。

辻番は臍をかきかき湯屋へ来る

真夏の昼下り、襦一本、襦袢一枚で湯屋へ来る辻番、帰りは襦一本の外まる裸——と来ると、全く江戸時代の下町情緒豊かである。

雷の中で仁王は臍を出し

浅草雷門、仲見世のつつき、仁王門の中

で、仁王様はお臍を出して睨んでいた。雷様も仁王様のお臍を狙う事丈はタブーだったのかも知れない。

謡の師臍から声を出さっしやい

臍下丹田に力をこめ、上体は軽く馬に乗った姿勢を保つ事、之が謡曲手ほどの第一歩である。

恋しさは親父のすねに母の臍

昔も今も小遣をせびる気持に変わりはない。

姫様の出臍治療に乳母困り

昔、お姫様の大きな出臍を治療す可く、乳母は弓の名人に話し、一発で引き込ますよう頼んだ。お姫様が恥しいと言うので自分もお腹を出して一緒に立ち並ぶ。すると放たれた矢はどうした事か乳母のお臍に当ってドン。江戸時代の小咄である。

弟の出臍泣かした二つ姉

筆者幼少の頃、大きな出臍に豆細工の風車

を結びつけ、得意になって駆け遊んでいた童子があつたが……。

母をりをり娘の臍を抜きに来る

咲耶姫お臍の下で雷が鳴り

咲耶姫は富士山、浅間神社の祭神である。かみなり様を下に聞く、富士山は日本一の山”と言えどそれ迄だが”お臍の下”と人間化するところにユーモアがにじみ出ている。

レビユーは臍を出すのがスターなり

臍一つハラハラさせて幕が下り

アロハシャツお臍へ風を入れてやり

今年の夏はお臍ルックが流行したが、臍出しスタイルにお臍は風邪を冒いた事だろう。

腹巻をとりたがる子は臍を出し

臍の緒を切られてからの浮き沈み

しっかりと懐炉は臍に当てがわれ

腹部は皮下脂肪が厚いので（平均一寸位ある）温めるのは仲々骨が折れる。然し臍の下には脂肪組織がなく、その儘腹膜に達するので効果的である。

日本の臍の大きさ四里四方

人体に擬して江戸市中を言ったもの、実測は三里四方位しかなかったと言うが、そこは所謂江戸ッ児の風流しであろうか。

人間の花落らしい臍の穴

お臍を原語学的に見ると、この句は面白くうなづかれる。

肌を脱ぐ人は大きな臍を見せ

人の為め一肌脱ぐ様な俠気のある男は、お臍もやっぱり大きいらしい。

臍つきりまくって二十四文とり

京都、大阪、筑前、伊勢、能登地方では私娼の事を「白湯文字」と言った。之は天保の

頃からの言葉であるがその頃の句であろう。

恋の文臍といもじの間に

あくたいに臍を抱える灸見舞

乳母や乳母おれは臍から生れたか

何人も抜いて棒押し臍を見る

茄子売りお釣りを出すに臍を見せ

存の外隠居の臍に垢ばかり

之は実際のお臍にゴマが溜まっていると言うより、歿くなった隠居の臍繰りを子供達が調べたところ、存外に金は無かった——の意であろう。ところでこの辺で一先ずこの稿を終り、次回若し機会が許すなら「お臍の詩集」など編んで見度いと思う。

抄出参考文献

川柳類纂 内外出版協会 明治二十八年刊
類題川柳名句集 岡村書院 大正十四年刊
類題狂句川柳五千句

洛東書院 大正十五年刊

川柳作法 明文館 大正十五年刊

川柳家族風呂 大阪出版社 昭和三年刊

奇技全集 大阪滑稽新聞社 昭和六年刊

川柳辞典 春江堂 昭和七年刊

昭和川柳類題高原句集

山川花恋坊編 昭和十年刊

世界の風刺詩川柳

日本出版 昭和二十五年刊

川柳入門 川津書院 昭和二十七年刊

異色川柳遊女風俗姿細見

那須書店 昭和三十七年刊

古川柳風俗辞典 青蛙房 昭和三十七年刊

(以上)

「代理部だより」 ○「悦唐写真集決定版」
(略号「プロ」)は、都合により分譲を中止いたします。○日本版サド侯爵悦唐絵巻(略号「さ9」)の大きさは先月号の広告から訂正しましたがA5判に変更しました。○梨花悠紀子帛書写真特集(略号「りつ1」「りつ2」)の枚数は今月号の広告より訂正しましたが、八枚一組に変更しました。尚、広告にて訂正以前の御注文には従前通りのものをお送りしました。



〈手記〉

神酒讃

—ある青年の熱烈なる手記—

乾 かん

隆 りゅう

一 いち

(1)

アブノーマルであることは何という得難い賜物でしょう。正常な人々にはおよそ夢想することすらできぬ人生の豊かさを全身で味わうのですから、私たちアブ族のみが、日々の果てしなき倦怠、憂鬱から逃れることができるのです。誰に感謝したらいいのか？ おそらく私たちがアブノーマルであるということに感謝すべきなのでしょう。

そのおかげで私はブルーストに異常な関心を持つことができたのです。彼の大作「失われた時を求めて」から「ソドムとゴモラ」を

省いてしまつたら、あとにのこるのは、單なる心理風景の微細極まる記録にしかすぎません。彼が身を以て描いた性倒錯の伏魔殿は、彼が作家なるが故にフロイド博士を遙かに抜いてしまいました。月並な恋愛小説のみがもてはやされ、巾をきかす世の中に、敢然と「ソドムとゴモラ」を製作したブルーストの勇氣は、遠くサド侯爵と相呼応して、文学の世界をいや人間の世界を、どれほど深く豊饒にしてくれたことでしょう。そうしてともすれば、日陰の花として萎れがちな私たちに限りない勇氣を与えてくれました。

サドの靈よ、安かれ！

ブルーストの靈よ、安かれ！

私が「奇譚クラブ」を知ったのはごく最近のことです。それ以来数多くの文学作品が何と色あせた不毛の形骸に変わってしまったことでしょう。と書くところだ、君は「奇ク」をよんでアブノーマルになったのかい、そいつは気まぐれだぞ」と言われるかも知れませんが、とんでもない、小学校を出るや出ないかにもう濃厚な女性器崇拜その他を自覚した私のこと、ただそれが開放されないうちに眠っていただけのことです。もう大丈夫、「奇ク」ほどの力づよい味方は、他にある筈はありません。休火山は今や墮眠から覚め、生き生きと蘇えろうとしています。そうして私は呪われた(?)自分の生に非常なよろこびと誇りを抱いています。元来私たちアブノーマリアンは洗練された交際をするいい意味での淑女であり紳士であります。まかり間違っても、そこらの街角で野原でちっほけな事件を惹き起す陋劣漢にはなり得ないのです。

(2)

「美女とおしっこ」——

私は長い間この幻想に囚われていました。

もう十年も昔のこと、私の上級生が結婚するといつて相手の女性の写真を見せてくれました。それは仲々の美人でしたが、そのとき上級生が、こう言ったのです。「こんな美人が便所へ入る所を想像するとなあ、いやになるよ」と。これが正常な人のいつわりない、あわれむべき貧困さの図なのです。もちろん私は当時を回想して言っているのです、そのとき私が、はつきり相手をおわれんだわけではありません。

私は「美女」と書きましたが、もともと美女と醜女の差は、あいまいなものです。もし西鶴の言うように、世の中の男がみな色男なら、世の中の女はみな美女である筈です。色の道はすべての女を天女とみることによって極まる、と誰やらが言いました。「美女とおしっこ」、全く何の縁も無さそうに思われるこの組合せ——そこには異常なる美があります。切腹好みの人ならば「美女と切腹」というところです。

さて、私が美女の排泄物を口にしてみたいという熱望を抱くようになったのは、いつのことか、どのような動機だったのか、もうはつきり思い出すことはできません。ただ昔、谷崎潤一郎の『少年』をよんだとき異様な感

動を覚えたのを漠然と思い浮かべるばかりです。この熱望は前述のように開放されないままに眠りこんでいました。

私は、その後、何のふしぎもないことです。が、いくにんかの女性と交渉がありました。(私には女性に対する正常な欲求も人並にあるらしいのです) 彼女らは私がこのような欲求を口に出すには、余りにも美女ばかりでした。つまり私は自分の弱気と、そういう行為への偏見を遂に克服することができなかったのです。ただ一度、青線の美女に勇を鼓して誘いかけたところ、この美女は「あんた、気狂いよ」と失笑はしたものの、どうやら気持ちが動きかけたのを察しました、しかしそのときも私には強引さが不足していました。こういうためらいこそ呪われてあれ／＼です。

こうなると、私は古代支那帝国のカンガンのように、様々なのみ方を空想するばかりです。それとも……ですか、それとも……こうして、私の空想はとめどなく空しく回転するばかりです。しかし、あるとき……。

(3)

私はこの退くつな日々の生活において——いかに忙しくても、いかに生活に追われてい

ても退くつさに変りはない——偶然の出会いのみを尊重しています。自分がどのようなアブノーマルの道を辿るか、これも全く偶然の成せる業です。偶然が私たちの内にかくされているSなりMなりを、発現させるのですから。私が「奇ク」に出会ったのも偶然、もし偶然が悪魔の作用ならば、こうした悪魔は素晴らしい悪魔に違いありません。

去年の夏のこと、私は毎日のように、「偶然」を求めて所かまわずほつき歩いていました。十時をすぎて、私は線路伝いの草の土手にふかふかと身体を埋めて、何の収獲もなかったその日のつかれを休めていました。そこはほとんど闇でした、月もなく、一つ二つの星があるばかり——夜風は涼しく汗ばんだ肌を冷やしてくれました。やがて、私の耳に人声と下駄の音がきこえてきました。どうやら線路伝いに二三人の人がやってくるのです。時々交る笑い声、私の直感これは父娘だとささやきました。たぶん映画からの帰りでしょう、下駄の音はだんだん近づき、二人の白い浴衣がぼんやり浮かんできました。そのとき、ふっと私は緊張しました、女の声におぼえがあったのです。

私の頭は素早く回転し、たちまち私のよく

行くD書店のY子だということがわかりました。去年高校を出た背の高いちよっと日本人ばなれした容貌の持主です。私とは顔を合せるときに一寸した挨拶位は交していました。

二人の足音は私の頭の上でした。突然、「お父さん、先へ行って、私ちよっと」とY子は立止って言いました。父親は何事かを了解してどンドン先へ歩いて行きました。Y子はすぐにそこへしゃがむとみる間に、女性特有のあの高い音を立て、その瞬間、私は顔にY子の熱い熱い液体を浴びていたのです。これらのことはもちろんあつというまに、ごく自然に行われ、私は茫然としていました。私の浴衣は紺色でしたし、それに闇が幸いしました。私は驚愕がすぎると、言いようのない歓喜に酔いました。私の休んだ場所がもうメートルも放れていたら……

Y子はながい間こらえていたのか、なかなか止みません、それだけ私の陶醉もつづきました。私はチラとY子の方を見るのですが、闇のこととて見るすべもありません。ようやくY子は終るとすぐに父を追って走って行きました。そのあと私は舌を刺す神酒の味を心ゆくまで味わっていました。何という偶然だろう、何という悦楽だろう。私はもう二度と

この呪縛から逃れることはできないだろう。この夜、私のアブノーマルの方向はこうして打ち出されたのでした。

私は翌日、D書店へ行きました。Y子は店に座って雑誌をパラパラめくっていました。高い鼻、小さめの顔——私を見てかるく頭を下げました。Y子には何の変ったところもありません、それは当然のことです。私は本を見るふりをして、Y子の横顔をつぐづく眺め、あるふしぎな思いに囚われておりました。言ってみれば、何かをいとおしむような何かをじっと抱擁しているような、つまらないものの一切を洗い落してしまつたような——私の心はひそかな戦慄を帯び、我ともなく呟やいていました。

「美しい、生きるのは、この世は……」

(4)

その夜の偶然は私にとって空想の世界を現実に変えてくれたばかりでなく、もう一つの思いもよらなかつた未知の扉を開いてくれたのです。思えば各人はそれぞれにたくさんの未知の宝庫を自ら知らずしてかくし持っていることでしょう、これを発見するのは全く偶然以外にはあり得ません。

もう一つの未知の悦楽——それは美女のおしっこを顔に浴びるということです。その力づよいほとばしりは必ずや退くつな人生の只中にいるのを忘れさせ、ひろびろとした境に私を運び去ってくれるに違いありません。

湯気のたちこめるお風呂で、思いきり自由な姿態で、勇敢な美女サジストと、私のような貪欲極まるマゾヒストが誰はばかることなく、そういうプレイを敢行している……

これはもう私たちアブノーマル共和国の住民のみの知る神秘的儀式の幾瞬間なのです。

(5)

私は果していつか青線の美女が言つたように狂ちがいでしょうか？（私のアブノーマルはもちろん『美女とおしっこ』に限られていくわけではありません）。もしおのれの心底からの欲求を、他人に迷惑、危害を及ぼさず果てまで追って行くことを狂ちがいというならば、私はよろこんで狂ちがいのままでいたいものです。そうして正常なる人々を私はあわれむばかりです。私は本当の意味でのエゴイストの道を歩きたい、そのためならどのような非情にもなろう、この底知れないほど豊富さをかくしている人生からその幾分でも

かすめ取る怪盗にもなるう。

私たちのアブノーマル共和国は果てしない
広大さをもっています。無数の悦楽と、手段
と、矛盾と——たとえば、私は切腹とかおむ



新鋭十二月号の

読後感

アガタ・オサム

このところ、号を追うて迫
力の増してきた貴誌の「読書の
秋」にふさわしい贈物、それは
新鋭十二月号でした。

まず巻頭グラビアの第一頁を
飾る『若妻』の写真は正に近來
にないヒット作ともいうべき圧
巻でした。ナワにその豊満な胸
部をいましめられて苦しむ女体
は、緊縛感の真味を味うことの
できる最高の作品でした。次の
ページの写真も乳当てがはずれ
ておって、小さなバタフライの
若妻の姿。

つかバーとかにはそれほど
の関心はありません。逆にそれらの人たちから言えば、おしっ
こなどと顔をそむけてしまいうに相違ないでし
よう。といって私たちはお互いに軽んじ合っ
たり、憎み合ったりするわけではない。私た

ちは淑女であり紳士ですから。私たちはただ
百花けんらんと咲き匂えばいい、それら全く
の異質のものを全て抱擁していささかも動じ
ないのが、われらアブノーマル共和国のかが
やかしい本質なのですから。

しっかりと縛り上げられてやわ
らかそうな柔肌に喰い込む縄目。
どれもこれも大いに満足で、やは
り貴誌ならではの、他に求めること
は出来ません。私のサド心を大い
に満喫させてくれました。

ナワの掛け方も、表情も申分あ
りません。これはモデルさんが素
晴しい肉体の魅力を持っておられ
るので今後が楽しみです。関谷富
佐子さんを得られたのは、貴誌に
とっては大成功であり、今後の緊
縛姿を大いに期待しております。
ベテラン大塚啓子嬢の白いパン

ティ姿もナワがしっかりかけられ
てあって大変よろしい。先日申
し上げましたが、全裸よりも、こ
うした半裸、特に今回の啓子嬢の
ような白いブローズ姿は、心ゆく
までいじめて、いや、眺めている
だけでも、決して「あきる」もの
ではありません。男性を悩殺する
こと必至ですね。塚本氏はじめカ
メラマンの方々に敬意を表してお
ります。

繰りかえして申し上げますが、
十二月号のトップの写真は、食べ
てしまいたいほどの女のやわらか
い線がよく出ています。殊にふっ
くらと膨らんだ白い腹部は若妻と
しての魅力をふんだんに持ってい
ます。胸から腹部にかけての食べ
てしまいたいような、なだらかな
美しい線とナワ目の織りなす奇妙

なコントラスト。このグラビヤ
からでも肌の白さが手にとるよ
うにうかがわれます。きっと陽
にも当たったことのない肌でしょ
う。今までになかった素晴らしい
写真だと確信しております。

総合的によかったグラビヤ写
真の中で、第二番目に光ってい
ましたのは、第二グラビヤの第
一頁を飾った梨花悠紀子嬢の写
真です。帽子は黒のバックにと
けこむ黒髪にうまくアクセント
をつけて、白い肌の黒い縄、盛
り上った乳房とくぼんだ大きな
臍窩。全く見事な陰翳を持った
縛り写真です。梨花さんの美し
さを最高度に発揮した傑作とい
うことが云えます。

次号の素晴らしい写真は今から
楽しみにしております。



佐川奈津子さまに捧ぐ

奴隷志願の男より

奴隷の賦

山 本 美 津 男

東京二十二時発急行『月光号』は闇の中を一路終着駅大阪に向って走っている。心よい鉄路のひびきと昼間の疲れに、乗客の大半は夢路をさまよっていた。

「名古屋、名古屋」

隴氣のなかで私は駅員のアナウンスの声を聞き、又何時しか深い眠りにおちた。

まばゆいばかりの朝の太陽が、車窓越しに顔を照らして、私は眼が醒めた。同時に列車は京都駅にすべり込んだ。プラットホームの時計が八時六分を指している。私は飛び起きた。それはあたりの乗客が驚く様な勢だった。

これから始まる私の人生に微な不安と、よ

り以上の期待を持って私は列車を降りた。

三十五歳の今日、私なりに築いた人生ではあった。資本金五百万円、従業員百五十人。いわば中小企業中の中小企業に属する会社ではあるが、人々は私を社長とあがめ、業界からは其の堅実な経営ぶりと営業面での成績からかなり高く評価されていた。其のきずなを絶ち切り、専務なる友人に全権を譲り渡して私は今第二の人生を歩むべく浪花の地に着いた。

輝ける私の第二の人生とは、私が物心ついてから、どうしても振り切る事の出来なかった悲しい性の倒錯、マゾヒストの終着駅『奴隷志願』だったのである。

京都駅から国電に乗りかえ千里ヶ丘の交番で目的地を聞くと、すぐに解った。徒歩にて約二十分、丘と呼ぶのにふさわしく小高い丘陵に静りかえった住宅街。『佐川寓』の木の香も新しい表札の前で私は佇んだ。真新しいダブルの背広に身をつつみ鱈皮のスーツケースを下げた私は、昨日までの会社々長であったが、この宏大な御屋敷にはいささか度肝を抜かされた。

目の前の威厳をこめた門がまえに、一度人を吸込んだら、二度と出ては来られない様な

峻厳さを示している。其の時、すでに私は此の御屋敷に対し、これから御目見得する御主人様に対し、身も心も隷属していたのかも知れない。おそろおそろ呼リンを押して五分ぐらい待たろうか、五十にも手の届こうと思われる老女が重々しく門を開けた。

「どなた様でしょうか」

其の老婦人は旅の者らしい私の服装を一べつしながらも、言葉は鄭重である。

「東京の山本と言うものですが……」

私の口から其のあとには出さなかった。

「ああ、貴方ですのね、奥様がお待ちかねです」

老女にみちびかれて屋敷の中に入った私の背後でギーと、背すじの冷くたる様な余音を響かせて門は閉った。

「此処でしばらくお待ちなさい」

屋敷に入って二、三分は歩いただろう。贅の限りを尽した庭園に見とれ乍ら、老女に従って居た私は我にかえった。其処は御数寄屋風の離れになっている。庭につたわる飛石の向うに見える建物がたぶん御本邸だろう。樹令何百年かと思われる樟が鬱蒼と聳えている。時たま思い出した様にツクツク法師が鳴いた。老女が消えてから、一時間は十分にた

った。お待ちかねです、と言われた奥様は一向に姿を見せない。私は不安と焦慮にかられた。赤とんぼがすいと飛んだ。二時間、三時間、時のたつのにつれて、まざまざと私の置かれていた立場を思い知らされた。

釣瓶おとしの諺通り、秋の陽は既に西にかたむいた。何とも言えぬ優雅な香りと絹づれの音を聞いて眼を瞠った。飛石の間にきらびやかな色彩が映えた。動悸は割れんばかりに高なった。

「其処にお坐りなさい」

雛の縁台に腰かけられて、奥様は言葉少く命令した。私は周囲を見わして困惑した。坐れと言われても椅子も無ければ何もない。ただ良く手入の行き届いた庭土だけである。

「お坐りなさい」

絹を裂く様な悍高い叱咤に思わず其の場に坐り込んだ私を見おろして奥様は「手紙は見ました。充分勤まるのでしょね」

私は突嗟の返答に窮した。何か奥様のお気に召す様な御返事を申し上げねばと思いつつも、其の言葉が咽喉につかえて出て来ない。

「ハ、ハイ」

口ごもり乍ら答える私へ

「前に経験はありますか」

矢つぎ早に聞かれた私は益々困惑した。無いと申し上げれば嘘になる。有ると申し上げるには余りにも悲しい想出だった。それは遠い昔の様に思えるし：昨日の出来事の様な気もする。あれこれと記憶の糸をたどっていると、

「正直におっしゃい」

痺れをきらして奥様は促された。

「ハイ、東京である会に入りまして、其処で少しばかり……」

しどろもどろな私の返事に

「分りました。お前は其処でプロの人等とプレイをしたと言うのですね」

簡単に解釈されて、奥様は厳かに立ち上られた。

「良くお聞き。これだけは、はっきりと言い聞かせます。向う一年間、衣食住つき月一万円でお前を買い取ります。勿論、お前は奴隷下僕として私に供えるのです。然しそれはお前の思っている様な生優しいものでありません。私の言うなり、思いつくまま、お前を使い飼育し折檻します。お前の東京でした事はプレイです。遊びです。此処に遊びはありません。お前の日々は私への御勤めであり奉仕

です。途中つらくなって、お前が逃げ出そうとしても、それは無駄な事です。お前の足にはいつも足枷か鎖がつないであるだろうし、お勤の無い時は、首枷、手枷、海老責等で奴隷のありがたさを思い知らせます。其の上で一年間、無事お勤の時は契約を更新します。又私の氣に入らねば、おひまをあげます。其の覚悟が出来ているのでしたら、今月より主従の縁を結びましょう。もし勤まらない様だったら、今すぐ此処を出ておゆき」

それは峻烈其のものでした。

「ハイ奥様、もとより私は其の覚悟で参りました。私の出来る事なら、どの様な事でも致します。どの様なお仕置を、お受しても異存は御座居ません。御給料は勿体のうございます。唯々奥様の御慈悲で、御そばにおいて下さいませ」

私は精一杯の誠意をあらわして両手をついた。

「お黙り」

あたりの樹木がこだました。

「今、お前は何と言いました。私に出来る事などと……その様な不遜な言葉は許しません。もしお前に出来ない事があったら、出来る様お前のその身体に教え込んでやります。私は

お前達の様な人間をただでは使いません。勿論、それ以上の仕事はさせます。解りましたか！」

「ハイ」

私は恐れおののいて其の場に平伏した。

「お時」

奥様のお呼びに、先程の老女が馳け寄って来た。

「誓約書に署名させなさい」

お時と呼ばれた老女は、手文庫の中より誓約書と筆を取り出して

「これをよく読んでサインする様に」

私は恐る恐る誓約書を一読して署名した。

誓 約 書

一、昭和三十七年九月二十五日から昭和三十八年九月二十四日までの一年間総額金拾貳萬円也にて私儀のすべてを買い取って戴きます。

一、萬一御主人様の意に反したる場合は、減俸、絶食、如何なる御折檻をも甘受致します。

一、期間中逃亡、反抗等の重罪を犯したる場合は、拷問の末転売されるものと覚悟して居ります。

右御誓約致します。

昭和三十七年九月二十五日

山本美津男

御主人 佐川奈津子様

「血印させなさい」

奥様が重ねて命令すると、老女は先程の手文庫の中より刃渡り二十センチぐらいの小刀を取り出して私の前に立ちふさがり

「左手の親指をお出し」

そうとさし出す私の手首をぐっと押え刃先が親指の腹を走った。

一瞬、糸を引いて血潮がにじみ山本美津男と署名した私の名前の下に血痕がきれいな花びらを咲かせた。私より誓約書をお取り上げになって奥様は

「美津男と言うのですね、今からお前を『美津』と呼びます。お時はお前が直接に指導監督して戴く人です。言わば、お前の母代り、これからお時にお母様とよんで良く言つけを聞く様に、お時は美津をよく教育して、若し不都合があれば、どの様な折檻をしてもかまいません、解りましたね」

お母様と私は一度に御返事致しました。

「ハイ、よく解りました」

「美津の服は、私の古いお腰をあげますからそれで着物を縫って着なさい。美津、今から

奴隷の洗礼を行いますから、裸におなり」

「ハイ、有難うございます」

ああ此の感激、私の全身は喜びに痙攣した。私の歩んだ三十五年の歳月が、今此処に実を結んだのです。私は生れたままの姿で其の場にひれ伏した。

「お時、お下り」

奥様の御声を聞いた時、私は頭ごしに其のお姿を拝して全身がふるえました。

私の御主人様のお名前は、もう皆様御存知の事と思います。佐川奈津子様です。

もう何時だろうか、遠くで一番鶏が啼いた様にも思う。私は一生懸命、奥様より頂いたうす桃色のお腰で着物を縫っていた。勿論、針など使うのは始めてである。十時頃までは、お母様に物差で叩かれ叩かれ教わって居たが、さすがに年のせい「今夜中に縫っておく様」言残されて寝所に下った。針は遅々として進まない。それに昼間の、あの強烈なる刺戟が今は疲れとなつて、いつしか私はまどろんだ

「ピシリ」

背中に激痛をおぼえて眼が醒めた。

「何です其のさまは！ 今から其の様な事でどうするのです。」

お母様の鞭が二つ三つ私の背を打った。

「お許し下さいませ」

ただおろおろと謝る私を、お母様は尚も打ちつづけ

「お前がお勤めしてから、何時間になります。今から其の様な事では、この先が思いやられます。お前の仕事は私の責任として、奥様より、どの様に叱られるかと思うと……エー……どうして来れよう」

それは年よりの力ではない。意地わるい一人の女性が久方振に手に入れた一匹の獲物を打ちのめる惨忍なムチだった。

「お許し下さい。お許し下さい」

私は嗚咽の中で謝りつづけた。

「お時、どうしたっていうの。うるさくて寝れやしないじゃないの」襖があいて奥様が来られた。

「ハイ奥様。美津が不仕末を仕出かしまして……」

お母様は一部始終を、より誇張して申し上げると

「美津、本当かい」

奥様のお美しいお顔が柳眉をさかだてた。

「昨日、あれ程お前に言い聞かせたのが、未だ解らない。お時の言つけは私の命令です。」

それにそむいた事は取りもなおさず、私にそむく事です。お仕置は私がします。お時、鞭をおかし！」

お母様より鞭をお取りになつて奥様は、私の腹と言わず背と言わず、ありとあらゆる所を責めつづけた。

「奥様、御許し下さい。悪う御しました」只管あやまる私の口へ、其の場にあつた奥様のお腰がおし込まれた。

「うるさい、お黙り。いくら泣こうが、わめこうが許しませんよ。今後の戒めに、お前に身体に良く教え込んでやります。」

鞭は輪を描いて私の全身に巻きついた。

「よく憶えておくがいい」

奥様の御み足が空をきつて私の頭を蹴った。どうと其の場に倒れた其の時、私は炎ゆる様な真っ赤な蹴出し中に、雪より白い奥様の太股を見た。

あとがき

佐川奈津子様

奴隷第一号として山本美津男が勝手気儘に飛び出しました不躰を御許し下さい。お叱りは充分覚悟致して居ります。この償いは如何すればいいでしょうか？ お呼び掛け下されば幸甚です。

緊縛フオト撮影の実際

△ 答打ちに悶える媚態 V

塚 本 鉄 三

関谷富佐子第二回の撮影

九月二十一日に撮影したフィルムは帰宅するもの、もどかしく早速現像した。

水洗を終るやいなや熱風乾燥機で即乾してとにかく引伸機にかけてみた。

第一回のあわただしい撮影であり、場所にも恵まれていなかったで、勿論思わしいものは少なかったが、中に一、二枚、これはと思うものもあった。とにかく、二枚宛印画した。ポリウムのある美しい肌を取りえのような写真が多かった。

私は写真を約束通り、局留にて送った。

彼女からの返事を持ったが、三日経っても四日経っても、一向に返事は来なかった。

それでも、最初の一週間ぐらひは、毎日心待ちに、まるで恋人からの便りでも待つような気持で待っていたのだが、九月も終り、いっとはなしに忘れてしまっていた。

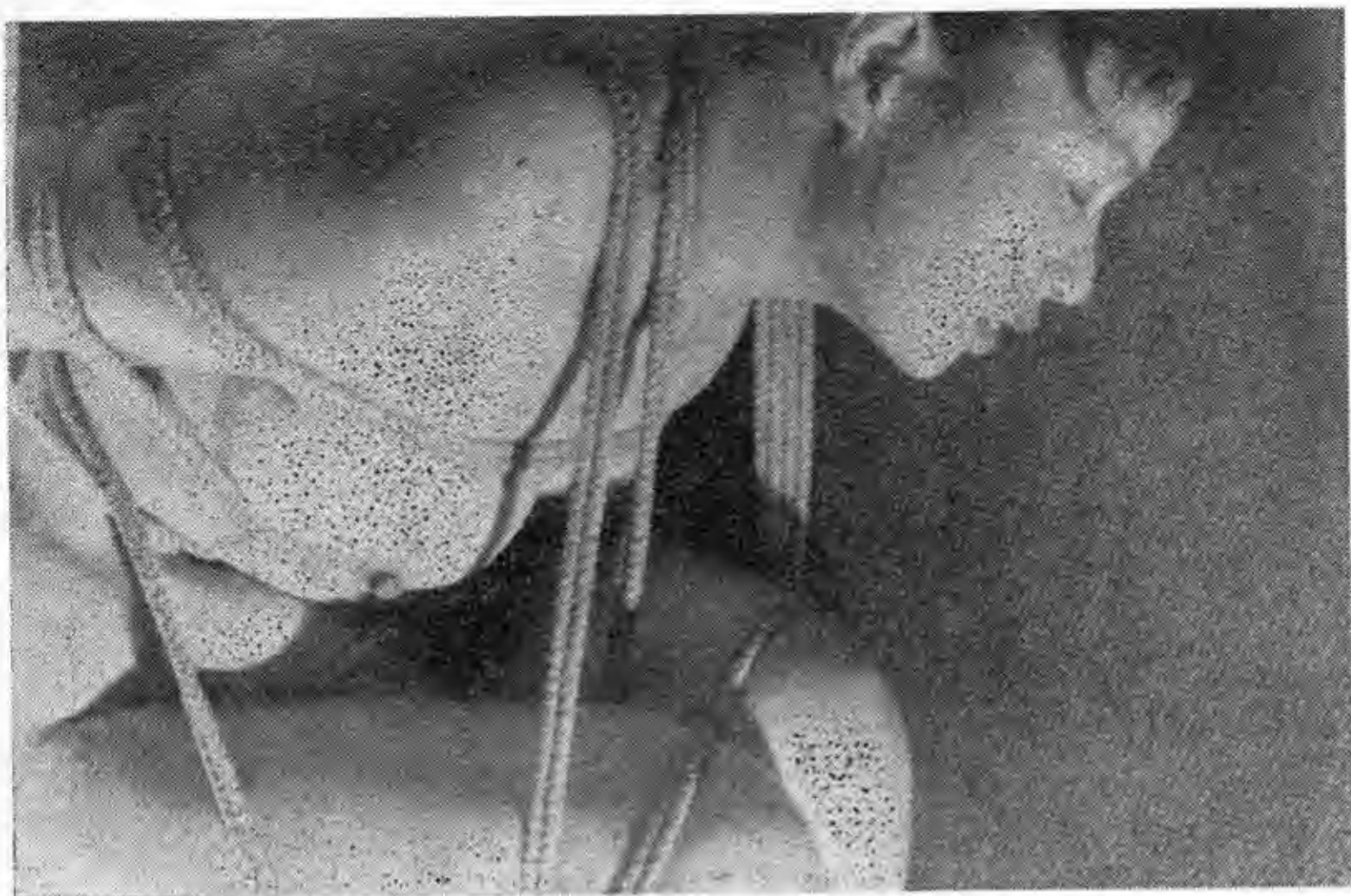
局留では留置期間が十日間だから、若し受取っていないとすれば、返戻されてくる筈だが、戻ってくる気配もない。

或は有閑夫人の気まぐれな遊びかもしれないと、半ば諦めていた。十二月号のグラビヤ

の原稿も印刷所へ回した。巻頭第一頁に彼女の半身緊縛像を載せた。

真夏並みの異常な暑さで過した九月中の気温も、十月の声を聞くと、めっきり秋らしくなってきた。殊に朝夕は手足の先が冷たくなるくらいの冷え込みようだ。

十月四日朝、彼女からの手紙がきた。封を切るのも、もどかしく内容を読む。五枚の便箋にぎゅちりと書かれた文字を辿ってゆく私の目は、次第に輝きを帯びてきた。その便りというのは――



長らく御無沙汰いたしました。

先日は沢山の写真をお送り下さいまして、本当にありがとうございます。早速お礼状を出さなければなりませんのに、今までほっておきまして申しわけございません。

こんなに大きく写していただいた自分の写真を見るのは始めてでございますので、最初はこわいような恥しいような気持ちで手ばかりがふるえて、はつきりと、よい見ないような有様でした。頂いた写真を手の中で、トランプでも切るように、ちらちらと眺めながら、あっちへやったり、こっちへやったり、一枚、一枚、ゆっくり眺めたのは、大分経ってからでございました。縛りといいたしましては、自分でも余りきついものではないと思っておりましたのに、こうして写真にとっていただき拝見しますと、刺戟が一段と強いように、なんだか変な気持ちがいたし

ます。

主人も「大分ゼイ肉がついてきたナ」と冷やかし半分に写真を鑑賞していましたが、あれから、二、三日は、ずい分ひどい折檻をされました。

でも、なんと申しまして、貴方様にはじめて縛られました、あの時の感激は忘れることはできません。ベテランの方に縛られたい貴められたい、答うたれたいという強い念願が、やっと果されたのですもの。それに、こうして、お写真にまでとっていただき、御便りでは、念願通りグラビアにまで載せていただけなのですってね。

私の縛られたポーズが、全国の愛好者の皆さまの目に触れるのかと思うと、今から胸がドキドキいたしますわ。もっともっと勉強して、よいポーズをとっていただきたいと思えます。

それで、大変あつかましいお願いなのですが、もう一度是非、この間のように私を厳しく縛り上げて写真をとってほしいのです。この前の一回でも、お忙しいところを大変御無理を申し上げまして恐縮なのですが、もう一度お願いしたく存じます。

どのような激しい縛りや責めでも甘んじて

お受けいたします。この前のお便りでも書きましたように、私はきつければきつい程うれしいのでございます。

主人も少々の縄や痕やムチの痕だったら、構わないと申しております。いや、実のところ、私の身体に跡が残っている方が主人も喜んでいるのかもしれませんが。この前の手首に残った縄のあと二日ばかり消えませんでしたけど、別になんとも申しておりませんでした。

まことに一方的なお願いばかりで申しわけございませんのですが、六日の土曜日、午後二時、阪急西宮駅前まで御足労下さいませんか。写真をつつします場所は、主人が探してくれました知り合いの家で、耳の遠い老婆が一人留守番をしているだけです。

駅から車で十分ばかりのところですから、時間的にも便利ですし、第一誰に気がねする必要もございませんので大変都合だと存じます。駅から私が御案内申し上げますから、何卒駅前まで足をお申し下さいますようお願い申し上げます。

それから、もう一つお願いがございます。私は吊り責め、浣腸責め、などに全身きりきりに縛られた上で拷問にしていたきたいの

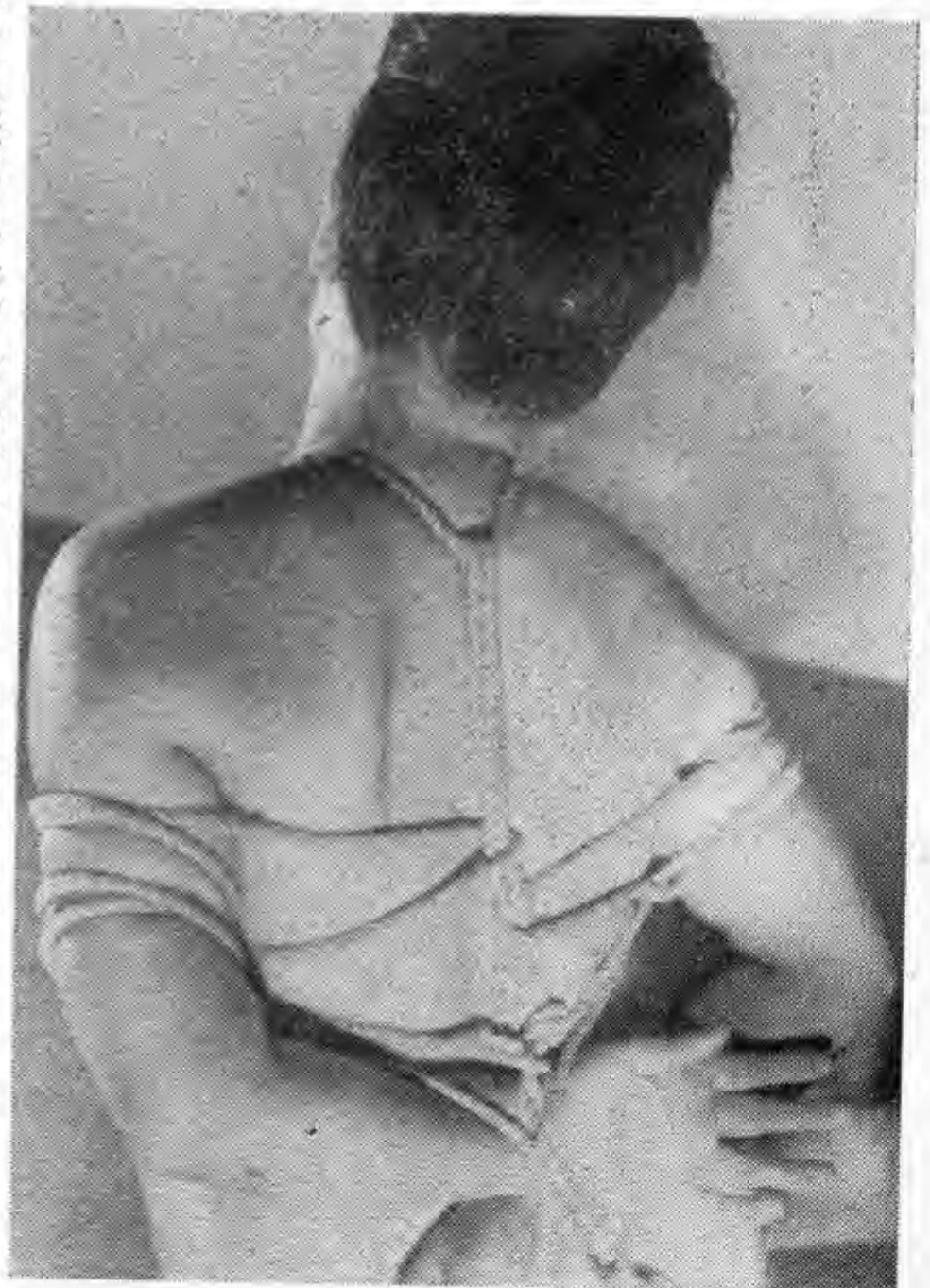
ですが、次回私は私がムチを持ってまいりますから、どうか激しいムチウチを直接肌に加えていただきたく存じます。

女の私から、このことをお願いしまして、

大変はしたないとは存じますが、私は結婚以来、主人から激しいムチウチに仕込まれ、時には失神するまで打たれることがあるくらいです。それで、一度、他の男性の方から、心ゆくまで打っていただきたいと願います。

どうか、思うままに私の肌をうちのめしてそのときの激しい表情の変化を、お写真にとって下さいませ。

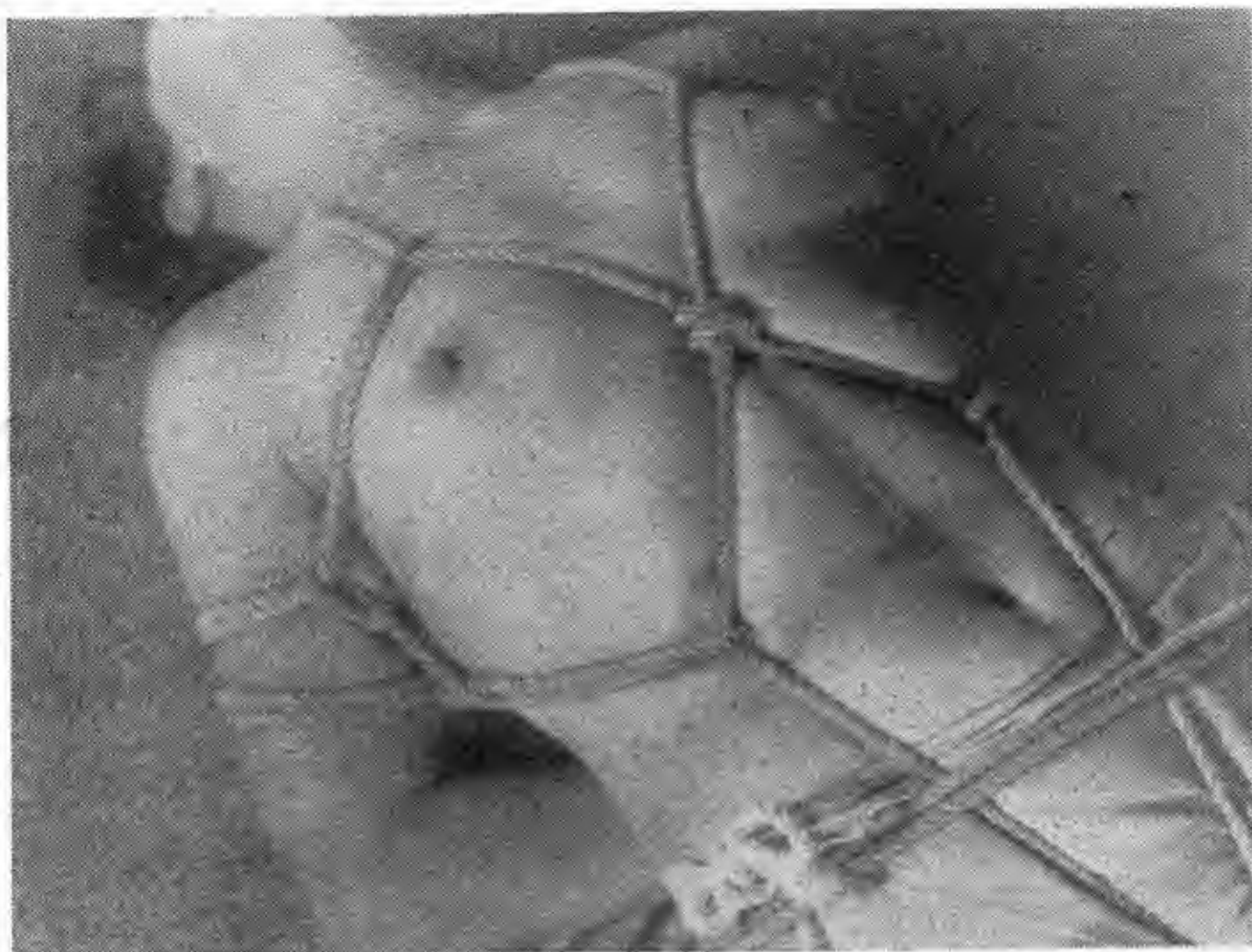
吊り責めや浣腸責め、操り責めなんかにつきましては、余り自信はございませんが、ム



チウチでしたら、全身をのたうたせて激しい感情を出せると思います。なにとぞ、お写真にとって下さいませ。

二階の奥の十帖の部屋が、たしかにあいている筈でございますので、あすこでしたら、少々の物音ぐらひは外へ聞えることはございません。若しも、私が悲鳴を上げるようでしたら、御遠慮なく本格的な狼ぐつわをかまして下さって結構です。

狼ぐつわにつきましては、この前お逢いし



ましたとき申し上げましたように、特別の関心は持っておりませんし、主人から受けるプレイのときは、猿ぐつわはいたしております

ん。でも、貴方様の御話によりますと、最初猿ぐつわに無関心だった或るモデルの方も、一度本格的な猿ぐつわをされてからは、それが放せなくなったとのこと、私も指導していただきたいと思ひます。

とりとめのないお願いごとばかりを長々と書きつづりまして、大変御読みづらいことと存じます。

どうか、身勝手なお便りにお怒りにならず私のためにお暇をさいて下さいますよう重ねてお願い申し上げます。かしこ

十月二日

兵庫県西宮市西宮局留

関谷富佐子

追伸

次の連絡場所は西宮局留にさせていただきます。変りまして御面倒とは存じますが、どうぞよろしくお願い致します。

六日といえは明後日である。

私は早速手帖をくってみた。幸

いに他に何にも予定の用件はなさそうである。私は関谷富佐子に対する第二回目の撮影の構想をあれこれと練った。彼女からの便りによると、どうも第一回目は手ぬるかったようである。初対面のぎこちなさと場所と時間に制約されて、思うように腕をふるうことが出来なかったと弁解すれば、どうやら負けおしみになりそうだ。

今までも、初対面で一時間半ぐらいの時間しか与えられなくて緊縛フォトを撮影したことも度々経験している。

例えば、美智子さんに似ているといわれた美貌の持主、春丘リルさんにしても、たった一回の初対面の機会に撮影したもので、三十五年九月号のグラビヤを飾っている。「怨嗟とあきらめ」なんか、よく被縛姿態の表情を出している。又、近藤一氏が激賞しておられた津川路子さんにしても、初対面の撮影で、同じ号のグラビヤ「不安と羞恥の嘆願」として掲載されている。

いずれも姿態といい表情のとり方がすぐれていて、カンがよいので撮影者の二言三言の注意で思い通りに動いてくれ、比較的よい写真がとれている例である。しかし、誌上に掲載しないものの中には、失敗の例も決して少

くない。やはり、モデルとなると女性の適不適が決定的な条件になりそうである。

その点、関谷富佐子さんは、恵まれた素質の持主であるといえる。第一回の写真で、成功したという写真がいささかでもあったとしたら、それは総てモデルの良さに負うところのものであろう。その意味合いからしても第二回目の撮影には、私は大いに期待し意欲を燃やしていた。

十月六日（土）快晴

土曜日の午後に殊の外車が多い。野田阪神のガード下をくぐってから、淀川を渡って尼崎に至る阪神国道の車、車、車にもまれ一路西下する。車中は上衣も脱ぎなくなるくらい秋日和。

駅前の広場に車を停めて待つ程もなく、きゆうとブレーキの音がして背後にタクシーが



止まると、彼女が降りてきた。五分と待たされぬ、まさに時間勵行である。

今日の彼女は和服である。髪にリボンをつけたところは、どう見ても若奥様とは見えない。結婚適令期の娘さんのようである。ぷんと香水の匂いとも体臭ともつかぬものが鼻孔をくすぐる。どうやら今日は、彼女は若づくりをしてきたらしい。

彼女の指示に従い踏切を横断して山手へ向

って車を走らせる。二言三言、軽い挨拶まじりの言葉を交す。上品で落ち着いた話しぶりである。アクセントは関西なまりだが、言葉はしっかりした標準語だ。

田園に囲れた舗装路を疾走する。甲山のまろい森が目の前に見える。坂道を登って黒松の樹立の中に滑り込むと、一戸建のかなり広い家があった。生垣の脇に駐車して、荷物を提げながら、こんもりと樹の茂った庭を通過して玄関に入る。

ひやとした空気、閉めきっているのか、外の明るさに比べて真暗な感じである。廊下をつき当って階段を上ると、南に面した奥の部屋に案内された。十帖はゆうにある広い和室である。畳の上には籐の敷物が一ぱいに敷きつめられてある。

秋の日ざしが硝子窓越しにカーテンに当たっている。五十ぐらいの老婆がお茶を持ってきて、すぐ帰っていった。

時計は二時二十分を指している。この前と

は違って、なんとなく落着いた気持であるし初対面と違って、一度緊縛ヌードを写した、写されたという間柄であれば、黙ってテーブルの前に坐っていても、心に通うものがあるような気がする。

私はいろいろと彼女に訊きたい事柄があった。しかし、それよりも時間が惜しかった。私はお茶を一口、口にふくむと、すぐ立ち上って、撮影の準備にとりかかった。

窓の反対側は傷のないきれいな壁である。これをバックにしようと思った。簾の敷物は畳とは違った面白い感じを出してくれるだろう。パタフライをつけた彼女は、ブラジャーはどうしようと訊ねたので、それは除いてもらうよう返事した。

裸身に喰い込む縄

学生時代はバレーの選手であったというだけあって、よく発達した筋肉、だぶだぶしたところは、いささかもなく引き締った堅ぶとりの肩先から二の腕。

背後にまわした両の手首に縄を掛けてしめつける。いつものことだが縄のはじめを両手首から掛けてゆくと、ここが一番きつくしまり、時間が経つにつれて、縄が手首の肌に喰

い込むくらいになってしまふ。先日関谷さんにしても、手首には相当、縄の痕が残っていた筈である。

「この前のとき、縄のあとが大分残っていたでしょうね。」

私は縄を掛けながら言葉をかける。

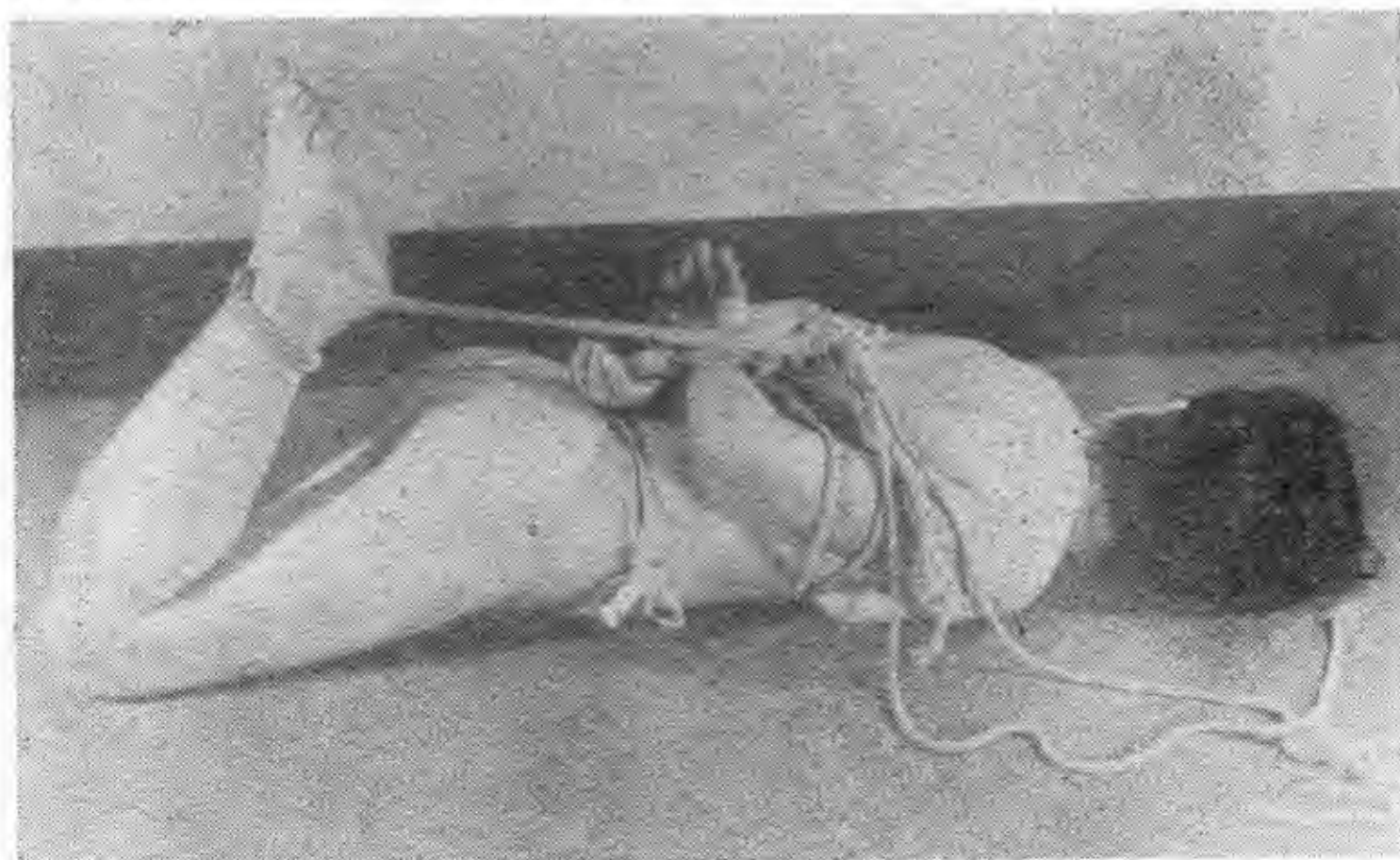
「ええ、三日ぐらいは、とれませんでしたわ」

「ああ、そうですか。相当手加減はしたつもりなんですが、……」

「いいえ、いいんですの。主人も縄のあとがうんとつく位縛られて来いと申しておりますし、私もそれぐらいきつく縛られる方が嬉しいんですの」

「そう言って貰えれば、私の方も気が楽ですが、実のところ、きれいな肌に縄のすり傷がついたりしては、と思って大分気がかりだったんです。人によっては、縛ったところが、黒く色変ったりしましてね」

「皮下出血というんでしょうか。私は、そんなものにはならないと思いますけど、でも、縄の痕のことは御心配いりませんのよ。場所の都合さえつければ、吊り責めもして頂きたいと思っていますくらいですも



「吊り責めは是非やってみいたですね。今、大阪の下寺町でお寺の庭をかしてくれというところがあって、先日下見にいったんですが、丁度吊りに手頃の松の木が庭にありましてね。梯子と滑車を使ったら、逆さ吊りでも出来ると思います。梨花さんの吊り責めの写真、今度のとき、お見せしましょう」

私は彼女と話をしている内に、彼女からの便りの文章を思い出した。すると一層意欲が起ってきて、思わず縄を持つ手に力がこもって力いっぱい締めつけていた。

身体をエビのように二つ折りに曲げて、膝と首とを連結して、ぐいぐいと締めつけた。どのような縛り方が彼女の最もお気に召すのか、今の私には一向にわからない。どのような縛り方が好きなのか、というような愚問を発しても、急にはっきりした返事を期待する方が無理だろう。

とにかく、少々の縄の痕なんか辛抱する、いや、あった方が嬉しいというのだから、力いっぱい、ぐいぐいと締めつける。若しヒューズが切れたら面倒なので、三〇〇ワットの写真電球を二灯使用して、撮影を開始する。

窓の外は松林なのだが、カーテンをのけると室内に射し込んでくる秋の斜光線が煩しい

ので、適当に被写体に当らぬようにカーテンを引いておく。電光に映えた白い肌がまぶしいように輝く。

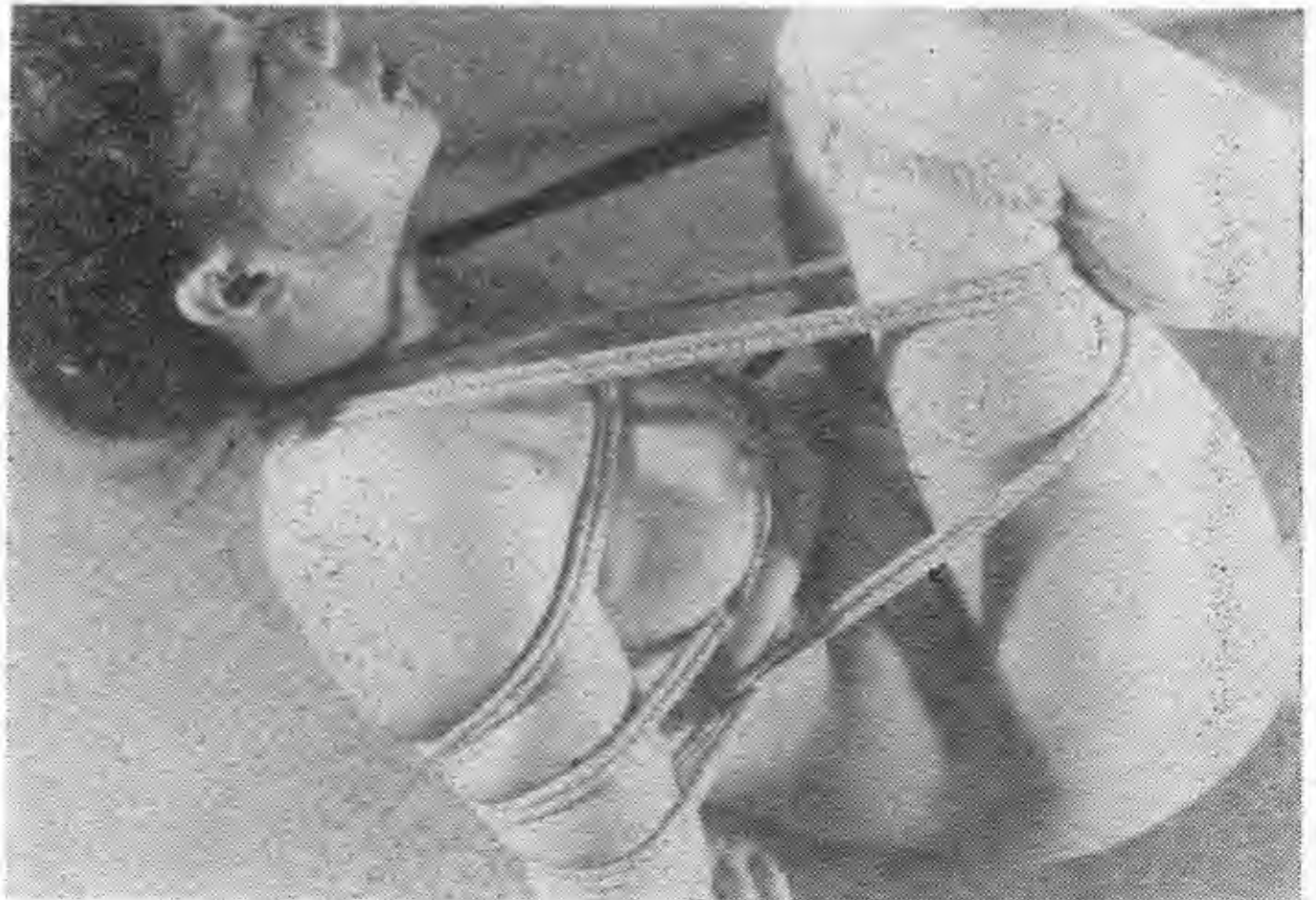
五枚、六枚、ポーズを考えてシャッターを切ってゆく。

エビ縛りのまま、固い簾の上に押しこめられると、下になった両手首や二の腕が、いかにも痛そうである。彼女は瞬間、疼痛に顔をしかめるが、しかし、その瞬間の表情はカメラにキャッチすべくもない。

単なるモデルだったら、こんなとき痛いとか、嫌だとか、もうやめとか、いろいろ文句を言う者もいるが、さすがに関谷さんは、自ら志願してきただけあって、そんな弱音はおくびにも吐かない。

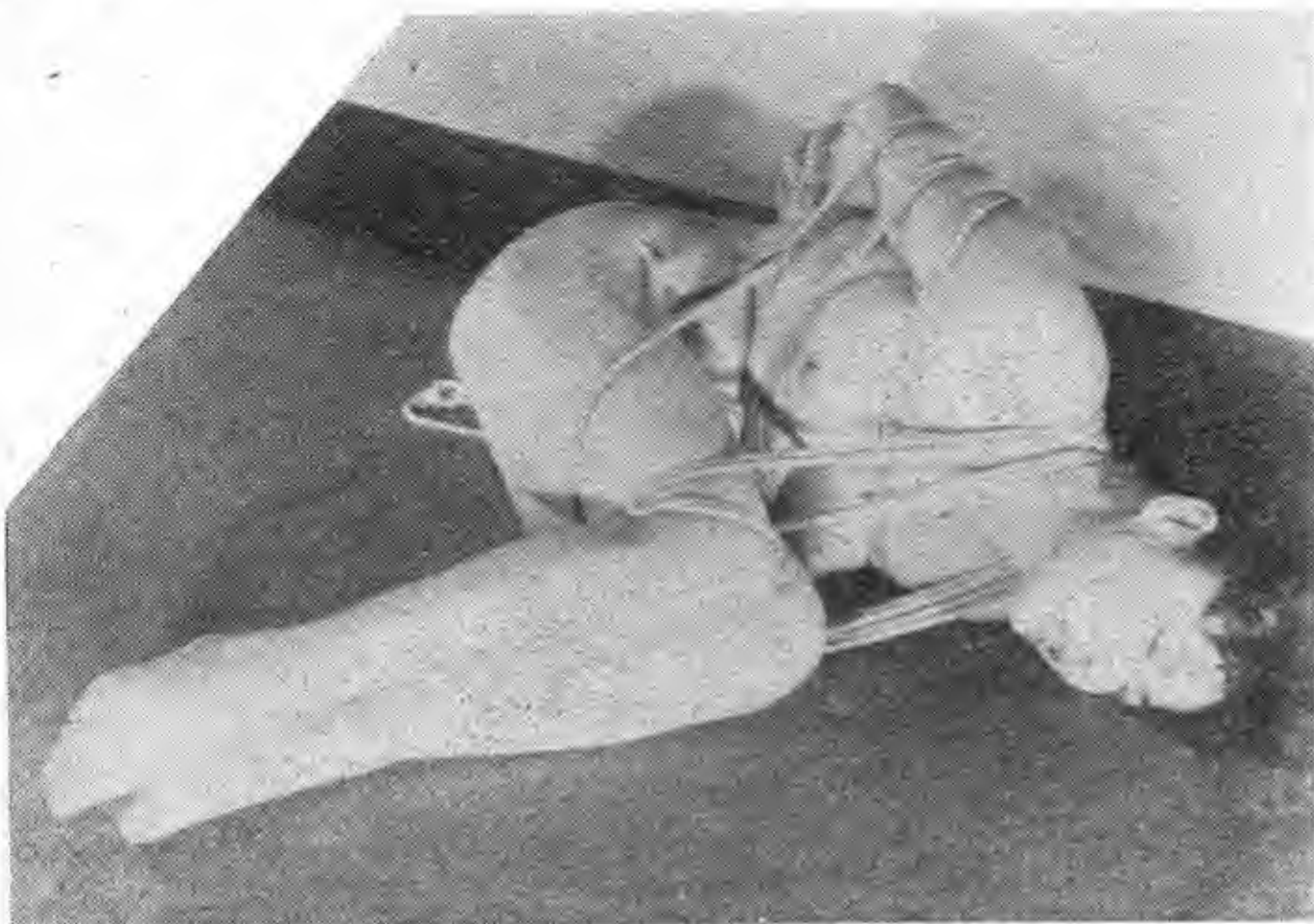
手首が腕が、自分の体重の下になつて放置されているのが、長ければ長いほど、その陶酔境が強いのかもしれない。うっとりとした表情を狙って、次々とシャッターを切る。

そんなポーズの彼女の全身を、足の爪先から髪の毛まで、ゆっくりと嘗めるように見まわしてから、なんとか、彼女の悦虐の激しい



表情を出してやろうと考えた。

先ず、足の裏から、脇腹にかけて擦ってみた。後手首を背後で括られ、両膝は首に連結



されているので、私の執拗な揉み責めに対して、彼女は全身をひくひくと動かし、芋虫のように這いまわって、逃れようとするだけで

観念したように一言も発しない。

嘗て、東浦ひかる嬢に揉み責めを施したときは、全身を波のようにのたうたせて、ころげまわって苦しんだが、関谷さんは、曲げられた足を伸ばそうとして上半身が起き上り足の裏をくすぐられるときは、足の指をくの字に曲げたり真直ぐ伸ばしたり、ぐったりしたところをパチリと撮る。

東浦ひかる嬢のときもそうであったが、八ミリだったら、恰好の被写体になったかもしれないが、スチール写真だったら、あのように、ごろごろところげまわって苦悶したら、写真のとりようがない。だから、一時、カメラの方はおあずけとして、揉み責めオンリーで果してどの程度、耐えられるものか、或はどのような表情が出るものか、更に一層激しい揉みの触手をゆるめなかった。この時、今まで、一言も発しなかった彼女が、「ムチウチしてムチウチして」と呟やいたのである。ここで私は、今更のように、彼女からの便りを思い出し、そして、腕

時計を見た。針は三時十分を指していた。

ムチ打ちの快味

彼女のバッグから取り出した責用のムチ。それは、彼女が御主人との激しいプレイに十数度いな数十度の使用に耐え、彼の肌の脂を吸った柔軟な革製のものである。

(主人から失神するまで打たれたことがあると言っていたが……)

私は心の中で、そんな独り言をつぶやきながら、エビ縛りの彼女の臀部に、最初の一撃をふり下した。

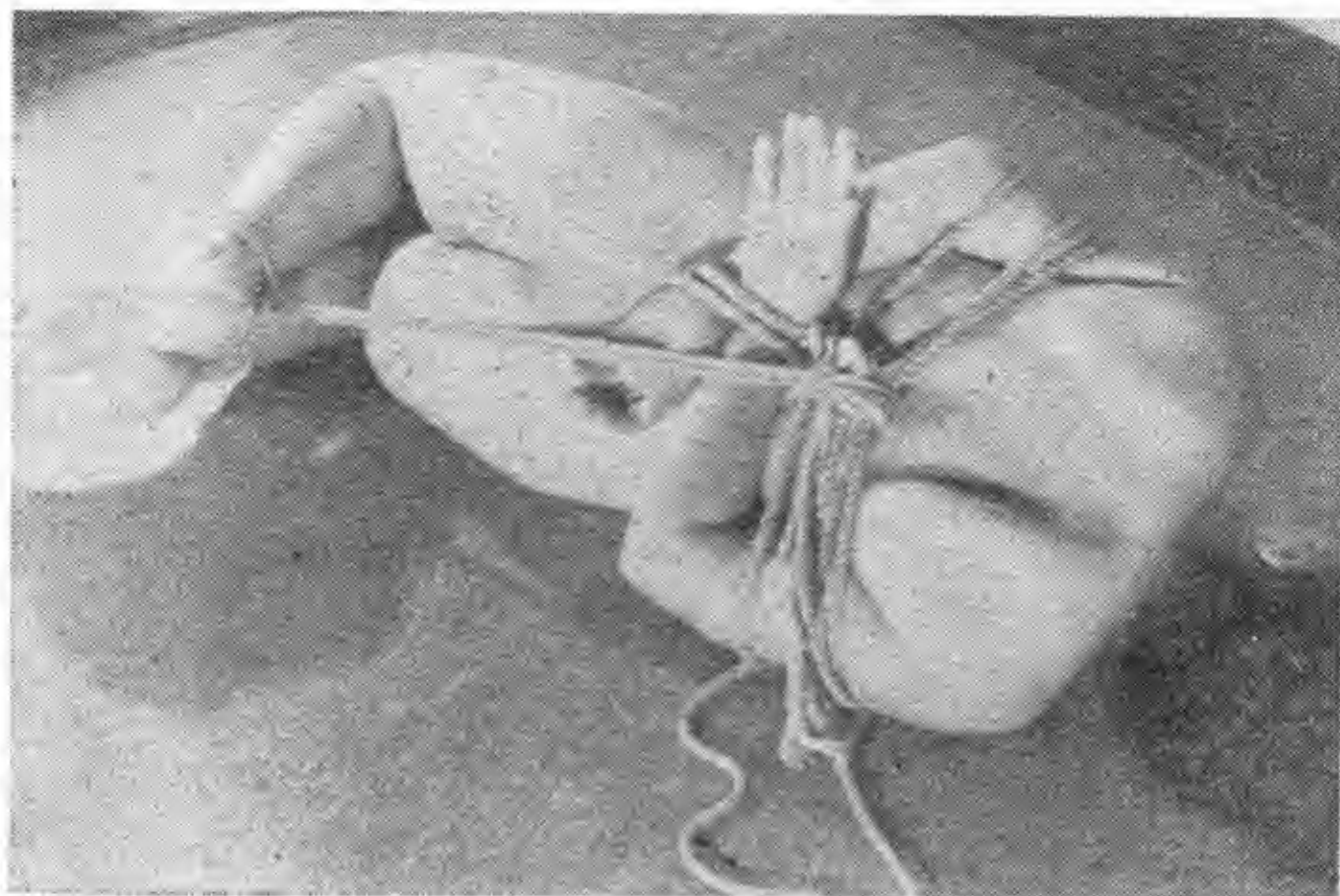
その一撃に対する彼女の反応は全く見事なものである。

びくっ！と、とびあがるように疼れんした全身が、縄目の喰い込むのもかまわず、激しい伸縮をした。素晴らしい躍動！

続いて、二撃、三撃、

忽ち、真白い臀部の肌に、真赤なムチのあと、そのたびに跳ねあがる全身。

それからは、もう無我夢中でムチをふるった。打っては、全身の表情を鑑賞し、鑑賞しては、更に激しい表情の変化を求めて強打する。一面に真赤になった肌に、幾筋ものミミズ脹れがふくれ上っている。



「イタイ、イタイ、イタイ」
微かな悲鳴が、遠慮しがちな悲鳴が、もしも、それが私に聞かれて、手加減するのを恐

れているような聞きとれないくらいの微かな悲鳴が彼女の口から洩れている。

それでいて、ムチうたれるたびに、彼女の全身の反応は益々派手になってくる。臀を打たれば、転げてうつぶせになり、股をうたれば、転げて横になる。肩先は臆でこすれて、赤い痣とさえなっている。

私は、ところ嫌わず、目の前にあらわれた肌目がけて、力いっぱいムチをふりおろした。彼女は疲れを知らぬもののように、相変らず、ムチが肌に当たるたびに、ビクッと反応している。ミミズ脹れのあとは、熱くはれぼったく熱を帯びている。打って打って、打ちまくる。

この時、私はカメラがお留守になっていることに気がついた。

この素晴らしい表情をキヤッチしなくては、と、私はあわてて、カメラのところへ走り寄った。ムチ打ってはシャッターを切り、シャッターを切ってはムチ打った。

(この時の写真の多くは、被写体が動いていたので、ブレてしまったが、そ

の中でも表情の比較的うまく撮むことが出来たものは、今月号のグラビアに載せた。)

私にしても、このような激しいムチ打ちの経験は初めてだった。激しい女性の被虐にもだえる真の姿を見た。汗にまみれてムチ打ちにもだえる被虐美の極致が、関谷夫人によって演じられているのだった。

私は、その時の激しい感情に動く、彼女の足の爪先から手の指先に至るまで、カメラに代って肉眼でつくずくとよく見た。悲しいかな、ストロボを持って来なかった私は、この激しい動きを示す被写体をキヤッチするすべはなかった。只、万に一つの僥倖を願って、シャッターを切るには切ったが。

やがて、はあはあと息をつく彼女も疲れたし、私も疲れた。そこで、静止したところを狙って、再びカメラが活躍した。

長い時間のように思えた。

それほど、私は疲れていた。肉体よりも気分の方が――。

時計を見ると、まだ四時には間がある。

私は彼女の縄を解いた。二の腕の縄のかかった跡は、赤く縄ずれがしており、肩先、膝頭は臆ですれ、皮がむけたようになっていた。縄の締った太股は、ぐっと窪んだ縄目が

縄の目そのままに、くっきりとついている。

しかし、彼女はぐったりと伸びたまま、放心したように起き上ろうともしない。

ムチを持って近寄った私に、彼女は更に言った。

「もっとムチ打ちして——」

彼女は両手を体側にだらりと伸ばしたまま、うつぶせになって、全身の力をぬいている。

今まで、幾筋ものミミズ脹れにはれ上っていた臀部を見ると、あら不思議、すっかり脹れが引いてしまつて、もとの白い肌にかえっているではないか。

と、いっても、ところどころ、強打したところに、あたかも水蜜桃のいたんだような痕が残っていたが。しかし、そんなことはもう、どうでもよい。

固ぶりの豊かな双丘に、びしりという弾きかえるような、あの反動、あの感触。

打たれるたびに、飛び上り、跳ねかえる女体。私は、そのたまらない瞬間を狙って、手にしたムチをふり上げていた。

ピシッ、ピシッ——

縄に束縛されていない彼女は、自由にころげまわった。だが、自由なように見えて、やはり彼女は、私が打ちよいように身体の方

を心掛けていた。なるべく打ちよいように。

右手が疲れば、左手に持ちかえて打ち、左手が疲れば、右手に変えた。

ぐったりとした彼女をおいて、トイレに立った私が帰って来ても、彼女はまだ、さっきのままのポーズで長々と伸びていた。

四時二十分。

丁度、この部屋を訪れて二時間経過していた。長い長い時間のようでもあり、又、考えようによっては、一瞬間のような短い時間のようにも思える。

満ち足りた表情の彼女と、駅前で別れると私は再び車の渦まく阪神国道へ出た。

つるべ落とし晩秋の日が、街路樹のかけを長々とペーブメントに投げかけている。身体はさして疲れていないにも拘らず、気ばかり十里の道を歩いたように疲れきっていた。そして、私は、余りにも彼女のペースに完全にまき送まれ、プレイに終始してしまったことに気がついた。

或いは、あの離れ家へ案内した、その時から、彼女にその魂胆があったのかもしれないと思った。それにしても、あの、ムチにのたうつ美しい彼女の媚態は見事なものだった。

うねうねと白蛇のように、のたうちまわる彼女の白い全身像が、私の臉の奥にやきついて、ありありと浮かび上ってくる。

「今度は、九日の二時に、ここでお待ちしていますから、それから、お写真もお願ひいたしますわ」

別れぎわに囁やいた彼女の澄みきった声音が、未だ耳朶に残っているようだ。

そうだ。今度こそ、彼女のペースに巻き込まれないように、十分予定を樹てて、二時間の時間を最大限に活用して、素晴らしいものを撮ってやろう。——私は彼女の幻影をうち払うようにして、そう決心した。

今日の無茶苦茶にシャッターを切った写真の成果には、心もとなかった。満ち足りた心と何か中途半端な、食い足りない気持の交錯した落着かない気持のまま、私は御堂筋を南へと疾走していた。

ムチに喘ぐ関谷富佐子の肉づきのよい胸が腹が、彼をうっている。

ムチに跳ねあがる白い女体が、フロント・ガラスいっぱい映っては消えた。

今日の写真は全部失敗であっても構わないという気持が、次第次第に私の心の中の大部分を占めだしてきた。

女軍対女軍、女斗秘聞

霞ヶ城女合戦

加賀淳史

関ヶ原の戦の時であつた。加賀の城主前田利長は、百万石の家を守るべく、東軍徳川家康に味方をした。しかし、その父大納言利家は人も知る豊臣方の大黒柱であつただけに、前田家の一族には、なお秀吉の恩顧を感じて西軍に味方する者も少くなかつた。その中、特に聞えた者に、利家の甥に当る、慶次郎利丈、小三郎利政の兄弟があつた。兄の利丈は天下に勇名を知られた加賀随一の剛の者であつたが、奇行が多く、当時は既に叔父利康の怒に触れて出奔し、親友直江山城守を頼つて

上杉家に身を寄せていた。従つてその領地春江の城には弟利政が拠つていた。彼は二十を越えていくばくもない若者であつたが、剛勇兄に劣らず、しかも節を守つて西軍に呼応し利長始め一族の背恩を責めること頗る急であつた。従つて加賀の家臣の中にも利政をよしとする者も多く、前田藩は恰も東西二つに分れ、当主利長にとっては、その誠意を家康から疑われる恐れがあつたのである。そうこうするうちに、戦は進展し、西軍は京都の伏見城を攻撃するに當つて利政の出動

を促がした。利政は即座に應じて、精銳一万二千を率いて伏見城攻撃に加つた。一万二千と云えば、利政手勢の殆んど総数であつて、従つて春江の城には女子供以外には、千名足らずの守兵しかなかつたのである。

これは利政を目の上のこぶとしていた利長にとつては、それを取り払う絶好の機会であつた。彼は直ちに前田全領に檄をとばして、同じく一万の大兵を集め、弟利常を総大将として、急に春江城を攻囲したのである。時に慶長五年春三月のことであつた。

一千の守兵に一万の敵兵、春江城の運命は推して知るべきであつた。こう見ると利政の出軍は如何にも不用意の様に思えるが、しかし何と云つても利政と利長は従兄弟同士の間柄である。如何に主張は違え、他方の留守中に、その城を屠る如き不義理は、武士道の上からも、加賀百万石の面目にかけても、到底考えられぬ所であつたし、又万一そういう事態が起つたとしても、まだ北国の雪は深く大軍の行動は容易でなく、春江近傍の諸城主は多く利政の味方であつたから、そうと知つて利政が帰城する数日を支えることは、必ずしも難事とされなかつたであらう。さればこそ、利長も利政の還らぬ中に一挙に春江城を屠るべく、稀有の大軍を集めたのだし、また利政に心を寄せる諸城主もこの大軍を見ては藩主利長の本腰を察して、春江城救援をためらつたのも無理からぬ所であつた。

ただ、今一つ利政の頼みとするものに、その新妻白妙姫のあやつる女軍があつた。

彼女は、大納言万里小路広房の息女、当時洛中一の美女と聞え、利家の申し入れもあつて十五才で利政に嫁したのが三年前。この姫、高貴な深窓に育つた可憐な容姿に似ず、静流の薙刀をよくする女丈夫で、春江の城中の人

となつてからは一層武芸に励み、侍女達にも手づから薙刀を教え、遂にはその中の精鋭を選んで一軍を作り、春江女軍と名づけていたのである。

しかし、如何に術にすぐれていても、女は女、しかもその数三百名足らずでは、果して実戦の役に立つかどうかは、共に危ぶむ所であつたのだが、利政の眼力に狂いはなかつたのである、利常勢が、女、子供のみの城何程のことやあらんと侮つて、もみにもんで押寄せたのが、この白妙姫の女軍を中心にした一千余の小勢に散々に打ちなやまされて意外の敗北。春江女軍手剛しと知つて、姫さえ討てばと、次々に一騎打を挑んだ前田の勇士達も片端から討ち取られて、二日経つても三日経つても城は落ちそうにない。

驚いたのは利常である。こんなことでは兄利長に対して面目ないばかりか、もう一、二日も手間取れば、急を聞いた利政が軍を返して来るのは必定。とすれば、あの勇猛の利政の大軍と、この女軍とを前後に迎えては万に一つの勝目もありようない。春江城の白妙姫以下が敵将の首実験をして意気揚々としてゐるにひきかえ、利常の陣中は、憂雲に閉ざされていた。

その時、苦慮している利常の前にあらわれた、うら若い乙女があつた。彼の娘楓姫である。これまた年は十七ながら、その美麗な容貌と男も及ばぬ大力をもって、今巴のあつた武勇の姫。この時も父に従つて合戦に臨んでいたのであるが、利常に向つて言つた。

「お父上、余りに不甲斐ない、味方の武士ども。明日の戦は妾にお任せ下さいませ。」

「そなたに任せとは、白妙姫と一騎打をしようとのつもりか?」

「もとより、あの姫一人討ち取らば、城は忽ち落ちまする。」

「ウム、しかし、その方の大力もさることながら、名だたる勇士達も、一人として齒の立たぬ彼の姫の手練、一騎打ちは危うて許せぬ。」

「わたくしが見まするに、白妙姫の武勇はさ程、恐るるに足りませぬ。ただ男達は彼女の美貌に目がくらみ、または利政殿の妻なる為の後難を恐れて真に討つ気なく、生け捕りにしようとして不覚をとっています。妾ならば容赦なく、彼の女の首とお目にかけまする。」

「わしとて生け捕りにしたかつたのだが、かくなつては他に手もあるまい。しかし、姫を

討たれて、あの利政が激怒したとなると、前田一族が血で血を洗うことになるが。」

「そうはもう既に覚悟の前、それよりも、このまま春江の小城一つ抜けずに軍を返せば、前田一族は馴合の戦をしていると徳川殿に疑われる方が、お家の大事ではありませぬか、利政殿が後に如何に猛ろうと、徳川殿の後ろ楯があれば、何で恐るるに足りましょう。大義親を滅す、ここは白妙姫の首一つで、加賀百万石が救われるか否かの瀬戸際でござりますぞ。」

楓姫の言う所、理路井然、大局をあやまらぬ名言の如く見えて、実はその裏には恐るべき私情も隠されていたのである。

というのは、楓姫も白妙姫とは同年、幼い時から利政に想を寄せていたわけで、一族の者達も豪勇の利政と、今巴の楓姫とは、まさに似合いの夫婦と取沙汰していた、利長、利常もそれを願っていたであろうに、利政はそれを見捨てて思いもよらぬ白妙姫を京から迎えてしまった。いわば憎い恋敵、そのつもる怨みをはらす、絶好の機会が来たのだから楓姫が意気込むのも、無理はなかったのである。利常もそれを察したが、私怨にあせって楓姫の方が討たれのでは何にもならない。

「そなたの申すことも一理だが、かの姫もそなたの手並はよく知っています。思わく通り一騎打に應ずるかどうかじゃ。」

「それには一策がございます。妾が一騎打を求めても応じますまいが、こちらも女軍を編成して挑めば必ず応じます。」

「わが方に女軍などないではないか。」

「近くの諸城から武術の心得ある侍女共を狩り集めて作ります。」

「そんな寄せ集めの女兵で、何であの精銳の春江女軍に敵し得よう。」

「いいえ、これで決戦するのではありません。これはほんの敵を誘い出すおとりの兵、弱い程よいのでございます。今勝ち誇っている白妙側には必ず深追ひして来ます。そこを伏せ勢をもっておしつづみ、白妙姫はこの楓が討ちとります。」

(ウーム、嫉妬のおそろしさとはいいいながらわれわれも三舎を避く名案じゃ)

利常も舌をまいた。

かくて三月八日の朝まだき、古今未曾有の女合戦が、春江城外で行われたのである。ともにうら若い乙女同志が、武装も凛々しく、春江女軍は白旗を、楓姫側は赤旗をひらめかして入り乱れての斬り合いとなったが、一人

一人が何れも難力の上手で、既に戦の場数を踏んでいる春江女軍に対して、何で烏合の衆の楓姫の女兵がかなうべき、みるみる白旗の女に倍する死体を残して散を乱して敗走する。と見て、白妙姫は勇気百倍、これが利常側の計と悟らず、部下を励まして急追数里、思わずも城から遠く離れた大野川の畔まで来て、ハッと後を振り返ったその時、突如起る銃声を合図に川岸にひそんでいた利常方の精兵五百ばかりが、一度に立って左右から春江女軍をおしつづんだのである。

(素破、敵のはかりごとにおちたか)

流石に白妙姫も顔色を変えたが、よく見るとその伏勢の数は意外に少ない。もしこれが大勢であつたら、彼女も危機を察して脱出を図ったのだろうか、これしきの敵なら恐れることはないと踏み止ったのがかえって運の尽き。しすましたりと楓姫は馬首を返し、他の者には目もかけず、白妙姫目がけて駆け寄ると、銀鈴を振るような声をもって名乗った。

「珍しや白妙姫、妾こそは利常が娘楓姫、まんまとわが計にかかった今日の戦、もはや逃れる所はなし、打物捨てて降参しや。」

「なに、楓姫とは。」

「いかにも、そなたも妾も両女軍の大將同

士、武士の娘が強いが、京女藤の手並が勝るか、尋常に勝負致しましょう。」

白妙姫も一族のこととて、楓姫を見知って居り、今巴と呼ばれた豪勇さは警戒すべきことも百も承知だが、事ここに至ってこう挑まれては、今更後ろを見せることは出来ない。

しかし京女藤と罵られた一語はグサリと胸に来て、怒りのあまり、白い頬をサッと紅潮させると、柳眉を逆立て。

「小癪なそなたの申し条。故太閤の恩顧を忘れ、人非人家康に味方するばかりでなく、主の留守を幸い、人の城を不意打するような卑劣な利常殿への見せしめに、この白妙がそなたの細首刎ねてくれまする、覚悟しや。」

と薙刀をふりかざす。彼女は何時もそうだが、わざと鎧を着けず、紅梅色の内褂の双肌をぬいで、白襦袢に、襷がけの窈窕たる女装のままに白馬を躍らせれば、これに反して楓姫は、武士と同じく物々しい鎧具足に身を固め、男と違う所は丈なす黒髪を鉢巻にとめてサッと後に靡かせているだけの目もまばゆい武者姿。黒馬の腹を蹴って打ちかかる。楓姫も平常の獲物は長刀なのだが、今日は考える所あって大身の槍を使用していた。彼女とても白妙姫の長刀の上手なことは今度の戦でも

充分に見せつけられている。打物としては容易に勝てない相手とあれば獲物はどうでも、逸早く組み打ちに持ち込むことの方が大事。それには槍を持って先に馬を倒そうというのである。まことは用意周到、さしも勝運にのる白妙姫も、この楓姫の執念の前には屈せざるを得なかった。

黒白両馬相乱れて、槍と長刀の打ち合うこと十五、六合。隙を見て突き出した楓姫の槍先が、狙いあやまたず、白馬の平頸を刺し通したからたまらない。ガクッと急に乗馬が前膝を折ったので、不意を打たれた白妙姫の身は裳裾を乱して白い脛もあらわに、もんどり打って馬下に落ちる。しすまじたりと楓姫、ヒラリとおのれも馬から跳び下りると、起しもやらず、白妙姫の姿目がけてムンツと組みつく、さはさせじと、こなたも体を交しながら突き放そうとするのだが、しっかとその両の袖をつかまえた楓姫の力の強いこと。見る見るあえなな白妙姫の女体は、楓姫の豊満な内ふところに引き寄せられてゆく。

(南無三、不覚なっ！)

みすみす敵の術中におちた口惜しさに白妙姫は歯がみをして、何とかふりほどこうとするが、こうなってはもう遅い。まるで蜘蛛の

巣にかかった胡蝶のように、あがけばあがく程、敵の手は機敏に動いて自由を奪い、やがては地面に押し伏せようとする。

(やはか、敵の女づれに。こんなことで利政殿に何の面目、まして妾が討たれたら、春江城はどうなるのだ)

その責任感に、健気にも最後まで斗魂を捨てぬ白妙姫は、敵に馬乗りになられてからもなおもしなやかな体をうねらせ、弾力ある両の脚を蹴って、刎ね返しを試みる。その死力にさしもの楓姫も、二度、三度と投げ出されて、しばし、二つのうら若い美女の肉体が、上になり下になりもつれ合ったが、所詮組んでは非力の白妙姫に勝味はなかった。しかもこうなると、女装と武装の相違がはっきりあらわれ、普通なら重い鎧が却って働きを不由にする場合もあるが、大力の楓姫は何とも感じない。かえって上になった時には、その鎧が磐石の重さをもって相手をおしひしぐのである。

白妙姫の苦戦を見て、春江軍の侍女達も救おうと心はあせるのだが、自らが二倍、三倍の敵に囲まれてどうすることも出来ない。楓姫の作戦は見事に効を奏したのだ。

かくて遂に、大力を利して白妙姫を組み伏

せた楓姫は、その細腰に馬乗にまたがると、相手の真白の両の腕まで己れの膝頭にふみしき、白妙姫が、（無念、無念！）となおもあ

がくの尻目に、キラリと右手に引き抜いた短刀の刃先を、たおやかなその右頸部にピタリと押し当てたのである。



「サア、京女藤殿、もはやどんなにもがこうと、そなたの負け。まことの戦場の討ちようは、このようにするもの。今こそ武士の娘の手並の程思い知ったであらう。御身の素っ首と共に春江城も、この楓姫が申し受けます。」

勝ち誇った楓姫の顔がいつもより一層美しく輝いているのとは対照的に、黒髪は乱れ、目は血走って凄艶な形相の白妙姫は、それでも白刃頭に臨みながらなお自若として、

「年下のそなたに打ち負けたのは白妙一期の不覚。しかし、この首は授けても、春江の城は渡しませぬ。妾の一念かすみとなっても城を守って見せましょう。」

「かすみ……？」

はっとりそう聞いて、楓姫は怪訝な顔をしたが、

「ホ……。曳かれものの小唄。前田の一族ともあろうものが往生際の悪い。いざ、潔よく観念して討たれなさい。」

左手をのぼして、濡羽の黒髪をむんずと握り、一気に首を掻こうとしたが、ふと視線が白妙姫の面にふれると、その言われた通り悪びれもせず、目を閉じたさまの、如

何にもおっとりとした気品に満ちた美しくさなの
に、思わず右手が動かなくなってしまった。

（ええい、不甲斐のない……）

われとわが心を叱咤して、

（それにしても、憎い恋敵、八つ裂きにして
もあき足らないのに、一思いに首を刎ねてし
まうのも勿体ない。一刺し、二刺し、決して
からでもおそくはあるまい）。

惨忍な眼を光らせた楓姫は、懐剣を持ち直
して、今度は、敵の姫の咽喉や胸の方を見や
ったが、それも激斗に喘ぐ、そのふくよかな
胸が、襟が乱れて、盛り上った左の乳房のあ
たりまで、雪白の膚があらわになっているの
が、また艶になまめかしく、まぶしいもので
も見る気がして、再び手が鈍ってしまったの
である。その時である。この楓姫の心の乱れ
を見抜いたのか、それまで観念し切っていた
と思った白妙姫が、突如、その右手を敵の膝
の下からすり抜いたと見る間に、電光石火、
何所から抜いたか、閃めく懐剣を下から、サ
ッと楓姫の脇腹目がけて突き上げたのだ。

「アッ」

この奇襲にさしもの楓姫も、思わず声を上
げて腰を浮かしたが、不運！おそらくは、草
摺の間を狙って突き上げたであろうその必死

の一突も、疲れの為に手元狂ったか、カチリ
と鎧の板金に当って横へ滑ってしまった。

「おのれっ、卑怯なっ！」

こうなると意外な相手の斗志に楓姫も逆上
していた。夢中で、空に流れた敵の右手を掴
みとめると、今はためらうことなく、右手の
懐剣を力まかせに、白妙姫の胸板目がけて突
きおろしたのである。

「ム……ッ、ウーン」

あやまたず胸元の真ん中を柄まで刺し貫か
れて何んでたまろう、大理石のような白肌に
紅葉を散らせたまま、あわれ、白妙姫は、グ
ッタリと首を横にかしげて、四肢をのぼして
しまった。

（死んだ……、白妙姫を討ち取ったのだ）

さしも今巴とあだ名された楓姫も、戦場の
一騎打はこれが始めてである。人一人殺した
興奮にはじめはしばし、胸の動悸を抑え得な
かったが、それも次第に鎮まってくると、敵
の女将に打ち勝ったのだという誇らしさと、
憎い恋仇を思いのままに凌辱しようと、惨
忍さが、逆に頭をもたげてくるのだった。

そこでまだ白妙姫がかすかに虫の息をして
いるのを認めると、顔を横伏せにしているそ
の耳元に口を寄せるようにして、

「如何に美しうても、武士の妻はもっと強う
ありたいもの。利政殿も御不幸な、お城を奪
われた上、愛しい新妻の死首に直面しなけれ
ばならぬとは。オホ……」

と、その嘲笑が耳に入ったのかどうか。瀕
死の美女の花唇がかすかに動いて、

「利政様、おさらば……。お城は……必ず守
ります。今にかすみ……」

つぶやくように洩れた言葉、語尾は聞きと
れなかったが、またもハッキリ聞きとれた（
かすみ）という言葉にギクリとした楓姫、

（チッ、かすみ、かすみと不思議な女。死ぬ
間際の錯乱とも思えないが……。死んでも城を
守ろうという気なのか……）

死んでゆく者の妄執のおそろしさを見せつ
けられた気がして、何か背筋にゾツとするも
のを覚えると、早く首をあげてしまおうとし
はなしと、あわてて懐剣をとりなおし、左手
を白く滑かな姫の頸にかけてぐいと押しあげ
ると、そのくびれの深い咽喉の奥に九寸五分
の冷刀の切尖をあてがい、

（白妙殿、御首級頂戴。楓が恨の刃をうけて
成仏しや）

と胸のうちで言い聞かせておいて、白絹の
ように柔かい美姫の右頸部に、鋭い刃先をグ

サリと斬り入れると

「エイ」と力をこめて右へ一閃！

大力の姫の手練にかかって、何んでたまろう、草花の茎よりいともろく、白妙姫の細首はスバリと斬り落されて、あたりは一面のから紅。先刻まで無比の美を咲き誇っていた名花白妙姫も、今や敵の乙女の手で討たれて、あわれ、一瞬のうちに身首處を異にしてしまったのである。

その血したたる女雛のように冷美な死首を黒髪を纏んで左手に掲げた楓姫は、

「ああ、心地よや、憎い女の首を手ずから斬り取って、恨みも霽れた。あとは、この変り果てた恋人の首を利政殿に見せつけてあげるまで。」

スックと立ち上って投げ出してあった槍をとり上げると、情け容赦もなく白妙姫の生首をその穂先にグサリと刺し通して高く掲げ、

「敵も味方もよく聞け、春江女軍の大將白妙姫は前田利常の娘楓姫が、この通り打ち取ったり！」

と声高に呼ばわれれば、ワーンと上る利常方の喜びの声。一方さらでだに苦戦していた春江方の侍女達は白妙姫が討たれたと聞いて力つき、或いは自殺し、或いは討たれて悉く斃

れてしまった。

かくて、楓姫は白妙姫の首をおのれの馬の鞍の四方手に結びつけ、首のないむくろを敵の白馬にくくりつけて意気揚々と引き上げて来ると、利常も斜ならず喜び、

「流石はわが娘。これで兄利長に対しても面目が立ち、徳川家に対しても言い開きが出る。いで、この上は主なき春江の城を一揉みに揉みとらん」

と勇み立つ。そこで直ちに使者を送って、白妙姫の亡骸を引き渡すことを条件に、城の明け渡しを迫ったが、案に相違して城方は頑として受けつけない。

「小癪なっ」

怒った前田勢は城中の士気を沮喪させる為白妙姫の首を槍先に貫いて、一揉みに押し寄せたが、不思議やそれまで何ともなかった空が、あやしく曇って来たと思うと、忽然霞が立ちこめて、石垣も天守閣もすっぱりかくれて見えない有様。寄手は初めはこの霧を利用して城にとりつかんと、隊を乱して殺到したが、すかさず打ち出した城方の矢玉は正確をきわめ、忽ちのうちに多数の死傷者を出して放々の態で引き上げる始末。それも不思議なこと、朝攻めでも、夜攻めでもまるで生あ

るもののように常に霞が立ちこめて、寄手の攻撃を阻むのである。

「不思議なこともあるもの、何じゃ、あの霞は……」

何も知らない利常や諸將は怪訝な顔をして首をひねるが、驚いたのは外ならぬ楓姫。

（では、あの霞は白妙姫の霊がなせる業だというのか。そんな馬鹿なことが……）

そう思うだけでも、じっとしていられたかった。今にも首を斬られようとする寸前の白妙姫のつぶやきが今も生々しく耳朶をうつ。

（妾の一念、かすみとなって……）

（ええい、今どき、そんな怪異がある筈はない。明日はこの眼でかすみの正体を見届け、たといそれが、怨霊の怪異であろうと、春江の城を乗っ取って見せる）

決心した楓姫は翌朝、再び討手の将を買って出た。利常もあまり気が進まぬようであったが、と云って愚図々々していると、もう利政の軍が到着しかねない。

「では、もう一度、そなたの神通力を借りようか、しかし、充分に注意してかかれ。」

「はい。」

翌日楓姫は再び、鎧、草摺に身を固め、まだ斬った時、そのままの冷艶な白妙姫の首を

槍先にかかげ、手勢をひきつれて、春江城に迫った。

(さあ、そろそろ、例のかすみ、かかる頃だ)

彼女に従う兵達は、その霞の為に、仲間が多く殺されたのを眼のあたりで見ているので、戦々競々なのだが、この日は何時も霞がかかる距離に來ても、その心配がない。

(今日はやっぱり楓様が居られるからかな)

彼等もいくらか安心したし、楓姫も氣を励まして、駒の歩をはやめると、城の真近まで來て、妖雲を打ち払うかのような玉音を張りあげて

「城中の者、よっく聞け。白妙姫を討ち取った楓姫、自ら城を受け取りにまいったり。神妙に城門を開け」

と呼ばはったが、城中はまたぞろ、ひっそりかんとして物音一つしない。

「えーい、重ねがさね、我々をなぶる奴等、押し入って皆殺しにしゃ、今日は霞などかかりませぬぞ。」

楓姫の下知に、前田勢も勇躍して、どっと攻撃にうつる。

とーその時である。何としたこと、先頭の兵達が、石垣にとりつくか、とりつかない頃

になって、突如、天から降ったか、地から湧いたか、スーッと彼等の視界をさえぎって霞がたちこめ、寄手の兵は前後も分らぬ有様。

「や、やっ、かすみだ、かすみだ。」

「ワッ、またやられるぞ！」

こうなるともう恐怖より外はない前田勢、攻城具も、刀槍も投げ出して我先にと逃げようとする。が、あわてふためいているので方向をあやまって、ぶつかり合い、押しあい、ひしめいて戦う所ではない大へんな騒ぎ、しかも、その霞を合図のように城内からはどつと一度に、弾丸、矢石を打ち出したからたまらない。倒れ、傷つき、音響におののいて打ち伏す有様に、楓姫も逆上せざるを得ない。

「ええい、不甲斐ない男ばら。霞など目の狂いじゃ。城はすぐ近くぞ、かかれ、かかれっ！」

絶叫しながら、物に憑かれたように一人馬を走らす、誰も続くものはないのだから、彼女はたちまち城内から討って出た利政勢に囲まれた。だが、打物取っての彼女は強い。

「小癪なっ、前田の楓姫と知ってか！」

馬上から大刀を振って、三人、五人と斬り倒す勢に、姫の仇とは知りつつ、城方も辟易して退く。

「ちっ、こんな弱兵しか居らぬ小城を。者共続けや！」

なおも逸り気で、後の味方の兵達を呼びもどそうと後ろをふり向いた時である。

「あっ！」

愕然とした楓姫は、あやうく馬から落ちそうになった。見よ、やや上空をすーっと流れる一団の霞の中に、ありありとこちらに近寄ってくる一個の女人の影。

「ああ、白妙姫！ おのれ迷ったかっ」

さしも氣丈の彼女も、この時許りはあまりの恐怖に全身をガタガタと顫わせたが、やっ

と渾身の力をふり絞って、

「エエッ」

とその幻影目がけて、大刀を投げつける。近づきつつあった白妙姫の姿がパッと消えたと思つた瞬間。

「ム……ッ」

おのれの下腹に激痛を覚えて、楓姫は馬上に弓のようにのけ反った。何時の間に迫っていたのか、敵兵の突き出した一槍が、草摺の下から深々と彼女の右腹を刺し通していたのである。

「無念！」

相手を斬ろうにも大刀は捨ててしまった。



バンド・マニヤの手記

バンドあれこれ

保田 高夫

奇クの皆さま、初めてお目にかかります。私、保田でございます。自分でも不思議に思うくらいの熱烈なバンド・マニヤでございます。今日は、私のバンド編歴をあれこれと書いてみたいと思います。

ずっと以前のことでありますが、川辺砂登子嬢のバンド着用縛りの写真が分譲になったことがありました。私は勿論、早速購入しましたが、その時、砂登子さんの着用していたバンドは、非常に型の古いもので、前開きですが、替ゴムが金具で止められ、着脱出来るようになっていて、当時でも珍しい月経帯でした。

それを見てからは、垂涎の思いで薬局という薬局をしらみつぶしに探しまわり、挙

句の果ては図解までして、薬局の女主人に変な目で見られながらも、懸命に探し求めましたが、結局手に入れる事が出来ませんでした。今でも時々この写真を出して眺めては残念に思っております。

村田那美子嬢の「月経帯着用縛り」も叢の中にメンスバンドだけ着用したもので、美しい女性が後手に縛られて観念の眼を閉じたポーズで横たわり、真黒のメンスバンドに白い大きな前開きのボタンがクッキリと浮かび上り真に美しいものです。

最近発売された梨花悠紀子嬢のバンド着用シリーズは、心にくい程バンド・マニヤの興味を刺戟する作品です。サポーター型のバンド、そして替ゴムの鮮やかさ。更に

それでも前帯にたばさんだ短刀の柄に手を掛けたが、その刹那に

「白妙様の仇！」

ぐいと一ひねりえぐられて、さしもの楓姫も馬上にたまらず、もんどり打って大地に落ちた。

「それ、首を挙げろ」

そんな声がして槍の主とは別の兵が、彼女の上にのしかかって来た。

「アレー」

こんな雑兵に討たれてはと、楓姫必死にはね返そうとするが、何故かもう身体がしびれて動かない。たちまちたくましい男の手が、むんずと、その黒髪をつかんで、ぐいと仰向かされてしまった。

楓姫の白く輝く美しい顔が、真赤に紅潮して、黒髪のおくれ毛が、その汗ばんだ頬にべったりとへばりついていいるのも、艶になまめかしい。

最後の渾身の力をふりしぼって、目の前に迫ってくる鎧通しをかわして、馬乗りに跨った敵兵をはねかえそうとしたが、不思議にも今までのような男まさりの力が出て来ない。

刃は次第次第に楓姫の首もとに迫ってきて今や絶対絶命の瀬戸際。

それを覆うバンド・カバー・ゴム！

私はこれに刺戟されて、全く同じタイプのバンドを作り、一週間穿き通してしまいました。極く最近、懸命に探して手に入れた月経帯があります。これは新案型（といっても古い年式のもですが）ローズ・パリス・バンドと云って、黒のメリヤス製前開き式のバンドです。

これは替ゴムもカバーゴムも取はずしが出来、その日の気分で色々に使い分けが出来ます。私は大好きなカバーゴムだけを別に数枚購入して膚に当る部分が、全部ゴムになる様にして終日穿き、その心地よさを十分味ってみました。

オシメカバー・マニヤが我が意を得たりと思われるかも知れませんが、それとは別なものです。と、言うのは、私もオシメカバーを所持していますし、たまには着用したこともあります。どうも赤ちゃんの連想がして、時には興ざめの感なきにしもあらずだからです。

それにひきかえ、バンドは全く女性のためにのみ作られた特別のものなのです。しかも、若いピチピチした女性を連想しがち

なのです。そこにバンドの強い魅力があります。此のカバーゴムを内側にあてがったメンスバンドを穿き、その上から真赤なレースのついた美しいナイロンパンティをはくと、その密着感は何ともいえません。バンド・マニアのみの知る楽しさです。バンド・マニアの皆さん、是非一度お試し下さい。鏡にうつった自分の姿に、思わず見とれてしまいます。

使用済の（勿論女性の）月経帯も相当持っています。これは恥を忍んで、色々な女性に新品と取替えてもらったものです。又時には古物商を尋ね、女性だけなのをたしかめて、お宅で買付けたボロの中にバンドの古いのはありませんか、と云って頼み探させてもらったものです。三、四人の女性に囲れながら、ボロの中からバンドを探している私の姿を想像して下さい。流石に顔から火の出る思いでした。

好きという事は又勇気のいるものです。まだまだ、色々と経験談もありますが、又の機会に変わったお話をしましょう。バンド愛好の皆さん、どしどし、御経験や告白をお寄せ下さい。楽しみにしています。

「クソ、クソ……」

断末魔の悲鳴をあげながら、朦朧とうすれて行く彼女の目に、フイと白妙姫の顔があらわれてニッコリと笑ったように映った。

「アッ」

と、最後の衝撃に、身体をこぼらせた瞬間、血しぶきと共に楓姫の首は胴体から斬り離されていた。楓姫の首を挙げたのは、その時、春江の城に帰って来た利政の手勢の者だった。楓姫を討たれ、利政の帰城を見て、利常勢が蒼皇と引き去ったのは、いうまでもない。

かくて白妙姫の一念は、よく春江の小城を前田の大軍から救ったのである。

利政も愛妻を失って悲歎にくれはしたが、幸いその首級はとり返したので、これを城内の一隅に埋め、その首塚の前に楓姫の首を供えて、その霊を祭り、戦勝の感謝を捧げたのであった。

それ以後、誰いうとなく、春江の城を霞ヶ城と呼ぶようになって、それと共に悲しくも美しい白妙姫の物語りが伝えられていったのである。

（おわり）



「責め場面」の 空想的読書法

真奈部 益 夫

前略、八月号欠号の時は暗澹たる気持ちに襲われましたが、前回の長い休刊と違って翌月直ちに合併号が出ましたので、心から安堵いたしました。毎々感謝申し上げております通り、さすがに貴誌は斯界の草わけであるだけに、他誌の追隨を許さぬ風格と一貫性があり、かつ何よりも嬉しいのは、常に読者への奉仕第

一に徹しておられるということです。貴誌の発行には、私達読者の想像も及ばないほど種々の制約と幾多の困難な障碍があるものと御推察申し上げますが、何卒万難を排して益々充実発展されますようお祈り致します。
さて十一月号を手にして表紙を開いた瞬間、思わず私の胸は高鳴り、その扉広告に眸

が吸いつかれてしまいました。特に九、七、三の順に強烈な魅力を感じながら……待ちに待ち焦れていた夢が、いまここに実現すると思うと、嬉しくなりません。早速お申込みいたしました。折返し急送して下さいますようお願い致します。

また、十一月掲載の「花と蛇」は、私にとって本年最高の感激でした。責められるのが淑やかで気品に溢れる絶世の美人であり、責め手が同性の淫らなズベ公達というのもよく、排泄強要の羞恥責めにも新しい試みがみられるからです。挿絵も思い切った構図で、禪のような薄いビニールのおしめカバーはすっかり気に入りました。ただ欲を言えば、これが四馬画伯の流麗な筆致であつたら、更に錦上花を添えたであろうということです。文中特に気に入った点は、

一、「おや、さすがに令夫人だけあって、お行儀がいいね。ごらんよ。朝から穴倉の中へ入りっぱなしなのに、全然、おしめカバーを汚しちゃいないよ」「へえ、桂子の方は、派手に汚しているよ。ふふふ」という会話。

二、また一日中、尿意をこらえていたのも、下腹に鈍痛のようなものを感じていた。面白半分に、ズベ公達にしめされたおしめカバー

を汚し、彼女達の嘲笑を受けるのが、たまらなく羞かしく、ずっとがまんを通していたのである。

三、「あんた、さっきから腰をもじもじしているけど、どうしたのさ？」と、わざと知っていたながら、みずみずしい羞恥心を失わぬ美しい令夫人に、恥かしい哀願を口に出させてなぶり辱しめようと企む彼女達の意地悪さなどです。こうなると今から次号に掲載されるであろう次の場面……おしめカバーをはずされ、洗面器をつきつけられて……必死になつてこらえこらえたこれまでのいじらしい努力もむなしく、嗜虐と好奇に妖しく眸を輝かせ、手を叩き喜ぶ毒蜘蛛のように淫虐なズベ公達の眼前に、絶世の美貌と豊麗な肉体に恵まれた淑やかで慎み深い令夫人静子が、死ぬよりも辛い。排尿の行為を華々しく展開させられる光景が待たれてなりません。もっとも公刊される以上、本当のサワリだけで終るものと諦めています……それでも尚、羞辱に悶え苦しむ令夫人の姿が期待されてなりません。

私は、いつもこのサワリだけでは物足らなくて、貴誌掲載のそうした場面をヒントに自分の趣好に合せて、勝手に想像を逞ましくしています。そして微に入り細にわたってこれを書き直して秘蔵しています。また挿絵もトレンシングペーパーを用いて（私は絵が下手なものですから）気に入った絵を自分の好きなように写し書きして彩色までしています。今回の例の挿絵も、それに似通った四馬画伯の美女の絵を下絵として早速描き直して楽しんでいきます。

文の方は私の場合（どんな場合でも）は、責められる嗜虐の生贄が、必ず、天成の美貌と、比類ない豊麗な肉体に恵まれた深窓育ちの令嬢緑川雪絵となっており、この淑やかで慎み深い絶世の美処女を責め辱しめることによって、無上の快楽に耽溺する嗜虐好色な責め手が蘭子というお嬢さんを中心に、これを取囲む政子、春美といった女中達になつております。私の今回のそれは、生贄が穴倉の中より引ずり出された処女から始まります。

彼女達がどんなに面白がつて、この慎み深い絶世の美処女に奇妙な見るも羞かしいおしめカバー（私のそれは薄い半透明のビニール製で、股間の処に袋がぶら下っています）をしめさせたかは、その挿絵を見れば一目瞭然です。薄いビニールの褌のようなおしめカバーに包まれた乙女の内肌から、腹部のゆるやかな曲線にかけて、皮鞭でぶたれたとわかる見るも痛々しい條痕が数本走っています。

「あら、さすがにお淑やかなご令嬢だけあって、ほんとに、お行儀がいいのねえ。朝から穴倉の中へ入りっぱなしだというのに、ほれ、ごらんなさいませ。全然、おしめカバーを汚してはいませんわ。ほほほ」

「まあ、ほんとうに、キレイにしているわ。これじゃ、いつ粗相をしてもいいように、お世話してあげた私達の親切も、いらなかったわけね。ふふふ。でもよく、がまんできるものねー」

「ほんとに、えらいわ。私なんか、あれからもう何回ぐらいいったかしら。ふふふ」

深々と首をうなだれて蒼ざめていた雪絵の美しい顔が、見る見る羞らしいの紅で染まりました。

「どう、雪絵。穴倉の中で、すこしは反省できました？　いくらお前が強情を張っても、一度こうと思ったことは、どんなことがあっても、私はやり通すんだからね。お前が、私達の可愛いペット……そうね、昨夜お前は、お皿をペロペロと、とても上手になめていたから、ペロという名前がいいわ。フフフ……そのペロという名前の、一匹の可愛い牝犬となっ

て、私達に奉仕すること承知するまで、絶対に許さないわよッ」

「さ、それでは、雪絵さん、お口がきけるようにしてあげますから、蘭子お嬢さんにお返事するのよ」

「あ、あああ……そ、そんな、そんなひ、ひどいこと。いや、いやッ、嫌ですノ、ね、後生ですから、もうお許しになって……」

「あら、まだそんな、図々しい泣きごとを……ききわけのない強情なお嬢さんねえ」

「政子、かまわないから、今夜はうんというまで、責めて、責めて、責め抜いておやりッ」

「あッ、あッ、あれー、ユ、ユ許してーッ……あ、ああ……」

雪絵は、早くも涙ぐみながら、懸命にあわれみを乞いました。だが、なんで許されましよう。邪慳に小突かれながら、今度は地下の拷問部屋に連れ込まれました。この拷問部屋には、三角木馬や奇妙な形の椅子など凡ゆる責め道具が完備されています。ここで、羞恥と屈辱にみちみちた折檻が、汚れを知らぬ深窓育ちの令嬢雪絵の豊麗な全身に加えられます。特に拘束台での責めは、破廉恥きわまるものでした。

ここでも私の挿絵は四馬画伯の口絵「女体

拘束台」が利用されています。それでも尚雪絵は耐えぬきます。また一責めすると、次の責めの効果をたかめるため、一時休息が与えられます。そこで雪絵は、女体拘束台から降され、一休みさせられた後、今度は、椅子をまたいだ及び腰のあられもない姿勢で髪の毛を吊られます。この挿絵が「午前〇時十分の静寂」です。全裸に書き改められていることはいうまでもありません。

やがて、雪絵の前に陣取った蘭子達が待つことしばし、どんなことがあっても、そんな羞かしいことはしまいと、いじらしいほどくらえにこらえつづけてきた尿意が、雪絵の体内に、もうどうにもこらえきることのできない生理の欲求となって、押し寄せてきます。無理ありません。身は薄いビニールの小布れのようなおしめカバーだけが纏わされただけで、朝から、ジメジメと湿気の多い穴倉の中に閉じ込められたのですから……ですから、哀れな雪絵は、穴倉の中にいた時から、すでに我慢のならない尿意を催おし、下腹部に鈍痛のようなものを感じていたほどなのです。だが、みずみずしい乙女の羞恥心が人一倍強い雪絵は、たとえそのために蘭子達が袋までついているおしめカバーをはかせていっ

たとしても、しかし、淫らな同性達にからかわれながら、面白半分にはかされたその奇妙なおしめカバーを汚し、あとで彼女達の嘲笑と辱かしめを受けるときのことを考えると、それがたまらなく恥かしく、それでずつとがまんし通してきたのです。だが、その尿意も、家畜強要のたとえようなない淫虐な折檻で、一時は消え去っていたのですが……それがいま、深夜の静けさの中で、先刻とは比較にならないほど猛烈な生理的な苦痛となって、慎み深い淑やかな雪絵の身心を責め苛んできたのです。

それでも尚水々しい羞恥を失わぬ雪絵は、責めから解放されるまで、口にも出さずにこらえ抜こうと、ふくれる口をすぼめ、足の指先に力を入れるなどして必死になって、たえがたい尿意の苦痛と戦いました。どんなにそれが切なくそして苦しいのでしょうか。氣品に溢れるその絶世の美貌が白蠟のように蒼ざめ、シミ一つない豊麗に輝く柔肌から悩乱の脂汗が、まるで全身に油を塗ったように流れています。それなのに雪絵の麗身は、まるで寒くてたまらぬようにガタガタふるえているのです。こらえにこらえている尿意が、たえがたい内臓的な疼痛となり、そう思っただけ

でも、ふくれあがった膀胱から、いまにもあふれ、こぼれそうになってきました。恥かしい声だけは洩らすまいと必死にくいしばっていた齒の間から、思わず羞恥の呻声もれはじめました。

「あ、ああ……く、くる、くるしい……ああ」

すると、それを待っていたかのように、政子がニヤニヤ笑いながら聞きました。

「あら？どうしたの？ずいぶん汗をかいて。それに、ふふふ。私達が見ている前だというのに、人一倍大きなお尻を、そんなに、浅間しいほどゆすって、とても苦しそうにしているけど、いったい、何を、そんなに苦しんでいるの？」

「そんなに、一人で苦しんでいないで、わけをおっしゃったら？」

「そうよ。いつまでも、そんなに、腰をモジモジさせていないで、さっさとおっしゃいなさいよ」

「今夜は、ずいぶん私達も疲れているから、貴女が苦しんでいる理由次第では、もう許してあげてもいいのよ。ですから、ね、お嬢さん、早くお願いするといいわ」

急に、政子がいままでの態度を一変させて、

わざと優しく言いました。この女が優しい言葉使いをするときは、必ず更に深い悪企みをもっているのですが……しかし、いまの雪絵には、それすら考える余裕はありません。チラリと感謝の眸を政子に向けると、口ごもりながら、それでも遂に意を決し、耐え難い羞恥を懸命におさえ、蒼ざめていた美しい顔を再び火の出るほど真紅に染め、消え入るような細い声で、現在わが身を責め虐げる淫らな女達に向って、世にも恥かしい哀願をしました。

「あ、ああ……は、はい。あの、お、おねがい。あの……あの、ト……トイ、トイレ、トイレへゆかせてください……お願いします、ああ……」

「ええ。なんですって？トイレですって？」

お仕置の途中に、またなんで、トイレなんかに行きたくなったの？」

「そうよ。なんのご用があつて、行きたいの？そのわけがききたいわ。ふふふ」

「あ、あッ、あッ……あれー、い、いや、いやッ、嫌！そ、そんなに、羞かしいこと……あ、ああ……後生ですから、そんな恥かしいことは、おききなさいで、ね、お願い!! トイレへ、トイレへ行かせて!! あああ

……アッ、アッ、アレーッ！い、いや、嫌ッ!! ユ、許し……あの……もう……とても……ですから、ね、おねがい」

「まあ！あきれた!! もうとてもですって。ほほ、おほほ」

「お嬢さんの分際で、よくも、そんな浅間しいことが、人前で、平気で言えたわね。わたし、あなたを見損なつたわ。ふふふ」

「ほんとよ。さっき、お行儀がいいと、ほめてあげたというのに。ふふふ。上品で、美しいお顔をしているけど、本性は、案外、淫らなのね。うふふふ」

「でも、お可哀相だわ。だって、いくら上品なお嬢さんでも、我慢できないものは、我慢できないのよ」

「あ、あッ、あれーッ、い、嫌ッ。春美さんまで、そ、そんなことを……ああ、羞かしいわ!!」

「雪絵！お前、お仕置から逃れたくて、そんな浅間しいことを、口走っているんじゃないだろうね。もしそんな横着な量見を起したんだと、承知しないわよ!!」

「あれーッ、ち、違います。ほんとに、く、くるしい、苦しいんです。ですから、ユユ許して、……お願いです!! ゆ、行かせて、ね、

行かせて!! トイレに、ね、トイレに……あ、ああ……は、早く……早くう……」

「そんなに、泣き出すほど、ほんとにトイレに行きたいんなら、許してあげないこともないけど、しかし、雪絵。このままでは、絶対に駄目よ。私のいつけ通り、ペロという家畜にならなければね。ふふ、うふふ……あら、そう、本当に、私のいうとおりの、牝犬になるというのね。そうだったら、嘘でない証拠に、真心をこめて、家畜として今後絶対に、私達の命令に服従しますと、誓ってごらん! 心の底から、それが誓えたら、すぐ許してやるわ」

「は……はい……はい。あの、わたくし……」

「家畜が、わたくしですって?」

「いえ、あの……あの、ペ、ペロ……ペロは、こんど……ご、御主人様の、お……お慈悲によつて……飼育していただきます、あの……い、いっぴきの、め……牝犬として……御主人様の、ご命令に……絶対に、服従いたしますことを、こ……こころの心の底から……お、お誓い申し上げます。ああ……」

「たとえば、どんな命令でもだよ。もし、私達の命令に背いたり、私達の御気嫌をそこねたりした場合は、どうするつもり?」

「は、ハイ……たとえば、御主人様の、ご命令が、どのように、ご無理であっても、わたし……イエ……ペロは、よ……よろこんで、服従いたします……若し、万一、ペロが、ご命令に背いたり、御主人様のご気嫌をそこねますようなことがありましたら……ペロは……ペロは、御主人様から……どのようなお仕置を、お受けいたしましたも……決して……ふ、不服は申上げません……ああ」

哀れな嗜虐の美しい生贄は、ただ一刻も早く許されて、粗相のないうちに、トイレで排尿がしたいといういじらしい羞らしいの一心で、溢れ出る涙と嗚咽に舌をからませながら、自からを虐げるたえようのない屈辱の言葉を探し求めて、喘ぎ喘ぎ、つぶやくように誓いました。

やがて、蘭子の命令で、雪絵は椅子から解放されました。涙に濡れた雪絵の素晴らしく美しい顔に、一瞬喜悅の表情が浮かびました。が……それも束の間……家畜の宣言によつて、許されるとばかり信じていただけに……雪絵は、前にもまして、形容することもない恥辱の泥沼に悶え苦しまねばなりませんでした。疑うことも知らぬ清らかで淑やかな令嬢、いや家畜にされた美しい令嬢雪絵の

前には、想像することもできないような、苛酷で、淫虐な羞恥の罾が仕組れていたのです。

「だけど、お嬢さま。ワンワンが、おトイレなんかに行くのは、おかしいですわ。」

政子がそういうと、その口車に乗るよう

に、春美までが「そうですわ。政子さんのいうとおり、おトイレで、ご不浄をする畜生なんて、見たことも、聞いたことも御座いせんわ。ふふふ」と、はやしたてます。

「そういわれてみれば、その通りだわね。それじゃ、どうしたらいいの?」

「お嬢様。私達に、おまかせ下さいませ。牝犬には、牝犬らしい作法で、私達がさせてあげますわ。ほほほ」

「それじゃ、政子さん、わたし、アレを持てきますわ。ふふふ」

春美が、待っていましたとばかり、ほくそ笑みながら部屋を出て行きましたが、すぐ戻ってきました。おどけながら、両手で、さもうやうやしうに、砂の入った浅いミカンの小箱を捧げながら……

「よく飼ひ馴らされたワンワンは、このような、砂の入った箱の中に、お行儀よく、用を足すものよ。フフ、ウフフ」

「さ、それではペロさん、お嬢さんワンワンらしく、お行儀よく、四ッん這いになって、この箱をまたぐのよ！」

「あれエーッ!! そ……そんな……そんな……ヒ、ひどい、ひどいわ!!」

雪絵は、彼女達の意図を悟ると、全身が火となつて、思わず白魚のような両手で、顔をしっかりと押えて、わっとなをあげその場に泣き崩れてしまいました。これまで、あらゆる凌辱をなめつくされてきたと思つた雪絵でしたが、これはまた、なんとというみだらな、なんとという羞辱の仕打ちでしょうか。毒蜘蛛のように淫虐な彼女達の罪深い悪だくみは、まだまだ、ほんの序の口だったのです。家畜になりますと誓つたトタン、哀れな生贄の前に待ちかまっていたのは、四ッん這いの浅間しい恰好で、砂の入った小箱にまたがって、見せよという命令だったのです。人一倍羞恥心の強い、そして慎み深い令嬢雪絵にとって、到底それは死んでも耐えしのおことのできな

「あら？ ペロ！ どうしたの？ お前、たつたいま、御主人様の命令なら、たとえどんな無理なことでも、よろこんで服従しますと誓つたばかりじゃないの。それなのに、もうそんなに図々しく横着をするなんて！ 絶対に、許せないわ!!」

「あれエーッ！ ユユ許してエーッ!! 御主人様。お、お慈悲です……べ、ペロは、どんな……どんなことでもいたしますから、そんな……そんな恥かしいことだけは……どうか後生ですから、お、お許しになって！ お、おね……アッ、アッアッアッアッ……お、お願いいたします、あの、トイレで、ネー！ トイレでさせて下さいませ……ア、アア……アッアッアッ……アレエーッ!!」

「なりません!! お前が、どうしても、自分で出来ないのなら、私達がしてやるわ！ フフ、フ……それでは、みんなで、このクズ牝ペロに、手をかしておやり！」

「ほんとに、世話のやける、お嬢さんワンワンですこと。ふふ、うふふ……」

輝くばかりに豊満な麗身を狂気のようにせつなくもんで、激しく泣きじやくりながら哀願する絶世の美女雪絵を、毒蜘蛛のように淫虐な彼女達は、さも愉しくてたまらぬよう

に、寄つてたかつて、手を取り、足を取りし

て、あらぬ恰好に縛しめてゆくのでした。

以上が、十一月号の「花と蛇」にヒントを得て作成した私の秘蔵版「美しくしき嗜虐の生贄」の抜萃です。この後は、十二月号を待つてから書き綴るつもりです。貴誌の編集者や、同好の古い愛読者なら一見しておわかりの通り、私の書き綴る文は、いずれも、いつか貴誌に掲載されたことのある羞恥責めの、貴重な箇所から拝借したものの寄せ集めです。そして、お便りに、こんなことを書くのは（幾度も思つていても）随分と躊躇されたのですが、略号「さ9」の解説文を読むに及んで、遂に自制することが出来なくなり、拙い、そして露骨な文で、頗る恥しかったのですが、思い切つてお送りした次第です。

なんらかの方法で活字にしていたくことはできないものでしょうか。私のそれが貴誌に寄せる最大の悲願であり、切願であり、また哀願でもあります。何卒よろしく御賢察下さい。なお、右の文は、通信欄で結構ですから（もっとも長すぎてお困りでしょうが）出来るだけ削除せずに（ギリギリの線で）載せていただけませんか。御配慮を賜れば幸甚至極に存じます。

最新代理部分讓品案内

女体緊縛フオトの部

一、//大の字//逆さ吊り

大中判印画紙 三枚一組 四〇〇円

略号(つり) モデル 梨花悠紀子

責めの中で吊りが一番好きだという梨花悠紀子を逆さ吊りの大の字に両足をいっぱいに拡げさせた強烈な吊り責めフオト。

二、立木 //宙縛り//

大中判印画紙 三枚一組 四〇〇円

略号(くた) モデル 梨花悠紀子

荒縄が全身にくるくると喰い込み、立木に高々と宙じばりになった悠紀子の足場のない足先だけが徒らに苦痛にうごめいている。

三、凄惨 //乳房責//

大手札印画紙 三枚一組 二五〇円

略号(とい) モデル 梨花悠紀子

ヒョウタンのように根元を縄でくびられてもうこれ以上大きくならないという極限まで虐げられた乳房の大写し写真。

四、//妊婦の緊縛//

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(にむ) モデル 某 女

読者の紹介で得た妊娠中の若い女性をモデ

ルとして、その胸や腹を緊縛した写真。誌上に掲載しないという約束の稀少作品。

五、//全裸の仕置//

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(すお) モデル 東浦ひかる

マゾの遍歴から。より強烈な試練の庭に立ちたいと願う東浦ひかるの最も新しい生感をここに、あからさまに紹介したいと思う。

女体切腹フオトの部

一、血紅女体自害

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひち) モデル 大塚啓子

白鞘の短刀を豊満な下腹へぐさりと突き立てて、きりりと臍下を切り裂き、溢れる血汐がしたたり落ちる凄まじくも美しい光景。

二、女体切腹マンダラ

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(あま) モデル 甘木春子外

あるマニヤが同好者の女性をモデルとして野外にて自らその女性の腹部を切り裂いてゆく有様を撮影した血紅利用の切腹写真。

三、悲愴女体自決

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひい) モデル 大塚啓子

真白い肌に突き立てられる氷のような九寸五分の脇差。臍下に、乳房に、咽喉元に最期のとどめは容赦なく加えられてゆく。

四、哀艶女体割腹

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(かつ) モデル 梨花悠紀子

正面向いて両膝を立て、或は右膝を一步踏み出して全身の力を両手にこめ、ううう、とばかり無垢の柔肌に突っ立てる刃先。

五、凄惨血紅女体立腹

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひさ) モデル 大塚啓子

柱を背にして立ち壮絶な立腹を演じるさまを豊富な血紅を用いて刻々と変りゆく経過と苦悶と哀切の表情を捉えた血汐のフオト。

六、苦悶切腹表情

大手札印画紙 五枚一組 五〇〇円

略号(せく) モデル 梨花悠紀子

切腹によって起る激痛による苦悶の表情を真迫的に描写しようとして、顔面は勿論、手足の指先に至るまで刻明に写した作品。

フェチ・フオトの部

一、バンド着用フオト

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(めい) モデル 梨花悠紀子

メンスバンド・マニヤ待望のバンド着用のありさまを刻明且つ鮮明に美しいモデル嬢によって、あらゆる場面をごらんにいきます。

二、バンド着用の縛り（後手）

大手札印画紙 四枚一組 三〇〇円

略号（めろ） モデル 梨花悠紀子

後手高小手にメンスバンドを着けられた女性の口も鼻も、猿ぐつわとしての替ゴムがムンムンするゴム特有の臭気を放っている。

三、バンド着用の縛り（前手）

大手札印画紙 四枚一組 三〇〇円

略号（めは） モデル 梨花悠紀子

バンドや替ゴム着用の部分を殊更鮮明に大写しするための前手しぼりによる脚拳ポーズ等、のびやかな下肢の動きは美しい。

四、女性の六尺褌

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号（ろく） モデル 大塚啓子

晒の六尺褌をきりりと締めた裸女が、正面背面、横臥、側面とフンドシ着用の女体をあらゆる角度からキャッチしたマニヤ向作品。

五、ゴム・マニヤ

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号（こむ） モデル 梨花悠紀子

ヌメヌメとした生ゴムのタッチとあの特有の臭気にむせびながら、頭の方から手足の先までゴムづくめのゴムフェチの女体。

六、メンス・バンド

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号（めす） モデル 梨花悠紀子

手の自由を奪われてしまつては、もう強制的に装着させられたメンスバンドをはずすことも出来ない。鮮鋭なレンズはシワの一つも見逃すまいとフィルムに印してゆく。

七、ゴムカバー着縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号（かは）

めめめめとしたアメゴムのオシメ・カバーが身の自由にならぬ下半身にはかされてこれから排泄の汚辱にむせばんとするカバー・プレイの三場面。ゴムの臭気が鼻の先に匂ってくる迫力。

八、脱がされたバンド

大手札 二枚一組 二五〇円

梨花悠紀子 略号（めに）

見るのは勿論のこと、手にとるのさえ恥しいメンスバンドを他人の手で脱がされるといふのは、なんという、いまだたいことだろう。でも、後手に括られているんだもの。仕方ないわ。

九、アテゴムの猿ぐつわ

大手札 二枚一組 二五〇円

梨花悠紀子 略号（めほ）

後手にしぼられた身体には、メンスバンドをはかされ、口には、バンドのアテゴムが鼻も口もすっぽりと掩いかぶさつて猿ぐつわをかまされている息ぐるしくも又、悩ましい陶醉のひととき。

Mフオトの部

一、足で戴く珍味

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号（くさ） モデル 絹川文代外

足の指に狭んだお菓子をもそのまま直接口で受けて戴くのは、マゾヒストの夢にまで描いた幸福の構図ではなからうか。

二、靴の下にうごめく

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号（くつ） モデル 絹川文代外

鋭く尖ったハイヒールの靴先が、或は踵が口の中へぐつと押し込まれる汚辱の瞬間。床に転った顔を踏みこむ非情な靴の裏。

特殊趣向フオトの部

一、絞首処刑

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号（こう） モデル 絹川文代

後手に縛られたフンドシ一本の裸の女首には絞首刑の縄が垂れ下り、脇腹には白刃が突きたてられて血汐が溢れる苦悶の形相。

二、鼻料理

大手札印画紙 六枚一組 六〇〇円

略号（はか） モデル 大塚啓子

若い女の鼻に対して、これでもか、これでもかと、いろいろの苛虐が手をかえ品をかえて加えられてゆく鼻マニヤの作品。

◎お申込みは「略号」にてお願いします。

女体切腹（現代篇）絵巻

四馬孝画

略号（えま1）

B6判 感光紙焼付

六枚一組 五〇〇円

その精細にしてリアルなタッチにて、数多くの責面を発表して、斯界に独特の新風を吹き込んだ四馬孝画伯が、ここに同じく女性切腹のテーマに意欲を燃やし、うら若い現代的な女性、絶対絶命の場面に追い込まれて、自らの手にて自らの命を断たなければならぬに努力されました。想を練ること数旬。十二分に意欲の燃え上ったところで、現代風女性切腹の姿を彩管に托して、女性切腹マニアの目に訴えることになりました。お申込みの如何によって、更に第二作、第三作の構想がある由なので、何卒奮って御注文下さるようお願いいたします。

一、将校と女学生の切腹情死

煉瓦のくずれた廃家の一室にて軍服姿の将校が軍刀にて双手突きで立腹を切り鮮血のりと飛び散る。その前には可憐な十六七才の制服姿の女学生、スカートを脱ぎ捨て、白いズロースを托くし上げて九寸五分の短刀をぐさりと臍下に突き立て右脇腹まで、きりりと切り進む。血汐は壁にとび散り、哀れにも美しい最期の有様。

二、女間諜夕に切腹す

スパイであることの露見した、うら若き敵国潜入の女将校。すでに逮捕の手の迫ったことを知った彼女は、軍服長靴に身を固め、十分に胸と腹をくつろげ、秘蔵の軍刀でしたたかに腹を切れば、青黒い腸が傷口から僅かにのぞき、血は床にしたたり落ちる。乱入した敵兵の見る前で、急所の乳下を突き刺して華々しい女性の最期。

三、大和撫子、乙女の自刃

敗戦は可弱い乙女の寄宿舎にも、凌辱の手が迫ってきた。大和撫子の操を守るため、次々と自刃してゆく乙女たち。生徒たちの最期を見届けた未婚の美貌の教師は、乱入する暴徒を目の前にして、日本の娘の自決を見よと、下腹を短刀にて軽く切り、咽喉元に突き立て、飛び散る血汐の中に鬼神も哭く悲壮な自殺を遂げた。

四、美女雨中の立腹プレイ

横なぐりの雨が降りつける深夜の林の中。レインコート一枚を素膚にまとっただけの美女の白い肌だけが、夜目にも鮮かにうかびあがる。洋式ナイフを片手に、左脇腹から右脇へかけて、深々と切り進む美女。創口からはむくむくと腸が溢れ出て、血汐は下半身一面に紅と彩る。降りしく雨は、その血汐をも押し流す激しさである。

五、夜会服貴婦人の切腹

黒皮手套に黒皮長靴の外は裸の大胆きわまりない貴婦人が夜会服を肩にかけたまま大の字に立っての壮絶なる覚悟の自決。海軍将校用の短剣の切れ味は、婦人の柔かい下腹を思うさまに斬りさばき、驚くほど太い腸管がぐっと切口いっぱいにくれ上り、豪華な雰囲気と美貌の女性とは、反対に凄惨きわまりない切腹のシーン。

六、女子大生の切腹自殺

私が自殺するときは、切腹によって命を絶つと覚悟していた美しい女子大生が失恋の結果、旅館の一室を選んで、思いきり自らの腹をかき切って死のうとする。パンティー一枚の裸身のまま、腸ののぞくまで深々と下腹を切り、部屋の壁に身をもたして、じっと自分の最期を待つ悲壮にして哀婉きわまりない女性切腹の表情。

女性切腹（時代篇）絵巻

四馬孝画

略号（えま2）

B6判 感光紙焼付

六枚一組 五〇〇円

若き女性のイメージを時代風俗に求めて、その構想を縦横に發揮しようと試みたのが、この時代篇です。近代的なリアルなタッチを活かして、美しい過去の女性の切腹の姿を追求してもらいました。別の項では同じような狙いで、『大奥裸女決斗場面』も描いて頂きましたが、若しマニアの方の数が或る程度まとまっていて、御注文があるようでしたら、引続いて別な構想とアイデアでドシドシ描いて貰う考えです。期待通りの御注文がないようでしたら、今回の試みを以って一応打ち切りにしたいと思います。マゾ関係の御注文は大変僅少なので、今度は分譲品の発表を見あわしておきます。

一、落城の姫君、火中の自刃

火焰に包まれた天主閣の一室、城主の姫君は迫りくる火焰と姫を生捕りにしようとする敵兵に追われながら、十八の花の命を自らの手で、潔く腹かき切って、女ながらも城主の娘。双肌ぬぎになって豊満な上半身を惜しげもなく燃えさかる火にさらし、家宝の脇差で下腹をしたたかに切りまくる。真白い肌が惜くしも血に塗れる。

二、武家の娘、覚悟の切腹

父のあとを追って女ながらも死を賜った武家の娘は、介錯のため派遣された藩中の青年武士に対して、介錯を断り、白布の上に正座して古式にかなった覚悟の切腹。柄も通れと思いきり突き立てた刃を、きりきりと切り回せば、血汐と共に腸が溢れ出て、氣丈夫な彼女も、思わず「ツツーツ」と前に手をついて倒れ伏してしまった。

三、恋人に抱かれて切腹する娘

「ウーム、なんのこれしき」白装束に覚悟の腹切りを敢行する娘に対して、恋人の武士はその悲壮な最期を見届けるように、背後から抱き起して顔をのぞき込む。下腹は一面血の海で腸さえのぞいている。顔面蒼白として悲痛な表情の娘は、その両の乳房を恋人に抱えられて、次第次第にうすれゆく意識の中で満足そうであった。

四、介錯に落ちる女的首

カガリ火の燃える御殿の庭、双肌ぬぎになった若い女が殿の御前で覚悟の切腹。前かがみになった下腹の膨らみに短刀を突き立てた途端、背後に回った介錯の武士が、白刃一閃。娘の白い首すじに斬りつけ、さっと飛び散る血汐。自らの鐵手で下腹を切った娘は、哀れにも、その首は、刃の狙いうちでぐさっと大きく抉ぐられる。

五、死を賜った腰元の切腹

局のザン訴によって切腹を賜った腰元は、その憎い局の見ている前で無念の切腹を遂げる。白布の上の白装束、上半身肌ぬぎとなり「えいッ」とばかり、短刀を思いきり下腹へ突き立てる。思わず口をついて出る絶叫、真一文字に切りまくった上、健気にも、とつかえた刃で臍の真上を十文字腹にきりきりと切り裂く壮絶さ。

六、操を守る若妻の切腹

夫が江戸表へ出在中のこと。かねて横恋慕していた上役の一人が無理無体にも迫ろうとする。死を以って操を守ろうとした若妻は、男に首をまかれ左手をとられた姿のまま、かくし持った懐刀で、あらわになった下腹をしたたかに突き刺し、二寸ばかりぐいと切りすすむ。血は白い内股にとび散り、操を守ろうとする若妻の心意気。

今月の新版分譲品案内

関谷富佐子夫人緊縛特集

一、強烈、エビ縛り

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(もい) モデル 関谷富佐子

肥り肉(じし)の白い女体をくの字に二つ折りにして、着用のバタフライもかなぐりすててエビ縛りのまま受ける強烈なムチ打ちに真白い臀部は忽ち紅に染まり、頸にかかった縄をピンと張りきりして悶える美体。

二、乳房責の苦悶

大手札印画紙 二枚一組 二〇〇円

略号(もろ) モデル 関谷富佐子

脂ののりきったコリコリとした固い乳房に加えられる手と足の暴虐の嵐。猿ぐつわに息もできぬくらいの口から洩れる苦悶の悲鳴。

三、全裸ムチ打ち

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(もた) モデル 関谷富佐子

豊麗な臀部に、太股に脛に、情容赦なく炸烈する革製のムチ。白い肌にはミミズばれが赤黒く走り、後手に縛られて身動きの出来ぬ彼女は、只ヒューヒューと喋って転げまわるばかり。

り。ムチ打ちに命を捧げる彼女に対して行った手加減のない本格的なムチ打ちの成果。

四、六尺褌の女性像

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(くる) モデル 関谷富佐子

恥しさに顔を赤らめた関谷夫人が、そのボリウムのある堂々たる体格の裸身に、白晒の六尺褌をきりと締めて、前後左右から、その見事な姿態を十二分に見て頂くため、皎々たる電光下に立つ。(縛りなし)

五、強打に泣く裸身

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(むち) モデル 関谷富佐子

裸身に六尺褌一丁の彼女が前手しほりにあって、その可憐な身をかばうことができない哀れな膝立のポーズで、むきだしになった臀部に、背中に乱れとぶ皮ムチの強打。彼女の全身はエビのように曲り、或は倒れんばかりに逆に反り、ぐねぐねと曲り屈み、ムチの痛さに悶えぬく悦虐の極の姿態。ムチ打ちつつシャッターを切った二十数枚のネガの中から選びだした絶妙の表情のものばかり。

フェチッシュ緊縛の部

一、レインコートの拘束

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(いろ) モデル 大塚 啓子

裸の肌に直接ネチネチとしたレインコートをまとい、フツドをまぶたにかかった大塚啓子の柔肌をぐるぐると荒縄で厳しく縛り上げれば、ゴムの裏布がジカに肌を圧迫して、その感触に、てんてん反側するさまを彼女の足の先から頭のとっぺんまで刻明に捉らえた。

二、ゴム布に包まれて

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こま) モデル 梨花悠紀子

後手に縛られた梨花悠紀子が頭にはゴム帽子、首にはゴムの前掛け、ゴムのズロースをはき、手にはゴムの手袋、足にはゴムの靴下と、全身これすべてゴムづくめ、縛られて次第に時間が経つてくると、ゴムのあのヌメヌメとしたタッチが直接肌を刺戟し、特有の臭気が鼻をついてくると、彼は、そのままじっとしていることができなかった。

三、狙われた和装の娘

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇円

略号(ねい) モデル 愛川 悦子

珍しく和服に身をかためた娘、愛川悦子に襲いかかった縄の暴虐。忽ち羽織は剥がれ着物の前は押しはだけられて、赤い長襦袢があらわに乱れ、縛しめられた愛川嬢の周囲は帯

や腰紐、羽織などが百花瞭乱と咲きはこり時ならぬ目の正月が現出した。

浣腸マニア東浦ひかる特集

一、只今浣腸実施中

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(かみ) モデル 東浦ひかる

責めの中でも浣腸が一番好きだという東浦ひかるに対して、実際に彼女のためのプレイとして実施した浣腸の場面を特にマニアに分譲するために撮影したもののワンカット。

二、強制空気浣腸

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(かく) モデル 東浦ひかる

彼女の好む空想のアイデア。お腹の中にドンドン空気を入れて蛙腹したらという要求でエネマシリンジを用いて、最大限に空気を注入したときの、腹部膨満の状態をごろんにされる珍しい浣腸作品。

三、百CCの硝子筒浣腸

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(かな) モデル 東浦ひかる

浣腸が好きだというモデルでないと、中々出来ない芸当。彼女なればこそ、こういった強烈な浣腸も容易に、しかも何の抵抗もなしに実施できるのである。

四、浣腸責のムード

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(かむ) モデル 東浦ひかる

浣腸されることが至って好きであるという彼女にしても、やはりマゾ女性に通有として無理矢理に浣腸されるというムードには弱い。従って、両手を拘束されて、もうどうにもならないという絶対絶命のピンチに対して大きな関心を持っている。クリスタ・マゾのひかるを最大限に満足させるポーズ。

先月号で初公開した新版

一、強烈エビ責め

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(えび) モデル 水本 茂美

野性美を帯びた水本茂美を全裸にひきむしった上で、足首と背中中に吊り上った後手首とを連結させて、グイグイ足で踏みつけて締め上げたエビ縛り、一分、五分、十分と経つうちに、流石の水本本も全身から脂汗をふきだして、うううと苦悶のうめきを洩らす。

二、ゴム衣緊縛

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(みす) モデル 水本 茂美

アメゴムのヌメヌメしたゴムズロースが、

汗ばんだ肌にネチャネチャとねばりつく。容赦のない縄さばきは彼女の弾力性のある肌を腰のあたりから二つ折りにして力いっぱい締めつける。むき出しのはりきった尻には、ぴっちりとしたゴムズロースが貼りついている。

三、和洋争闘場面

大手札印画紙 六枚一組 五〇〇円

略号(らり) モデル 田中芳代 外

渾一本に長襦袢をひっかけた田中芳代と、シユミーズ一枚の愛川悦子とが、腕を逆にとり、足を逆エビにとり、必死に相争う中、互いに着衣もふっとんでしまい、裸身のまま、むしゃぶりついて上になり下になりして格闘する場面。二人の娘が激しく争闘するシーンが迫力をもって迫ってくる第二作。

四、裸女の繃帯覆面

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(ふく) モデル 大塚 啓子

豊満な裸女の肉体には、ぎりぎりとした縄が掛けられている。顔面には真白いホータイがグルグルと、まるで大怪我をした負傷者に対するように巻かれていた。真白いホータイと裸女の緊縛。このアンバランスが奇妙なアブノーマルなムードをかもし出している。

四馬孝画 (女斗ファンと裸女血斗マニアのために)

大奥裸女決闘場面

略号

(おく5)

B6判 感光紙焼付 四枚一組 五〇〇円

○大奥の裸女格闘

大奥の広間を舞台として繰りひろげるフンドシ一本の豊満な裸女、腰元対腰元の必死の格闘。髪をふり乱したハダカの二人があられもなく取っ組みあう勇ましくも目ざましい光景。脚を巻きつけ首を締め、止めをさそうとする腰元と、懸命に耐えてはねかえそうとする下になった腰元の必死の形相。

○禪裸女の争い

灯籠のある御殿の庭。二人ともきりきりと締めた六尺禪一本のりりしい姿の腰元、その真白な裸身を白日の下に惜しげもなく、さらけ出しての争い。乱れ流れた髪を掴み合つての立芸。御殿に仕えたときの淑やかな物腰も今は、その影すらなく、互いにすきを狙って相手を倒そうとする鋭い目つき。

○庭での果し合い

互いに懐刀を手にした二人の腰元が、フンドシ一つの裸身で斬り合う惨忍な果し合い。一人の刃先が肩口に、更に二の腕、胸、太股へと四太刀くれて、忽ち鮮血に彩る白い肌。禪裸女の激しい死斗が血にまみれながら続けられてゆく。やがて、いずれかの首級が挙げられるまで、この争いは終らぬだろう。

○首級を挙げる

金屏風のかげ。争いに破れた腰元の一人がフンドシ一本の還ました裸女に馬乗りになられて組み敷かれている。上になった腰元は勇ましく股を開いてまたがり、懐刀をぎして首を挙げるべく切りつけた。下の女の必死の抵抗で、刃はそれで頬に傷を与えたが、この死斗は更に凄絶に続けられてゆく。

一、首吊り屍体発見

二階の手摺りから縄を垂らし、て首吊り自殺を遂げたワンピース姿のうら若き洋裁生。何気なく部屋へ入ってきて、ブラリブラリとぶら下る首吊り屍体にびっくりして「きやっ」と恐怖の悲鳴を挙げて身動きもできないでいるその友人。屍体の口からは、だらりの涎が流れて、足は力なく伸びている。

三、縊死体の検屍

「他殺の疑いがあるから縄は切らぬように」そう注意しながら検事は靴を脱いで机の上に上った。シユミーズが盛り上った豊満な胸。キヤバレーかアルサロに勤めていたか、二十前後の美しい女だった。口から出たものをハンカチに受けて、彼は職業を離れた気持で、この咲ききった花の女の興味を持った。

四馬孝画 (若き女性の美しくもいたましい変死体)

変死女体惨酷場面

略号

(へし4)

B6判 感光紙焼付 四枚一組 五〇〇円

二、溺死体の検屍

河原の荒ムシロを警官がめくると、そこには輝くばかりの白い若い女の溺死体があった。生けるが如く豊かな肌の女だ。半ば口紅のはげた口からは水が静かに溢れている。検屍官は手帖を出して、この土の上に放り出されたうら若い女体の死後三時間の屍体を仔細に検屍してゆくのであった。

四、溺死体の解剖

変死体は、どんなに花恥しい妙令の乙女であっても、こうして全裸に剥かれて、頭の皮から足の先まで、否、咽喉元からお腹まで真二つに切り裂かれて解剖されるのです。数時間前まで動いていた、この肌が冷たいメスによってズタズタに切りちやちやくられてゆくのです。

第四景 親分の折檻

コウモリの辰が狙った小股の切れ上った小間物屋の娘には、生憎くと言いかわした男があった。乾分に欺まされて連れて来られた娘は、腰巻もはがされたあらわな姿に縄を掛けられて、部屋の中に押しこめられた。キセルの雁首を娘の真ッちらい肌にし当て、自分の意に従わせようと、いろいろ手を変えて責め折檻するのだった。

第三景 腰元の逆吊

「拙者の意に従うと言わぬから、このような哀れな姿を晒すのじゃ」素裸に剥かれた美しい腰元は納屋の梁から逆さ吊りに釣り上げられて、観念の眼を閉じている。可愛さ余って憎さ百倍の直参は、弓の折れを手にして、この美麗な生人形を叩きのめそうというのである。汚れを知らぬ真ッ白い肌は、やがて紅に染まることだろう。

第二景 目明裸吟味

番小屋の裏の柱に真ッ裸のまま縛りつけられた娘、身に覚えのないことと拒みつづけるのを、役得とばかり十手を口の中へ捻じ込んで、口を割らせようと目明し。真白い太股にむしろのケバが喰いこんで痛々しそう。娘は乳房も押し潰されそうな厳しい縄目にもだえ、柱のうしろで頑丈に縛られた後手がびくびくと哀れにふるえる。

第一景 乞食と美女

荒むしろを張った乞食小屋へ掠われてきた町一番の小町娘と評判の美女。雪をあざむくばかり真白い肌をむき出しに、一条まとわぬ裸身に太い麻縄がぐるぐる縛りつけられ、口には、むさくるしい汚れ揮できっちり猿ぐつわをされて乞食の一人に抱かれて無慚な光景を、庭のすき間から覗き見している仲間の乞食の眼。

佐保 忍 案・四馬孝画

B6版8枚1組 500円

時代風俗責場面八景

略号(さほ8)

< 時代風凌辱場面ばかりの被虐絵巻 >

第八景 井戸責の姫

「姫、かくなる上は不憫ながら、その真ッ白い肌に、この弓のムチをお見舞いさせて貰いますぞ」全裸の恥しい姿にむかれ、冷たい井戸端の栗石の上に座らせられた姫は、後手をもうこれ以上は上らないという程、高々と背に縛り上げられ、苦痛の悲鳴を洩らすのであった。これから行われる苛酷な責を暗示する釣籠がころがっている。

第七景 杉葉いぶし

深夜の森の中にぽかりと焚火の火。夜目にも白く浮かぶ裸身の若い女が、松の木から太い縄で吊るされている。下には奇怪な老女が白髪をふり乱して、この哀れなイケニエを山の神の人身御供に捧げるべく祈りつづけている。焚火にのせられた生の杉葉は、くすぶり続けて蒙々と白い煙を女の裸身にそそぎかけていた。

第六景 駕籠昇人足

悪人足の駕籠にのったのが運の尽きであった。人影のない森の中へかつぎ込まれた末、着物という着物をむしり取られ、後手のまま樹に縛られてしまった。口には汗くさい豆しぼりの手拭できっちり猿ぐつわをされ、いやらしい醜男の人足が、美しい若奥様に対して舌なめずりしながら近づいてくる。まさに危ふし、美女の運命。

第五景 戦陣の血祭

生捕りにされた敵方の娘は、裸にむかれて楯にぎりぎり縛りつけられて、土塁の上に立てられた。裸の首に、胸に、腹に、胴に荒々しい太縄が喰い込んで息もつけぬ娘は、苦痛と羞恥に真赤になりながら、味方に救いを求めて泣き叫ぶが、飛び来たった一筋の矢が激しく楯に突き刺って、彼女の恐怖心を一層あふりたてるのだった。

読者通信



十二月号にのった田島直士氏の「マゾの芸術考—女性男装管見」は、大へん興味深いものでした。マゾと男装女性の関連は、やや公式的論になる傾向はありますが、重要なものです。ゴッティエの「モ—パン嬢」は、心理学的にも面白い作品であり、一度私もゆっくり論評したいと考えていた矢先でした。中河与一の「愛恋無限」野上弥生子の「迷路」ゴールドーニの「一度に二人の主人を持てば」などは、私の未知な作品ですので、早速読んでみましょう。何よりも嬉しいことは、田島氏が非常に「きれいな好み」でいらっしゃることです。この点私の年来の主張と合致するのです。高貴なもの、美しいものに対する憧れが、真のマゾのエッセンスなのです。その点から氏の「マゾ芸術考」に心から讃辞を送り、一層の御健筆を祈ります。(麻生保)

山辺まゆみ様、十二月号にて貴信拝読致しました。秘かに「奇く」を愛読して居りましたが、貴女の一文の条件を読み、又慎重な態度に惹かれ、是非御交際願ひ度く思います。小生、二十四才の真面目なサラリーマンです。同じ東京です。十二月一日(御都合悪ければ八日に再度御待ちします)午後四時頃銀座松坂屋のカメラ売場にて何気なくウインドを見て立って居ります。目印は眼鏡をかけ、手に白い紙包みを持って居ります。小生の姿を認められ、若し貴女に印象が良く映れば声をおかけ下さい。お逢ひした以上礼儀として、住所氏名は名乗りますし、お望みなら身分証明もお見せします。お互に遊びですからプライバシーを傷つけないのは同じです。小生もMS両方かも知れませんが、御足労御願ひします。(東京△T生▽)

北緋紗子様、十二月号誌上にてお便り拝見しました。9月の二日か二十三日にお会いしたい予定でお呼かけしましたが、二日は私の都合が悪くて行けませんでしたが、二十三日は約束の時間にお待ちしていました。お会い出来ず残念に思っていました。お便りによれば緋紗子様も御都合が悪かったようで本当に残念でした。出来ましたら今一度お会出来る機会をと思います。いかがでしょうか。これから年末になりなにかとおいそがしいと思いますが、十二月の二日と九日の両日場所、時間は前回(十月号誌上にての)とおなじでお待していますから、どちらか都合のよい日においでの上お呼びかけ下さい。もし両日とも都合の悪い場合には、ご都合のよい日時をご指定の上誌上にてお呼びかけいただければ幸々と思います。ドレイ飼育法の一部を拝見しまして私の日頃願望しているところと一致しているのを知りました。そして緋紗子様の飼育法は私にとって十となつたようです。愛情をもってプレイをされているようお見かけしますが、そのような緋紗子様は飼われているドレイはどんなに幸福かと思ひます。私も出来れば飼育されて見たいと考えています。ぜひご都合をつけておいで下さるようかさねてお願いいたします。(名古屋△服部生▽)

佐川奈津子様、貴女の十月号十二月号の読者通信ぐりかえし読ませていただきました。私は昭和九年十一月二十八日生の青年です。私は貴女のような気高き美しい女王様の奴隷として一生飼ひ殺しにしたいだけなら無上の光栄と存じます。そして身分賤しき奴隷として鎖に繋がれ烙印を押されて、鞭の下で恐れ戦きながらお仕え致します。どんなに屈辱の身が苦しくとも、どんなに呼吸が仕難くとも、それらに耐える忍耐力は余る程全身に貯えられております。そして限りある身の力を試さんと、じっと其の日の来るのを心待ちに待っているのです。そののみか、恨めしいとか、情ないとか考える余裕もない程の厳しい虐待を望んでいるのです。美しい女王様の大オナラを、いやという程嗅がされ顔中こすり込まれ乍ら悶え苦しむとうございます。何卒、女王様の特別のお慈悲を持ちまして試験の

拷問を受けさせて下さるよう地面にひれ伏してお願ひ致します。私は次の事を命にかけて誓います。

一、私は女王様の気儘を満足させるために生きている奴隷に過ぎません。私の精神も、感情も、意志も、すべて女王様の所有物です。一、私は女王様の気分を、そして残虐な拷問用の奴隷に過ぎません。一、私は女王様の御命令には絶対に服従致します。まして反抗など思いもありません。ただ命ぜられた事を忠実に守る奴隷に過ぎません。一、私は虐待のあまり不具者になっても決して恨んだり致しません。あかれたら残酷きわま

る拷問と責苦の末殺して下さい。昭和三十七年十月二十八日拷問用の奴隷（大阪△石本完治△）

山辺まゆみ様。12月号読者通信で貴女のお便りを拝見しました。私は現在東京の某大学へ通っている22才の男性です。身長174cm、体重56kg、ずいぶんひょろ長い体格でしょう。高校時代から自分のS的性格を自覚しており、あらゆるS的行為に興味をもっており、すが最近になって貴女のようにSM両方の性癖があるのではないかと考えております。貴女が出された条件は全面的に守ることを誓い

本誌最近号在庫案内

△新装特大号より以降▽

昭和35年10月号	(定価一四〇円)
昭和35年11月号	(売切)
昭和35年12月号	(定価一四〇円)
昭和36年新年号	(定価一五〇円)
昭和36年2月号	(定価一五〇円)
昭和36年3月号	(定価一五〇円)
昭和36年4月号	(定価一五〇円)
昭和36年5月号	(定価一五〇円)
昭和36年6月号	(定価一五〇円)
昭和36年7月号	(定価一五〇円)
昭和36年8月号	(定価一五〇円)
昭和36年9月号	(定価一五〇円)
昭和36年10月号	(定価二〇〇円)

昭和36年11月号	(定価二〇〇円)
昭和36年12月号	(定価二〇〇円)
昭和37年新年号	(定価二〇〇円)
昭和37年2月号	(定価二〇〇円)
昭和37年3月号	(定価二〇〇円)
昭和37年4月号	(定価二〇〇円)
昭和37年5月号	(定価二〇〇円)
昭和37年6月号	(定価二〇〇円)
昭和37年7月号	(定価二〇〇円)
昭和37年8月号	(定価二〇〇円)
昭和37年9月号	(定価二〇〇円)
昭和37年10月号	(定価二〇〇円)
昭和37年11月号	(定価二〇〇円)
昭和37年12月号	(定価二〇〇円)

本誌の最近号は以上の通り在庫しておりますから御申込み次第急送申し上げます。

ます。私も肌を傷つけ合うことは好みません。そのようなことは空想の世界においてのみ許されることであり、実際にはプレイの域を越えたものであると思います。もちろんお互いの私生活をセンサクするような話題は避けましょう。また新たな責めを行う場合は前もって貴女の承諾を得てから行うようにしてもかまいません。お手紙をいただければ、もっと詳しい条件をお聞きしたいと思えます。私の好む責めは一般緊縛はもちろん特に尻部鞭打ち、棒責め、浣腸等です。鞭は釣竿の穂先を絹糸で捲いた素晴らしいものを持っております。また責められる場所はあまり道具を使わずに女性の肉体を使つての責めを好みます。春になったからハイキングに行き誰もない山の中で立木を利用して思いつき責めてみたいと思います。私のような者でよろしかったら是非友だちになって下さい。尚、私の住所本名は編集部気付にしてありますからごめんどうでも編集部の方へ問い合わせして下さいようお願いいたします。お手紙をお待ちしております。(神奈川△尾形弘之△)

奇譚クラブの皆様、御元気で

すか。十月号に拙文をのせていただきました。大変有難う存じました。又雪崎氏、殿田氏等尊敬する諸先輩より御批評文をたまわり恐縮しています。前稿には諸賢御指摘の通り女子土俵の直径（一尺小さいのが正しい）や選手たちの身長（尺から直すのをまちがえて高すぎた）その他、差し手、投げ技の左右と体のくいちがいなど、大分ズサンなところがありまして申しわけありませんでした。なおあつてとびこんでくる相手にはかからないと通信をいただきましたが、私自身少年の頃からすこし実際に取っておりますので、そのような事はない様に思います。又同じ方は揮がゆるむのはエロティックです。こし度がすぎると申されましたが、高校生の相撲は本来押し、突きが主体で揮に手がかかるのは二の次とされているとはいえ、非常に動きが活発なのであの位でもまだマシな方です。一度高校生（今は男子しかありませんが）のマッパチを御覧になることをおすすめします。さて私の憂ウツに思いますのは、相撲の出で立ちを揮一本にするをやめて、少年たちには相撲パンツと称するもの（東洋レ-

ヨンで既に量産している。)を用いさせ、高校、大学には従来の禪の下にスイパン(水泳パンツ)を用いる風習が推進されていることです。これは締め合うとき仲間の前で性器を出すのが恥かしいとか又熱斗でゆるむと肛門や性器がのぞけるとかいうのですが、それはそれとして、関東の大学相撲部の連中のスイパン姿や、「小中学校用相撲カリキュラム」などに見る相撲パンツなるものはどう見てもただける代物ではなく、こんな風潮ではせっかく相撲が義務教育で「格技」として普及しても、そして仮に将来女子相撲部が実現しても、そのときにはそれこそ女子水着の上に禪などということになり、りりしい禪一本の出で立ちは見事事が出来なくなるでしょう。識者はもっと伝統に敬意をはらってほしいものです。私は日本人の締め込みに対する愛着はすいぶん大きいものだろうと思っていたのですが、案外、地方の祭りなどの若衆にもこのごろはすくなくなり残念に思っています。禪というとかか後進性の遺物みたいだに思っているのではないのでしょうか。一本の布をあれだけ器用に用いるのですから古代ギリシャの衣物と同様

廿一世紀的な近代性もあるのですけれども。では益々御活躍の程、組文御免下さい。(雄松比良彦)

○ アクロバットの女体ほど美しいものはない。これが私の主張です。世の中には私と同じ考えをお持ちの方も多いのではないでしょう。しかし、残念なことには、わが国ではアクロバットがそれ程盛んではないようです。アメリカの舞踊雑誌などを見ると必らずアクロバットの教授広告が出ています。わが国でも早くそのようになりたいものです。日本は、アクロバット王国「中国」の隣国です。日本女性がアクロバットに秀れた素質をもっていないと考えることは不可能です。かつて新東宝が配給した「中国の芸人」という白黒映画がありました。覚えて居られる方も多いと思いますが、その中に出て来たアクロバットは文字通り息を呑む感がありました。日本女性もあの程度のアクロバットは当然できる筈です。しかし、残念ながらことに一般論としていえば日本のアクロバットダンサーはトレイニングが足りないようです。ポリショイやチェコのサーカスで見た程のアクロバットを見せてくれる

裸女争闘場面

略号

(らし)

大手札型印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 田中芳代、愛川悦子

禪一本の若々しい裸女二人が互いに相手に止めをさそうと、あられもない姿を展開して根かぎり争う場面。胴絞め、ヘッドロック、腕とり、押え込みなどの手を使って相手の顔を自分のお尻の下に敷いてしまおうと争うメトミフアン、女斗フアン並に女性のサドマゾに関心をお持ちの方及び女相撲フアンの方に捧げる。

日本の女性は少ないようです。わが国のアクロバットを盛んにするには、それ相応の教育機関と市場が必要なのだと思います。アクロバットの好きな方、みんなアクロバット同好会を作りましょう。踊れる方、習いたい方、見たい方、好きな方、是非お手紙を下さい。同好会ですら所属するプロダクションの如何を問いません。そして、皆で、練習所の設置、機関誌の発行、小規模なショウの開催、撮影会、資料の交換、親睦会等々、アイディアを出して下さい。アクロバットダンサーとアクロバットファンからのお手紙をお

変態強盗侵入

略号

(こと)

大手札型印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 絹川 文代

外出から帰った一人居の美女の目の前に、突然ニユッと現れたアブ強盗、驚いて口もきけぬ彼女の細腕をとるや逆手に捻じ上げるや次々と彼女の晴衣をはがしてゆくのであった。晴衣を長襦袢をはがされた女の白い胸や膝、荒々しい縄は後手ばかりか胸から二の腕へも無惨にかけられてゆく。縄にもだえ、いたぶられてつくす美女と悪魔の如き強盗とのコントラスト。

待ちして居ります。(東京八近藤生)

○ 十一月号拝見しました。私はいつも、広告から見事にしています。広告の文章がまことになやましい。その題を見ただけで、ぞくぞくとします。今日も期待にたがいませんでした。グラビアでは「囚女独禁の像」のモデルさん美しいですね。なんともいえない愁いにみちたフェイス一目で好きになりました。パンティはいや、禪をはいた股間を写してください。表情ですが、責められて苦痛をこらえている表情がほしいです。無表

情はつまりません。下着はパンティよりもショーツ（うすいナイロン製）三角フンドシ、六尺褌、或いは特製の下着、例えば三条卓史氏の「新らしい女性の下着」における、種々の物、或いは植物の葉をつける（イブのように）或いはスキ間が多くて短い腰ミノ、ガイズのフンドシ、女の髪の毛のフンドシ（これはぜひ）男物のパンツ、ズタズタにやぶられたスリッパ、パンティ、ショーツ、縄フンドシ、小さなサポーター（股に喰い込むくらいのも）ピッタリしたブルマー（紺色）及び、女学生体操着すがた（上は、白の半袖

シャツ、下は、ピッタリした紺のブルマー、或いは白いショートパンツ（短かめの）前にうすい純（和紙）をはっただけの姿、或は男の手でかくした姿等々思いつくまま書きましたが、こんな姿のフォトをぜひとってください。女学生の体操着姿は是非お願いします。私はペドフィリアですので、余り成熟しきった女体には興味もてないのです。中学生、高校生の一年ぐらいの女の子に多大な興味を覚えます。南村俊平先生の絵はいつも心おどらされていましたが、このごろ余りみられなくなりましたが、す（東京都渋谷区八山本和彦）

○ 女相撲ファンの諸氏、諸嬢にお便り申し上げます。先日、書店で「寄ク」を開き、女相撲ファンのおられることを発見、胸をわくわくさせながら、その足で古本屋を見回り十冊ほど既刊誌を手に入れ不足分は直接、編集部注文し、大体の様子もわかりましたので、早速、女相撲ファンに呼びかけをする次第であります。御案内の通り女相撲には興業としての女角力と各地方に存在する素人の女角力に大別されますが、両者とも近頃は衰滅せんとしつつある状態です。そこで、一つの提案をしたい

と存じます。編集部にお願ひして興業的女角力の後援会を結成するとか、「寄ク」相撲会を結成、素人による女相撲を大阪、東京で開催していただくこと、女力士は愛読者からつり会員のみに公開、但し撮影等の行為は、相互の名誉を重んじ一切禁止する。安心して女力士もこれに参加できる形態を整えると共に、相当の参加報酬を与えること、観戦を望む女相撲ファンは一般的にいつて、中年以上の方が多くと思いますから、会費も三千円程度なら喜んで参加するものと考えます。誌上での女相撲の告白、小説等はそれはそれとし

奇譚クラブ旧号の在庫案内

△復刊号の部▽

復刊号の分は漸次売切れの分が増加してまいりました。左記に掲げましたものは、今在庫いたしておられます。売切れに限り、定価の半額に奉仕いたします。

復刊第24号	（昭和33年2月号）	定価二百円
復刊第25号	（昭和33年3月号）	定価二百円
復刊第27号	（昭和33年5月号）	定価二百円
復刊第28号	（昭和33年6月号）	定価二百円
復刊第29号	（昭和33年7月号）	定価二百円
復刊第33号	（昭和33年10月号）	定価二百円

復刊第34号	（昭和33年11月号）	定価二百円
復刊第35号	（昭和33年12月号）	定価二百円
復刊第48号	（昭和34年10月号）	定価二百円
復刊第49号	（昭和34年11月号）	定価二百円
復刊第47号	（昭和34年7月号）	定価二百円
復刊第46号	（昭和34年8月号）	定価二百円
復刊第45号	（昭和34年9月号）	定価二百円
復刊第44号	（昭和34年4月号）	定価二百円
復刊第41号	（昭和34年2月号）	定価二百円
復刊第39号	（昭和34年1月号）	定価二百円
復刊第37号	（昭和34年11月号）	定価二百円
復刊第36号	（昭和34年12月号）	定価二百円
復刊第35号	（昭和34年11月号）	定価二百円

復刊第54号	（昭和35年2月号）	定価三百円
復刊第55号	（昭和35年3月号）	定価二百円
復刊第56号	（昭和35年4月号）	定価二百円
復刊第58号	（昭和35年4月号）	定価二百円
復刊第59号	（昭和35年5月号）	定価二百円
復刊第60号	（昭和35年6月号）	定価二百円
復刊第61号	（昭和35年7月号）	定価三百円
復刊第62号	（昭和35年8月号）	定価三百円
復刊第63号	（昭和35年9月号）	定価三百円
復刊第64号	（昭和35年10月号）	定価三百円
復刊第65号	（昭和35年11月号）	定価三百円

特に定価の半額に奉仕いたします。

御承領願います。

て価値もあり、楽しませてくれますが、別に実戦を是非みたいものと思ひます。編集部の皆様、何卒よろしく御配慮をお願いしたいと存じます。(東京八岡平吉雄)

○ 貴社益々御清栄のこと御慶び申し上げます。私は五年前からKクラブを愛読させて頂いております。最近のグラビヤは以前より写真も多く責画もまことに味のあるものばかりで私達MSファンにとりまして本当に楽しいことです。最近私と同様のゴムマニヤの方が大勢いられますが、グラビヤの方も、もっと多くゴムを使った責写真や責画を載せてほしいものです。私はあのヌメよメとしたゴムの感触、そしてゴムの香りが大好きです。縛り方も部分的なものばかりで出ません。全身、身動き出来ない程縛り上げてこそ実感がわきます。残念ながら私はプレイの経験がありません。私と同じ趣味の方と文通いたしたいと思ひます。位し女性の方を望みます。私は五尺五寸、十五貫で顔は十人並です。(大阪市八木村正明)

○ 編集部の皆様、御元気ですか。これから寒くなつてまいりますか

ら、くれぐれも体を大切に奇クの内容をより一層充実したものにしてください。ところで本文に入りますが、勧告があつてから、急激に本の内容がなくなつて薄くなつた様な気がしますが、いかがでしょうか。グラビヤも減る内容は遠まわしになり、はつきりしたところがなくなつたことは、奇クファンにとっては残念でなりません。貴誌のこれからの編集方針がこの様に続くなら、奇クファンは激減するであろう。編集部の皆様、あまり神経質にならない方がいいのではないですか。実際に治安はみだれています。だが、これは社会全体の責任である。(全世界の青少年の犯罪は急増している) プレーキをかけることもいいことです。だが、あまりプレーキをかけすぎると、ファンはいやになつて去るのではありませんか。先日新聞には、サド裁判といつて話題となつた「悪徳の栄え」の裁判がありました。その結果はどうなつたか。この種の関係でおられる編集部の皆様はすでに知つておられると思ひます。また特別弁護人に大岡昇平氏などがでられた。奇クのおそれるようなセックスの関係は想像

傑作緊縛フोट紹介

全裸後手縛

略号

(みに)

大名刺印画紙焼付

三枚一組 二〇〇円

モデル 平野 笑子

OSミュージックのヌードダンサーとして活躍する平野笑子嬢が一条まとわめすべすべとした姿態にロープをかけられて後手高小手の緊縛ポーズをとらされた嗜虐的な三葉のフोट。

寝台の全裸

略号

(みほ)

大名刺印画紙焼付

三枚一組 二〇〇円

モデル 平野 笑子

ぐつと凹んだお臍、伸びやかな下股、痛さにもだえる太股、投げだされた足の指。厳しい縄目にベッド上で転々ところがりまわる平野笑子嬢の緊縛裸身をとらえた三ポーズ。前作(みに)と共に彼女の全身の美しさを余すところなく露呈した垂涎万丈のフोट。

全裸の羞恥

略号

(みる)

大名刺印画紙焼付

五枚一組 三〇〇円

モデル 田原美佐子

モデルずれのしていない可憐なBGのアルバイト作品。本人の希望によって特に口絵には大々的に掲載しなかつたのでお馴染みも薄いと思ひますが、清純なフェイスと姿態の田原美佐子嬢が恥しさに耐えて衣服をすっかり脱ぎ去り、縄のいましめに哭くポーズ。

股間しばり

略号

(みと)

大名刺印画紙焼付

五枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

顔といい姿態といい、モデルとして一級品に属するベテラン絹川文代嬢が股間しばり、首縄高小手に施されて、開股、仰向、足の指をくの字に曲げてのもたえ、等々、度胸をきめて縄ととり組んだ五つの変化のあるポーズ。

全裸股間縛

略号

(みへ)

大名刺印画紙焼付

五枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

全裸になつた文代嬢の真白い肌に喰い込む茶とグレイのまんだら夢幻的な股間しばりのムードを全面にはのほのかにもし出して、見る者をして恍惚境へさそひ込む。

しない。反対に抑制することではありませんか。罪悪感を感じてもセックスは感じないと遠藤周作氏も言っておられます。これは地裁の判決なので、これから、いろいろと上級裁判所でもめるかもしれません。しかし地裁には認められたのです。これをさかんに、以前の姿に奇クもどつてもいい。これはどのファンも願っていることだと思います。奇クの表紙に書いてある風俗文献誌という言葉を資料として心理学の勉強にはげんでいる文学青年もいることでしょうか。いろいろと書きましたが、早く本来の姿になって下さい。これは小生の願ひですが、

避暑地の切腹

略号
(せひ)

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

モデル 絹川 文代

海岸近い有名な水浴場の貸別荘の二階の一室で、失恋した美貌の令嬢が、最後の海水浴を終えた上で、いさぎよく女ながら切腹して、この世に別れを告げようとする。水着の上から、ぎりぎりと短刀を引きまわすと、ナイロンの布はさっと切り開かれて、真白い肌

からは紅の血潮が溢れ出る。更に切り続ける刃、水着の布は肌と共に破れてゆく。流れる血汐の海。やがて鳩落ちにも刃先は加えられて、苦悶と苦痛は足先にまで伝わり、全身エビのように折れまがるといった血紅使用のロマンチックな女体切腹の場面。

浣腸の記事をもう少し増して下さい。お願いします。では次の奇クを楽しみにしております。(東京 H・J生)

貴社ますます発展お喜び申し上げます。私は三十二才になります。女性で、夫の死後、某社に勤めています。昔の友達から貴社の本を見せてもらい、同性の乳房責に興味を持ってから三年ぐらいになります。一度寄稿してみようかしらと思ひながら恥しくてできませんでした。毎土曜日の深夜、そのお友達とお互いに責めつ責められつのプレイをお遊びしています。彼女は三十才で私より二つ下です。私達は二人ともお勤めを持っています。

ますし、それに、小学校の三年と一年になる女児を持っていますので、そういうのも、プレイを楽しむというわけにはまいりませんし、あまりきつい責めもできません。ごく軽い責めで、でも時々強くします。時には口に布を入れて本式の猿ぐつわをする時もあります。ここに書きました体験記は、二人で考え、こうであつたらいいなアという思いで書いたものですから貴社の誌上に発表していただければ嬉しいと思います。字が汚いのと筆不精で申し分けありません。何分原稿用紙でないのと、字が汚く万一編集されます時は直してもかまいません。子供が田舎に行っている時、友達と二人でオシメのお遊びをした時を参考にして書いた「女と女の遊び」には期待しております。オシメを巻いて寝るとまるで赤ん坊になったような感じになるのを覚えています。滝先生の絵が一番好き、四馬先生のは奇抜すぎると思っています。(深見マサ江)

なりました。是非、貴女様のその若さあふれる御便りが頂けるよう編集部の皆様、よろしく取りはかり下さい。夜も寝ないで、貴女の事を思いつづけているのですから。美しい秋の為に、美しい夜の月の為に、弦楽とセレナードの為に。さようなら、御便り頂ける日を楽しみに待ちつづけております。(大阪八出来明)

貴誌ますます御発展のことと思います。十二月には、梨花悠紀子様の素晴らしい姿体に目をみはりました。私は貴女の熱烈なファンに

読者通信を始めて書く者ですがよろしくお願い致します。十二月号のグラビヤ、若妻モデル、実にすばらしいですね。今後もしどしどし利用して下さい。関谷さんの御主人がうらやましいと思います。これで又、毎月の発行が待たれます。所で私の方も女性の同好者がおればと思つていた所、同じ十二月号通信欄に東京の山辺まゆみさんがお友だちを得たいとの事、其のお友だちに志願致します。私も写真を見るだけでなく、それを実演でしたら、どんなにすばらしいかと思ひ、山辺さんと同じ気持ちであります。私の職業は公務員でMS両方好き、その他お会いした時に明らかにします。連絡方法は山辺さんの都合のよい期日、場所、時間をお知らせ下さい。十一月二

自刃悶絶

略号 (せよ)

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚啓子

豊満な肉づきをみせている下腹を脇差で掻き切ると溢れる血潮が(血紅使用)臍の下一面をくれないに彩る。今はもう覚悟の切腹であるから、力いっぱい深々と腸に至るまで刃を突き刺し、自刃の恍惚感に陶醉するのであった。

腰まで垂れる黒髪の大塚啓子が豊かな姿態をくねらせて、切腹の痛手に悶絶する光景。

十八日頃まで東京渋谷郵便局止、大久保清で連絡の事。お待ちしております。(東京八久保清)

読者の皆さん、お元気ですか。私はMSに深い興味を持っています。三十八才の男性サラリーマンです。MSといえば、まだまだ変態的だと思っている人が多いこの世の中で読者通信欄にみるごとく、多数の同好者がいることは甚だ心強く思っております。私はMSが必ずしも変態とは考えていません。むしろ性に関する遊びよりは高尚では

ダブル切腹

略号 (せる)

大手札型印画紙焼付

二枚一組 二五〇円

モデル 絹川文代、大塚啓子

すでに切腹し果てた啓子は、絶命した揮一本の裸身を長々と晒している。文代はその死骸の上に跨がり、自分も又、彼女のあとを追って、臍の下へ深々と刃を突き立てる。一瞬電撃のように全身に走る疼痛、しかし、健気にも氣をとり直し、勇をふるってかさばいてゆく文代の雄々しい六尺揮一本の男まさりの切腹ポーズ

ないかと考えます。私も二、三回実際にプレーをしたことがあります。全くとすばらしい遊びだと考えます。勿論度を過ぎることはよくありませんが。私は女性を責めるよりは、むしろ女性に責められることを望んでいます。つまり女性のドレイです。いつも首には首輪手や足にはクサリをつけられて、女王の命令には絶対服従する生活は、どんなにか楽しいものと思っておりますが、そのようなことは未経験です。そして命令に反したときは、女王の好む責め、たとえば

木馬責め、ローソク責め、ムチ責め等をうけたら、どんなにか楽しいでしょうね。そして、その責めは命令に服するまで、続けられ結局、どんな、いやなことでもさせられるといった考え方はどうでしょう。私は平日でしたら午後六時半、土曜日でしたら午後三時以降、いつでもよいです。どなたか女性の方で、私のほかない夢をかなえて下さる女王はあらわれませんか。ただし互いに秘密を守る真面目な方に限ります。どうか、お便り下さい。あるいは、何日の何時に、どこそこに来いと命じて下さい。もし、読者通信で呼びかけがあれば早速、私の住所を掲載してもよいと思っています。(東京八横山生)

愛読者の皆様、お元気ですか。編集部の皆様、何時もご苦勞様です。私は二十七才になります男性ですが、毎月Kクラブを愛読しておりますが、最近出版の部では竹野ひろ子様の緊縛フォトが全然なくまりましたが、ファンと致しましては誠に淋しい限りです。私も竹野ひろ子様と同じ趣味の持主です。ゴムが大好きです。強烈な高小手手と猿ぐつわ、むんむんする

ゴムの香い、全身雁字搦目に縛り上げ、プレイをしてみたいと思います。今後は竹野ひろ子様のフォトをもっと載せて頂きたいと思えます。それから四馬先生の責画にはいつも敬服致しております。実感があふれていて、実にすばらしいです。毎月心待ちにしております。一度新年号でも、鼻責めに關して、鼻責めオンパレード、鼻責めに泣く美女といったところを希望致しております。尚、私はゴムに大変愛着を感じて者ですが、どなたか、二十五才位迄の女性の方で私とプレイを楽しみませんか。秘密は厳守致します故、御希望の方がおられましたら御便り下さい。MSどちらの方でも結構です。(大阪府堺鳳八高田二郎)

「奇ク」の愛読者ですが、十一月号の表紙の美しさには眼を奪われました。如何なる他誌にもひけをとらない立派な芸術品です。特に興味を持つのは「切腹」です。この日本人独特の壮烈な行為を他誌では殆ど扱ってくれないからです。十一月号には切腹写真のないのを寂しく感じますが、滝れい子画伯の二点の近來にない名作と思えます。どこから見ても一分の隙

もなく、画面に魂が吸込まれるように自分が切腹しているような感情に捉らわれます。まこと、無念の最期や斯くありしならんと思われる「沖繩女子挺身隊員の自決」は、悲壮な表情、訓練に鍛えぬいた体格、力のこもった両腕、女らしく両膝をピッタリ揃えた慎ましさ。恥かし気に押し下げたズロースの位置、どれを見ても満点です。殊に写真でできないのは、切り進む刃の前方が皮膚の抵抗のために盛り上っていることで、この皮膚の盛り上りと血の散り具合はかつて、「ビジネス・ガール」の自害」を画かれて以来、特に迫力を増してきたものです。以前の「祖国破れたり」と向い合せて見ると実に凄絶な女子挺身隊員の集団切腹が現出されます。ただ、惜しいことに「祖国破れたり」では、脇の位置が少し高過ぎて不自然に見えます。欲を言えば、更に割腹絶命した女性を一人加えると、一層効果があったでしょう。「介添切腹」も、まだ成長しきらず、少女の面影を残した姫が深く双肌を脱いで、その恥しい下腹を、恐らくは恋人であろう青年武士に掻き切らせ、苦痛にのけ反り、悲鳴を挙げて悶えるさまは、まさに最高の

興奮を覚えます。然し、少し惜しいのは、滝先生の作品に珍しく、この女性が腰巻を見せていません。やはり腰の辺りと膝前に赤い腰巻をチラリと見せてこそ、美しさが倍加するでしょう。なお、この介添の青年が、同じく双肌ぬいで、切腹の準備をし、開いた裾前に純白の褌をチラと見せていたらつまり、これが情死の場面であつたら、色気があって良いと思えます。先生の情死ものは「相対死」があります。男性の方は凄味が足りません。男女が同時に切腹して腸を流し裾を乱して絶命、他は今まさに切腹といった情死ものを是非お願いしたいと思えます。十月号の「腰元決斗の果て」は顔に苦悶の表情が足らず、上半身は美しいが、下肢が小さ過ぎて不自然に見えますし、血斗の果てに下駄をはいて居るのもおかしい。また踏み出した右足先が外を向いているのは女性の本能に反します。なお彼女の踏みつけているのが、庭石でなく、斬倒されて赤い蹴出しを乱した女性であつたら、素晴らしいと思ひました。「殿のあとを慕いて」は、姿勢、表情ともに立派ですがこれは下半身が長過ぎる。こんな背の高い女性は日本人には

「優秀緊縛フオート紹介」

乳房責

略号

(きよ)

大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円

モデル 四方 清美

全く凄絶な責めである。裸にむかれた首から二の腕、胸、腹にはピンクの綿ロープがきびしくからまり、身動きならぬ女体の背後にはプライヤーを手にした辻村隆が可憐な乳房を思いきり挟む。忽ち上る悲鳴も、きびしく囁まされた猿ぐつわに消される。苦悶の表情は見る者をして思わず手に汗をにぎる。乳房責の圧巻、責めの圧巻である。

女囚独居

略号

(はつ)

大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円

モデル 柳 初子

哀愁を帯びた柳初子の美しい顔(十一月号巻頭口絵参照)が女囚六三三の囚衣をまとい、前手縛りに手首と肘とを括られて独居に幽閉された表情。そして手と足がアップで美しく描き出されている。陰惨な囚女の雰囲気モデルの美しさによって、ほのぼのとしたロマンチック・サジズムが發揮されている。

吊られた美女

略号

(けい)

大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

豪華なシャンデリヤに両手首を括られて吊り下げられている全裸の美女は、身をくねらせてこの華やかにも甘く厳しいムードに浸っている。うねうねともだえる裸身は見物人によって隅から隅まで眺められ、次第次第に増してくる苦痛は彼女の羞恥心を徐々に剥ぎとってゆく。

首縄と腰縄

略号

(せつ)

大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円

モデル 大塚 啓子

一点のシミもないスベスベとした柔肌の大塚啓子嬢が湯上りの全裸の肌を惜しげもなくさらけ出して後手高小手しばりに首縄と腰縄を併用した縄目に足の先から長髪の前まで緊張させたサジ・ムード満点の素晴らしく美しいフオート。恍惚とした表情、凄絶なながしめ。あきらめきった諦観の表情。

珍しい。恐らく、十月号に画かれた時、先生が疲労して居られたのでしよう。それから滝先生の絵は片手切りが殆どですが、勿論腹部をよく見せるには、片手切りが好都合としても、実際に体験者諸氏の報告では、殆ど双手切りとなつていますし、特にあの長大な軍力で片手切りは無理と思います。編集部へお願い。以前と同じように切腹写真ものをせて頂きたいものです。特に和服姿を希望します。大塚嬢の和服姿はすばらしかったが徳川時代の女性が腰巻を着用して居ないのは史実に反します。他の一切の衣服は身につけずとも、腰巻だけは決して離さなかったものです。記事も、以前は「切腹心中体験記」や山田嬢の「ブイレのレポート」等豊富にありましたし、読者の画いた絵、「美姫城主の最期」その他須賀綾女嬢は裸身に湯文字一枚の大胆な姿で一文字に切る様を三枚の写真にしたもの（更に倒れて苦悶する場面がはしかった）等多種多様でしたが、最近、これが少いのは何故でしょうか。切腹をいくら研究しても、決して所謂「悪書」の仲間入りはしないと思います。九月号に投書された荒井弥生様、御主人の前で見事に切

腹された体験を、是非是非書いて頂きたい。殊に貴女が洋装は一切用いず、純然たる和服に赤いお腰で切腹されるということに大きな興味があります。最近の若い女性は、赤い腰巻はおろか、腰巻そのものをたとえ白色でも嫌うのが普通ですのに、貴女の場合、それが赤いのは真実に和服の美しさの半分が、その赤い腰巻にあることを理解して居られるからだと思います。（切腹ファン生）

○
今迄皆様方の楽しい通信を拝見してわずかな内に秘められた激しい己がマゾをなぐさめて参りましたが、思い切って決心致し皆様とお仲間させて頂き交流することになりました。私は以前ある御夫婦の方からマゾとしての経験を受けてより性来のマゾ性といえ、その激烈、夢幻の素晴らしい刺激を忘れることが出来ず、今迄悶々とした毎日を過して居ります。奇巧の読者のS女性の方と文通交際、或は真の奴隷として御奉仕する機会を得たく広く皆様に御願ひする次第で御座います。もっとも、この賤しいマゾヒストとしてプレイや交際に於て一応希望もあるのですが、それを申し上げる

腸露出 「無念腹」 女体切腹写真

A5判(本誌の大きさ)感光紙焼付 十枚一組 八〇〇円

モデル……大塚啓子 略号(せ10)

やわらかなヘソ下の肌に今や深々と刃を突き立てれば、溢れる血汐は、唐くれないに、とびちり、腸が切口から、むくりむくりと盛り上ってくる。無念の形相も物凄く、血に染った手に更に力をこめて引きまわせば、腸は刃のきりきりと皮膚をさき皮下脂肪を割け、肉を切るにつれて、みるみる創口いっぱいにひろがってくる。

左手で腸を押えながら右脇腹まで切りさいてゆくと、刃を抜いて、今度は下腹からみぞおちまで一気に凄惨な十文字腹。今まで試みられなかった腸露出の有様を今回はじめて写真化した女体切腹フォトの決定版ともいふべき迫力のある連続写真集である。凄絶、女体切腹フォトの決定版として自信を以ておすすめできる切腹フォト集です。

は御主人様に対して失礼ですので、一切貴女様の申付通りに行動するつもりです。二十六才の若さと健康な身体と誠実をもつて女様にお仕えする所存です。どうかこの切実なる願ひが届きましたら、御連絡を賜りますよう伏して御願ひ申し上げます。御連絡は毎週火曜日と金曜日七時頃に、大阪六六一局八四二一番の所におります故、呼び出して下さいます様に、又M女性や浣腸に興味をお持ちの女性からも御連絡頂けましたら幸甚に存じます。奇巧のことやM

S、アブノーマル全般にわたって種々遠慮なく大いに語り合つて同好者としての親睦をはかりたいと思います。（大阪八友田良一V）

○
十二月号の読者通信に京都市の佐藤良子様の記事を拝見致し私と同じマニヤの貴女にぜひ御願ひ致します。私も大のゴムマニヤで最初は月経帯でしたが、今はすっかりオムツカバーに引かれ、ずい分売っているところを探しました。が、まだゴム製のカバーを売っている所が見つからず、残念ながら

自分で作って使用しております。それで貴女様には四、五枚有るとの事、ぜひおゆすり下さい。マニヤにとつて、これ以上の贈り物はございません。出来れば貴女の尿で濡らしてポリエチレン袋に入れていただければうれしいと思ひます。私も貴女の申し出ならば、お礼になんまりと送りたく思ひます。一日も早く貴女のゴムのカバーが手に入る事を祈ります。愛読者の皆様様、オムツカバー（ゴム製）の売っている所をお教え下さい。マニヤの人達、どしどし告白などで紙面をにぎわして下さい。私もその中出します。月経帯の交換などもしたく思ひます。（東京都葛飾区八本郷綾子V）

○奈津子様、私も貴女にお仕えする奴隷の一人として否一匹として名乗りをあげました。今日まで、どれだけ貴女のような女王様のあらわれるのを待ちしていたことか。思わず貴女の文字を拝見して万才を叫びたくなりました。毎日満たされぬ想いで夢想の世界にマゾの姿を描いては、わずかに慰めていた自分。しかし貴女の出現によつて私達マゾの世界にも光明の射し込んでくる思いがします。貴

女は私達にとつて、美しくも気高い救いの女神なのです。私は一日も早く、貴女に飼育されるのを望んでいます。女王様、貴女のご命令を鶴首して待っているのです。（和歌山市AT・M生V）

○十二月号拝読、関谷富佐子夫人の出現で奇クもいよいよ革命期を迎えたようですね。今後、自分の恋人をどんな奇クで記念撮影したいという男性が現われるのを望みます。「サジスト、マゾヒストは、それぞれのサジズム、マゾヒズムにもつと権威を持つていいのではないか。それらは文化の進んだ国でのみ発生するものだから」こういった意味のことを、「男の銘柄」の中で円地文子さんがいつています。それにしても、塚本氏の四十八頁の「緊縛フォト撮影の実際」が、本当に実際なら、関谷夫人に対して礼を失されたような気がします。「きびしく縛り上げられ、思いきりきついむち打、拷問、逆さ吊り、浣腸責めなどにしほしいと願つております」に對して何という手ぬるさ。私だっただけ、関谷夫人を足腰立たぬまで打ちのめしたでしょう。役者負けなのか、初対面のせいかな。前者なら

夫人は失望し、後者なら夫人は次を期待しているでしょう。「思いきりきついむち打ち」「浣腸責め」は、もとより「訓練されたマゾ女性」関谷夫人すら遊んだことのないう恍惚境に案内してあげるのが、本当の礼儀、いたわりだと思ひます。最少一人、できれば二人くらいの手伝いを得て、次回は塚本氏をもっとしっかり立ち向かわれることを希望します。呻き声やむち音を消すために野外の場所を選んでおかれるのも必要かもしれません。（花田一郎）

浣腸関連資料

○オシメと浣腸責

大手札 四枚一組 三〇〇円

略号（せち）

モデル 大塚啓子

ガラス製三〇CC浣腸器、エネマシリンジを用いて浣腸を施したモデル嬢に、オシメカバーをつけさせ、後手を縛って自由を奪うと忽ち激しい便意が襲ってきて、八転九倒の苦しみとなつて全身をさいなむ。その有様を執拗にカメラに狙つてゆく。

○オシメカバー着用と浣腸連続フォト

大手 十二枚一組 九〇〇円

略号（ちし）

モデル 大塚啓子

これは或るオシメ浣腸マニヤのアイデアによつて連続撮影した十二枚続きの組写真です。パステイを脱した若い女性に30CCのガラス製浣腸器によつて浣腸を施し、やがてオシメを当てて総ゴム製のオシメカバーを着用して排泄するに至るまでの経過を刻明に描写した写真です。

中山梨津子様、もうずい分古いお話になりますが、六月号にて貴女様の通信拝見しました。長い間、夢にまでみていたエネマ・ファンの会があるうとは。是非入会させて戴きたいとは思ひながら、恥かしさに決心がつかかねて、今までペンもとれずにおりました。しかし、日夜このことが頭からはなれず、思い切つてお便りする次第でございます。かく申す私、既に一二の体験を奇クに発表させていたのだいたもの、浣腸歴は少くないものと信じます。お仲間に加えていただけます日の一日も早からんこ

生理帯シリーズ

A6判感光紙焼付

二十枚一組 一〇〇〇円

略号(め20)

モデル 大塚啓子

バンドマニアのために、ここにパンティ型バンド、ズロース型バンド並にパンネットの三種の生理帯の着脱連続フोटを大塚啓子嬢を煩して、特にトイレを背景にして順を追って、前後左右からカメラの焦点を当てた生理帯着脱シリーズです。

とを——。奇クの読者通信に連絡方法御教示いただければ幸甚に存じます。(東京新宿区八山岸操V)

針井美香様、女サジストの記録、胸を躍らせて拝見致しました。貴女様の手記はマゾヒストである私に素晴らしい感動を与えて下さいました。どうか私に貴女様の下でマゾヒストとして徹底的に飼育して戴く機会を与えて下さい。体力的精神的にも十分な自信がありますし、幸いなことに私は本当に独りです。ので誰にも迷惑の掛る様なこ

とはありません。現在は他界した両親から引継いだ貸ビルの収入で毎日のんびりと退屈な日々を過しております故、そのためにも刺戟のあるSMの世界に非常な憧れと夢を託しております。もっとも以前からSMに対する熱烈な情熱を感じ、今迄もマゾとして純粋なSMのプレイに浸った経験もあります。しかしながら過去の経験から、私のマゾの方がその様なS女性達より激しく残念ながら自分の全てを投げうって迄忠実な奴隷としてお仕え出来るような酷しいS女性に合ったことがありません。貴女様の手記ではかなりのサド性が感じられ、それが事実ならば全く夢の様な御主人様です。貴女様の下で今飼育中の恒川氏なる奴隷は手首を痛められたとのこと。私も今迄にその様なことは度々経験しておりますし、失神に迄及ぶ激しい鞭打ちにも耐えられるだけの頑健な体力とキャリヤを貴女様に捧げて彼と共に飼育して下さいましたらと思ひます。私にとって吊り責めの好きなS女性こそ、本当に神様の様な存在です。それに鞭打ち、ヒップ責めに及んでは、それ以上の幸福はありません。勿論片輪等覚悟の上のことです。私は年令、

廿九才、アブノマリストとは云え、社会的には一応立派な青年です。願わくば貴女様の下に一日も早く飼育される日の来ることを希みます。(大阪市天王寺区八小野生V)

東京の山辺まゆみ様、貴女の御通信を奇ク誌上にて拝見し、我が意を得たりと早速ペンを取った次第です。私は旧刊当時から奇クを愛読しているサドファンです。毎月奇クのグラビヤを見たり読物を読みながら、自分で色々なアイデアを思い描き、いつか貴女のような女性が現われるだろうと待ちのぞんでおりましたし、貴女のような女性とプレイすれば、どんなに素晴らしいだろうと考えております。私は市内の写真店に勤務している二十七才の店員です。自分の事を紳士だとは、あえて自負致しておりませんが、貴女の要求される秘密及び条件について、又最後の一线を守るということは必ず厳守致します。私のこの拙文をお読みになつて、もし同好の交りをしてよいとお考えになれば御返事下さい。(埼玉県東松山市八太田昭彦V)

大変涼しくなつてまいりました。愛読者の皆さま、心ならずも長らく御無沙汰してしまいました。実は半年ばかり病気のため入院いたしておりました。昨日、やっと退院いたしました。次第でございます。まだ当分通院しなければならぬのですが、今まで遠ざかっていましたKKのことがなつかしく、編集部へお伺いしましたところ、再び希望通りお写真をとって下さるそうですので、身体が続くかぎり、もう一度皆さまのお仲間いりをさせていただきたいと思ひます。気持の方は熱烈な責めや浣腸責めにしていただきたい気持ちでいっぱいなのですが、なにしろ半年以上も寝たきりの身体です。ので、どのくらいまで耐えられるでしょうか。自分でも心配でもあり、又、自分の体力の限界を試してみたいような楽しい気持もございます。一生懸命努力するつもりです。若し誌上や分譲品に私の姿が出ましたら、御応援下さいますようお願い致します。右のような次第で、お呼びかけ下さいました方々に、御返事もいたしませうたします。心からお詫びいたします。さようなら。(大阪八東浦ひかるV)

○ 奇譚クラブの読者の皆様方お元気ですか。私も皆様と同じ本誌のファンで今年二十三才になる男性です。半年も前になりますが、ふと書店の店頭にて本誌を見染めてからはすっかり熱烈な愛読者となつてしまいました。毎月書店へ並べられるのが待ち遠しくなりません。あの美しい縛られた美女のポーズは何が何といっても魅力があります。ただ一度でよいから、

本誌読者の中の若い女性の方とお友達になつて一緒にプレイがしてみたいものと思つております。初めての便りで、こんな勝手な事を書いて恥しいと思つていますが二人だけで縛つたり縛られたり、そして責めつけたりしたら、きっと楽しい思い出になると思います。今月の十二月号には、水本茂美さんのエビ責ポーズがありました。あのポーズは素晴しかった。若い女性に対しては一番魅力のあ

るポーズでないでしょうか。(東京八大河春夫)

○ 山辺まゆみ様、十二月号の貴女の御呼びかけにお答え致します。私が貴女の御希望に依つてあげましよう。私はいつも貴女様の様な理解あり且つ社会人としての自己の立場を考慮される方の呼びかけを待っていた者であります。白表紙時代からの読者であり特写フォト等を送つて頂いておりますが、

不幸にして未だ一度もプレイをしたのしんだ事がありません。私達はロビンソン・クルーソー等とは異なり、社会生活を営んでいる以上、如何なる場合にも、社会人としての限度があると思います。貴女の云われる通り肌を傷つけ合つたり、お互いの身上を傷つたりは既にこの範囲以外と考えます。成程理論としては、肌が切れるまでムチ打ち、責具をつけての外出等はサドの極致かも知れませんが、私

「最新版」 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 1	全裸エビ責仰向け(関谷)
B 2	逆エビ責め全裸像(水本)
B 3	乳首ペンチ挟み(竹野)
B 4	後手十字縛肩口上(梨花)

B 5	足の裏擦り責め(竹野)
B 6	おへソいじめ大写真(関谷)
B 7	剃いだバタフライ(関谷)
B 8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)
B 10	無防備双手吊り(絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り(水本)
B 12	一条縄わぬ股間縛り(水本)
B 13	全裸亀甲股間縛り(関谷)
B 14	足踏付け二つ折り(大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち(関谷)
B 16	手錠にもだえる(竹野)

B 17	尻突出エビ責め(水本)
B 18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B 19	息もつかせぬ猿轡(竹野)
B 20	投げ出した全裸(関谷)
B 21	美しき尻部の露出(絹川)
B 22	首絞めの悦虐境(竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美(竹野)
B 24	強制鼻挟水呑ませ(梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身(関谷)
B 26	責めに気を失って(関谷)
B 27	さアどうでもして(関谷)
B 28	豊満乳房膨隆縛り(竹野)
B 29	投げだされた女体(竹野)
B 30	裸身をくぐる麻縄(梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)
B 32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地(東浦)

B 34	すべてをさらけて(関谷)
B 35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B 36	クリップ鼻挟み(絹川)
B 37	台上のマゾポーズ(大塚)
B 38	吊られゆく美体(絹川)
B 39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B 40	マゾ女性の表情美(東浦)
B 41	喰い込む股間縄(絹川)
B 42	灸責めに悶える(梨花)
B 43	犠牲台の人身御供(大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)
B 45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B 46	手枷足枷大写真(四方)
B 47	鎖に悶える足首美(柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)
B 49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B 50	女囚菱縄さらし(絹川)

には賛成出来ない点であります。あくまでプレイはプレイであり、社会の中の区切られた時間と場所に於て、一定限度迄許されるべきだと思ひます。或は私の考え方は、やや消極的でSの本質をはなれていられるかとも知れませんが、私はそれで良いと考え、この私の考え方に同調下さる女性の方とプレイを致し度く思つております。山辺様、以上の私の考えに御満足でしたら、十二月二日、九日の各日曜日の五時頃東京丸の内中央口改札口附近にて御待ちして居ります。左脇下に週刊誌をはさみ、煙草を吸つて居ります。貴女もハンドバッグを左手にお持ち下さい。(東京八北川生)

月を重ねて早や十二月号を手にしました。奇クの歩みの発展の一端を辿り、私が奇クを知り読みはじめてから九十年になります。常に私達の夢を充たしてくれる奇クに私は大いに感謝の念を新たにすべく次第です。然し、今月号は本年の棹尾をかざるにしては、いささか淋しい気持もします。七月号以後は頁数が削減されて内容に多彩さを欠くうらみはありますが、それにしても読者の要望を入れた内

容は以前に比して大いに期待出来るものと存じます。十二月号の四馬孝氏の口絵は相変らず素晴らしい限りです。しかも「オムツと浣腸」の絵は久方振りの楽しい作品でした。麗人が自由を奪われてムツチリしたヒップにヌメヌメしたゴムのオムツカバーをはめられ、カバの下から派手なオムツをはみ出させて、そばに軽便浣腸器が二個ほどところがついている。まだ浣腸がある。それで楽しい想像が湧いてくる様です。浣腸をされてピツチりとオムツカバーをはめられ、やがて自らの手では如何にするすべもない激しい便意に、麗人は恥も外聞もなく多量の便をオムツカバーの中へ。この苦痛、羞恥を訴えるにも声が出せない。美しい口には恐らく彼女自身が汚したオムツがサルグツワがかまされて居る。やがて麗人の体内から洩らされた汚物によって室内に異臭が漂ってくるであろう。又、多くの浣腸愛好者が広く要望していた「女体浣腸嗜虐場面」なる画集が発表された事は正に一大企画と存じます。兎角、浣腸ものといえ、立派な医院にあつても、こうした面では敬遠され勝ちなだけに浣腸愛好者には好機到来といふべきだと思ひ

裸女格闘

略号(くる)

(首を締める)

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

モデル 田中芳代、愛川悦子

咽喉に両の手の指をまわして首を締めて締め殺そうとするサジスチン。首をしめられて絶命の瞬間の断末魔の形相。首に縄をまわして両方の手で引きしほつて絞首しようとする女。更に柱を利用して縄の一方を結びつけ、首にぐるぐる巻きつけて、力いっぱい引き首を締めてしまおうとする等、二名の若き女性の演ずる首じめの五ポーズ。首がしまつて絶命寸前の目を瞳き、舌を出した真迫の表情に重点をおいた。

ます。尚、続刊の予定もありこの事、大いに楽しめる事と存じます。(岐阜八赤井茂)

貴誌十二月号、斎藤七郎氏に依る「ゴムマニアの弁一」を読み御便りする次第です。結論から申し上げますと同氏の御考えなり御意見に全く同感で日頃私の感じて居る事、そのままと云つて良い位です。最近になり、世にゴムマニアのいかに多いかを知り大変心強く思つて

自分ではくバンド

略号(はく)

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

モデル 梨花悠紀子

誰にない自分ひとりの部屋でひそかにメンス・バンドを穿いてみる。月に一度は御厄介になる女の必需品ではあるけれど、今こうして、つくずくと眺めながら自分の身に着けてみると、言うに言われぬ奇妙な気持が湧いてくる。生理のときに穿くからだろうか、それとも、この布とゴムで出来上った下着に不思議な魅力でもあるのだろうか。私のこのバンドをつけた秘密のポーズは私の部屋の鏡と貴方だけが知っているのよ。

居ります。然し乍ら我々ゴムマニアの熱望する写真なり文章の少ないのは、どうしたものでしょう。特に写真に至つて、皆無と云つても良い位で毎月の発売日を今度こそはと胸をおどらせてページをめくり其の度に失望させられるのです。ゴムのタッチの好むモデルが居て、ゴム衣スタイルの写真が望むゴムマニアの多きを知り乍ら、何故に貴社では其の様な企画がないのでしょうか。毎月毎月同じ様

な緊縛写真ばかり、いささかマンネリの感も致しますが如何でしょう。次号からは是非ゴムスタイルのもの、ゴム引レインコート或はゴム合羽を使用した写真を最低一組ずつはいさいされる事を希望致します。梅川幸子さんの「ブレイ振り」をそのまま写真にした様ないわゆる組写真等是非採用して頂きたいものの一つです。(福岡県博多市八秋本一郎V)

十二月号の築地氏の「女武者の討死と生首」についての論考は近來にない力作であり、亦マニヤにとつては、此の上もない贈り物でした。女武者の討死の模様や身首所を異にして、血のしたたり落ちる生首を、みどりなす黒髪で下げられてゐる図は、美人であればある程凄艶極まりない無惨美を醸し出すことでしよう。その有様を生

これは前にも申しましたように時代物に限りません。それも女性相討つ有様を望んでおります。例えば町娘と若い芸妓の痴情から果し合いで、いずれかが相手を斬り倒して生首を斬り取る状、或はそれにも飽き足らず、憎い女の屍をずたずたに斬りさいなむ状等を描いたものを望んでいます。姐御の縄ばり争いからの果し合い、町家の若女房とその主人の思ひものとの妾との出刃庖丁による果し合い等の図絵も結構なものです。この様なものを更に発展せしめて女達をすべてフンドシ一つの裸のままでの血斗模様を最高の私のあこがれです。京洛生氏の「大奥裸女血斗」を以て嚆矢とするこの種の無惨絵模様は最高の倒錯美の境地と思えます。それなればこそ、発表されて五年にもなるのに「大奥裸女血斗」の讃仰者が後を絶ちません。私も勿論その一人です。そして私は今また新しいイメージを先月の紅毛の娘と日本娘のフンドシ一本での決斗のイメージに続いて皆様

●代理部分譲品総目録(第五号)出来ました。

十円切手封入の上お申込み下されば、折返えし急送いたします。

は今度は大奥の女中が美少年の小姓と決斗の末、首級を挙げるというものです。奥女中も小姓も勿論フンドシ一本の裸体で奥女中は赤フンドシが最もよいでしょう。この二人が互いに斬り合う中、小姓は剣技に勝る奥女中の敵ではなく苦もなく討ちとられ、首級をかき落されてしまうという倒錯的なものです。新潟の前川様、通信うれしかに吾々にとつて物足りませんが、それでも吾々の希望が叶えられるという期待が新に出てまいりました。長い目で見てゆきましょう。幸いにしてサド裁判が無罪となりました。今後これに力を得て吾々マニヤのパラダイスを作っていただくたいものです。同好諸兄姉の御便りをお待ちします。(大阪八北村英一改め女斗彦V)

貴誌のグラビアを今までに随分多く見ているが「強烈」を表わす作品が案外少ないのが気にかかる。貴社の方でも色々問題があると思うが……十二月号でも水本茂美嬢が一人奮闘してくれただけ。「悦唐の表情とその刹那」の梨花悠紀子嬢は横側からなので物足りない。それに彼女の体は側面から

見るとやや細かい感、せっかくのよい構成が惜まれてならない。又ベテラン絹川文代嬢にいたっては全く彼女の美しい肢体を見殺しにしている。ただ残念残念。最初に関谷富佐子さんののがあまりにもよかっただけに特に目立つ。大塚啓子嬢は表情が非常に豊かなので、表情の方にも気を配ってもらいたい。又肉づきも大変よいから一箇所を特に誇張したり責めたりした方がいいのではないか(たとえ乳房や腹部を荒縄で極度に縛る)四馬孝氏の画も好調。毎度ながら氏の画は我々読者を楽ませてください、一度氏の画と実際にモデルを使っての写真と同時に載せてはどうか? 又単に縛るだけでなくグラビアにも〇×特集(例えば浣腸特集としてその写真を中心に載せる)と言ったものを作っては? 次に読者へ呼びかけ、いわば我々は友人なのだ。この短かい人生を奇巧で楽しいものにしようと努力している。諸君この諸者通信欄を利用してお互いの意見を交換しようではないか? 又小生少々サディズムです。特にマゾヒズムなる女性諸君、小生の呼びかけに応じてもらいたい。(滋賀八桂V)

読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるものたえ、どうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語▽

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下

さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポート・マニヤ通信▽

新聞記事、週刊誌記事等に関心をお持ちの事項、或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

△読者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、文通、或いは読者相互間の交歓、面談の許す限り、つとめて掲載いたします。

書下し原稿募集

新しい風俗雑誌として新発足する本誌のために、新鮮にして読者の大歓迎するよう、新鋭の原稿をどしどしとお寄せ下さい。左記の要項にて募集いたします。どうか奮って御応募下さい。

募集要項

一、原稿の内容は風俗雑誌の尖端をゆく本誌にふさわしいものであること。
二、原稿の体裁は、小説、創作、研究、資料、体験、告白、紹介、論説、といったものを含め、洗練、女装、美、身体各部に対する狂熱等に関するものを含む。

一、表紙、口絵、挿絵、或は写真なども努めて掲載したいと考えますから、原稿の枚数は別に定めません。合に長短は御自由です。尚、御都合に構いませんが、必ず自作品で未発表のものに限り、掲載の可否は特別に定めません。掲載可能な作品は、最近号から漸次発表の順序に従って、優秀作品の投稿者には、編集部から題材を提供して、寄稿料をお支払い致します。一、採用原稿の対しては、相当の原稿料を、採用原稿の対しては、相当の原稿料をお支払い致します。又、投稿者や寄稿家の住所本名は絶対他へ洩すようなことは致しません。故に御安心下さい。

奇譚クラブ編集部

☆本誌御愛読の契

予約料

一月分	(1冊)	二百円	△送共▽
三月分	(3冊)	六百円	△送共▽
半年分	(6冊)	千二百円	△送共▽

本誌は各地書店にて毎月二十五日一斉に発売致しますが、若し入手困難でしたら、直接発行所へ代金御送りの上お申込み下さい。予約お申込みの場合は発行と同時に、厳重包装の上、急送申し上げます。尚既刊号の内、在庫分は別項に一覧表を掲げてあります故、御注文頂き次第に急送いたします。

☆代理部分譲品についての案内

○本誌代理部分の譲品は、最近分譲品案内並に読者通信欄の記事中に広告してあります。他に、代理部分の譲品目録を準備しております。録は十円切手同封にてお申込下さい。急送申し上げます。○雑誌は厳重包装の上第三種郵便にて、お送りいたします。その他は第五種郵便にてお送りいたします。○代理部に対する御送金は、なるべく現金書留、振替、定額小為替、小為替、切手代用の節は、八円又は十円切手等の小額のものに願います。

本誌に発表した口絵、写真の複写或は無断転載等は固くお断りいたします。

奇譚クラブ 定価二百円

新年号 (第十七卷第一号) (通刊第百七十二号)

昭和三十一年十二月二十日印刷
昭和三十一年一月一日発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)

(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌 第一二二号)